

四 日 市 遺 跡 Ⅰ

—玖珠工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅰ)—

2017

大分県教育庁埋蔵文化財センター

四 日 市 遺 跡 Ⅰ

—玖珠工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)—

2017

大分県教育庁埋蔵文化財センター

序 文

本書は、大分県教育委員会が、大分県土地開発公社から依頼を受け、平成14年～28年度にわたって実施している玖珠工業団地の造成工事に伴う四日市遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する玖珠町は、大分県の北西部に位置し、中央部を玖珠川が西流する玖珠盆地を中心に周囲を万年山や北方の深耶馬溪、日出生台などの山嶺に囲まれた起伏のある地形を呈しています。高い山に囲まれた玖珠盆地にたなびく深い霧は一幅の水墨画のようで、四季折々に私たちの目を楽ませてくれます。この地域の深い山間を流れる玖珠川は、西に向かい、筑後川となって福岡県側の有明海に注ぎます。旧石器時代以来、この玖珠川を通して文化の交流が行われたようで、とりわけ弥生・古墳時代には、玖珠町内の元畑遺跡の銅矛・鬼塚古墳や鬼ヶ城古墳などの装飾は北部九州との深い関係を物語っています。玖珠川沿いに行きかう山人の姿が想像されます。

本書で報告する四日市遺跡は、弥生時代中期を主体とした集落であります。竪穴建物跡や貯蔵穴が多数出土しているほか、弥生時代の土器とともに、コメ、アワ、ダイズ、アズキ、モモ、トチノキ、イチイガシなどの炭化した種子などの食糧も出土しています。弥生時代における山間の生活を知る貴重な調査例となりました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大なご支援とご協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成29年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長 後藤 一重

例 言

- 1 本書は、大分県土地開発公社から依頼を受けて、大分県教育委員会が実施した玖珠工業団地の造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書で報告する四日市遺跡は、平成14年度に発掘調査を開始し、今年度まで15次にわたって継続的に発掘調査を行っている。この報告書は、整理の進んだ第1次調査の遺物の中でも弥生時代から平安時代までの資料を収載しており、膨大な旧石器時代の資料や、第2次調査以降の調査時の資料についても順次、次年度以降に報告していく予定である。
- 3 遺構の実測図作成や遺構写真の撮影は大分県文化課職員が行った。
- 4 出土遺物の整理作業や報告書作成に伴う諸作業については、大分県教育庁埋蔵文化財センター職員が担当したほか、遺物の洗浄・注記・接合・実測・トレースについては、平成26・27・28年度は株式会社九州文化財総合研究所に委託した。
- 5 出土遺物の写真撮影は、株式会社九州文化財総合研究所に委託したほか、平成26年度・平成27年度整理分については綿貫俊一（埋蔵文化財センター）が行った。
- 6 出土遺物ならびに図面・写真等、出土状況、出土遺物に関する詳細なデータは、大分県教育庁埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 7 発掘調査に際して、玖珠町教育委員会、九重町教育委員会より助言を頂いた。
- 8 レイアウト、データ入力については、友廣美和、松本晴美、小野千恵美、佐田智子、清松 悟、加島英大(以上、埋蔵文化財センター嘱託・臨時)が行った。遺物一覧表については小野千恵美が作成した。
- 9 本書の編集執筆は、小野千恵美の補助を受け、綿貫俊一が行った。

凡 例

- 1 測量座標値は、世界測地系を用いた。標高はすべて海拔をあらわす。
- 2 本書で使用する方位は、いずれも座標真北である。
- 3 壁面土層図は、名称・注記等の内容について原図記載のとおりであるが、表現を大幅に補った。
- 4 平面図中の番号は遺物番号と同じである。
- 5 石器類・遺構の縮尺については統一していない。
- 6 土器の色調については、『新版 標準土色帖』を用いた。赤色顔料はトーンで表現している。
(625のみ脂漏)
- 7 SH：堅穴建物跡、SK：土坑、SD：溝、S：円形周溝遺構

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
第1章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の体制	2
第3節 調査の概要	2
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 遺跡の歴史的環境	3
第3章 調査の成果（第1次調査区）	
第1節 発掘調査成果の概要	5
第2節 弥生時代中期後半の遺構と遺物	11
1 弥生時代中期後半の遺構と遺物-西北部遺構群-	11
2 弥生時代中期後半の遺構と遺物-中部遺構群-	74
3 弥生時代中期後半の遺構と遺物-西南部遺構群-	182
第3節 弥生時代後期終末の遺構と遺物	216
第4節 古墳時代前期の遺構と遺物	232
第5節 古代の遺構と遺物	238
第4章 総括	
第1節 弥生時代中期の遺構・遺物	244
第2節 弥生時代後期終末の遺構と食糧	252
第3節 古代墓の意義	253
遺物一覧表	255
第5章 理化学的分析	
大分県玖珠郡四日市遺跡微細資料分析報告	
小畑 弘己（熊本大学文学部）	277
大分県、玖珠工業団地（四日市遺跡）における自然科学分析	
株式会社 古環境研究所	297
四日市遺跡出土陶入方鏡の蛍光X線分析	
大分県立歴史博物館 神田優生	307
四日市遺跡の ¹⁴ C年代測定	309
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 四日市遺跡の位置 (1/30000)	4	第39図 SK25実測図 (1/30)	33
第2図 四日市遺跡第1次調査区周辺地形図 (1/4000)	6	第40図 SK25出土遺物実測図	33
第3図 四日市遺跡第1次調査区と 周辺の遺構分布略図 (1/750)	7・8	第41図 SK26実測図 (1/30)	33
第4図 四日市遺跡第1次調査区全体図 (1/500)	9・10	第42図 SK26出土遺物実測図	34
第5図 四日市遺跡第1次調査区 北部遺構群詳細分布図 (1/400)	12	第43図 SK84実測図 (1/30)	34
第6図 SK101実測図 (1/30)	13	第44図 SK84出土遺物実測図	34
第7図 SK101出土遺物実測図	14	第45図 SK40実測図 (1/30)	35
第8図 SK102実測図 (1/30)	15	第46図 SK40出土遺物実測図	36
第9図 SK102出土遺物実測図	15	第47図 SK81実測図 (1/30)	37
第10図 SK74実測図 (1/30)	15	第48図 SK81出土遺物実測図	38
第11図 SK74出土遺物実測図	15	第49図 SK83上層実測図 (1/30)	39
第12図 SK100実測図 (1/30)	16	第50図 SK83下層実測図 (1/30)	40
第13図 SK100出土遺物実測図	17	第51図 SK83出土遺物実測図①	41
第14図 SK36・SK37実測図 (1/30)	17	第52図 SK83出土遺物実測図②	42
第15図 SK36・SK37出土遺物実測図	18	第53図 SK82実測図 (1/30)	43
第16図 SK114実測図 (1/30)	18	第54図 SK82出土遺物実測図	43
第17図 SK85実測図 (1/30)	19	第55図 SK19実測図 (1/30)	44
第18図 SK85出土遺物実測図	20	第56図 SK19出土遺物実測図	44
第19図 SK35実測図 (1/30)	20	第57図 SK42実測図 (1/30)	45
第20図 SK35出土遺物実測図	21	第58図 SK42出土遺物実測図	45
第21図 SK33実測図 (1/30)	22	第59図 SK41実測図 (1/30)	46
第22図 SK30実測図 (1/30)	22	第60図 SK89実測図 (1/30)	46
第23図 SK30出土遺物実測図	23	第61図 SK89出土遺物実測図	46
第24図 SK31実測図 (1/40)	24	第62図 SK33実測図 (1/40)	47
第25図 SK31出土遺物実測図	24	第63図 SK33出土遺物実測図	48
第26図 SK28実測図 (1/30)	25	第64図 SK32実測図 (1/40)	49
第27図 SK125実測図 (1/30)	25	第65図 SK32出土遺物実測図①	50
第28図 SK125出土遺物実測図	25	第66図 SK32出土遺物実測図②	51
第29図 SK124実測図 (1/30)	26	第67図 SH4実測図①貼床上位 (1/60)	52
第30図 SK124出土遺物実測図	26	第68図 SH4実測図②貼床下部 (1/60)	53
第31図 SH15実測図 (1/80・1/40)	27	第69図 SH4出土遺物実測図①	54
第32図 SH15出土遺物実測図① (上層)	28	第70図 SH4出土遺物実測図②	55
第33図 SH15出土遺物実測図②	29	第71図 SK15実測図 (1/30)	56
第34図 SH15出土遺物実測図③	30	第72図 SK15出土遺物実測図	56
第35図 SH15出土遺物実測図④	31	第73図 SK14実測図 (1/30)	56
第36図 S1実測図 (1/30)	31	第74図 SK14出土遺物実測図	56
第37図 S1出土遺物実測図	32	第75図 SK16・SK17実測図 (1/30)	57
第38図 SK38実測図 (1/30)	32	第76図 SK16出土遺物実測図	57
		第77図 SK18実測図 (1/30)	58
		第78図 SK45実測図 (1/30)	58

第79図 SH13実測図 (1/40)	58	第119図 SH19出土遺物実測図	88
第80図 SH13出土遺物実測図	59	第120図 SK73実測図 (1/30)	89
第81図 SK27実測図 (1/30)	59	第121図 SK23・SK24実測図 (1/30)	89
第82図 SK27出土遺物実測図	59	第122図 SK23出土遺物実測図	90
第83図 SK22実測図 (1/30)	60	第123図 SK21実測図 (1/30)	90
第84図 SK22出土遺物実測図	60	第124図 SH5実測図 (1/40)	91
第85図 SK46実測図 (1/30)	61	第125図 SH5出土遺物実測図①	92
第86図 SK46出土遺物実測図	61	第126図 SH5出土遺物実測図②	93
第87図 SH22実測図 (1/60)	62	第127図 SK72実測図 (1/30)	94
第88図 SK97実測図 (1/30)	62	第128図 SK72出土遺物実測図	94
第89図 SK97出土遺物実測図	62	第129図 SK4実測図 (1/30)	95
第90図 SK98実測図 (1/30)	62	第130図 SK4出土遺物実測図	95
第91図 SK98出土遺物実測図	62	第131図 SK5実測図 (1/30)	96
第92図 SK96実測図 (1/30)	63	第132図 SK5出土遺物実測図	96
第93図 SK96出土遺物実測図	63	第133図 SK32実測図 (1/40)	97
第94図 SK75実測図 (1/30)	64	第134図 SK32出土遺物実測図	98
第95図 SK115実測図 (1/30)	64	第135図 SK123実測図 (1/30)	99
第96図 SK115出土遺物実測図	64	第136図 SK123出土遺物実測図	99
第97図 SK76実測図 (1/30)	65	第137図 SK20実測図 (1/30)	100
第98図 SK76出土遺物実測図	66	第138図 SK20出土遺物実測図	100
第99図 SH6実測図 (1/60・1/30・1/40)	67	第139図 SH7実測図 (1/60・1/30)	102
第100図 SH6出土遺物実測図①	69	第140図 SH7出土遺物実測図①	103
第101図 SH6出土遺物実測図②	70	第141図 SH7出土遺物実測図②	104
第102図 SK37実測図 (1/60)	71	第142図 SK103実測図 (1/30)	105
第103図 SK37出土遺物実測図		第143図 SK103出土遺物実測図	105
～SIG5・36・37混在資料～	72	第144図 SH8実測図 (1/40)	106
第104図 西日市遺跡第1次調査区		第145図 SH8出土遺物実測図①	106
中部遺構群詳細分布図 (1/400)	73	第146図 SH8出土遺物実測図②	107
第105図 SK29実測図 (1/30)	74	第147図 SH11実測図 (1/40)	108
第106図 SK29出土遺物実測図	75	第148図 SK116実測図 (1/30)	109
第107図 SK43実測図 (1/30)	75	第149図 SK68実測図 (1/30)	109
第108図 SK43出土遺物実測図	75	第150図 SK68出土遺物実測図	109
第109図 SK44実測図 (1/30)	76	第151図 S2実測図 (1/60)	110
第110図 SK44出土遺物実測図	76	第152図 S2出土遺物実測図	111
第111図 SH20実測図 (1/40・1/30)	78	第153図 SK47実測図 (1/30)	111
第112図 SH20出土遺物実測図	79	第154図 SK47出土遺物実測図	111
第113図 SH21実測図 (1/80)	81	第155図 S3実測図 (1/30)	112
第114図 SH21出土遺物実測図①	82	第156図 S4実測図 (1/30)	113
第115図 SH21出土遺物実測図②	83	第157図 SK34実測図 (1/30)	114
第116図 SH8実測図 (1/40・1/30)	84	第158図 SK34出土遺物実測図	114
第117図 SH8出土遺物実測図	85	第159図 SK48実測図 (1/30)	115
第118図 SH9実測図 (1/60・1/30)	87	第160図 SK48出土遺物実測図	115

第161页	SK66夹洞园 (1/30)	116	第203页	SK12出土遗物夹洞园	148
第162页	SK93夹洞园 (1/30)	116	第204页	SK94夹洞园 (1/30)	148
第163页	SK117夹洞园 (1/30)	116	第205页	SK94出土遗物夹洞园	148
第164页	SK1内土坑 (SK104) 夹洞园 (1/40)	118	第206页	SK7夹洞园 (1/30)	149
第165页	SK1 (SK104) 第1段阶夹洞园 (1/40)	119	第207页	SK7出土遗物夹洞园	149
第166页	SK1 (SK104) 遗物出土状况 (1/30)	120	第208页	SK9夹洞园 (1/40)	150
第167页	SK1 (SK104) 第2段阶夹洞园 (1/40)	121	第209页	SK9出土遗物夹洞园①	151
第168页	SK1出土遗物夹洞园①	122	第210页	SK9出土遗物夹洞园②	151
第169页	SK1出土遗物夹洞园②	123	第211页	SK108夹洞园 (1/30)	152
第170页	SK95夹洞园 (1/30)	124	第212页	SK10A夹洞园 (1/30)	153
第171页	SK95出土遗物夹洞园	124	第213页	SK10出土遗物夹洞园	154
第172页	SH4夹洞园 (1/40)	125	第214页	SK8夹洞园 (1/30)	155
第173页	SH4出土遗物夹洞园	126	第215页	SK8出土遗物夹洞园	156
第174页	SK23夹洞园 (1/40 · 1/30)	128	第216页	SK6夹洞园 (1/30)	157
第175页	SK23出土遗物夹洞园	129	第217页	SK6出土遗物夹洞园	158
第176页	SK24夹洞园 (1/60)	130	第218页	SH10夹洞园 (1/40)	159
第177页	SK24内土坑夹洞园 (1/30)	131	第219页	SH10出土遗物夹洞园	159
第178页	SK24出土遗物夹洞园①	132	第220页	SK6夹洞园 (1/40)	160
第179页	SK24出土遗物夹洞园②	133	第221页	SK9出土遗物夹洞园	161
第180页	SK67夹洞园 (1/30)	134	第222页	SK28夹洞园 (1/40)	162
第181页	SK67出土遗物夹洞园	134	第223页	SK28出土遗物夹洞园①	163
第182页	SK69夹洞园 (1/30)	135	第224页	SK28出土遗物夹洞园②	164
第183页	SK70夹洞园 (1/30)	135	第225页	SK53夹洞园 (1/30)	165
第184页	SK71夹洞园 (1/30)	135	第226页	SK53出土遗物夹洞园	165
第185页	SK1夹洞园 (1/30)	136	第227页	SK54夹洞园 (1/30)	165
第186页	SK1出土遗物夹洞园	136	第228页	SK77夹洞园 (1/30)	166
第187页	SK2夹洞园 (1/30)	136	第229页	SK77出土遗物夹洞园	167
第188页	SK3夹洞园 (1/30)	136	第230页	SK86夹洞园 (1/30)	168
第189页	SK13夹洞园 (1/30)	137	第231页	SK86出土遗物夹洞园	168
第190页	SK13出土遗物夹洞园	137	第232页	SK90夹洞园 (1/30)	169
第191页	SH1夹洞园 (1/40)	138	第233页	SK50夹洞园 (1/30)	169
第192页	SH1出土遗物夹洞园	139	第234页	SK50出土遗物夹洞园	170
第193页	SK2夹洞园 (1/40 · 1/30)	140	第235页	SK51夹洞园 (1/30)	170
第194页	SK2出土遗物夹洞园①	141	第236页	SK51出土遗物夹洞园	171
第195页	SK2出土遗物夹洞园②	142	第237页	SK55夹洞园 (1/30)	171
第196页	SK39夹洞园 (1/30)	142	第238页	SK55出土遗物夹洞园	172
第197页	SK9夹洞园 (1/30)	143	第239页	SK52上层夹洞园 (1/30)	173
第198页	SK9出土遗物夹洞园	144	第240页	SK52下层夹洞园 (1/30)	174
第199页	SH41夹洞园 (1/40)	145	第241页	SK52出土遗物夹洞园	175
第200页	SH2夹洞园 (1/40)	146	第242页	SK9夹洞园 (1/40)	176
第201页	SH2出土遗物夹洞园	147	第243页	SK9出土遗物夹洞园	177
第202页	SK12夹洞园 (1/30)	147	第244页	SK29夹洞园 (1/40 · 1/30)	179

第245区	SH29出土遺物実測図①	180	第285区	SK64実測図 (1/30)	209
第246区	SH29出土遺物実測図②	181	第286区	SK64出土遺物実測図	209
第247区	SH28実測図 (1/40)	182	第287区	SK119実測図 (1/30)	210
第248区	四日市道跡第1次調査区 南西部遺構群詳細分布図 (1/400)	184	第288区	SK122実測図 (1/30)	210
第249区	SH25実測図 (1/60)	185	第289区	SK122出土遺物実測図	210
第250区	SH25出土遺物実測図①	186	第290区	SK78実測図 (1/30)	211
第251区	SH25出土遺物実測図② SH25・SH26出土遺物実測図	187	第291区	SK78出土遺物実測図	212
第252区	SH26実測図 (1/60)	188	第292区	SK79実測図 (1/30)	212
第253区	SH26出土遺物実測図	189	第293区	SK113実測図 (1/30)	213
第254区	SK56実測図 (1/30)	189	第294区	SK49実測図 (1/30)	213
第255区	SK56出土遺物実測図	189	第295区	SK49出土遺物実測図	213
第256区	SK57実測図 (1/30)	190	第296区	SK65実測図 (1/30)	214
第257区	SK57出土遺物実測図	190	第297区	SK65出土遺物実測図	215
第258区	SK92実測図 (1/30)	190	第298区	四日市道跡第1次調査区 弥生時代後期終末住居分布図 (1/800)	217
第259区	SK92出土遺物実測図	190	第299区	SH3実測図 (1/40)	218
第260区	SK58実測図 (1/30)	191	第300区	SH3出土遺物実測図	219
第261区	SK58出土遺物実測図	192	第301区	SH35実測図 (1/40)	221
第262区	SK59実測図 (1/30)	192	第302区	SH35出土遺物実測図①	222
第263区	SK59出土遺物実測図	192	第303区	SH35出土遺物実測図②	223
第264区	SK91実測図 (1/30)	192	第304区	SH34実測図 (1/40)	224
第265区	SK80実測図 (1/30)	193	第305区	SH17実測図 (1/40・1/30)	226
第266区	SK80出土遺物実測図	193	第306区	SH17出土遺物実測図①	227
第267区	SK88実測図 (1/30)	194	第307区	SH17出土遺物実測図②	228
第268区	SH27実測図① (1/60)	195	第308区	SH17出土遺物実測図③	229
第269区	SH27実測図② (1/30・1/40)	197	第309区	SH17出土遺物実測図④	230
第270区	SH27実測図③ (1/30)	198	第310区	SH17出土遺物実測図⑤	231
第271区	SH27出土遺物実測図①	199	第311区	1号周溝墓実測図 (1/150)	233
第272区	SH27出土遺物実測図②	200	第312区	1号周溝墓断面実測図 (1/60・1/30)	234
第273区	SH27出土遺物実測図③	201	第313区	1号周溝墓1号主体実測図 (1/30)	235
第274区	SH27出土遺物実測図④	202	第314区	1号周溝墓2号主体実測図 (1/20)	236
第275区	SH27出土遺物実測図⑤	203	第315区	1号周溝墓出土遺物実測図	237
第276区	SK60実測図 (1/30)	205	第316区	四日市道跡第1次調査区 古代墓分布図 (1/800)	239
第277区	SK60出土遺物実測図	205	第317区	SK87・SK126実測図 (1/30)	240
第278区	SK61実測図 (1/30)	205	第318区	SK87出土遺物実測図	242
第279区	SK62実測図 (1/30)	205	第319区	SK126出土遺物実測図	243
第280区	SK11実測図 (1/30)	205			
第281区	SK118実測図 (1/30)	206			
第282区	SK118出土遺物実測図	206			
第283区	SK63実測図 (1/30)	207			
第284区	SK63出土遺物実測図	208			

表 目 次

第1表	竪穴建物跡の面積と支柱穴数	244
第2表	主要な石器・土製品の数量表	248
第3表	出土した食糧の収穫時期	250
第4表	祭祀・呪いの強い出土状況	251
第5表	遺物一覧表(土器・陶磁器)	255
	遺物一覧表(石製品)	270
	遺物一覧表(金属製品)	276
	遺物一覧表(土製品)	276

遺 構 写 真 目 次

写真図版 1	四日市遺跡遠景1	311	写真図版 10	S1 遺物出土状況 SK25 SK26・SK84 SK40	320
写真図版 2	四日市遺跡遠景2	312		SK81 SK82 SK19・SK42	
写真図版 3	四日市遺跡遠景3	313	写真図版 11	SK41 SK89 SH3 SH2	321
写真図版 4	四日市遺跡遠景4	314		SH4 焼土出土状況	
写真図版 5	四日市遺跡遠景5	315		SH4 台石出土状況	
写真図版 6	四日市遺跡第1次調査区の空中写真1	316	写真図版 12	SH4 屋内土坑出土状況	322
写真図版 7	四日市遺跡第1次調査区の空中写真2	317		SK4 SK15 SK18 SH13 SK27	
	SK101 SK102 SK74 SK100 SK36・SK37		写真図版 13	SK22 SK97・SK115 SK98	323
写真図版 8	SK114 SK85 SK35 SK33 SK30 SK31	318		SK96 SK75 SK76	
	SK28 SH15 台石出土状況			SK36 トチノキの実出土状況	
写真図版 9	SH15 遺物出土状況 SH15の完備状況 S1	319	写真図版 14	SH36 炭化糞出土状況	324
				SH36 投弾出土状況	
				SH36 炭化材出土状況	
				SH36 炭化材・投弾の出土状況	
				SH36 竪穴建物跡検出状況	

写真図版 15	325	写真図版 26	336
SH36 完掘状況		SH1 SH2 遺物出土状況	
SH36・SH37 完掘状況		SH2 SH2 砥石出土状況 SK9	
写真図版 16	326	写真図版 27	337
SK29 SK43 SK44 SH20 SH21		SH41 SH12 SK94 SK7	
写真図版 17	327	写真図版 28	338
SH21 完掘状況 SH18 SH19		SK10 遺物出土状況 SK10 完掘状況	
写真図版 18	328	SK8 遺物出土状況 SK8 完掘状況	
SH19 SK23・SK24 SH5 SK72 SK4		SK6・SH10・SH6	
写真図版 19	329	写真図版 29	339
SK5 SK32 SK123 SH7 SK7 SK103		SH28 SK28 埋土中の遺物出土状況	
写真図版 20	330	SK53 SK77	
SH8 SK11 SK116 S2 S3 S4		写真図版 30	340
SK34 SK48		SK86 SK50 SK50 埋土 SK51	
写真図版 21	331	SK51 遺物出土状況 廃棄	
SK48 埋没途中に廃棄された土器 SK66 SH31 上層		SK55 小児葬棺石蓋検出状況	
写真図版 22	332	SK55 小児葬棺石蓋取り外し状況	
SH31上層と下層遺物		SK55 小児葬棺内完掘状況	
SH31下層遺物 SK95		写真図版 31	341
写真図版 23	333	SK55 小児葬棺内完掘状況 白は脂漏	
SH14 SH14 柱穴と柱痕		SK55 小児葬棺差し込み状況	
SH23 石戈出土状況		SK55 小児葬棺全検出状況	
SH23 遺物出土状況		SK55 小児葬棺全検出状況	
写真図版 24	334	SK55 小児葬棺取り上げ後の圧痕	
SH23 遺物出土状況		SK52 遺物出土状況	
SH23 遺物出土状況(廃棄状況)		SK52 完掘状況 SH39 完掘状況	
SH23 赤色顔料出土状況		写真図版 32	342
SH24 遺物出土状況・SH23完掘状況		SH29 SH25 SH25・SH26	
写真図版 25	335	SH25 土器一括廃棄状況	
SH24 伊跡上位遺物出土状況		写真図版 33	343
SH24 伊跡下位遺物出土状況		SH25 床面上の焼土出土状況	
SK67 遺物出土状況 SK69 SK70 SK71		SK58 丹塗磨研の高環出土状況・左は埋土	
SK3 SK13		SK58 両小口がオーバーハング	

SK58 床面上の高環出土状況	写真図版 43	353
SK58 北側小口のオーバーハングと埋土	1号周溝墓 石棺断面	
SK58 埋土の堆積状況(南東から北西)	1号周溝墓 石棺東端南断面	
SK80	1号周溝墓 中央北側東断面	
写真図版 34	1号周溝墓 中央南側東断面	344
SH27 遺物出土状況	1号周溝墓 石棺西端南断面	
SH27 北東側屋内土坑遺物出土状況	写真図版 44	354
写真図版 35	1号周溝墓 石棺西端	345
SH27 北東側屋内土坑埋土	1号周溝墓 石棺東側	
SH27 北東側屋内土坑の炭化米	1号周溝墓 石棺内部西半部 白色の枕	
SH27 北西側屋内土坑	1号周溝墓 石棺内部東半部 左脛骨残存	
写真図版 36	1号周溝墓 粘土槨断面	346
SH27 炉跡内上位遺物出土状況	写真図版 45	355
SH27 遺物出土状況	1号周溝墓 粘土槨 1・2 SH3	
写真図版 37	写真図版 46	347
SH27 遺物出土状況	SH35 全景 SH35 遺物出土状況	
SK11 SK118	SH34・SH17	
写真図版 38	写真図版 47	348
SK63 SK122 SK78	SH34 SH17	
写真図版 39	写真図版 48	349
1号周溝墓 全景 1	SK87 木棺墓	
写真図版 40	SK87 木棺墓 越州窯青磁唾壺・和釘 1・2	350
1号周溝墓 全景 2	SK87 木棺墓 断面	
写真図版 41	SK87 木棺墓 隅入方鏡	351
1号周溝墓 全景 3	SK87 木棺墓 隅入方鏡と漆器状製品	
1号周溝墓 断面 1・2	SK87 木棺墓 漆器状製品	
1号周溝墓 石棺	写真図版 49	359
写真図版 42	SK126 木棺墓	352
1号周溝墓 石棺・粘土槨	SK126 木棺墓 隅入方鏡と和釘	
1号周溝墓 石棺西端根締白色粘土	調査風景	
1号周溝墓 石棺東端根締白色粘土	写真図版 50	360
1号周溝墓 石棺南東端根締白色粘土	調査風景 甍柱対策の新聞	
1号周溝墓 石棺	雪の中の調査風景	

遗物写真目次

写真图版 51 361 SK101 SK102 SK74 SK100	写真图版 67 377 SH21
写真图版 52 362 SK85 SK35 SK30 SK31 SK125	写真图版 68 378 SH18
写真图版 53 363 SH15	写真图版 69 379 SH18 SK23 SH5
写真图版 54 364 SH15 SK25 S1	写真图版 70 380 SH5 SK72
写真图版 55 365 SK26 SK84 SK40	写真图版 71 381 SK5 SK32
写真图版 56 366 SK81 SK83	写真图版 72 382 SK123 SK20 SH7
写真图版 57 367 SK83 SK82 SK19 SK42 SK89	写真图版 73 383 SH7 SK103
写真图版 58 368 SH33 SH32	写真图版 74 384 SH8
写真图版 59 369 SH32 SH4	写真图版 75 385 SH8 SK68 SK47 SK48 SH31
写真图版 60 370 SH4 SK15	写真图版 76 386 SH31
写真图版 61 371 SK14 SH16 SH13 SK27 SK46 SK22	写真图版 77 387 SK49 SH31 SK95
写真图版 62 372 SK96 SK115 SK76	写真图版 78 388 SK95 SH14
写真图版 63 373 SH36	写真图版 79 389 SH14
写真图版 64 374 SH36 SH37 SK29	写真图版 80 390 SH14 SH24
写真图版 65 375 SK43 SK44 SH20	写真图版 81 391 SH24
写真图版 66 376 SH20 SH21	写真图版 82 392 SH24 SK67 SK1

写真图版 83	393	写真图版 101	411
SK13 SH1 SH2		SH27	
写真图版 84	394	写真图版 102	412
SH2 SK9 SK94		SH27 SK60 SK63 SK118	
写真图版 85	395	写真图版 103	413
SK7 SH9 SK10		SK63 SK122 SK78	
写真图版 86	396	写真图版 104	414
SK10		SK48 SK49 SK65 SH3	
写真图版 87	397	写真图版 105	415
SK8 SK6		SH3	
写真图版 88	398	写真图版 106	416
SH10 SK6 SH6		SH3 SH35	
写真图版 89	399	写真图版 107	417
SH28		SH35	
写真图版 90	400	写真图版 108	418
SH28 SK53 SK77		SH35 SH17	
写真图版 91	401	写真图版 109	419
SK77 SK86		SH17	
写真图版 92	402	写真图版 110	420
SK50 SK51 SK55		SH17	
写真图版 93	403	写真图版 111	421
SK52		SH17	
写真图版 94	404	写真图版 112	422
SK52 SH39		SH17	
写真图版 95	405	写真图版 113	423
SH39 SH29		SH17	
写真图版 96	406	写真图版 114	424
SH29 SH25		SH17	
写真图版 97	407	写真图版 115	425
SH25		SH17 1号周清	
写真图版 98	408	写真图版 116	426
SH26 SK56 SK57 SK92		SK87 (唾壶)	
写真图版 99	409	写真图版 117	427
SK92 SK58 SK59 SK80		SK87	
写真图版 100	410	写真图版 118	428
SH27		SK126	

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

四日市遺跡が立地する台地に計画された「玖珠工業団地」は、大分県北西部の玖珠町に位置する。この玖珠町は、福岡県側に流下する筑後川水系最上流部の玖珠川沿いに開けた盆地と、それを取り巻く広大な山地からなり、総面積286.60km²の約88%は山林で占められている。玖珠川は、玖珠町に隣接する九重町の九重山群を源流の一つとする筑後川流域の河川で、豊富な水量と周囲の山岳地帯の緑がやすらぎをあたえる自然環境を生成している。玖珠町は、こうした地形・森林・木・豊富な水などからなる自然環境に恵まれている。

恵まれた自然環境の中で、玖珠町での基盤となる産業は農林業であったが、1954年（昭和29）頃から始まる高度経済成長期にあつて、それまで農林業を支えた若者の多くが大都市、地方都市部に職をもとめて流出することが続ようになった。若者の流出は結果的に農林業生産人口の減少と年少人口の減少をもたらすこととなり、農村の荒廃につながる「過疎化」が次第に進行していた。更に、こうした「過疎化」と連動する形で高齢化社会の到来が予測された。そうしたなか、1970年（昭和40）5月28日付で「九州横断自動車道建設法」が公布され、「起点を長崎市、終点を大分市とし、主たる経過地を佐賀市附近、鳥栖市・久留米市附近（両市の区域を一体とした地域附近をいう。）及び日田市附近とする路線」であることが示され、産業基盤の強化に資するとともに国民経済の発展に寄与することが期待された（玖珠町付近は1995年（平成7）3月10日に供用開始：以下「東九州道」）。

一方、玖珠町当局は、1980年代になると「過疎化」と「高齢化社会」の進行に対する打開策として、産業振興と雇用の創出を重要課題・重要施策としてとりくむようになる。特に玖珠町は、国道210号線と国道387号線が交差する交通の要衝であり、加えて東九州道には「玖珠1C」の設置も予定されたことから、福岡・大分の両都市圏を結ぶ交通の要衝となる可能性があり、地域経済の活性化対策として工業団地の設置について「絶好の位置」とされた。玖珠工業団地は、大分県における内陸型の工業団地計画に基づき1991年度（平成3）に可能性の調査が行われた。この調査を踏まえて、実情にあつたマスタープランとして1994年（平成6）12月に『内陸型工業団地基本計画及び基本設計委託業務基本計画報告書』が出され、着工に向けて具体化し、その後、地元交渉・土地取得が進められるなど、事業が推進されていった。

この玖珠工業団地の立地が予定された四日市の台地は、平坦な台地であることもあり、弥生・古墳時代に生活場所として好まれたようで、北に隣接する名草台遺跡とともに台地上に土器を中心とした遺物が散布しており、遺跡としては以前から知られていた。1999年度（平成11）になって、埋蔵文化財の取り扱いについて、大分県教育委員会文化課は大分県商工労働部企業立地推進課及び大分県土地開発公社と協議を重ね、現状把握のために試掘調査を実施することになった。東西に長い台地のほぼ中ほどを境に東側の畑作地帯と西側で丘陵地帯の多い山林地帯に二分し、更に両地域をそれぞれ二分した。計四分された四日市の台地は、東から西へ1区、2区、3区、4区に区分した。これをもとに1999年（平成11）5月に1区と2区の一部、2000年（平成12）8月に1～4区の全域で試掘調査を行った。その結果、1区と2区で弥生時代中期の遺構、3区と4区で弥生時代・古墳時代・中世の遺構（寺院跡・墓）が豊富に分布していることが明らかになった。とりわけ1区は、玖珠盆地を望む台地東端部地域で場所的に適地だったのか、遺構密度が20%と高い密度であった。

試掘調査結果を受けて、大分県教育委員会文化課は、大分県企業立地推進課及び大分県土地開発公社と協議を行い、平成14年（2002）から本調査を継続的に実施することになった。こうして四日市遺跡の第1次発掘調査は、平成14年5月15日～平成15年（2003）3月20日までの日程で実施した。調査地点は、試掘でも最

弥生時代の遺物の検出が多かった台地東端の1区中央で東西に長い10,800㎡の調査区で実施した。

第2節 調査の体制

調査体制・組織 ー平成14年度ー

《調査指導》 本田光子 別府大学文学部教授

《調査主体》 大分県教育委員会

岩尾康晴 文化課長

高橋 徹 文化課主幹

栗田勝弘 文化課主幹

總貫俊一（調査担当）・田中裕介 文化課副主幹

河野哲郎・古庄博之・戸田英佑 文化課嘱託

《発掘調査作業員》 清水静子・用松計子・秋好千壽代・穴井節子・宮次子・園田龍馬・

園田直美・長田大吉・森澤八重子・森澤歌子・後藤菊男・長尾五月・時枝良枝・後藤真志・

園田チサ子・園田睦雄・河野康彦・河野豊子・水落郁雄・松崎静恵・衛藤 浩・秋山千秋・

後藤典雄・渡辺シヅエ・長野久仁子・松本昌子・野川孝子・後藤栄子・高倉美保子・長尾典夫・

矢野雅子・江上正高・滝石フキエ・森本和子・秋好マサコ・合原正利・秋好マサエ（名簿順）

《調査・整理協力者》 小畑弘己（熊本大学）・大坪志子（熊本大学）・竹野孝一郎（九重町教育委員会）・

志賀智史（別府大学）・西野摩耶（慶応義塾大学大学院）・轉田優生（大分県立歴史博物館）

《整理》 ー平成15年度ー 總貫俊一（整理主担当） 文化課 副主幹

ー平成26年度ー 總貫俊一（整理主担当） 埋蔵文化財センター 主幹

ー平成27年度ー 總貫俊一（整理主担当） 埋蔵文化財センター 主幹

ー平成28年度ー 總貫俊一（整理・報告書主担当） 埋蔵文化財センター 課長補佐

※ 整理作業受託業者 株式会社九州文化財総合研究所（平成26年度～平成28年度）

第3節 調査の概要 ～調査の経過～

平成14年5月16日から四日市遺跡の第1次調査を開始した。調査開始後、数日は重機を用いて表土層の除去を行った。その後、作業員と重機による遺構検出を併用しながら行った。東西に長い調査区の北半は、地層の残りが良好であることから、表土（耕作土）直下の黒土層（クロボク層）上面で、弥生時代中期以降の遺構・遺物が検出された。土器片が1片確認された場合、その土器を起点に放射状に表面を削り、自然堆積の黒土との境を見極める方法で遺構検出を行った。遺構が検出されると、その切り合い関係を勘案しながら石灰で遺構の外郭線に沿って線を引いた。その後、調査区の南東部から遺構の掘り下げを開始するが、作業員による作業進捗から、全域で掘り下げを行っている。平成14年11月から平成15年3月頃まで、断続的に調査区の東端にある古墳時代の1号墳の調査を行った。1号墳の調査に伴い、平成14年11月20日と平成15年1月17日、本田光子氏（別府大学文学部教授）に赤色顔料調査の現地指導をいただいた。

なお、期間中の平成14年10月22日（火）11：00～14：00まで塚脇小学校の6年生80名と引率教諭：合原富美氏・飯田康二氏・工藤勇造氏による発掘体験を行った。

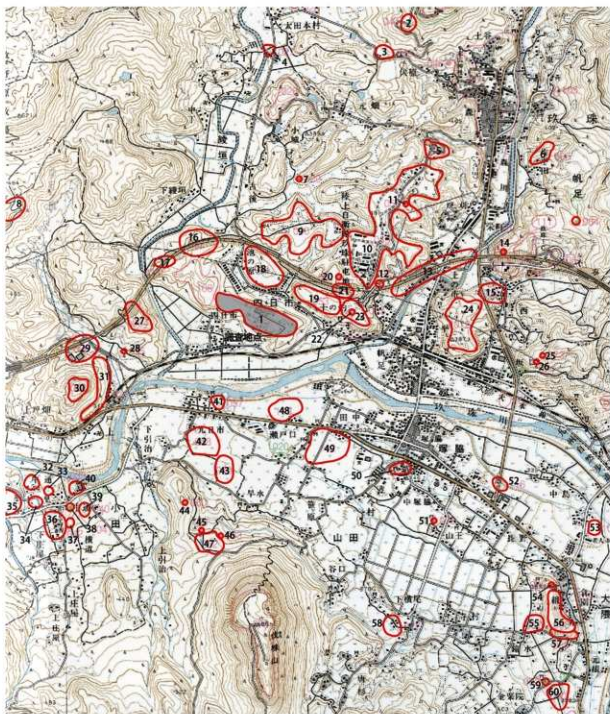
第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

四日市遺跡は玖珠郡玖珠町大字四日市字上原・字西の原に所在する。遺跡のある玖珠町は、大分県の北西部に位置し、東西27.1km、南北21.5km、総面積286.60km²に及ぶ広大な面積があり、大分県全体の4.5%、玖珠郡の51.4%を占める。玖珠町は、東に九重町・由布市、北に宇佐市・中津市、西に日田市、南に熊本県小国町と接している。玖珠町の中央部から九重町西部には半月形の玖珠盆地が広がっている。この玖珠盆地には、玖珠町北部や南部の山々、九重連山、九重町内北部の山群に源を発する玖珠川が蛇行しながら貫流している。また盆地の周縁部には、周辺山々から延びる台地や丘陵があるほか、南側を中心として万年山からの扇状地が発達している。四日市遺跡が立地する台地は玖珠盆地玖珠川の右岸側にある台地の一つである。台地は西から盆地に向けて東西に長いが、概ねW-30°-Nの方位で延びる台地である。その規模は最大長1700m・最大幅400mで、西端部を九州横断自動車道が通る。上位の古い段丘と下位のより新しい段丘面に分かれる。第1次調査区は、台地の南東端部より下位の段丘面上であり、およそ東経131.140931・北緯33.286071付近から東側東経131.142218・北緯33.285497の間に挟まれた場所である。この地点は、南側が上位段丘で標高が高く、北側が低くなる傾斜面で、地勢的には北側の谷方向へ向かう地形である。台地の方向性としては、南東側の玖珠盆地方向へ延びている。

第2節 遺跡の歴史的環境

玖珠盆地周辺に人類が現れたのは、後期旧石器時代にさかのぼる。そうした遺跡に藤原台遺跡（玖珠町大字山浦字中野）・杉塚遺跡（同町大字四日市）や日出生台の人岳見下遺跡（同町大字小野原）を含め12箇所程度が知られている（参考文献：大分県史先史編Ⅰ1983）。中には、有茎剥片尖頭器がみられる。縄文時代の遺跡としては九重町の二日市洞穴遺跡が著名で、縄文時代早期を中心とした文化層が見つかった。四日市に近いところでは、亀甲遺跡（玖珠町大字四日市字亀甲）で早期の楕円押型土器、且ノ原遺跡（同町大字岩室字且ノ原）で前期の押し文土器、西田遺跡（同町大字小田）では西平式土器と大量の扁平打製石斧が出土している。弥生時代になると、遺跡数が増大している。そうした遺跡には且ノ原遺跡（同町大字岩室字宮ノ下）、池ノ原遺跡（大字森字池ノ原）、白岩遺跡（大字四日市字白岩）、太田遺跡（大字森字太田）、坂口遺跡（大字岩室字坂口）、陣ヶ台遺跡（大字山田字早水）、妙大寺B遺跡（大字小田）、冷酒庵A遺跡（大字小田）等があり、枚挙にいとまがない。このうち、且ノ原遺跡では弥生時代各期の遺物が見つかっており、玖珠盆地の拠点遺跡と目されている。また、白岩遺跡は、四日市遺跡に近い弥生時代後期の遺跡で、山頂部付近を環溝で取り囲んだ高地性の環溝集落である。その他、元畑遺跡（大字太田）、角理山遺跡（大字森）などで中込銅矛など青銅器が出土している。古墳時代の遺跡も多く、墳墓では前期の瀬戸古墳（同町大字帆足字瀬戸）、前方後円墳で6世紀代に築造された亀都起古墳（玖珠町大字大隈）、鷹巣横穴墓群（大字帆足字鷹巣）、鬼塚古墳（同町大字小田）、十ノ釣石棺（大字四日市字十ノ釣）、小竿遺跡（大字山田字小竿）、集落遺跡では、原田遺跡（同町大字戸畑字原田）、谷ノ瀬遺跡（同町大字戸畑字谷ノ瀬）、釜水遺跡（大字大隈字釜水）など数多い。玖珠町・九重町は、古代には豊後国の玖珠評・玖珠郡が置かれ、その役所は長野地区に置かれたという有力な説がある。小田地区の西田遺跡からは、奈良時代の円面硯が出土している。平安時代の後期から中世の終わりにかけては清原系の諸氏が勢力をました時代である。そのことを示すかのように、鎌倉時代の帆足城跡、陣ヶ台遺跡、古後城跡、瀬戸遺跡、平田山土塁などがあるほか、南北朝から安土桃山時代の城として切株山城跡、松木城跡、野田城跡、角牟礼城跡などがある。近世になると、はじめに毛利高正が入り、次いで黒田氏を経て久留島氏が入り、玖珠郡の一部ながら森村、帆足村、日出生村、太田村、綾垣村、山下村、古後村などを領した（他は、天領）。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	四日市遺跡	弥生	16	下段埴遺跡	古墳・中世	31	野田山遺跡	古墳	46	陣ヶ台塚遺跡	古墳
2	太田巨石遺跡	旧石器時代	17	下段埴埴穴群	古墳	32	冷沼庵A遺跡	弥生・古墳	47	陣ヶ台遺跡	弥生・古墳・中世
3	太田本村遺跡	旧石器時代	18	池ノ原B遺跡	弥生・古墳	33	冷沼庵C遺跡	縄文時代	48	豆田遺跡	古墳
4	太田遺跡	弥生	19	井ノ原遺跡	弥生	34	冷沼庵B遺跡	古墳時代	49	瀬戸口遺跡	縄文・古墳
5	上ノ原遺跡	弥生・古墳	20	井ノ原穴群	古墳	35	西田遺跡	縄文時代	50	寺山(古墳)遺跡	古墳
6	平塚横穴墓	古墳	21	上ノ原横穴群	古墳	36	中西遺跡	縄文時代	51	山王古墳	古墳
7	中森古墳	古墳	22	上ノ約古墳	古墳	37	鬼塚両辺石棺群	古墳	52	六十六郎遺跡	古墳
8	白石北遺跡	縄文	23	上ノ約遺跡	古墳	38	鬼塚古墳	古墳	53	塩ノ元遺跡	弥生
9	池ノ原遺跡	弥生	24	平台遺跡	古墳	39	妙大寺B遺跡	縄文・弥生	54	船岡山古墳	古墳
10	名草台遺跡	弥生・古墳	25	殿若寺1号墳	古墳	40	妙大寺A遺跡	古墳時代	55	榑水遺跡	古墳
11	千人塚古墳	古墳	26	殿若寺2号墳	古墳	41	中山田遺跡	古墳	56	船岡山石棺群	古墳
12	農業横穴群	古墳	27	白岩遺跡	弥生	42	小平遺跡	古墳・江戸	57	船岡山横穴墓群	古墳
13	治野当遺跡	縄文時代	28	野田遺跡	古墳	43	早水野中遺跡	弥生・江戸	58	下橋原遺跡	古墳・中世
14	瀬戸古墳	古墳	29	谷ノ原遺跡	古墳	44	將軍塚古墳	古墳	59	亀船起古墳	古墳
15	西遺跡	弥生・古墳	30	野田(戸塚峰山)城跡	古墳・中世	45	陣ヶ台塚遺跡	古墳	60	おごもり遺跡	弥生時代

第1図 四日市遺跡の位置 (1/30000)

第3章 調査の成果（第1次調査区）

第1節 発掘調査成果の概要

調査状況 四日市遺跡群は1区から4区までの範囲のなかで1区について平成14年5月末から本格的に調査を開始した。6月半ばには表土剥ぎも終了し、一日あたり約20人の作業員による遺構検出と遺構の掘り下げを行った。最終的には、約10,800㎡の面積について発掘作業を行った。

遺構の分布 試掘調査によって、遺構は台地のほぼ全域に遺構が存在する事が分かったが（第4図）、とりわけ盆地側の東半部に密度が高い。遺構は一箇所に集中するのではなく、遺構が散在した状況である。約10,800㎡の面積内に竪穴建物跡40基、土坑約90基、柱穴多数が見つかっている。なお旧石器時代の石器は、玖珠川を臨む台地の東端付近に集中する傾向をみせる。これは古墳時代の墓地（周溝墓）も同様で、台地の高い部分から低い部分にかけて台地東端の崖よりに立地する。平安時代初頭の遺構として、木棺墓が2基みつけた（第39図）。二つの墓は調査区の北西部と南西部に約70mの間をおいていた。

遺構・遺物 遺物として最古のものは、旧石器時代後期に属する石器類で、1号墳の南西側に設定したトレンチから数百点出土している。それらの石器は、クロボク層下のローム層中位から出土し、チャートを主要な石材とする石器類で、出土層位からナイフ形石器の段階である。また1号墳の北西に設定したトレンチの漸移層からローム層最上部にかけて出土した石器は、地元の石を用いた石器が多く、その量は未集計であるが、数百点ある。出土層位からすると旧石器時代終末頃のものと考えられる。

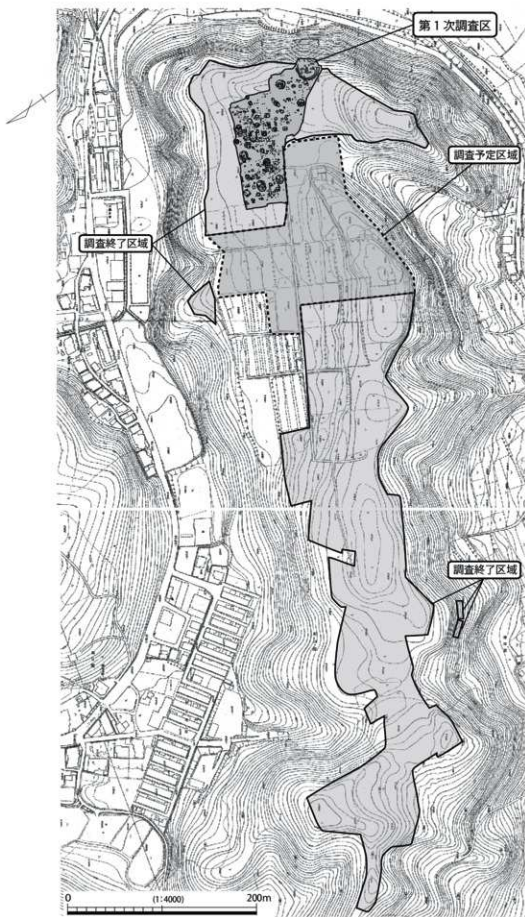
縄文時代早期と思われる遺物も見つかっている。弥生時代の柱穴側面旧石器時代遺物を確認したことを契機に、周辺を掘り下げているときにクロボク層から石鏃が出土している。また弥生時代の竪穴建物跡内から混入した縄文時代早期の鎌形石鏃が出土している。しかし、縄文時代早期の資料は、広大な調査区全体からみれば数点であり、縄文時代の土器にいたっては1点も出土していない。したがって縄文時代に、ここを生活拠点としたことを窺わせるほどの量ではなかった。

この遺跡の主体となる時期は、弥生時代中期で、ほとんどの遺構がこの時期に属している。弥生時代中期のなかでも須玖1式土器段階の遺構は僅かで、ほとんどが須玖Ⅱ式土器段階に併行するものである。竪穴建物跡は約25基、土坑は90基以上である。この中には直径10m前後の巨大な円形住居跡が8基ある。隅丸方形や隅丸長方形の竪穴建物跡は概ね一辺が3m、4mと小型である。

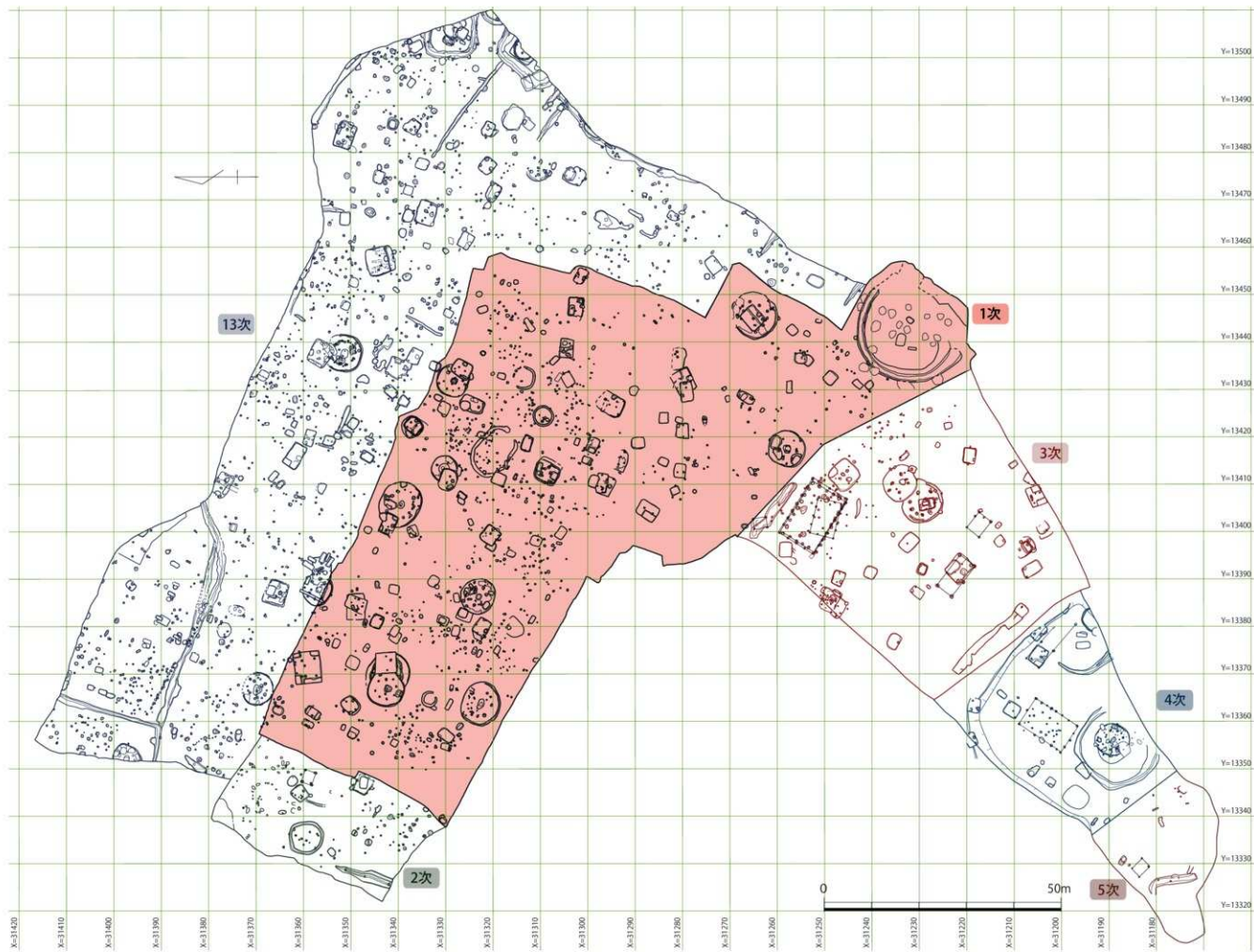
3世紀後半頃の弥生時代後期終末の方形住居跡が3基あり、隅部が弥生時代中期の方形住居跡に比べて鋭角的である。この時期の住居から出土した土器は、叩き目のある甕、壺、高坏が主要な遺物である。

古墳時代前期になると、台地の南東端部で直径約19m（外径で23m）の周溝を持つ低墳丘の1号溝墓がある。主体部は石棺が1基と粘土槨が1基である。石棺の内部には、全面に赤色顔料が塗布されていた。西側に粘土枕があった。人骨は残りが悪く、大腿骨と思われる部分が一片あったのみである。その他の装身具類は現在までのところ見つかっていない。周溝内にベンガラを貯蔵した土器が見つかった。東側の斜面には石棺にベンガラを塗った後、整形した石棺の調整破片があった。時期は4世紀代と推定した。石棺と方位を90°逆えるように木棺墓があった。石棺は長さ250cm、幅150cm前後の墓坑に構築している。

古代墓については、いずれも主軸は東西、頭位は西と推定している。土坑内は埋土と流入土があり、木棺と流入土を包む埋土の立ちあがり明瞭に観察された。2基の木棺墓のうち南東部の墓から青磁の唾壺と土師質土器・唐鏡・釘・曲物・漆器が見つかった。北西部の墓からは、唐鏡・釘が見つかった。青磁の唾壺は口縁部が打ち欠かれていたし、二つの墓から出土唐鏡は半裁されていた。8世紀末～9世紀初頭頃の年代が考えられる。土師質土器を伴った墓は、その年代観から9世紀代の埋葬年代が比定される。



第2図 四日市遺跡第1次調査区周辺地形図（1/4000）



第3図 四日市遺跡第1次調査区と周辺の遺構分布略図 (1/750)

第2節 弥生時代中期後半の遺構と遺物

逆「く」の字形をした南北に長い第1次調査区は、南北で約150m、幅は広いところで約75mある。この広大な調査区の全域に遺構が広がっている。遺構の分布は大きく3か所程度に区分される。このため北西部遺構群、中部遺構群、南西部遺構群に区分して記載をしていく。

1 弥生時代中期後半の遺構と遺物 -北西部遺構群- (第5図)

四日市遺跡の北西部遺構群は、第1次調査区の中なかでもグリッド番号ロD51区北部とロD91区北部を結んだライン以北の一群である。この北西部遺構群には、SH3・SH17・SH34・SH35の方形竪穴建物跡が分布するが、これらは弥生時代後期終末であり、第3節で記載する。北西部遺構群のほぼ中央部に、大型竪穴建物跡のSH36・SH33が位置し、若干遺構分布が疎らな部分が取り巻き、その外側に竪穴建物跡(SH)、柱穴、土坑(SK)、円形遺構(S)、などが取り巻いている。

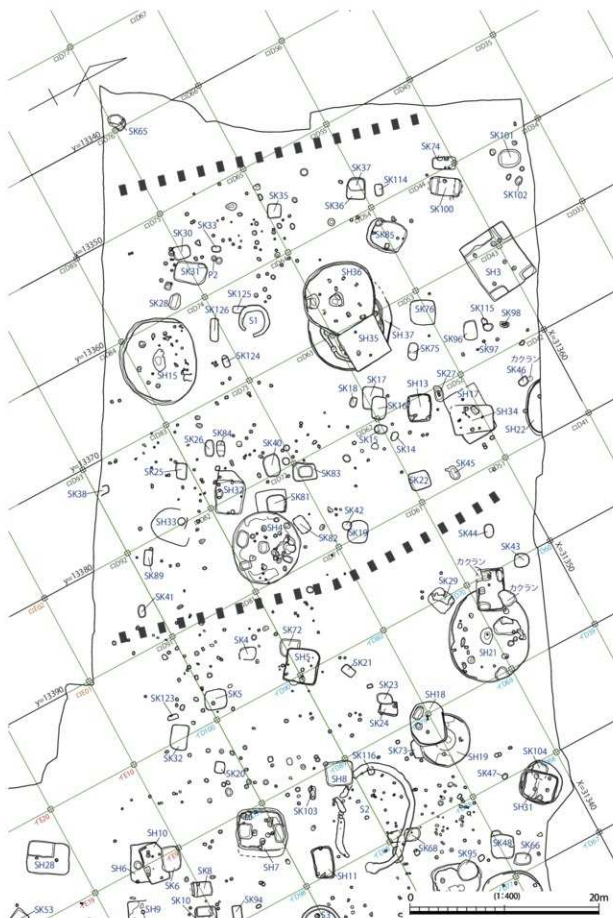
SK101 この土坑は、北西部遺構群の中なかでも最も北側に位置し、ロD34区西部に位置する(第5図)。この辺りは、平らな地勢にある場所で、やや東にSK102が隣接するだけで、他の遺構との距離はやや開く。土坑は、その上部平面形が楕円形であるものの、底部の平面形は隅丸長方形である(第6図)。土坑の規模は、長軸236cm、短軸190cmである。深さは、整地層までが82cmで、整地層下は掘っていないが、深い。土坑平面の長軸方位は、N-20°-Eである。土坑の底部は、ほぼ平らであるが、土坑壁の立ち上がりは、長軸方向の北壁が78°、長軸方向の南壁が78°・短軸方向の東壁72°・西壁76.5°で、南北小口の壁が立ち上がりの途中で外側に開くようになっている。土坑内堆積物は、1層～7層まであり、各層とも流入土のようであるが、後述する床面直上の土器と3層の土器が接合しており、埋土の可能性が高い。なおこの遺構は、詳細に分布図をみると土坑外に対角線近くに柱穴があり、あるいは土坑に関連されるものかもしれない。

〈遺物〉 上層～下層にかけて土器を中心に出土しているが、接合しており、集中性もあり、埋める過程で廃棄されている。完形復元されたものや大きな破片の4個体が整地層上面に遺棄されたと考えられるいずれも粗製の甕で(第7図1～4)、廃棄されたと考えられる。この他、混入と推定される丹塗りの高坏破片がある(5)。

SK102 この土坑は、北西部遺構群の中なかでも最も北側に位置し、ロD34区西部に位置する(図5)。この辺りは、平らな地勢にある場所で、西にSK101が隣接するだけで、他の遺構との距離はやや開く。土坑は(図8)、楕円形の土坑である。その規模は、長軸96cm、短軸70cmである。深さは32cmで、整地層下は掘っていない。土坑平面の長軸方位は、N-28°-Wである。土坑の底部は、北西端部から南東端部方向への伏角が6.5°の下り勾配となっている。土坑壁の立ち上がりは、長軸方向の北西小口壁が60°・長軸方向の南壁が58°であるなど開いている。土坑内堆積物は、調査していない。

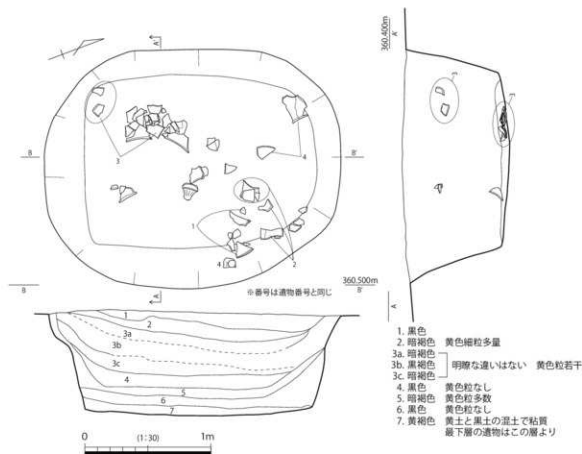
〈遺物〉 広口壺の頸部から胴部にかけての小破片がある(第9図6)。内外面をナデ調整している。

SK74 この土坑は、北西部遺構群の中なかでも北側に位置し、ロD45区とロD44区境界付近の北部に位置する(第5図)。この辺りは、平らな地勢にある場所で、東にSK100が平行するように隣接する以外は他の遺構との距離はやや開く。土坑の平面形は(第10図)、隅丸長方形である。土坑の規模は、長軸245cm、短軸133cmである。深さは90cmと深いが、整地層下は掘っていない。土坑平面の長軸方位は、N-25°-Eである。土坑の底部は、北東端部と南西端部方向を結ぶラインの勾配はあまりないが、長軸方向の南東から北西への内法の勾配が伏角6.5°の下り勾配となっている。土坑壁の立ち上がりは、短軸方向の北東小口壁が73.5°・短軸方向の南西小口壁が78.5°など、やや開く。これに対して、長軸方向の南東壁と北西壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。土坑底の南西壁下部から土坑長軸に直交する方向へ下り勾配で横穴が2か所掘り込まれている。



第5図 四日市遺跡第1次調査区 北西部遺構群詳細分布図 (1/400)

※点線の間が北西部遺構群



第6図 SK101実測図(1/30)

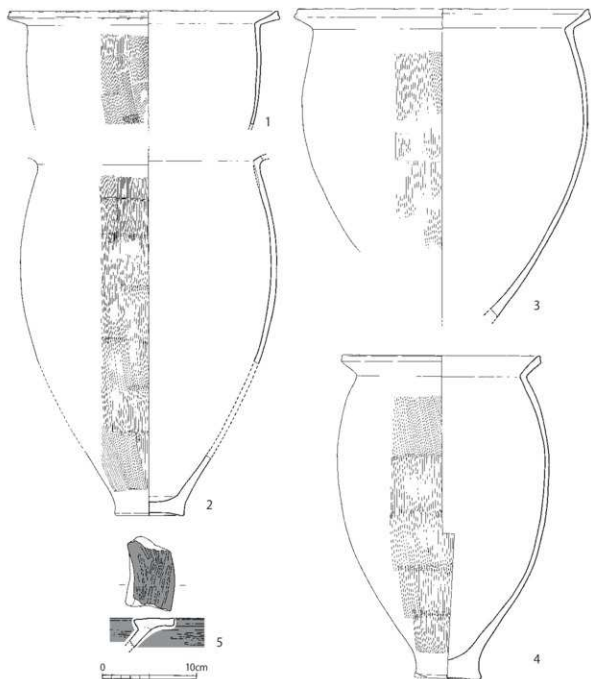
る。南側の横穴は、伏角 45° で75cm程度の掘り込みである。内部には、炭化物が大量にあった。また、長軸方向東壁の北よりの裾にも小型の横穴が2基あった。土坑は、自然層の3層上面(黒色土、クロボク)から掘り込んでいる。土坑内堆積土は、1'層~7c層まで確認されたが、5'層までは流入土と推定される。6a層は、ロームブロックであり、埋土の可能性がある。その他、7a層、7b層、7c層には大量の焼土・炭が堆積しており、この土坑での作業に伴うものと推定される。

〈遺物〉 流入土の中から、口縁がL字状に屈折し、直下に断面三角形の突帯がつく粗製の甕と(第11図7)、丹塗磨研鋤形口縁の甕の破片が出土している(8)。これらは、小破片であり、意図的にこの土坑に持ち込まれたかどうか明確ではない。鋤形口縁の甕の破片は、口縁の外側面にナデ調整時の爪形圧痕が観察される。

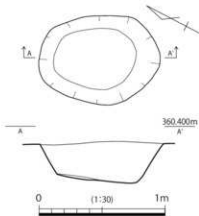
SK100 この土坑は、北西部遺構群のなかでも北側に位置し、ロD44区北西隅付近に位置する(第5図)。この辺りは、平らな地勢にある場所で、西にSK74が平行するように隣接する以外は他の遺構との距離はやや開く。土坑の平面形は(第12図)、隅丸長方形である。土坑の規模は、長軸355cm、短軸154cmである。深さは現状で78cmと深い。整地層下は掘っていない。土坑平面の長軸方位は、N- 36° -Eである。土坑の底部は、北東端部と南西端部方向を結ぶラインの勾配はあまりない。しかし、長軸方向の北東から南西への土坑底部の勾配は伏角 8° の下り勾配である。土坑壁の立ち上がりは、長軸方向の北西長軸壁・南東長軸壁とも 90° 近い。南東壁部北寄りの裾に横方向の穴が掘りこまれている。この横穴は奥行き40cm、幅40cm、高さ38cmの規模を有する。その他、北西長軸壁沿い近くに、2基の柱穴状の掘り込みがある。土坑内の両長軸端部には、長軸方向に直交する隅丸長方形をした一段低い掘削部分がある。しかも一段低い掘り込み幅の

半分近くまでオーバーハングするように掘り込まれている。このオーバーハングする掘り込みの規模は、北東小口部分で長軸195cm、短軸90cm、深さ35cm、底部から天井部までの高さ40cm、南西小口部分で長軸190cm、短軸110cm、深さ10cm、底部から天井部までの高さ38cmである。土坑内両端部にオーバーハングする掘り込みを有する土坑は、二回に渡る掘削で形成されている。土坑の長軸に設定した断面観察では、まず北東端部側が掘削され、何らかの行為を行った後に埋め（1層～6b層）その後、先行する埋土を掘り込み、何らかの行為を行った後に埋められていた（7層～11層）。

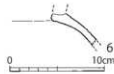
〈遺物〉 記録されている遺物の出土状態は、1点の鋤形口縁の広口壺の大破片が南西小口方向にある掘り込み部分近くの床面上に廃棄されていた（第13図9）。その他、口縁部が外方に「く」の字屈折する粗製の甕と（10）、埋土に混入していたと推定される丹塗り高坏の脚部（11）、器台の小破片がある（12）。



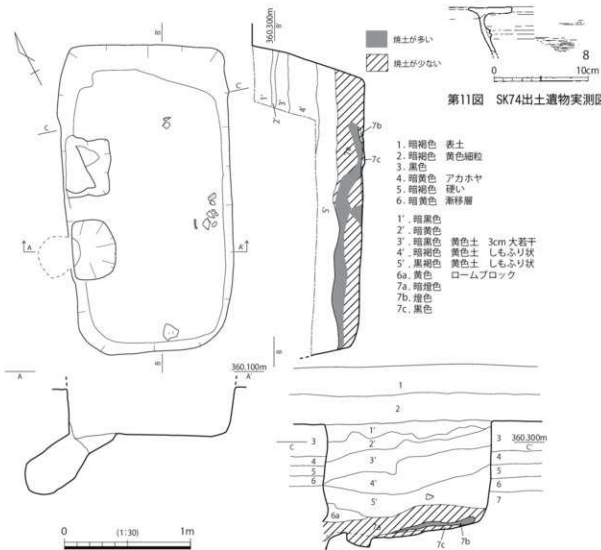
第7図 SK101出土遺物実測図



第8図 SK102実測図 (1/30)

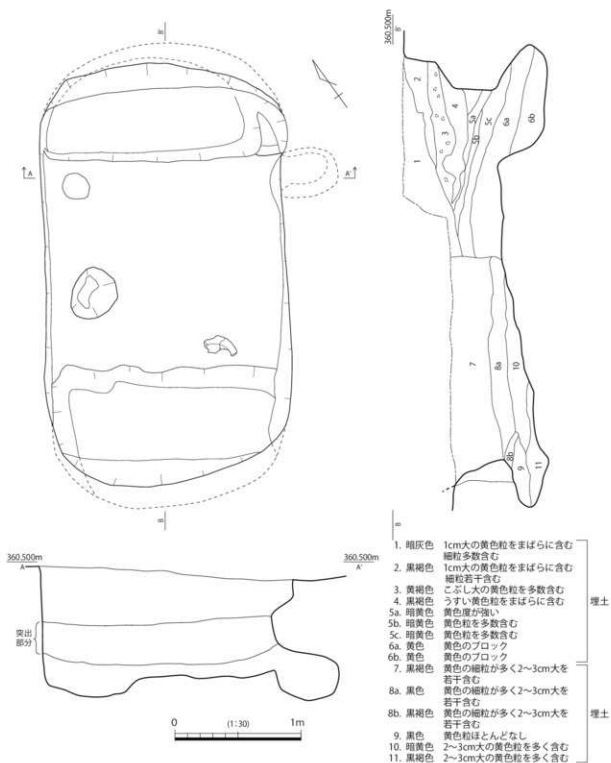


第9図 SK102出土遺物実測図



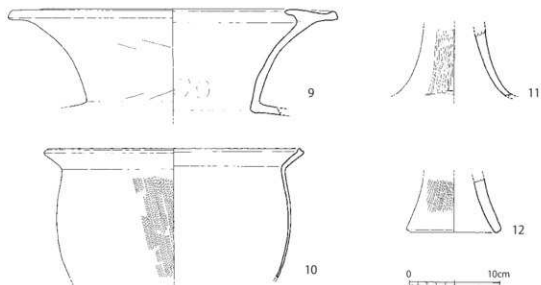
第11図 SK74出土遺物実測図

第10図 SK74実測図 (1/30)

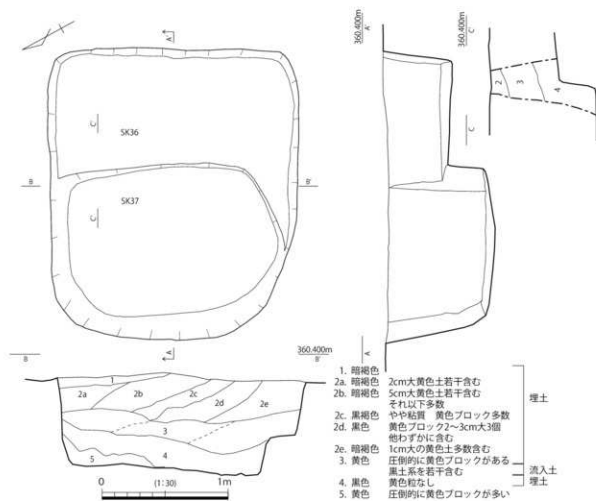


第12図 SK100実測図 (1/30)

SK36・SK37 この土坑は、北西部遺構群のなかでも北側に位置し、区画でいえばロD45とロD55区の境界に位置する（第5図）。この辺りは、比較的に平らな地勢にある場所である。土坑の平面形は、歪ながら隅丸方形である（第14図）。土坑は土坑内堆積物と切り合い関係から二つの土坑から形成されているが、ほぼ同時である。最初に深さ54cmのSK36が掘削される。次にSK36の中央付近から北西側を掘り広げるように深さ85

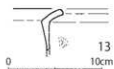


第13図 SK100出土遺物実測図



第14図 SK36・SK37実測図 (1/30)

cmのSK37を掘削している。この一連の作業が時期差なく行われていることは、土坑内堆積物である最下底部域直上の4層がSK36とSK37の下底面に被っていることから分かる。土坑の規模は、長軸230cm、短軸200cm、面積4.18㎡である。なお、直線的な長軸方向北東壁の方位は、N-60°-Wである。土坑内の立ち上がりは、SK36南西壁80°・同南東壁82°・SK37北西壁78°・同南西壁78°・同南東壁85°・同北東壁が82°である。土坑内の堆積土は、1層～5層までのうち、4層を除く各層は埋土の可能性が高い。4層は、現場では流入土と判断したが、堆積物全体の傾向からすると、あるいは埋土の可能性もある。



第15図 SK36・SK37
出土遺物実測図

〈遺物〉 土坑内からは、埋土に混入した「く」の字屈折口縁で粗製甕の小破片が出土している（第15図13）。

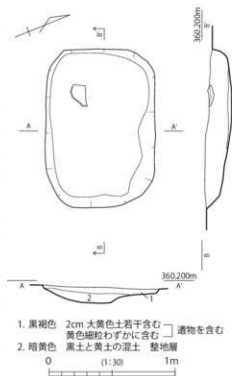
SK114 この土坑は、北西部遺構群のなかでも北側に位置し（第5図）、区画でいえばロD45南東隅部に位置する。この辺りは、比較的に平らな地勢にある場所である。土坑の平面形は、規模の小さい隅丸長方形である（第16図）。土坑の規模は、長軸126cm、短軸87cm、面積0.96㎡である。なお、長軸の方位は、N-68°-Wである。土坑の整地層上面までの深さは5cm、整地層下の掘削面までの深さが12cmと、浅い土坑である。土坑内の堆積土は、1層が埋土の可能性が高い黒褐色土、2層は黄色ローム土が混在する整地層である。

〈遺物〉 土坑内からは、1層上部に板石の破損部が出土したが、明確な土器・石器はない。

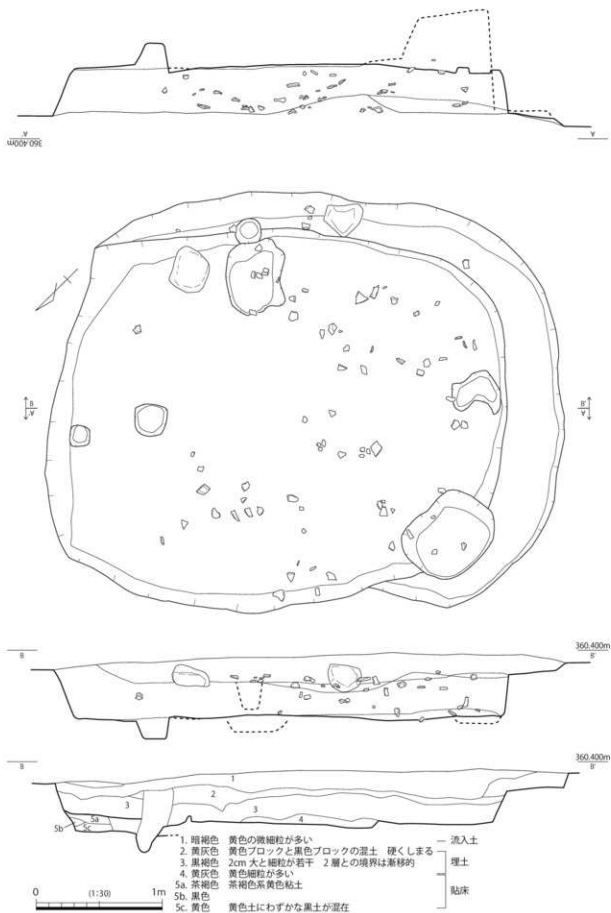
SK85 この土坑は、北西部遺構群のなかでも北側に位置し、区画でいえばロD44区とロD54区の境界部に位置する（第5図）。この辺りは、比較的に平らな地勢にある場所である。土坑の平面形は、規模の大きい隅丸長方形である（第17図）。規模は、長軸410cm、短軸333cm、面積約11㎡である。なお、長軸の方位は、N-44°-Eである。土坑の遺構ラインと同堆積土の断面観察から、二つの竪穴建物跡が重複している状況が切り合い関係から窺える。土坑内堆積土の断面を観察すると、SK85aが最初に掘削され、次いでSK85bが掘削されている。堆積土の2層は、SK85aの埋土であるが、硬化によってSK85bの床面・貼床状になっている。また2層上面を掘り込み面とするSK85bの柱穴が3層及びSK85aの床面を突き抜けて掘削されている。なお、4層・5c層は、SK85aの貼床（整地層）である。土坑壁の立ち上がりは、SK85bが浅い皿状で、SK85aは南西壁82°・北東壁が87°である。

〈遺物〉 遺物の垂直分布図をみると、大多数がSK85aに帰属し、SK85bに帰属する例は少ないが、いずれも小破片で個々の帰属は明確ではない。磨きのある広口壺破片（第18図14）、鋤形口縁の広口壺の破片（15）、屈折口縁粗製甕の底部破片（16）、丹塗磨研で鋤形口縁の高坏の破片（17）、丹塗磨研の無頸壺の蓋の破片がある（18）。なお無頸壺の蓋の破片には、穿孔がある。

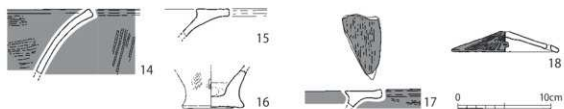
SK35 この土坑は、北西部遺構群のなかでも西側に位置し、区画でいえばロD55区とロD65区の境界部に位置する（第5図）。この辺りは、比較的に平らな地勢にある場所で、柱穴状の遺構が多い。土坑の平面形は、隅丸方形である（第19図）。規模は、僅かに長い方が153cm、短い方が147cm、面積約2.1㎡である。整地層面までの深さが28cmである。なお、僅かに長い方の方位は、N-61°-Wである。堆積層は1層から4層まであり、いずれも流入土とみられる。4層の下数cmの厚さを有する整地層がある。整地層上面に



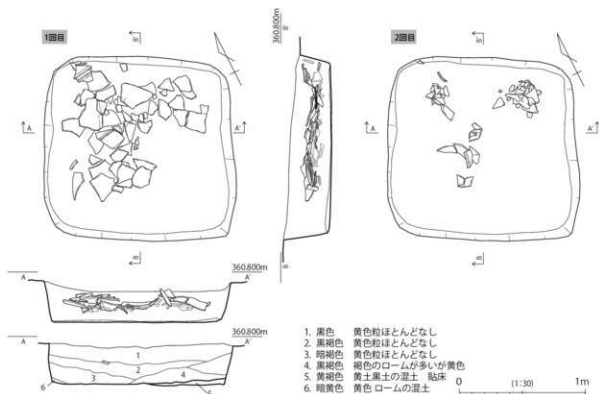
第16図 SK114実測図（1/30）



第17図 SK85実測図 (1/30)



第18図 SK85出土遺物実測図



第19図 SK35実測図 (1/30)

は、柱穴痕や台石などはなく、竪穴建物跡ではない。

〈遺物〉 流入土の2層が堆積しつつある状況のなかで、破損した大型の甕破片が敷き詰められるような状況で、廃棄されていた。とりわけ、土坑の西半部に西壁ラインと平行するように長方形になるように破片が敷き詰められている。廃棄された甕は、概ね2個体分である。甕は、流入土の2層中に含まれるので本来、土坑に伴う遺物ではない。また、この土器のパーツに足りない部分があり、出土した土坑内で破損したのではない。したがって、他の場所で割れた甕破片を選び、埋没しつつあったSK35内に敷き詰めるように廃棄したといえる。復元すると胴部が張る2個体分の甕で、同様に口縁部側と底部側を欠いており、大きさは胴径が42.2cm・現状での高さ32.5cmの例と胴径46cm・現状での高さ27cmであり、前者は最大径がやや上位で、後者は球形となる(第20図19・20)。両例とも胴部に二条の突帯があるが、前者が断面台形の突帯で、後者は上位の断面が三角突帯で下位の突帯がコの字形突帯である。いずれにしても、口縁部・底部側を欠く甕の大破片を敷き詰める行為の背景に民俗学的な意味の存在が窺われる。

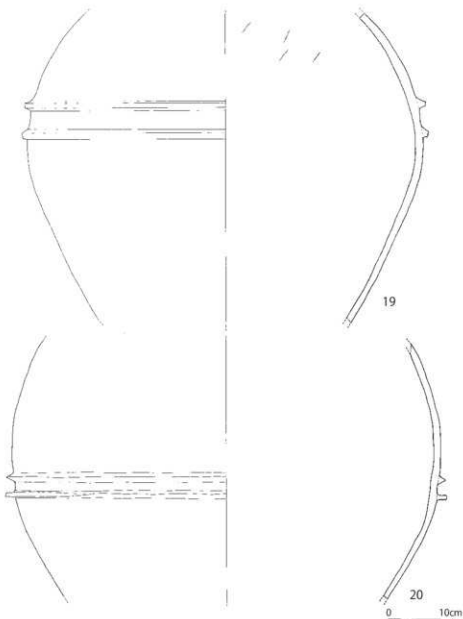
SK33 この土坑は、北西部遺構群のなかでも西側に位置し、区画でいえば口D65区に位置する（第5図）。この辺りは、西側が高く、東方向へ標高が緩やかに減っていく緩斜面であるが、柱穴状の遺構が多い。土坑の平面形は、長辺がやや膨らむ隅丸長方形である（第21図）。規模は、長軸100cm、短軸65cm、面積約0.6㎡である。整地層面までの深さが100cmで、長軸の長さと同じであり深い。なお、長軸の方位は、N-30°-Eであるなど傾斜する南北方向の地形に向いている。掘り下げ中に、土坑の幅に比べ深いため、中位ぐらいから堆積土のベルトを残し観察したところ、1層から4層までを確認した。いずれも流入土とみられる。土坑の立ち上がりは、東壁86°・西壁は100°から75°・小口南壁90°・小口北壁83°であった。

〈遺物〉 格別、記載するような出土状況などは観察されなかった。

SK30 この土坑は、北西部遺構群のなかでも西側に位置し、区画でいえば口D65区と口D75区の境界に位置する（第5図）。この辺りは、西側が高く、東方向へ標高が緩やかに減っていく緩斜面で、巨大な土坑SK31の西側に並列するように位置している。土坑の平面形は、幅広の隅丸長方形である（第22図）。規模は、長軸190cm、短軸142cm、面積2.3㎡である。最下底部までの深さが32cmである。

なお、長軸の方位は、N-16°-Eであるなど傾斜する南北方向の地形と同じである。堆積土は、1層から3層まで確認し、いずれも流入土とみられる。整地層は掘り下げていない。土坑の立ち上がりは、東壁71°・西壁84°・南壁64°・北壁66.5°である。SK30は、幅広い湖に深くない。

〈遺物〉 遺物は、粗製甕1個体分が破片状態で南壁よりの整地層直上に潰れた状態で出土しており（第23図21）、廃棄されたことが判かる。

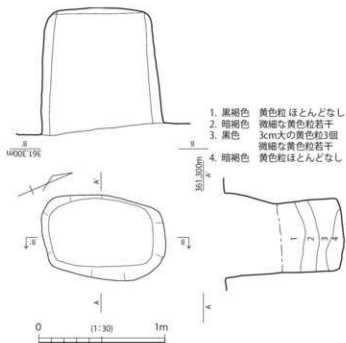


第20図 SK35出土遺物実測図

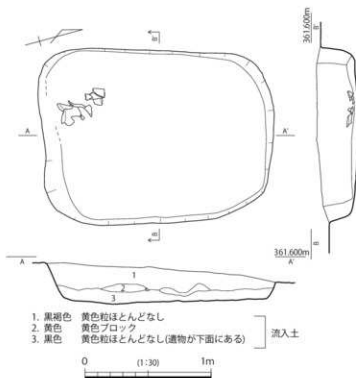
SK31 この土坑は、北西部遺構群のなかでも西側に位置し（図2）、区画でいえばロD65区とロD75区の間界に位置する（第5図）。この辺りは、西側が高く、東方向へ標高が緩やかに減っていく緩斜面方向に、巨大な土坑の長軸を向けている。土坑の平面形は、幅広の隅丸長方形である（第24図）。規模は、長軸が340cm、短軸が235cm、面積約6.5㎡である。なお、長軸の方位は、N-38°-Eである。最下底部（整地土上面）までの深さが56cmである。土坑内堆積土は、1層～7層までであるが、7層が整地土である以外は流入土である。なお、土坑外に対角線上（東北部分を除く）に柱穴がある。柱穴の掘り方の規模は、小さいもので60cm、大きいもので70cm×80cmの大きさがある。桁行は510cm、梁間は350cmである。

（遺物）土坑自体は柱穴を有する巨大なものであるが、特記するような出土状況はなく、小破片が出土しているにすぎない。

小破片には屈折口縁の甕の底部破片（第25図22）、鋤形口縁を呈する高坏の口縁部破片（23）、丹塗磨研の高坏脚部破片（24）、甕などの大型の蓋破片（25）がある。



第21図 SK33実測図（1/30）



第22図 SK30実測図（1/30）

SK28 この土坑は、北西部遺構群のなかでも西側に位置し、区画でいえば口D75区に位置する（第5図）。この辺りは、西側が高く、東方向へ標高が緩やかに減じていく緩斜面方向に直交するように土坑の長軸を向けている。土坑の平面形は、幅広の楕円形である（第26図）。規模は、長軸が173cm、短軸が117cm、面積約1.8㎡である。土坑下底面の深さは130cmで、その下の整地層は掘り下げていない。なお、長軸の方位は、N-45°-Wである。壁の立ち上がりは、北西小口84°・南東小口81°・北東壁80°・南西壁78°であり、深く急傾斜で、内法の短軸幅が50cm、内法長軸長は約135cmである。堆積土は、1層～6層までは円レンズ状堆積で流入土、7層は壁の崩落土、8層が流入土である。堆積土の状況は、陥穴に似ているが明確ではない。

〈遺物〉 土坑内からは、記録できるような遺物は出ていない。

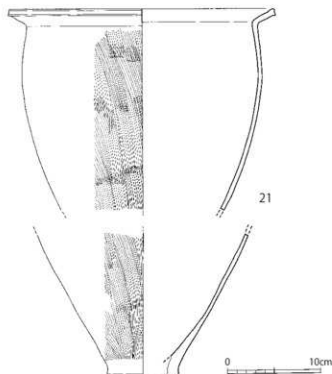
SK125 この土坑は、北西部遺構群のなかでも南西から南部側に位置し、区画でいえば口D64区に位置する（第5図）。土坑の平面形は、幅広の隅丸長方形と推定するが、円形周溝であるS1から切られており、正確な規模は不明である（第27図）。S1から切られている部分までの長軸が137cm、短軸が75cmである。整地層上面までの深さが12cmと浅い土坑である。残存部だけであるが、形態的には均整がとれている。なお、長軸の方位は、N-30°-Eである。堆積土は、1層を確認し、いずれも流入土とみられる。整地層は掘り下げしていない。

〈遺物〉 屈折口縁で粗製の甕の厚い底部破片が出土しているが（第28図26）、特記するものはない。

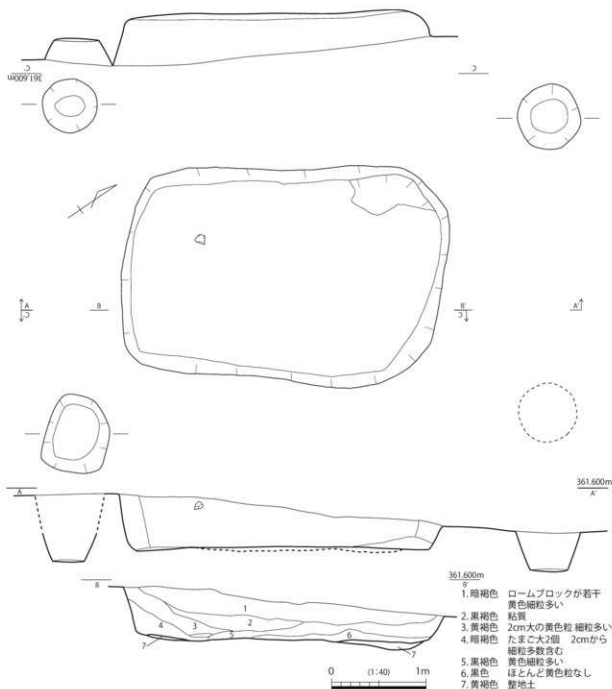
SK124 この土坑は、北西部遺構群のなかでも南部側に位置し、区画でいえば口D74区に位置する（第5図）。土坑の平面形は、幅広の隅丸長方形と推定される（第29図）。隅丸長方形と不定形、二つの遺構が切り合っているが、長軸方向のベルトを残していなかったため正確な前後関係は不明である。幅広の隅丸長方形部分の長軸が現状で90cm、ここから不定形遺構西端までの長さが40cm、隅丸長方形部分の短軸が70cmである。整地層上面までの深さと、整地層下の掘り込みまでの深さは、ともに10cmである。なお、隅丸長方形部分の長軸の方位は、N-83°-Eである。隅丸長方形部分の堆積土は、1層を確認し、流入土とみられる。不定形の掘り込み部分は、西側にややオーバーハングしている部分があり、掘り込み穴は東方を向く。また不定形の掘り込み部分の深さは38cmで、壁部分が被熱により赤色をしている。

〈遺物〉 台石の破片が出土しているが（第30図27）、出土状況等、特記するものはない。

SH15 この堅穴建物跡は、北西部遺構群のなかでも南部側に位置し、区画でいえば口D74区に位置する（第5図）。堅穴建物の規模と平面形は、東西920cm、南北800cm、面積約58㎡の規模を有する円形を基調とした楕円形の大型堅穴建物跡である（第31図）。掘り込み面からの深さは、最大で約60cmであり、SH15の北側



第23図 SK30出土遺物実測図

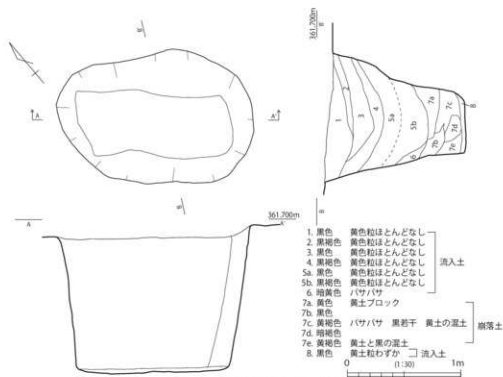


第24図 SK31実測図 (1/40)

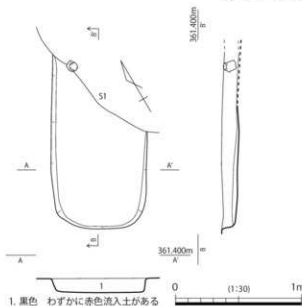


第25図 SK31出土遺物実測図

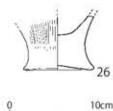
部分は、上面が傾斜しており浅くなっていた。堆積土は、基本的に流入土であり、貼床面下は掘り下げていない。柱穴は、大小11基あり、外周部分から内側へ約150cm程度入りこんだ部分にある。小型の例も、柱底である可能性が高く、掘方の大半は貼床・整地土で覆われていることが考えられる。なお、伊跡から見て東方の柱穴間が他の柱穴間よりも間隔が空いており、この方向が入口であると推定する。竪穴建物跡の中央



第26図 SK28実測図 (1/30)



第27図 SK125実測図 (1/30)

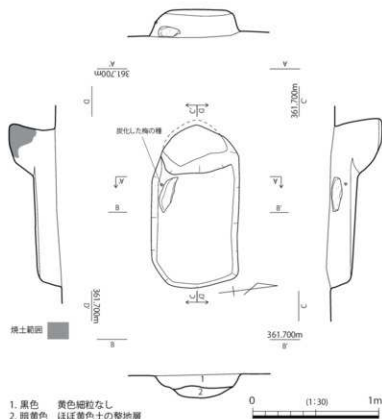
第28図 SK125
出土遺物実測図

には、長軸を北西方向と南東方向に向けた長楕円形の炉跡があり、方位はN-61°-Wである。炉跡は、長軸240cm、短軸125cmの規模で、床面までの深さが26cmであるが、被熱痕ははっきりしない。竪穴建物跡内部の壁治いのうち、北西部分-南部分-東部分には「壁周溝」がめぐっている。竪穴建物跡の中央から続く貼床部分か壁に沿った平面での「壁周溝」ラインが短く出入りをくり返している。このことは壁治いでの貼床・整地作業があまり部分と推定される。したがって「壁周溝」ではなく、掘り方の最下底部の黒土や整地土が見えている状況である。焼土の規模は、長軸約50cm、短軸40cmである。

〈遺物〉 遺物の大半は土器で、2層・4層に含まれていた。土器の中には、完全な形に復元された例もあるが、横倒しになり破片となったものが多い。

これらの多くは集中性があり、埋没しつつあるなかで廃棄されたと推定できる。

上層の遺物を説明する。壺は、あまり垂れない鋤形口縁の広口壺(第32図28)、無頸壺かと思われるもの(29)、器種不明ながら丹塗磨研の壺の胴部/底部がある(30)。甕は、「く」の字屈折口縁の粗製甕があり(31・32)、底部がやや厚い。この二つの甕は南西部でバラバラの破損状態で廃棄されていた。このほか、あまり垂れない鋤形口縁で丹塗り磨研の高坏(33)、筒形器台(34)、甕もしくは壺の蓋(35)がある。蓋は炉跡と北壁の間であって、流入土の2層中から潰れた状態で出土した。炉



第29図 SK124実測図 (1/30)



第30図 SK124
出土遺物実測図

跡の床面直上では、その西側で台石や敲石・磨石が出土している。また柱穴内に口縁部を欠く無頸壺(第33図)や大型の石(柱穴2)・高杯の脚部(柱穴3)が埋納された状態で出土している。

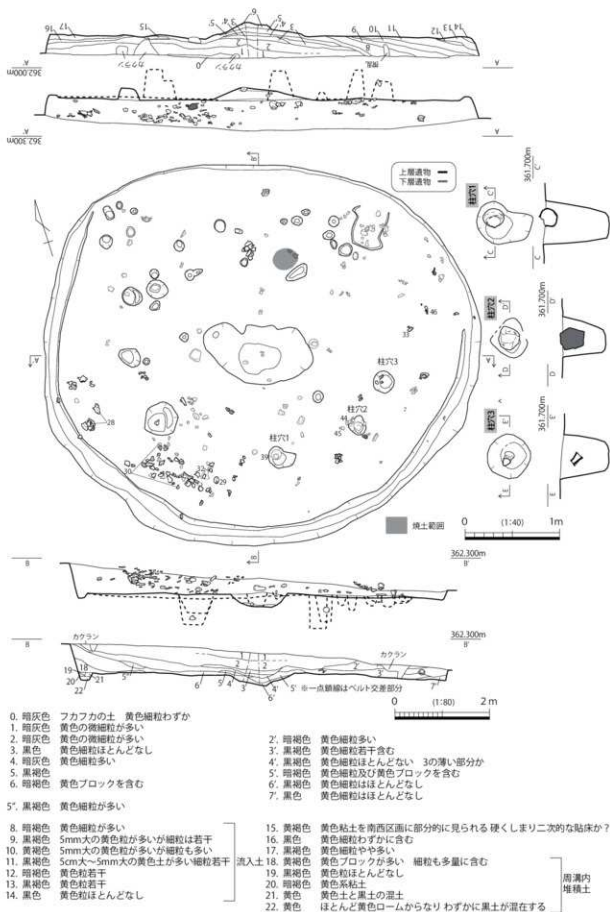
次に下層の遺物を説明する。広口縁で丹塗磨研の壺破片があり(第33図36)、

外面に0.8cmピッチで垂下する暗文がある。無頸壺は、小型例(37)と柱穴1に埋納の大型例(39)がある。甕は、屈折口縁で粗製の甕があるが、口唇部上面の跳ね上げは未発達で(40・41)、底部がやや厚い。このほか、丹塗磨研の脚付鉢または高杯の鉢部~坏部(42)、鉢(43)、筒形器台(44)、土製勾玉(45)、鉄製平鋸形工具(46)がある。また、竪穴建物跡から3cm~6cm前後の小礫が出土している(第34図47~第35図124)。SH36でも同様の小礫が集積された状況で出土し、投弾とされており、SH15の事例も投弾であると考えられる。この投弾は、礫のままで、全くの未加工であり、大きさを考えて集めている。

S1 この遺構は、北西部遺構群の中でも南部側に位置し、区画でいえばロD64区に位置する(第5図)。遺構の規模と平面形は、内径約230cm、外径約340cmの円形を基調とした円形周溝である(第36図)。溝の幅は、35cm~70cmであるが、緩斜面に位置する浅い溝であるため、僅かな起伏で溝幅が変わっている。そのためか溝が途切れている部分もあるが、実際は70cmを僅かに超える幅が本来の幅と推定される。溝の深さは、最深部で17cmと浅く、底部は緩やかに凹湾しており平ではない。

〈遺物〉遺物は、西側から南側にかけての溝内にかけて分布している。特に、西側の溝内に推定鋤形口縁の広口壺が潰れたようにほぼ一個体分が出土している。これについては、廃棄されたものと推定しており、外面胴部に二条の断面台形の突帯を付け、器面は磨いている(第37図125)。甕は、L字の屈折口縁の粗製甕である(126・127)。石器は、磨製石斧の基部と刃部が破損した例が1点ある(128)

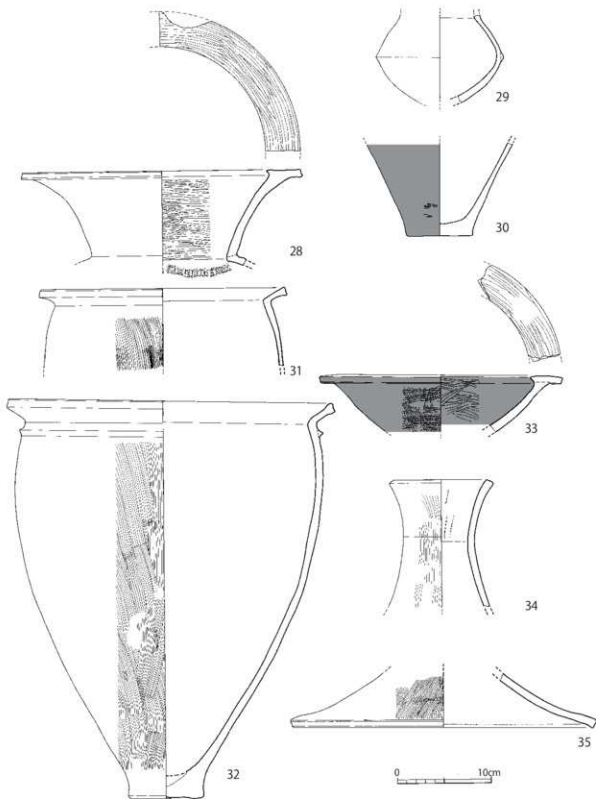
SK38 この土坑は、北西部遺構群のなかでも南部側に位置し、区画でいえばロD83区に位置する(第5図)。発掘調査区外にかかっており、正確な規模は不明である。現状での特徴から、隅丸長方形であることは確実である(第38図)。現状で長軸が82cm、短軸は83cmである。長軸の方位は、N-7-Eとほぼ南北方向に orienting。深さは、旧石器時代の包含層であるローム層上面を検出面として整地層上面までが52cm、整地層の下面までが54cmである。堆積土は、1層~5層が流入土、6層が整地土である。



第31図 SH15実測図 (1/80・1/40)

〈遺物〉 流入土のなかから高杯脚部の破片が出土しているものの、特記するような出土状況はない。

SK25 この土坑は、北西部遺構群のなかで南側に位置し、区画でいえばD83区に位置する(図5)。この辺りは、西側が高く、東方向へ標高が緩やかに減っていく緩斜面方向に位置する。土坑の平面形は、隅丸長方形である(第39図)。遺構の規模は、長軸が176cm、短軸が118cm、面積1.8㎡である。長軸の方位は、N-64°

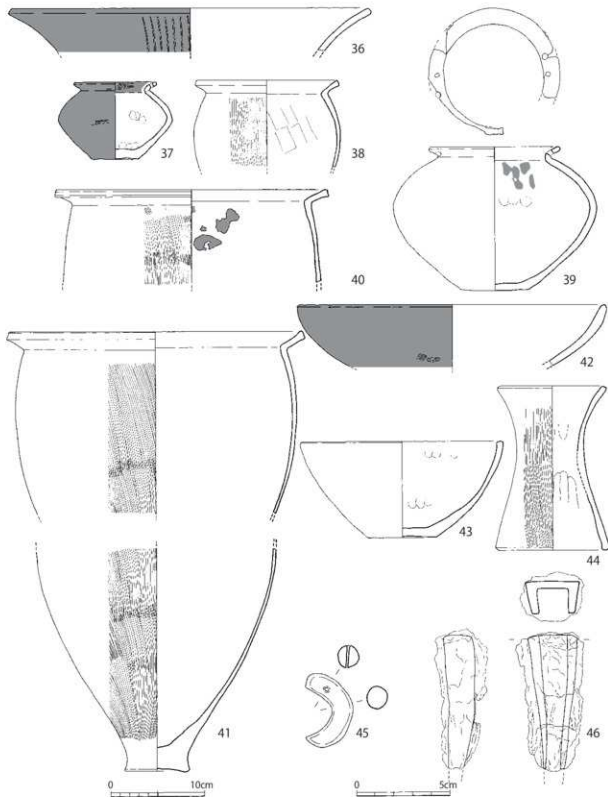


第32図 SH15出土遺物実測図①(上層)

である。土坑の整地土上面までの深さは60cmである。堆積土は1層～3層まであり、いずれも流入土である。

〈遺物〉 東から西へ流入する土の中に破損した筒形器台1個体分が散布している（第40図129）。

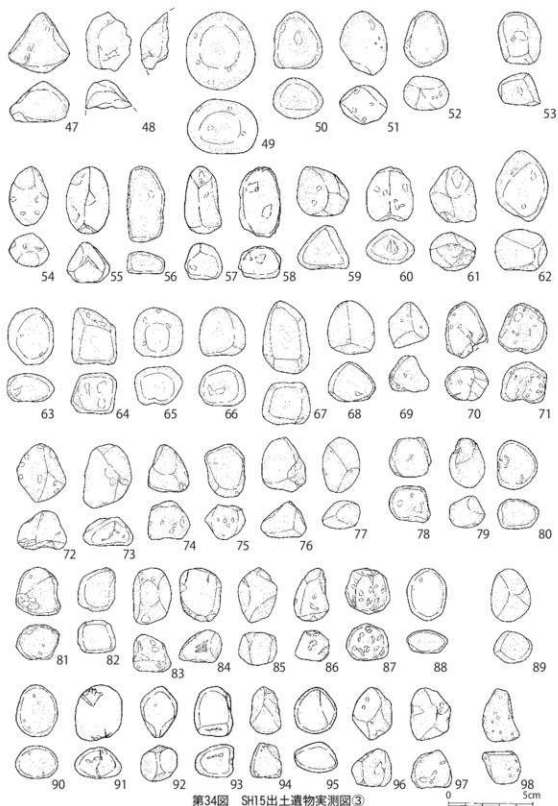
SK26 この土坑は、北西部遺構群のなかでも南東側に位置し、区画でいえば口D73区に位置する（図5）。

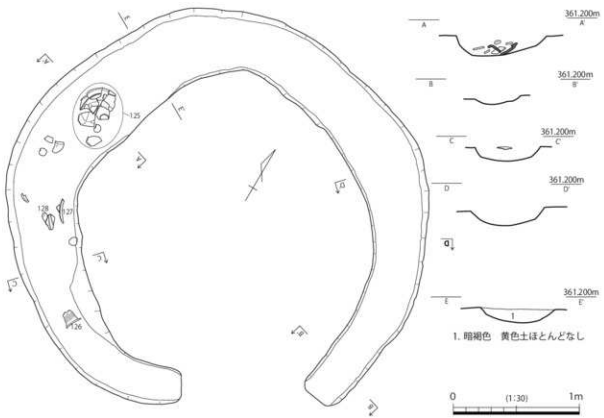
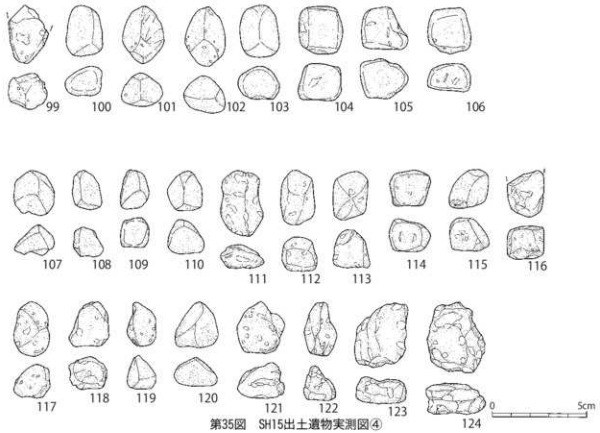


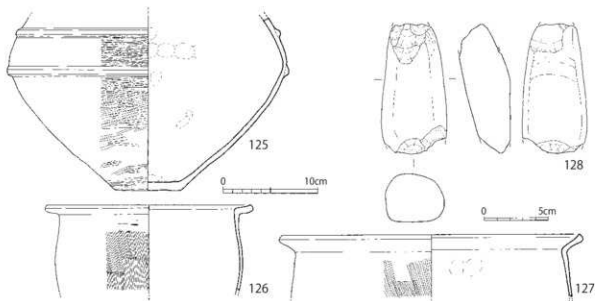
第33図 SH15出土遺物実測図②

第3章 調査の成果

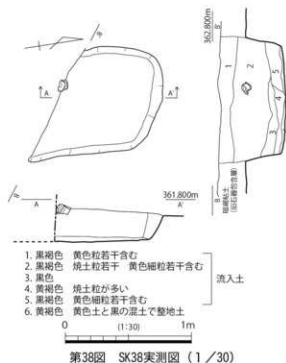
土坑の平面形は、隅丸長方形である（第41図）。遺構の規模は、長軸が175cm、短軸が96cm、面積1.52㎡である。長軸の方位は、N-60°Wである。整地土上面までの深さは50cmである。土坑内の壁の立ち上がりは、北西小口85°・南東小口で76°・南西長壁が77°・北東長壁77°であるが、内側に内湾する。整地土を除く堆積土は3層あり、流入土である。なお、このSK26の北側に約30cmの間隔を開けて並び平行するSK84がある。







第37図 S1出土遺物実測図



第38図 SK38実測図 (1/30)

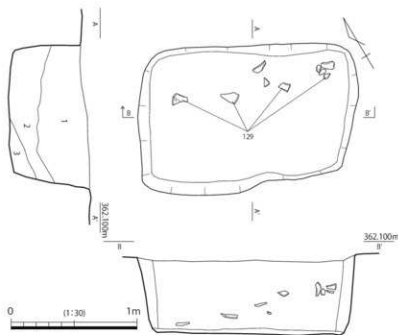
近距離で平行するSK84とSK26は、その位置からして、機能的に相互関係にある遺構であろう。

〈遺物〉 丹塗磨研で鋤形口縁の甕 (第42図130)、湾曲するL字状口縁の粗製甕 (131)、甕の底部がある (132)。

SK84 この土坑は、北西部遺構群のなかでも南東側に位置し、区画でいえばロD73区に位置する (第5図)。土坑の平面形は、隅丸長方形である (第43図)。規模は、長軸が160cm、短軸が86cm、面積約1.2㎡である。長軸の方位は、N-65°-Wである。深さは、最も深いところで70cmであるが、整地土下面是掘り下げていない。土坑内は、西側端部から40cmまでは深さ10cmと浅く、ここから伏角39°で東方向に掘り下げている。東側小口は、当初深さ40cmまで垂直に掘り下げているが、その後、東方向へ20cm程度オーバーハングするように壁を掘り込んでいる。このことからSK84の機能的な正面は西側小口といえよう。堆積土は、4層までが流入土で、5層は整地土。5層以外は、いずれも流入土で、西側から流れこんでいる様子が窺える。なお、この土坑の南側に約30cmの間隔を開けてSK26が平行するように隣接する。こうしたオーバーハングする遺構の類例は、SK74やSK100と同様で、遺構の主要部分がそれだけで形成された遺構はなかった。

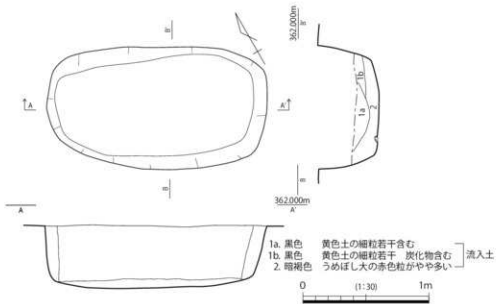
〈遺物〉 屈折口縁を呈する粗製甕の底部破片が最深部から出土しており (第44図135)、本土坑の掘削と近い時期かもしれない。このほか上位から、屈折口縁の甕破片があるが (133・134)、跳ね上がり口縁気味である。石器は、端部に敲打痕のある敲石が最上部で出土している (136)。

SK40 この土坑は、北西部遺構群のなかでも南東側に位置し、区画でいえばロD72区とロD73区の境界に位置する (第5図)。この辺りは、南側が高く、東方向へ標高が極緩やかに減じていく緩斜面方向に位置す



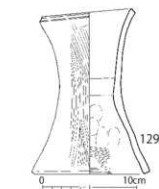
1. 黒色 黄色粒ほとんどなし
 2. 暗褐色 黄色・褐色ローム若干(たまご大)5個前後 細粒多い
 3. 褐色 黄色細粒わずかに含む

第39図 SK25実測図 (1/30)



- 1a. 黒色 黄色土の細粒若干含む
 1b. 黒色 黄色土の細粒若干 炭化物含む
 2. 暗褐色 うめぼし大の赤色粒がやや多い

第40図 SK26実測図 (1/30)



第40図 SK25出土遺物実測図

る。土坑の平面形は、幅広い隅丸長方形である(第45図)。規模は、長軸が232cm、短軸が174cm、面積約3.4㎡である。土坑内長軸の方位は、N-75°-Wである。また土坑最下部(整地土上面)までの深さは、74cmであ

る。壁の立ち上がりは、東壁小口で84°・西壁小口が82°・長軸南壁が85°・長軸北壁が78°で、底面(整地土上面)は平らで起伏は少ないなど断面形は急傾斜で箱形を呈する。

堆積土は1層~8層までであり、8層(整地土)を除く各層は流入土であ

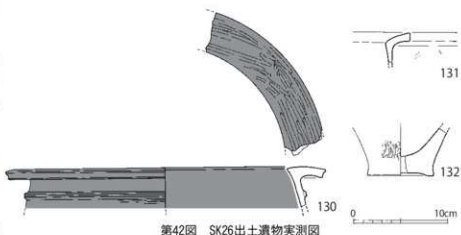
る。堆積土の流入方向は、南から北方向へ流入している。

〈遺物〉 土器を中心とした遺物は、流入した堆積土の6層から出土した。出土した土器のほとんどが南から北側へ伏角で傾斜する6層内に含まれていた。土器類は大多数が破損した大型の破片が多い。土器の大きな破片は、概ね5個体前後であるが、完形に復元できる例は1個体であり、復元に必要なパーツが足りないこれらの例は、南部から南東の近隣に位置するSH4もしくはSH32方面から持ち込み廃棄した痕跡と推定する。したがって、出土した土器類は本来のSK40の使用に伴うものではない。なおSK40の整地土上面に特記する土器はない。廃棄された土器は、口縁を欠く広口壺(第46図137)、同じく広口壺の別個体である2点の大

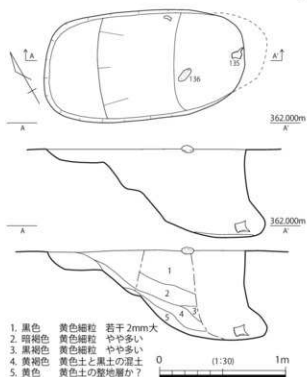
第3章 調査の成果

破片 (138・139)、口径37cmの大型の「く」の字屈折口縁の粗製甕 (140)、器高22.5cmの小型の「く」の字屈折口縁の粗製甕 (141)、筒形器台 (143) が出土している。

SK81 この土坑は、第1次調査区の北東

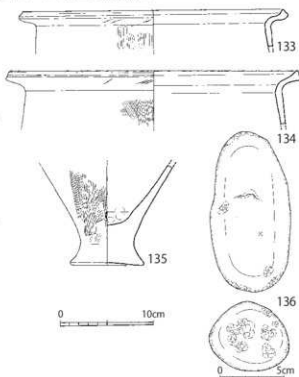


第42図 SK26出土遺物実測図



第43図 SK84実測図 (1/30)

- | | | |
|--------|-----------|--------|
| 1. 黒色 | 黄色細粒 | 若干2mm大 |
| 2. 暗褐色 | 黄色細粒 | やや多い |
| 3. 黒褐色 | 黄色細粒 | やや多い |
| 4. 黄褐色 | 黄色土と黒土の混土 | |
| 5. 黄色 | 黄色土の整地層か? | |

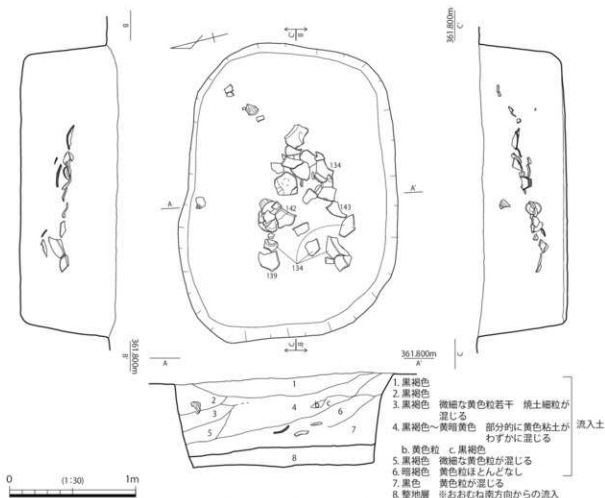


第44図 SK84出土遺物実測図

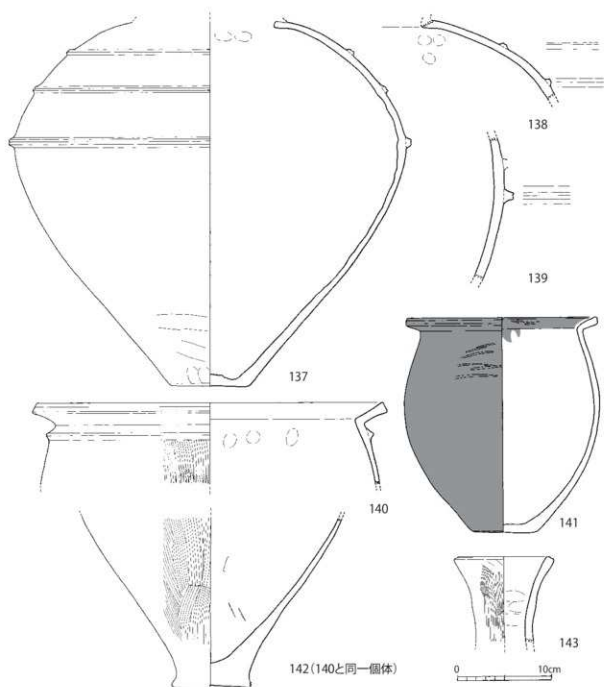
部道構群の南東部に位置する。区画では、ロD72区にあたる (第5図)。このあたりは、南側の比高が高く、北側へ向けて緩く標高を減じていく地勢である。こうした地勢上の方向に向けるよう土坑の直線部が平行する。土坑の平面形は、幅広の隅丸長方形である (第47図)。その規模は、長軸323cm、幅250cmである。長軸の方位は、N-29°-Eである。土坑の長軸方向に平行する西壁は、僅かに堅穴建物跡のSH14に切られていることから、同堅穴建物跡にやや先行するといえるが、微妙にSK81を避けているようにも見える。土坑内の北東隅部寄りに、長軸200cm、短軸180cmの規模を有するやや小型方形土坑が掘り込まれている。土坑の一段目は、深さ17cmと浅く、二段目は一段目の整地面から約65cm程度掘り込まれているが、切り合い関係は認められないことから一連の掘削に関わる土坑である。土坑内の一段目と二段目の整地面とも平坦である。この土坑内には、1層から9層までの流入土と10層の整地土からなる堆積土がある。整地土は部分的に掘り下げたが、全掘はしていない。流入土は、標高の高い南側の土坑外から主に流入しているが、北側方向からも若干の流れ込みがある。

〈遺物〉一段目の整地直上に粗製甕の一個体分が横倒しになる状況で出土した甕があるが、遺棄したものと推定する。また、土坑の北半部の巨大な台石と甕の大破片や、内側土坑の最上部域の遺物集中部分は1層中に含まれていた。台石は、その大きさから(長さ32cm・幅25cm)、流入したとは考えられず、土器は群集しており、両者とも廃棄された可能性が高い。その他の土器片は、流れ込みの可能性もある。また、遺物類は、土坑一段目で出土した「く」の字屈折口縁の粗製甕(第48図145)と、台石の近くで1層中から見つかった底径の大きい土器(壺か)(146)以外で明確に土坑へ遺棄した例はない。特に、ほぼ復元できた「く」の字屈折口縁の粗製甕は、口唇端部が跳ね上げ風であることから、須玖Ⅱ式土器に相当する。土坑内に遺棄・廃棄された遺物は、その出土層位から直接土坑の掘削目的と関連するものでなかったことが考えられる。この他、擦過痕のある砥石破片(147)、河原の長楕円礫を利用した砥石(148)が出土している。長楕円礫の砥石は表面が磨痕、裏面には鋭く抉られた横方向の傷がある。この他、鉢の破片がある(144)。

SK83 この土坑は、第1次調査区の北東部遺構群の南東部に位置する。区画では、ロD62区とロD72区の境界西部にあたる(第5図)。このあたりは、南側の比高が高く、北側へ向けて緩く標高を減じていく地勢である。こうした地勢上方向に向けるよう土坑直線部が平行する。土坑の平面形は、幅広の隅丸長方形である(第49図)。その規模は、長軸256cm、幅194cm、面積7.7㎡である。SK83の長軸の方位は、N-28°Eで、SK81と同じである。土坑内には、もう一段下を掘り下げており、その規模は、長軸160cm、短軸116cm、面積3㎡の規模を有する小型方形土坑が掘り込まれている。こうした内部遺構のあり方は、SK81と同様である。土坑の一段目は、深さ38cmと浅く、二段目は一段目の整地面から約58cm程度掘り込まれている。一段目と二段目



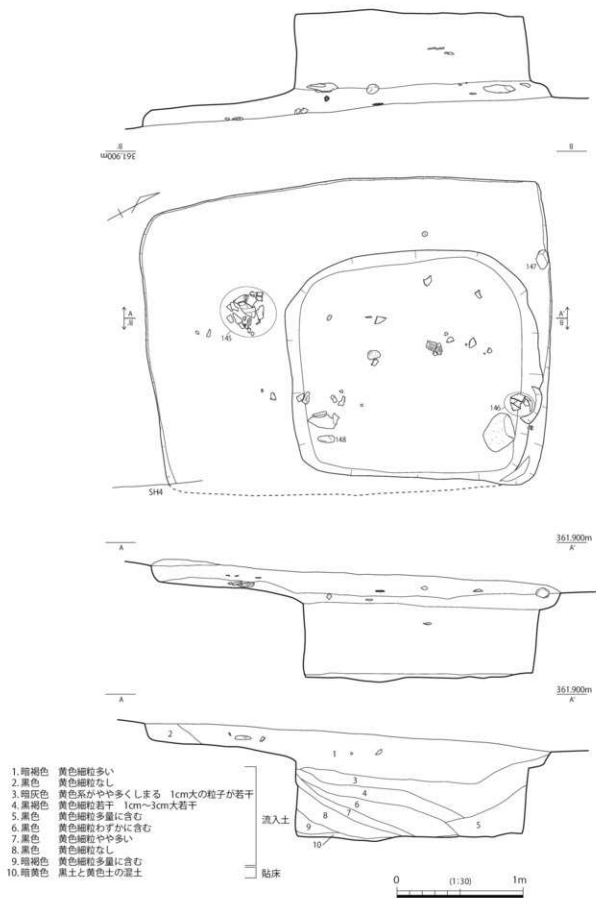
第45図 SK40実測図(1/30)



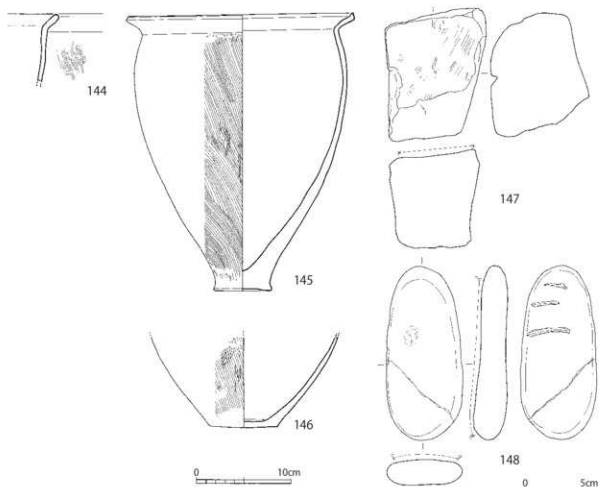
第46図 SK40出土遺物実測図

の整地面とも平坦で、後者は整地土下の最下底面までは掘り上げていない。この土坑内には、1層から14層までの埋土と流入土からなる堆積土がある。まず焼土粒・炭化物を含む流入土14層が堆積する。次に、南西方向から埋土が入られる。次に、12層から7層までの土壌が流入する。このうち7層と9層は、黒色の腐植土であり、草本類が一時的に繁茂していたことがわかる。

〔遺物〕 遺物の出土状況は、遺構内堆積土の上層・下層に区分できる。下層遺物は、4a層から9層取り上げの都合で1面目と2面目に分けたが、ほぼ同時廃棄である。下層の壺は、縦ハケのある底部破片がある(第51図150・151)。下層の甕には、鋤形口縁の上面が内傾する丹塗磨研でM字突起のある精製甕がある(第52図153)。また口縁部径が38.4cm、胴の最大径が62.7cmと胴部の張り方が特に大きい甕があり、内傾する上

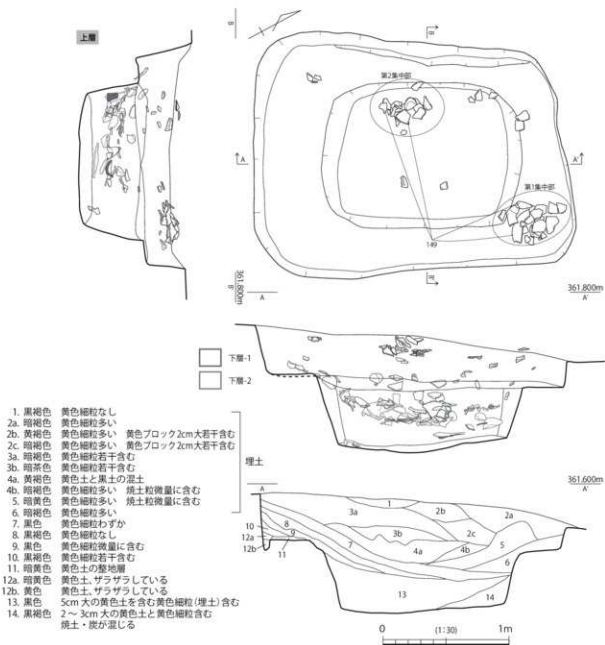


第47図 SKB1実測図 (1/30)



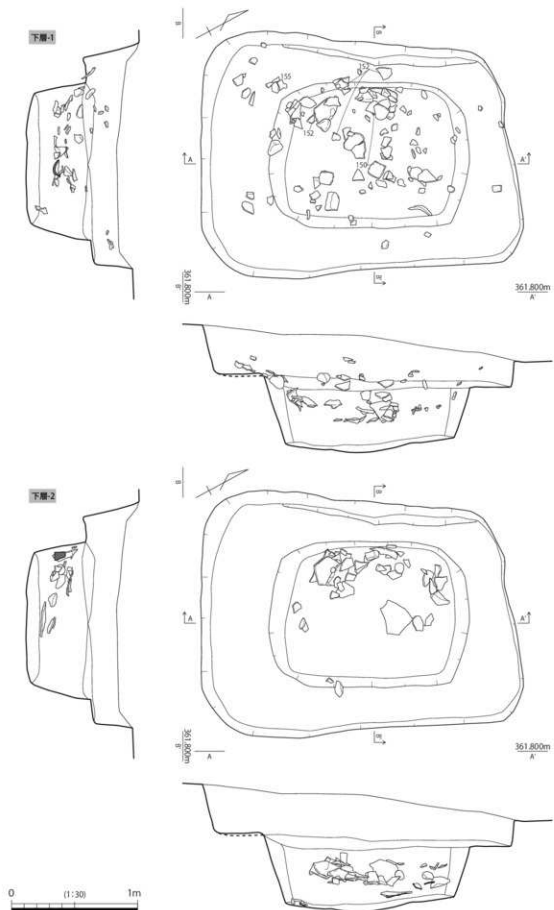
第48図 SK81出土遺物実測図

端部に鋤形口縁が付いている(152)。この大型の甕は、その大きさと重量から貯蔵用に設置した甕と考えられる。この他、屈折する口縁を有する粗製の通常甕がある(155)。下層からは、やや大型の砥石と敲石が出土した(158・159)。砥石は、表面に対し、磨り面のある側面が直角状に展開する例である。敲石は、細長い楕円礫の両端に明瞭な打痕がある。その後、上層になると、遺物は、埋土の1層から3b層までの間に大破片が廃棄されていた(第49図)。この上層には、大破片をかため置くように第1集中部と第2集中部という小規模な集中廃棄単位が観察された。この第1集中部・第2集中部という二つの廃棄は、時を置かず形成されたとみられ、集中部間で相互に接合した土器片の接合がみられる(第51図149)。したがって、両集中部は、廃棄区分したというような民俗学的に何か特別な意味があるというものではなく、破損・散乱する土器片をかき集めて廃棄した単位を物語っていると考えるのが自然である。上層出土の土器には、鋤形口縁で浮文のある広口壺の大破片(149)、屈折口縁で粗製の甕(第52図154・156)及びその底部がある(157)。なお鋤形口縁の広口壺にある浮文は(149)、口縁部幅の中央部ではなく、内よりにシフトしている。いずれにしてもSK83から出土した遺物類は、SK83が土坑としての役目が終了した後での廃棄行動のパターンを示している。こうした土器や台石の廃棄については、SK81に隣接するSH14との接合作業を実施していないが、至近距離に居住するSH14の居住者が行った可能性がある。土器は、甕の底部が薄いこともあり、須玖Ⅱ式土器新段階に相当すると考えられる。

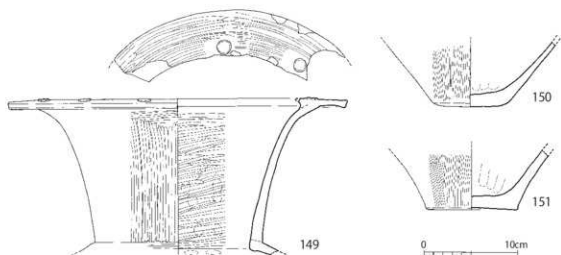


第49図 SK83上層実測図(1/30)

SK82 この土坑は、北西部遺構群のなかでも南東側に位置し、区画でいえばD72区に位置する(第5図)。この土坑の南側には、僅かな間隔を空けて大型の竪穴建物跡があるSH4が隣接する。切り合いもなく隣接するのでSH4の居住者に属する施設の可能性がある。この土坑の平面形は、隅丸長方形である(第53図)。規模は、長軸が191cm、短軸が114cm、面積2.1㎡である。土坑の長軸方位は、N-80°-Eである。また土坑最下部(整地土上面)までの深さは、75cmである。掘削した層を観察すると、黄色ローム層下位まで掘り込んでいる。壁の立ち上がりは、東壁小口が97°・西壁小口が95°・長軸南壁が93°・長軸北壁が113°から83°で立ち上がる。検出した遺構ラインから壁の最下部が外側数cmの位置にあるなど、オーバーハングする。最下底面と壁の移行部分は鋭角的である。底面(整地土上面)は平らで起伏は少なく、断面形は概ね箱形を呈する。堆積土は1層~7層までであり、いずれも比高の高い南側から多くが流入した流入土である。



第50図 SK83下層実測図 (1/30)



第51図 SK83出土遺物実測図①

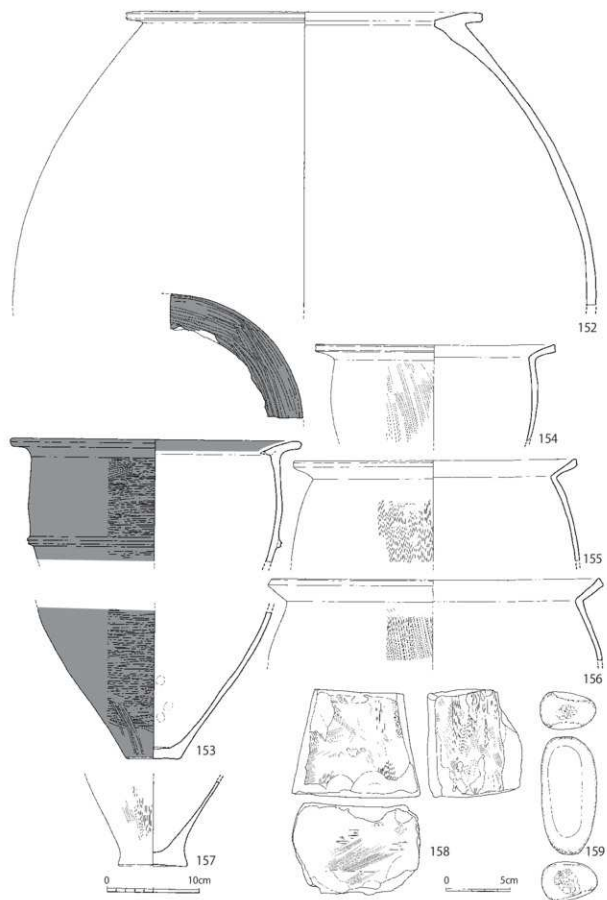
〈遺物〉 遺物は、土器を中心として散布状態で若干出土しているが、いずれも小破片で流入土に混入し一緒に堆積したものと推定される。したがって、遺構の掘削理由に直接関わる土器ではない。鋤形口縁の上面幅が幅狭い甕の破片(第54図160)、やや口唇上面が跳ね上げ状になる屈折口縁の粗製甕(161)、鋤形口縁で丹塗磨研をした高坏(162)、底径が大きく甕とも考えられる底部破片がある(163)。

SK19 土坑は、北西部遺構群の中部にあたり、区画でいえばD61区とD62区に位置する(第5図)。この辺りは、比較的平らな地勢にある場所である。SK19は、SH4の北方約5m地点に位置し、西側遺構ラインを小土坑のSK42に切られている。土坑の平面形は、幅の広い隅丸長方形であるが、楕円形に近い(第55図)。土坑の長軸方位と規模は、N-54°-W、長軸242cm、短軸210cm、面積4.3㎡で、深さは42cmとあまり深くない。土坑の整地層上面は、ほぼ平らである。土坑内の立ち上がりは、長軸平行の南西壁付近と東北壁がそれぞれ86°と88°と急な角度で立ち上がる。そのほか、小口の北西壁が69°、南東壁80°である。土坑内の堆積土は、1層～11層までが流入土で、周囲が平らな地勢であるためか、南西と北東方向の土坑外から交互に土が流入している。整地層とその下は掘っていない。なお、このSK19と、その周辺遺構の配置を観察すると、SK42・SK83・SK40・SK81・SK82など共にSH4を囲んでいるように見え、SH4に関連する遺構の可能性はある。

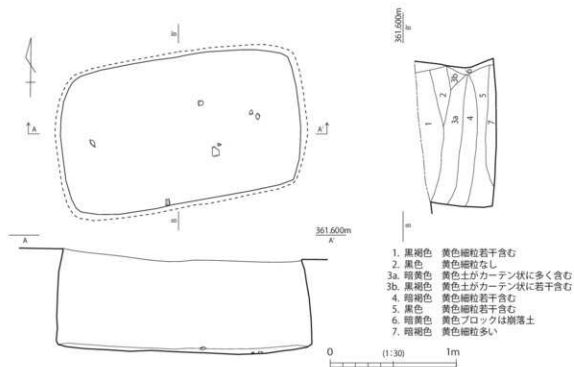
〈遺物〉 土坑内からは磨石(第56図164)と、敲石(165)台石(166)が出土している。敲石が整地土直上面で出土した。他は上位の流入土中からである。

SK42 土坑は、北西部遺構群の中部にあたり、区画でいえばD62区に位置する(第5図)。この辺りは、比較的平らな地勢にある場所である。SK19と同様にSH4の北方約5m地点に位置する。SK42は、東側の遺構ラインが大型土坑のSK19を切っており、同土坑に後出して掘削されている。その平面形は、幅の広い円形である(第57図)。土坑の規模は、東西97cm、南北102cm、面積約0.7㎡の小土坑である。深さ35cmで、その断面形は、長方形の箱形であり、壁が90°近い立ち上がりである。土坑の整地層上面は、ほぼ平らである。土坑内堆積物と1層を除き南側からの流入土である。1層は縦方向に延びた不自然な層であり、攪乱であろう。

〈遺物〉 2個体分の甕の大破片が、整地面の直上で出土している。大破片は甕の一部分であり、復元するには全く足りないが、土坑のほぼ中央部下底にまとめていたことから、土が流入する直前か流入し始めた直後に土坑外から一塊の廃棄単位として土器破片類を集め、廃棄したことがわかる。甕は2種類あり、1点は

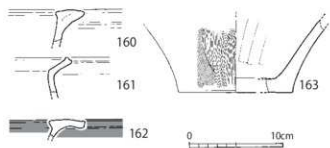


第52図 SK83出土遺物実測図②



第53図 SK82実測図 (1/30)

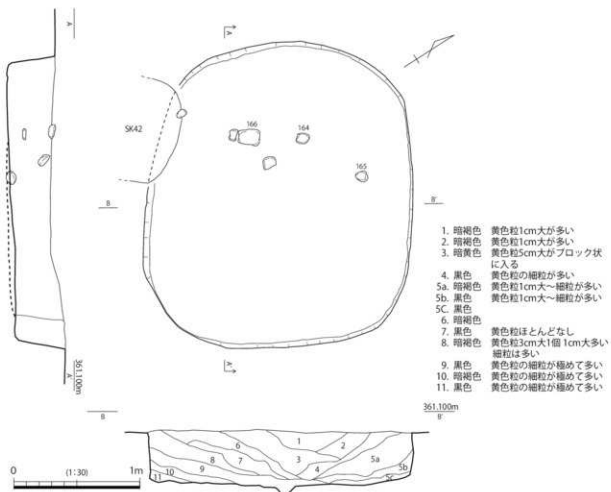
大型の甕 (第58図167)、もう1点は、やや口径の大きい屈折口縁の甕破片である (168)。大型の甕は、太いコの字状突帯が二条めぐる。また屈折口縁の甕破片の外周調整は、ハケメではなく、下から上方向への板ナデである。これらの土器破片は、整地土直上出土であるものの、本来の遺構掘削目的との関係は不明である。



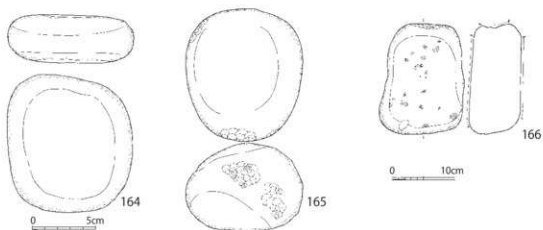
第54図 SK82出土遺物実測図

SK41 この土坑は、北西部遺構群の南東部で、最も南側の部分にあたり、区画でいえばD92区に位置する (第5図)。このあたりは、南側の比高が高く、北側へ向けて緩く標高を減じていく地勢である。SK41は、地形の傾斜に直交する方向に長軸を向けている (第59図)。周辺に遺構がほとんどない場所である。その長軸方位は、 $N-72^{\circ}-W$ である。土坑の平面形は、隅丸長方形に近い長楕円形である。土坑の規模は、長軸132cm、短軸80cm、面積0.84㎡の小土坑である。その深さは、103cmと規模に比べ深く、陥穴状である。その立ち上がりは、長軸側小口壁が 82° と 85° ・短軸側は 84° (中ほどから 69°)と 87° (中ほどから 76°)で、壁の中ほどから開き気味になる。土坑最下底部の整地層上面は、ほぼ平らである。土坑内堆積物は掘り下げの途中から断面を設定して観察し、1層から13層までの流入土を確認したが、黄色土粒の混入が各層で多く、あるいは埋土とも考えたが、堆積状況を観察すると、薄い層とやや厚い層が凹レンズ状に堆積していることから流入土と推定した。

〈遺物〉 周囲に堅穴建物跡や大型土坑がないなど、空間利用の点で目立った痕跡がなく、流れ込みした遺物も出土しておらず、特記するような出土遺物・出土状況はない。



第55図 SK19実測図 (1/30)



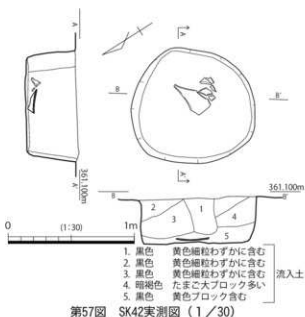
第56図 SK19出土遺物実測図

SK89 この土坑は、北西部遺構群の南東部にあたり、区画でいえばD82区南西隅部に位置する（第5図）。このあたりは、南側の比高が高く、北側へ向けて緩く標高を減じていく地勢である。SK89は、地形の傾斜方向と直交する方向に長軸を向けている（第60図）。その長軸方位は、N-57°Wである。土坑の平面形は、比較的に整った隅丸長方形である。土坑の規模は、長軸117cm、短軸92cm、面積1.48㎡の小土坑である。深さは、35cmと比較的に浅い。立ち上がり角度は長軸の小口で80°と87°である。土坑内堆積土については、観察していない。

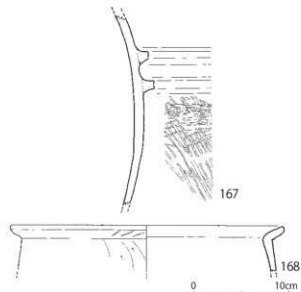
〈遺物〉 土器の出土状態については記録していないが、2個体分の大破片が出土し、一塊の廃棄単位として廃棄されたものと推定される。1点は、口縁端部を欠くものの大口口縁の壺で（第61図169）、口縁部から胴部上半にかけての破片である。もう1点は、跳ね上げ口縁がL字状に屈折する粗製の甕であり、底部の厚さが薄い例がある（171）。

SH33 この竪穴建物跡は、北西部遺構群の南東部にあたり、区画でいえばD82区とD83区に位置する（第5図）。このあたりは、南側の比高が高く、北側へ向けて緩く標高を減じていく地勢である。SH33は、極めて残りが悪く、正確な平面形は分からないが、隅丸正方形に近い形であったのかもしれない（第62図）。検出面から床面最上部までが5、6cm前後である。この遺構の規模は、概ね長軸430cm前後、短軸350cm前後である。こうした規模と深さから考えると竪穴建物跡であった可能性が高い。しかし支柱穴が明確でなかったこともあり、不明な点が多い。また、竪穴建物跡内の北寄りに直径約84cmの土坑があるが、竪穴建物跡の付属施設であった可能性がある。

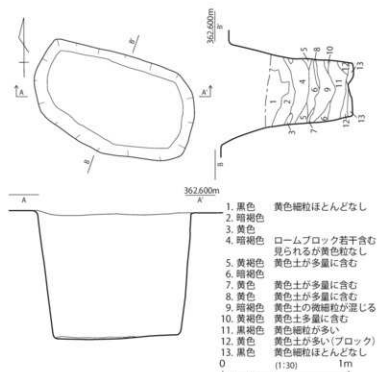
〈遺物〉 遺物の出土状態は、床面直上から土器の数個体が押し潰れた状況と、土器小破片が散在する状況で出土しているが規則性はなく、遺棄されたものと考えられる。甕は、口径が26.2cm、高さ34cm前後の大きさを有する「く」の字状に口縁が屈折する粗製の甕である。口唇端部上面の跳ね上げはみられず底部が薄い（第63図172・173）。特にこの土器は、同一個体でありながら四つの集中部を形成しながら分布していた。遺構から石器と石製品が若干出土している。軽石製品は、火山噴出物で発泡した多孔質で極めて軽い石である（174）。僅かに擦り減ったような痕跡があるが、光沢のある摩滅ではない。四日市遺跡では竪穴建物跡内などで多く出土しており、しばしば鋭い線状痕が観察される。石斧は、平面形が長方形をしており、刃部は両刃で刃こぼれがある。体部に敲打による調整痕と、その上に琢磨の痕跡が残る（177）。3.4cm前後の長さで2.5cm前後の厚さを有する石を用いた投弾も出土している（175・176）。



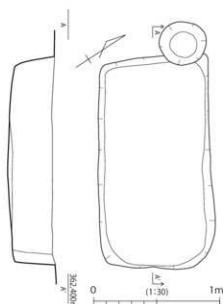
第57図 SK42実測図 (1/30)



第58図 SK42出土遺物実測図



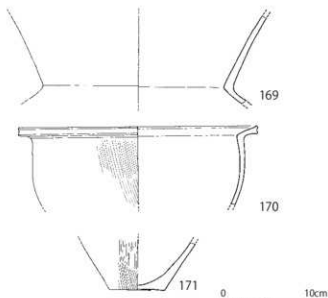
第59図 SK41実測図 (1/30)



第60図 SK89実測図 (1/30)

SH32 この竪穴建物跡は、北西部遺構群の南東部にあたり、区画でいえばロD72区とロD73区に位置する(第5図)。

このあたりは、南側の比高が高く、北側へ向けて緩く標高を減じていく地勢である。大型竪穴建物跡のSH4の西側に隣接する。SH32の平面形は、隅丸正方形に近い長方形である(第64図)。規模は、長軸360cm、短軸310cm、面積11.2㎡の小型竪穴建物跡である。SH32の長軸方位は、N-60°Wである。深さ約35cmである。基本的には2本主柱穴で、長軸方向の壁付近にある。このほか、南側の長軸方向の壁より長軸105cm・短軸70cm・深さ15cm程度の小土坑があり、その長軸方向の土坑内斜面に40cmの間を開けた二つの小柱穴がある。更にこの小土坑の長軸

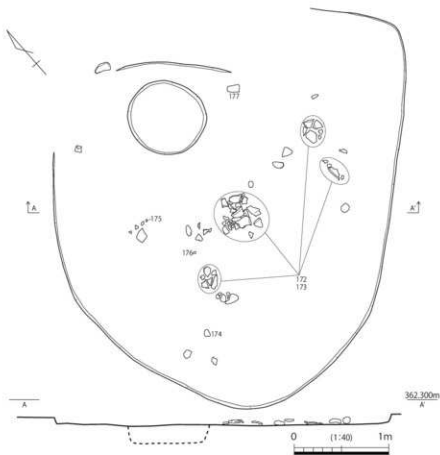


第61図 SK89出土遺物実測図

方向の外側に浅い柱穴が位置している。遺構内の堆積土は、9層あるが、流入土である。竪穴建物跡の最下底部の整地層上面は、ほぼ平らで、上面に焼土・被熱部分が広範囲に広がっている。なお、西壁の外側へ幅100cmの張り出した浅い遺構があるが、SH32に切られている。

〈遺物〉 南部の床面直上中心に、ほぼ完形に復元できるタテハケで調整した粗製甕が潰れた状態で出土した他、伏せられた状態の5個体が置かれており、遺棄されたものと考えられる。そのほか、別個体の甕小破片が出土しているが、集中性はなく、流れ込みと考えられる。甕のうち、器高が19cm~27cmまでの高さを有する小型の甕が4点ある(第65図180~183)。そのうち1点は、口縁がS字状の特徴をもつ例で(180)、

他は「く」の字状に屈折する口縁である。このうち1点は、胴部の最大幅が頸部直下であり、その胴径が口径より著しく小さいなど鉢のような外観をしている(183)。中型の甕は、高さが推定で約50cm、口径は39cmであり、口唇端部上面が跳ね上げ状になっている。また頸部直下に断面三角の突帯を二条めぐらせている(184)。この他、土製品として、器面を丁寧に調整した紡錘車がある(第66図189)。石器は、磨製石斧(190)、敲石・磨石(191)、台石(192)が出土している。このうち磨製石斧は横斧の片刃石斧

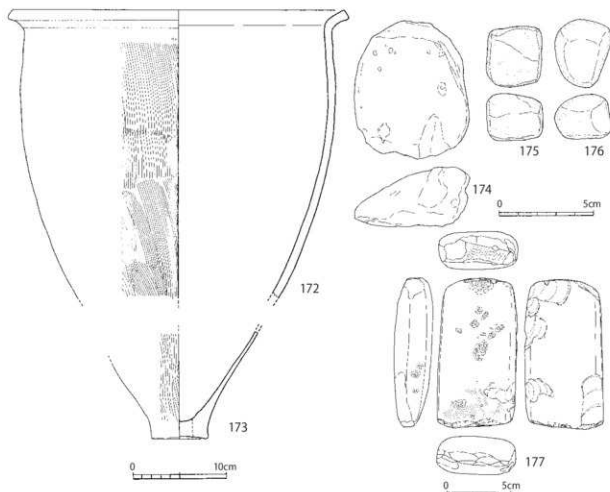


第62図 SH33実測図(1/40)

である。使用のためか、器体の基部側が破損しているほか、後主面側方向へ著しい刃こぼれが生じている(190)。台石は、板状石を利用しており、表裏両面に磨痕が観察される。

SH4 この竪穴建物跡は、北西部遺構群の南東部にあたり、区画でいえばD72区に位置する(第5図)。このあたりは、南側の比高が高く、北側へ向けて緩く標高を減じていく地勢である。SH4の平面形は、円形で、その規模は、東西760cm、南北725cm、面積43.4㎡の大型竪穴建物跡である(第67図)。深さ約35cmである。床面上に7本の支柱穴があり、やや長楕円形に並ぶ。北東側に柱穴が2基単位で外側方向へ並んでいる部分があるが、あるいは出入り口か。中央部には、長軸125cm・短軸97cmの土坑もしくは炉跡があり、明確な被熱痕は観察されていない。その一方、炉跡と支柱穴間の2箇所で見規模な焼土・被熱痕が床面に観察された。このほか、西側から南側の壁沿いに浅い土坑が3箇所存在していた。遺構内の堆積土は、流入土である。SH4は、遺構の北部から北東にかけて深さ約35cmの掘り込みがある(第68図)。この部分は最初に流入土、次に埋土、次に薄く硬い数枚の層からなる貼床が観察される(B~B'ライン)。また炉跡の西側には焼土・被熱痕が観察された。

〈遺物〉 出土状態を観察すると、潰れたような集中性のある土器の大破片などの出土状態はなく、散漫で規則性がない。したがって、遺物は床面直上に遺棄された小破片や流入によるものと推定される。土器には、以下のようなものがある。壺は、胴部下半から底部にかけての大破片で、大型の広口壺である(第69図194)。丹塗磨研の脚付無頸壺は、SH27で出土した脚付短頸壺のうち口頸部を取り除いた器形である(199)。この他、壺には黒色磨研の無頸壺がある(201)。甕は、丹塗磨研で胴形口縁の上部破片と(196)、中型の屈折する口縁の粗製甕の上部破片がある(197)。鉢は、ボウル状に立ち上がり、口縁が内側内湾気味の例であ



第63図 SH33出土遺物実測図

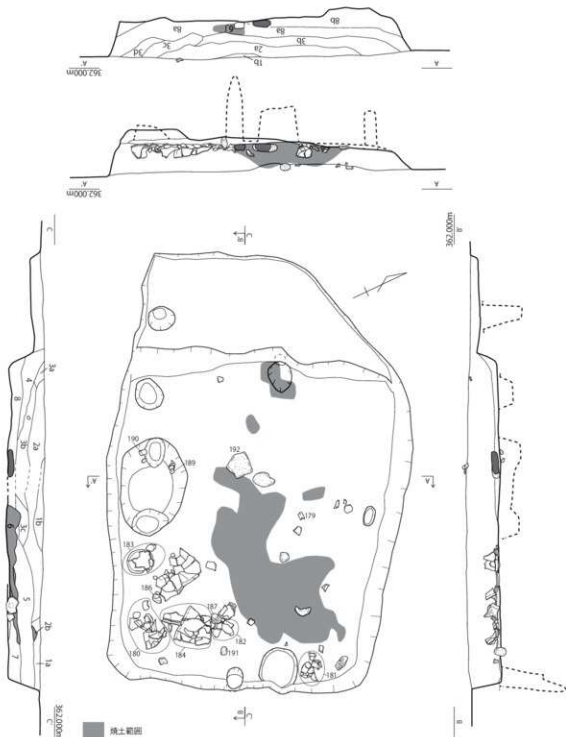
る(200)。高坏(202)、器台がある(203)。石器には以下のものがある。小型の横斧で後主面が著しく刃こぼれした例である(205)。この他、石包丁(204)、砥石(206)、鉞石・磨石(第70図207・208)がある。

SK15 土坑は、北西部遺構群の東部にあたり、区画でいえばロD52区とロD62区に位置する(第5図)。この辺りは、比較的平らな地勢にある場所である。土坑の平面形は、幅の広い長楕円形で(第71図)、その規模は、長軸140cm、短軸99cm、面積71㎡である。この土坑の深さは70cmであるが、底部の南側が斜面になっている。土坑長軸の方位は、N-34°-Eである。土坑内の堆積土は、1層～6層までの流入土と、7層の整地土からなる。整地層とその下は掘っていない。

〈遺物〉土坑内から、「く」の字屈折の粗製甕(第72図209)、丹塗磨研で鋤形口縁の甕(210)、小型無頸壺の蓋(212)、磨製石鏃(213)などが出土したが、出土状態に特記するような状況はない。

SK14 土坑は、北西部遺構群の東部にあたり、区画でいえばロD52区に位置する(第5図)。この辺りは、比較的平らな地勢にある場所である。土坑の平面形は、幅の広い楕円形である(第73図)。土坑の規模は、長軸100cm、短軸72cm、面積0.6㎡である。深さは16cmと浅い。長軸の方位は、W-33°-Nである。土坑内の堆積土は、1層だけの流入土と、その下の整地土からなる。整地層とその下は掘っていない。

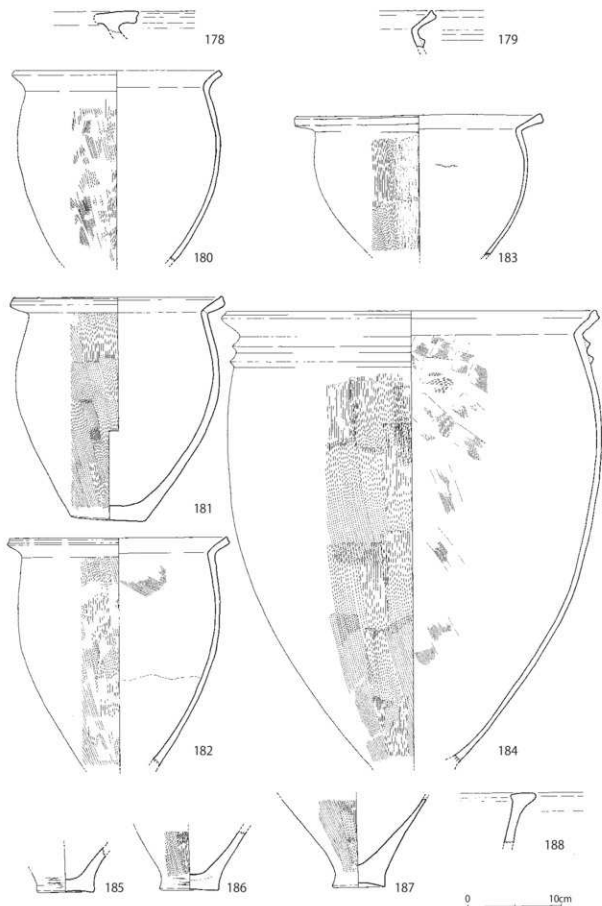
〈遺物〉土坑内から屈折口縁と思われる小型の甕の底部小破片が1点出土しているが(第74図214)、出土状態に特記するような状況はなく、二次的な流れ込みと推定される。



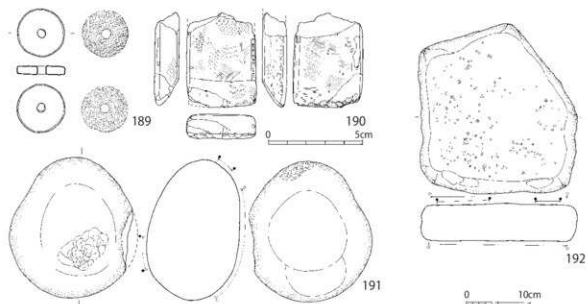
- | | | | |
|---------|--------------------|----------|------------|
| 1a. 黒色 | 黄色粒なし | 4. 暗褐色 | 黄色粒なし |
| 1b. 暗褐色 | 黄色粒ほとんどなし | 5. 暗褐色 | 黄色粒若干含む |
| 2a. 暗褐色 | 黄色粒 1～2cm 大 若干含む | 6. 黄褐色 | 黄色粒なし 焼土 |
| 2b. 黄褐色 | 黄色粒 1～2cm 大 焼土が多い | 7. 黒黄褐色 | 黄色粒なし 灰が多い |
| 3a. 黒色 | 黄色粒なし | 8a. 黒黄褐色 | 黄色粒なし 灰が多い |
| 3b. 黒色 | 黄色粒なし 焼土が若干 炭化物含む | 8b. 黒黄褐色 | |
| 3c. 暗黒色 | 黄色土が漸移的にかなり混じる しまる | | |
| 3d. 黒色 | 黄色 2cm 大 1個含む | | |

0 (1:40) 1m

第64図 SH32実測図 (1/40)



第65図 SH32出土遺物実測図①



第66図 SH32出土遺物実測図②

SK16・SK17 二つの土坑は、北西部遺構群の東部にあたり、区画でいえばロD53区とロD63区の境界南部に位置する（第5図）。この辺りは、比較的平らな地勢にある場所である。まずSK17の土坑が掘削されている（第75図）。その平面形は、幅の広い長方形をしている。土坑の規模は、長軸240cm、短軸220cm、面積5.16㎡である。深さは38cmと浅い。長軸の方位は、W-62°-Nである。土坑内の堆積土は、1層～3層までの流入土と、その下の整地土からなる。整地層とその下は掘っていない。その後、SK16の土坑が掘削されている。この土坑の規模は、長軸241cm、短軸160cm、面積3㎡である。深さは50cmで、短軸方向の立ち上がりは90°近い。土坑の平面形は、隅丸長方形である。長軸の方位は、W-61°-Nである。土坑内の堆積土は、1層～9層までの流入土と、その下の整地土からなる。整地層とその下は掘っていない。両遺構の新旧関係は、SK17→SK16と変遷する。

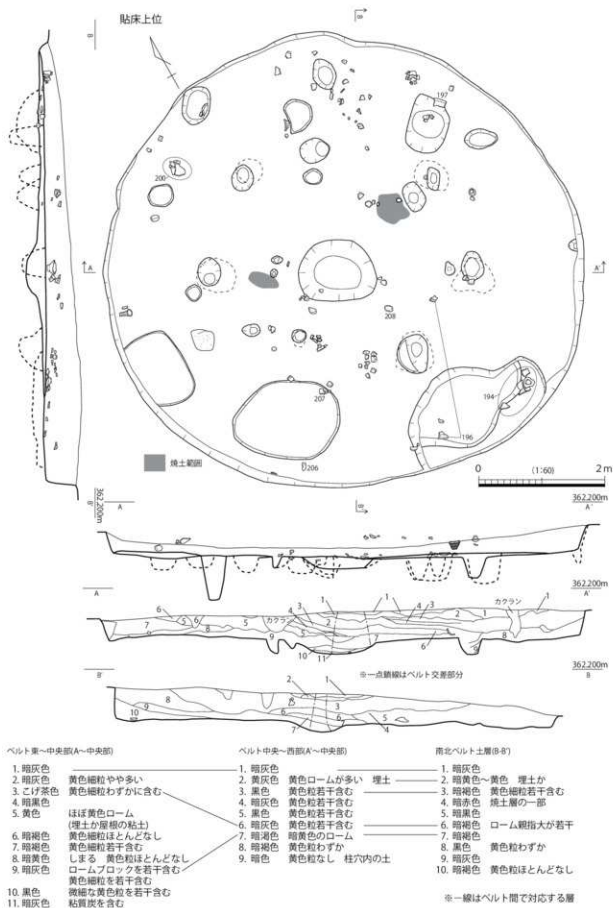
〈遺物〉 出土状態に特記するような状況はないが、SK16から「く」の字屈折口縁の粗製土（第76図215）と台石が出ている（216）。

SK18 この土坑は、北西部遺構群の東部にあたり、区画でいえばロD63区北東部に位置し、大型の竪穴建物跡SH37の東約3m地点にあたる（第5図）。このあたりは、比較的平らな地勢である。土坑の平面形は、隅丸長方形である（第77図）。土坑の規模は、長軸108cm、短軸72cm、面積0.77㎡の小土坑である。深さ85cmと幅に比べ深い。SK18の長軸方位は、N-47°-Wである。土坑最下底部の整地層上面は、ほぼ平らである。土坑内堆積物は観察していない。

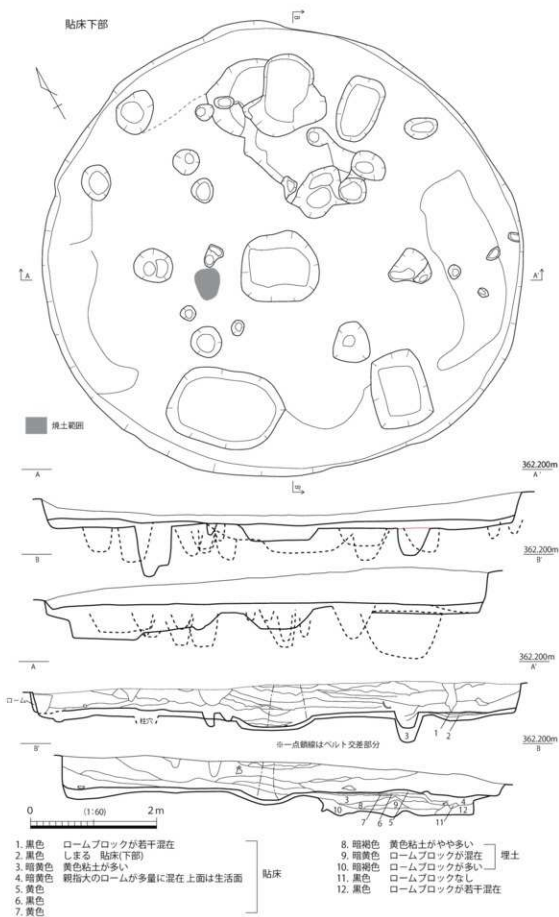
〈遺物〉 特記するような出土状況はない。

SK45 この土坑は、北西部遺構群の東部にあたり、区画でいえばロD52区東部に位置する（第5図）。このあたりは、比較的平らな地勢である。SK45の長軸方位は、N-91°-Wである。土坑の平面形は、長楕円形であり（第78図）、土坑の規模は、長軸152cm、短軸95cm、面積1.1㎡の小土坑である。その深さは60cmと深い。この土坑の最下底部の整地層上面は、ほぼ平らであるが、その上面は、中央部から長軸の西側方向へ高く、全体的に長軸方向の断面形が逆台形である。土坑内堆積物は観察していない。なお、整地土は掘り下げていない。

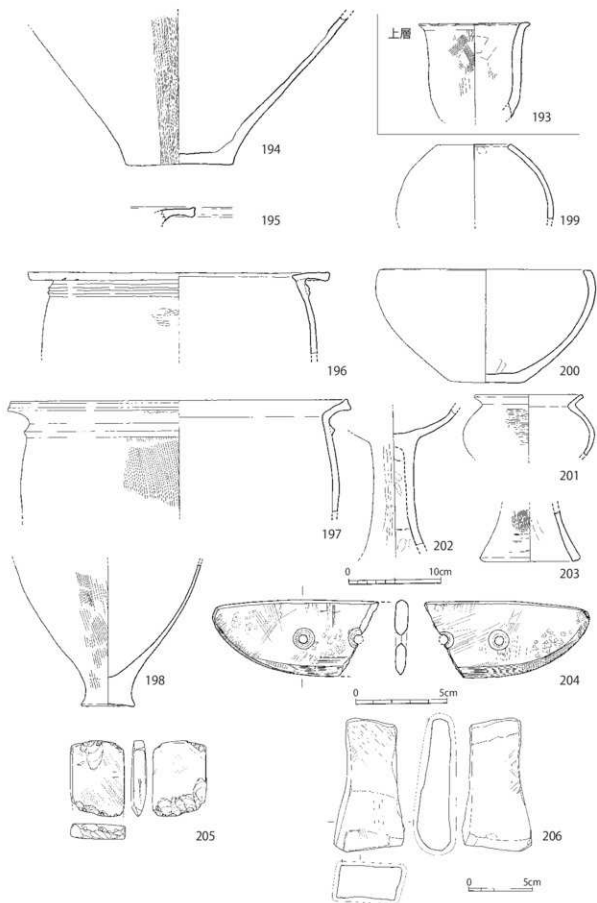
〈遺物〉 特記するような出土状況はない。



第67図 SH4実測図①貼床上位 (1/60)



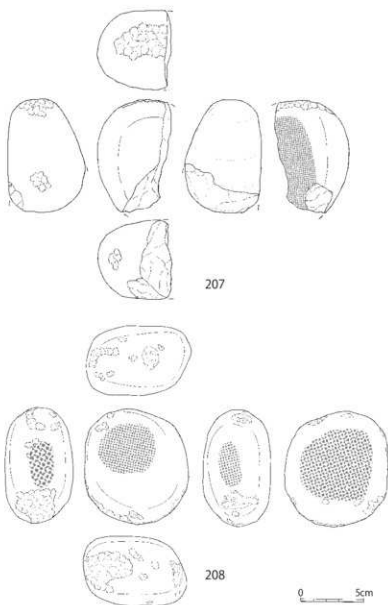
第68図 SH4実測図②貼床下部 (1/60)



第69図 SH4出土遺物実測図①

SH13 この竪穴建物跡は、北西部遺構群の東部にあたり、区画でいえばロD52区とロD53区間に位置する（第5図）。このあたりは、比較的平らな地勢である。SH13の平面形は、幅広い長方形で（第79図）、その規模は、長軸295cm、南北255cm、面積6.6㎡の小型竪穴建物跡である。深さ約20cmである。主柱穴は、精査したが確認できなかった。内部の床面上に台石が設置されていた。また壁沿いに浅い壁周溝がめぐっていた。遺構内の堆積土は、1層から11層まであるが、流入土である。床面の貼床・整地土の下は未調査である。

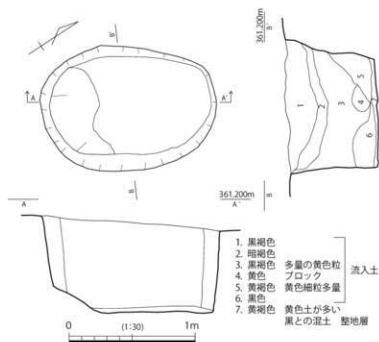
〈遺物〉 屈折口縁の粗製甕破片があり（第80図217）、完全には復元できないが北部の一ヶ所に集中している。また台石と敲石・磨石が東半部の床面直上に置かれていた。その他、石剣の破損品や（220）、丹塗磨研の鉢（碗）（219）、突出する突帯と内面側に稜のある黒髪式系の甕（218）がある。



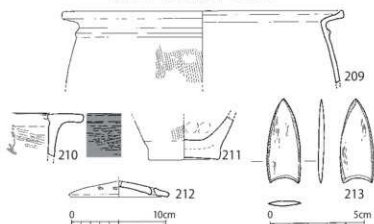
第70図 SH4出土遺物実測図②

SK27 この土坑は、北西部遺構群の南東部にあたり、区画でいえばロD52区とロD53区間に位置する（第5図）。このあたりは、比較的平らな地勢である。SK27は長軸の方位が、W-73°-Nで、その平面形は、剛丸平行四辺形である（第81図）。土坑の規模は、長軸170cm、短軸90cm、面積12.3㎡の陥穴と推定する。この陥穴は、最初に掘削したのち、逆茂木を立て、次に、厚さ約20cmの11層：根紋兼整地土を埋め固めている。10層は、逆茂木痕に流入した土である。この逆茂木痕の検出面までの深さが60cmで、土坑掘削最下底面までの深さは78cm～100cmである。10・11層より上位の層には壁が崩れたような状況を含め流入土である。土坑壁の立ち上がりは、短軸方向が90°近いのに対し、長軸方向は66°・69°と開く。

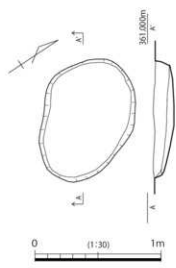
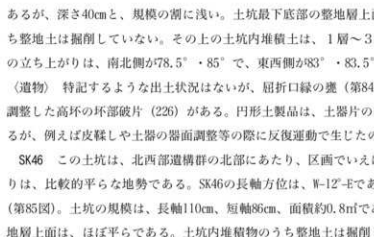
〈遺物〉 広口壺の破片（第82図221）・甕の蓋の破片（222）があるが、流入と考えられる。なお、広口壺の破片は、口縁端部の上面が突出しているほか、頸部のつけね方向に向かって締まる状況が窺える。また敲石が2点出土している（223・224）。



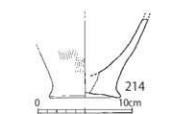
第71図 SK15実測図 (1/30)



第72図 SK15出土遺物実測図



第73図 SK14実測図 (1/30)



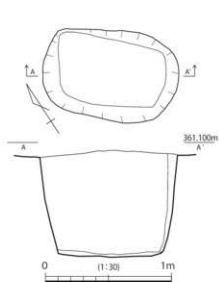
第74図 SK14出土遺物実測図

SK22 この土坑は、北西部遺構群の東部にあたり、区画でいえば口D52区と口D62区の境界に位置する(第5図)。このあたりは、比較的平らな地勢である。SK22の長軸方位は、N-13°-Eである。土坑の平面形は、幅広の長方形である(第83図)。その規模は、長軸119cm、短軸191cm、面積約3.8㎡であるが、深さ40cmと、規模の割に浅い。土坑最下底部の整地層上面は、ほぼ平らである。土坑内堆積物のうち整地土は掘削していない。その上の土坑内堆積土は、1層〜3層が埋土であるほかは流入土である。壁の立ち上がりは、南北側が78.5°・85°で、東西側が83°・83.5°と急角度である。

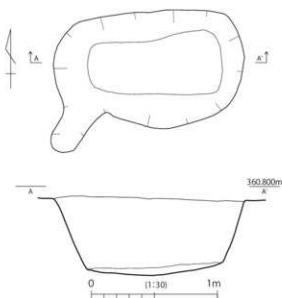
〈遺物〉 特記するような出土状況はないが、屈折口縁の甕(第84図225)、円形土製品(227)、へらミガキで調整した高環の環部破片(226)がある。円形土製品は、土器片の表裏に煤が付き、周囲が著しく磨かれているが、例えば皮掻しや土器の器面調整等の際に反復運動で生じたのであろう。

SK46 この土坑は、北西部遺構群の北部にあたり、区画でいえば口D42区に位置する(第5図)。このあたりは、比較的平らな地勢である。SK46の長軸方位は、W-12°-Eである。土坑の平面形は、歪な楕円形である(第85図)。土坑の規模は、長軸110cm、短軸86cm、面積約0.8㎡である。深さ20cmと浅い。土坑最下底部の整地層上面は、ほぼ平らである。土坑内堆積物のうち整地土は掘削していない。

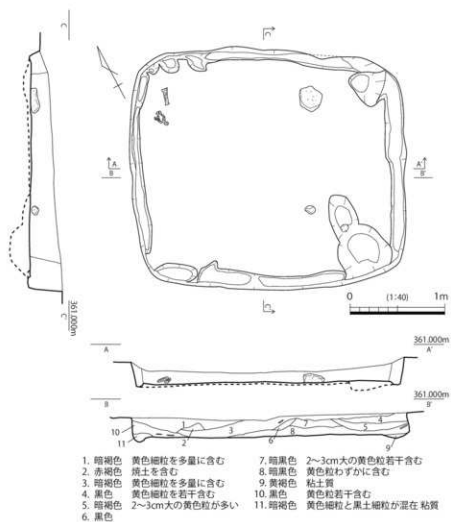
〈遺物〉 小規模な浅い土坑であるが、南寄りに甕がうつ伏せに遺棄されていた。土器のパーツが足りない部分は、浅い土坑のため、削平されたのであろう。鋤形口縁の広口壺と(第86図228)、「く」の字形に屈折



第77図 SK18実測図 (1/30)

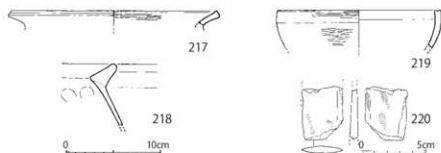


第78図 SK45実測図 (1/30)

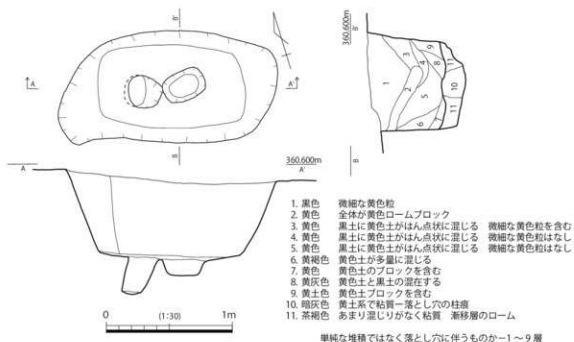


- | | | | |
|--------|---------------|---------|-----------------|
| 1. 暗褐色 | 黄色細粒を多量に含む | 7. 暗黒色 | 2~3cm大の黄色粒若干含む |
| 2. 赤褐色 | 焼土を含む | 8. 暗黒色 | 黄色粒わずかに含む |
| 3. 暗褐色 | 黄色細粒を多量に含む | 9. 黄褐色 | 粘土質 |
| 4. 黒色 | 黄色細粒を若干含む | 10. 黒色 | 黄色粒若干含む |
| 5. 暗褐色 | 2~3cm大の黄色粒が多い | 11. 暗褐色 | 黄色細粒と黒土細粒が混在 粘質 |
| 6. 黒色 | | | |

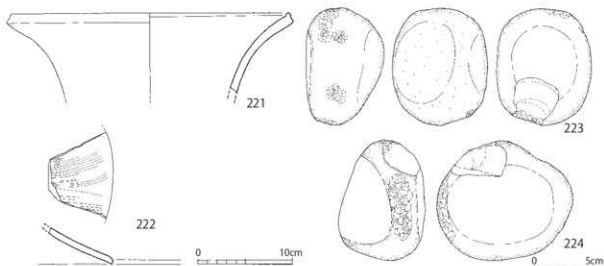
第79図 SH13実測図 (1/40)



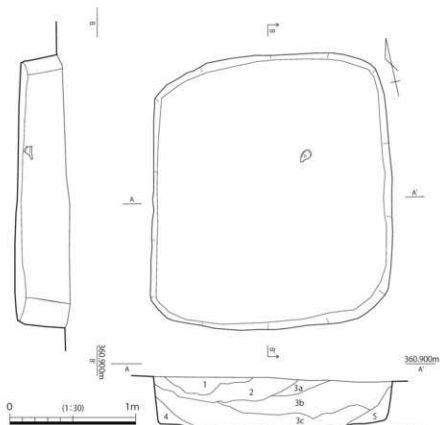
第80図 SH13出土遺物実測図



第81図 SK27実測図 (1/30)

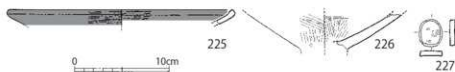


第82図 SK27出土遺物実測図



1. 黄褐色 3cm大の黄色粒が多量に混在
2. 黒色 3cm大の黄色粒がわずかに見られるが、他は黄色細粒を含む
- 3a. 暗褐色 黒土と黄土が細かく混在した層
- 3b. 暗褐色 暗褐色土に2cm大～1cm大の黄色土が混在
- 3c. 黒色 黒土に5cm大～1cmまでの黄色土が混在し、細粒も多い
4. 暗褐色 暗褐色の土と黒土に黄色細粒が混在
5. 黒色 黒土に黄色細粒がわずかに混在

第83図 SK22実測図 (1/30)

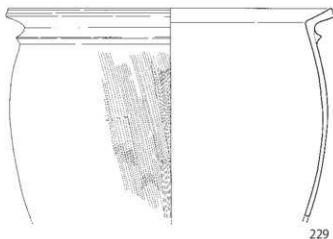
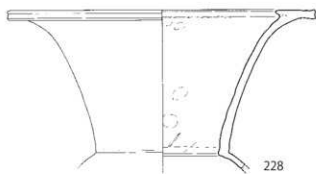


第84図 SK22出土遺物実測図

SK97 この土坑は、北西部遺構群の北部にあたり、区画でいえばロD43区に位置する（第5図）。このあたりは、比較的平らな地勢である。SK97の長軸方位は、N-73°-Wである。土坑の平面形は、やや長い多角形の土坑である（第88図）。土坑の規模は、長軸110cm、短軸78cm、面積約0.7㎡である。深さは、42cmであるが、その横断面形が逆半円形であるのに対し、長軸方向の縦断面形は長い逆台形である。長軸方向の立ち上がり角度は、72°と77°に掘削している。堆積土は、1層～4層まであり、全て埋土である。とりわけ1層は、黒土系・黄色土系の土ブロックが混在している。なお、SK97はSK115と切り合い関係にあり、前者が切っている。

〈遺物〉 特記する出土状況はないが、鋤形口縁で広口壺の口縁部破片が出土している。埋める際に混在したものであろう（第89図230）。

SK98 この土坑は、北西部遺構群の北部にあたり、区画でいえばロD43区に位置する（第5図）。このあたりは、比較的平らな地勢である。SK98の長軸方位は、N-32°-Eである。土坑の平面形は、楕円形の土坑であ



第86図 SK46出土遺物実測図

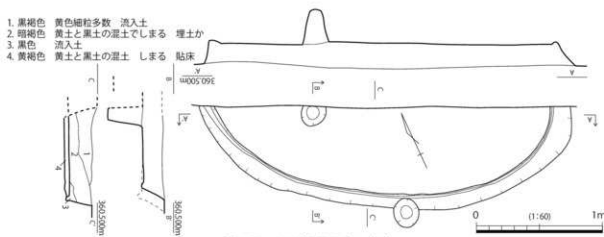
る(第90図)。土坑の規模は、長軸100cm、短軸60cm、面積約0.95㎡である。深さは、54cmである。長軸方向の縦断面形は長い逆台形である。長軸方向の立ち上がり角度は、73°と75°に掘削している。堆積土は、未調査である。土坑の最深部から、深さ10cm前後、直径14～25cm程度の小穴が3基あった。陥穴の可能性も考えられたが、穴があまりにも浅く、はっきりしない。堆積土は未調査である。

〈遺物〉 鋤形口縁の高坪の小破片が出土しているが(第91図231)、特記する出土状態はない。

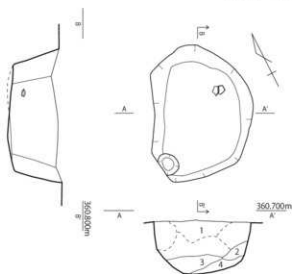
SK96 この土坑は、北西部遺構群の北部にあたり、区画でいえばD43区に位置する(第5図)。このあたりは、比較的平らな地勢である。土坑の平面形は、幅広の隅丸長方形である(第92図)。SK96の長軸方位は、W-65°-Nである。土坑の規模は、長軸205cm、短軸140cm、面積約2.43㎡である。深さは、整地土上面までが50cm、整地土下の最下部までが62cmである。立ち上がり角度は、短軸の小口で90°近い角度である。土坑内堆積土は、1層から2層が流入土で、3層は不明、4層～7層は埋土と判断した。7b層は整地土である。1層～3層で土器が出土しているが、その層位から土坑の掘削目的とは関係がないといえる。

〈遺物〉 土器は、1層・2層の堆積途中に廃棄されている。出土状態については記録していないが、4個体分の大破片が出土しており、廃棄されたものと推定される。その垂直分布は、北側が高く、南側が低い状況で凹湾している。また土器片の大きい例が北よりに分布する状況である。したがって北側から南方向へ向けて一塊にして投棄したことがわかる。大破片を中心とした破片から推定されるのは、概ね4個体分、推

第3章 調査の成果

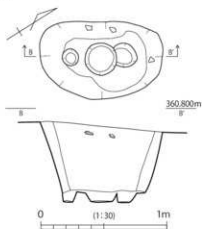


第87図 SH22実測図 (1/60)



1. 暗黄色 黒土系 暗黄色系土が混在 黄色粒や多い 埋土の可能性大
 2. 黒褐色 黄色粒なし
 3. 暗褐色 黄色粒なし 埋土の可能性大
 4. 暗褐色 黄色粒なし
 全体的に土層観察では流入土のような安定した堆積でなく埋土と考えられる

第88図 SK97実測図 (1/30)



第90図 SK98実測図 (1/30)



第91図 SK98出土遺物実測図



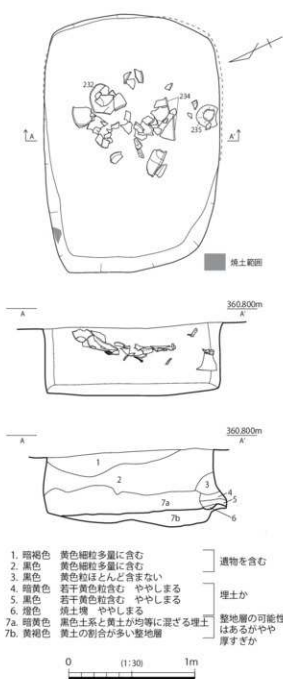
第89図 SK97出土遺物実測図

定鋤形口縁大口壺の下半部破片 (第93図232)、口縁部が「く」の字状に外方へ屈折する粗製甕が3点ある (233・234、1点は未実測)。この他、3層から高坏の脚部破片が出土している

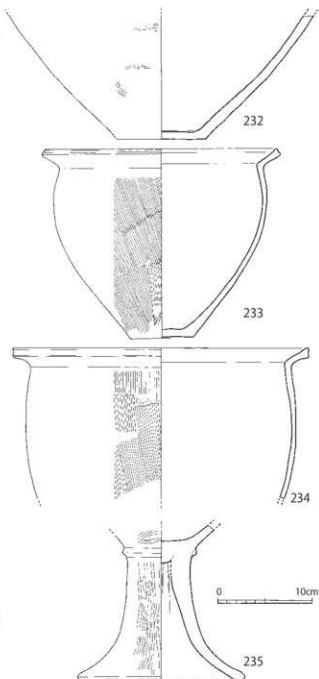
が、これも廃棄された可能性が高い。この高坏は、坏部の見込部が平らで、坏部と脚部の境界に断面三角の突帯を有するものである (235)。

SK75 この土坑は、北西部遺構群の中部から北部にあたり、区画でいえばロD53区に位置する (第5図)。このあたりは、比較的平らな地勢である。SK75の平面形は、小判形、もしくは隅丸長方形で (第94図)、その長軸方位は、W-56°-Eである。土坑の規模は、長軸153cm、短軸100cm、面積約1.53㎡である。深さは、整地土上面までが6cm、整地土下の最下部までが12cmであり、極めて浅い土坑である。土坑内堆積土は、1層が流入土で、2層は整地土である。

(遺物) 特記する遺物は出土していない。



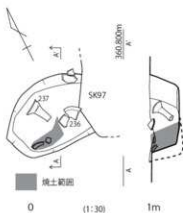
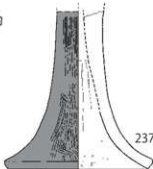
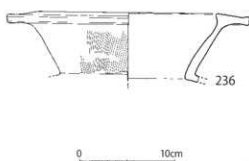
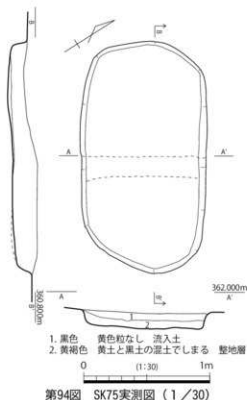
第92図 SK96実測図 (1/30)



第93図 SK96出土遺物実測図

SK115 この土坑は、北西部遺構群の中部から北部にあたり、区画でいえばD43区に位置する(第5図)。このあたりは、比較的平らな地勢である。SK115の平面形は、歪な長楕円形で、その長軸方位は、N-56°Wである(第95図)。SK115はSK97に切られており、後者に先行する土坑である。土坑の規模は、長軸は現状で76cm、短軸56cm、面積は不明の比較的小規模の土坑である。深さは、整地土上面までが23cmであるが、整地土は未調査である。土坑内堆積土も未調査であるが、土坑内は被熱・焼土痕が観察されており、炉として掘削され、使用されたのであろう。

〈遺物〉丹塗磨研の高脚脚部と(第96図237)、鉢形口縁広口壺の大破片が出土しており(236)、破損品を小土坑に置くように廃棄している。土器表面の被熱痕の有無がはっきりしないので、焼土との関係はわから



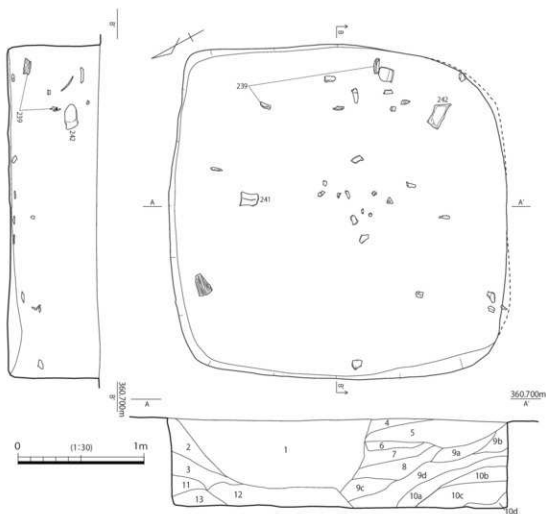
第95図 SK115実測図 (1/30)

ない。この他、二条突帯がめぐる壺の胴部破片がある(未実測)。

SK76 この土坑は、北西部遺構群の中部から北部よりで、区画でいえばD43区D53区の境界に位置する(第5図)。このあたりは、比較的平らな地勢である。SK76の平面形は、隅丸方形である(第97図)。土坑の方位は、北側遺構ラインがN-63°-W、東側遺構ラインがN-26°-E

である。土坑の規模は、南北268cm、東西254cm、面積6.5m²である。深さは、整地土上面まで469cm、整地土下の最下部は未調査である。壁の立ち上がり角度は、四方とも90°近い角度である。しかも、整地土上面と壁との境界部分も直角近い角度で丁寧に掘削している。土坑内堆積土は、1層から13層まですべて埋土である。堆積土の断面を観察すると、埋める作業は2回に渡っていることがわかる。すなわち、土坑利用の終了後、2層から13層まで埋土作業を実施した後(この場合の最上層は4層)、いくらかの時を経て埋土上面から切り込むように再び穴を掘削(第2次掘削土坑)している。その深さは12層まで達している。第2次掘削土坑の利用が終了後、埋めたのが1層である。断面に見える1層のラインが第2次掘削土坑の壁や底部ということになる。この断面にみえる第2次掘削土坑から、断面部分での南北長が153cm、深さ52cmであった。

(遺物) 土坑の東壁寄りの上位から中位にかけて丹塗り鋤形口縁甕の大破片や小破片がやや多いが、その散乱状況にはまともではない。したがって、第2次掘削土坑を埋める際に(2層)廃棄、もしくは混入したのだろう(第97図)。また土坑の中央部付近に小破片が散乱しているが、これらは土坑の整地土直上に位置している。しかし、小破片であり、人為的に小破片のみを廃棄したとは思えない。出土遺物には、丹塗磨

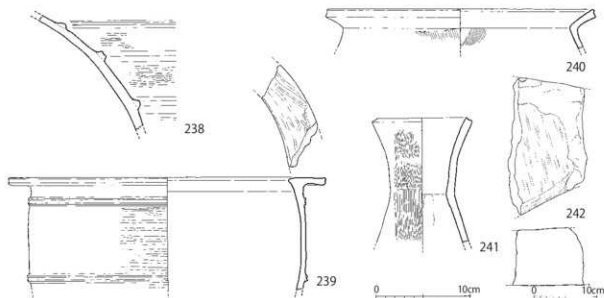


- | | | | |
|---------|-----------------------------|---------|--------------------|
| 1. 暗褐色 | 黄色の5cm大 1cm大の粒が多い 細粒も多い | 9c. 暗褐色 | 黄色の細粒を若干含む |
| 2. 暗褐色 | 黄色の細粒が多い | 9d. 黒色 | 黄色の細粒が若干 ブロックも若干含む |
| 3. 黒褐色 | 黄色の細粒が多い | 10a. 黄色 | 多量の黄色土が混在 |
| 4. 暗褐色 | 黄色土のかたまりが多い 硬くしまる | 10b. 黒色 | 黄土若干含む |
| 5. 暗黄色 | しもふり状に黄色土が混じり明るい 1cm大の黄土が多い | 10c. 黄色 | 黄土がブロック状に多量に含む |
| 6. 黒色 | 黄色土ほとんどなし | 10d. 黒色 | 黄土若干含む |
| 7. 暗灰色 | 黄色細粒多い | 11. 黒褐色 | 黄色粒若干含む |
| 8. 黄色 | 黄色土がブロック状に混在 多量 | 12. 暗褐色 | 大小黄色ブロックが多い |
| 9a. 暗褐色 | 黄色2cm大が若干 やや汚染される | 13. 暗褐色 | 5cm大若干 細粒が多い |
| 9b. 黒色 | 黄色土ほとんどなし | | 1~13まで埋土と考えられる |

第97図 SK76実測図 (1/30)

研で鋤形口縁の甕 (第98図239)、大型の広口壺の胴部破片破片 (238)、砥石 (242)、器台 (241)、「く」の字に屈折する粗製甕破片 (240) が出土している。未実測資料には、高杯の脚部破片がある。なお鋤形口縁の甕は、胴部に二条のM字突帯がめぐるほか、口縁部はあまり垂れない。広口壺の破片には三条の突帯があるが、中央が太いM字突帯、他はやや細い三角突帯である。これらのM字突帯の鋤形口縁甕や広口壺の破片は、須玖Ⅱ式土器に相当する。砥石は埋土のうち、5層に混入していた。全体的に、出土遺物は小破片であることと、なによりもまとまりに欠けることから廃棄というよりは、埋土に混入した遺物であろう。なお、M字突帯の土器は、須玖Ⅱ式土器である。

SH36 この堅穴建物跡は、北西部遺構群のなかでも中央にあたり、発掘区の口D54区に位置する (第5図)。この辺りは、平らな地勢にある場所で、SH37が埋没後、中央から西側を大きく切るように掘り込まれている。SH36は検出面の平面形が円形である (第99図)。やや形が歪な円形であるが、南北が790cm、東西が



第98図 SK76出土遺物実測図

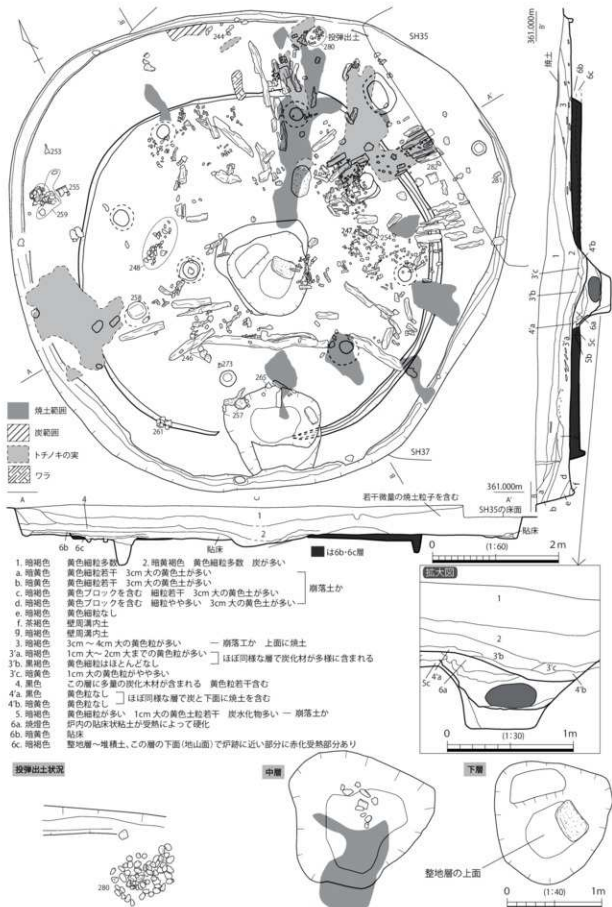
800cm、面積約49㎡である。内側の壁際ラインの平面形も基本的に検出面の形に連動する。内法の床面積は約57.4㎡である。検出面から貼床面までは、深いところで58cmである。

発掘時に貼床を全て除去したわけではないが、柱穴の内壁、炉跡断面、竪穴建物跡内土坑内壁などの観察によって二重構造になることが判る。建物の内側に直径575cmの建物跡があり、これが当初の建物跡であることから、最終的に外側へ拡張したことになる。つまり最後の貼床の下に、被熱・焼土痕跡が観察されることからもう一枚の生活面が存在していた。竪穴建物跡内の土坑は南西側に1基ある。調理・作業台とも考えられる台石は、炉跡の北東40cmと北西15cmの至近距離の床面上に設置されていた。

〈柱穴〉 規則的に並ぶ柱穴は、平面の遺構ラインから内側約180cmのところではほぼ円形にめぐる8ヶ所の主柱穴が確認できた(第99図)。柱穴の並び方は、平面上の配置が八角形の頂部に柱穴がくるようにしている。幾つかの小さい柱穴は、内部を掘り進みと深さ10cm前後のところでは広がる状況にある。これは本来、より直径の大きい穴を掘り、柱を立て、埋土の順で埋め、その後貼床土(整地土)で床面調整していることに起因している。要するに床面上で観察された直径20cmの穴は柱の大きさにほぼ等しいと言える。挿図上で大きい穴は、内部の土を掘る中で上位の貼床部分を掘り広げたために大きい。

〈南西側の土坑〉 竪穴建物跡内の南壁に接続する土坑の規模は、東西が150cm(幅広部分)と100cm(幅狭部分)、南北137cmである。床面からの深さは、南壁側の段が8.5cm、深い部分が約15cmある。平面形は、竪穴建物跡内側の方が壁側より幅広い扇形である。2段目を含めた1段目の内法は、外法より10cm～20cm縮小した大きさで、土坑の南側壁面上部は、壁周溝に接続しており、縦断面が階段状となっている。

〈炉跡〉 中央部に位置する土坑は炉跡と考えられるが、被熱痕が観察できない部分もあるなど、不明な部分がある。平面形態は、隅丸台形である。南北136cm、東西156cmの規模である。この土坑は、被熱痕、整地土の状況から二段階程度の変容がある。初段階は、5b層・6b層の貼床層から連続する硬化層の一つである6a層上面である(中層)。この面には、被熱・焼土痕が観察されたことから、炉跡として使用されたことがわかる。次に、最も深い部分を整地し、その上面には台石1個が設置されていたが、炉底面には被熱痕が観察されていない。台石は火持ちをよくするための機能があったのだろうか。



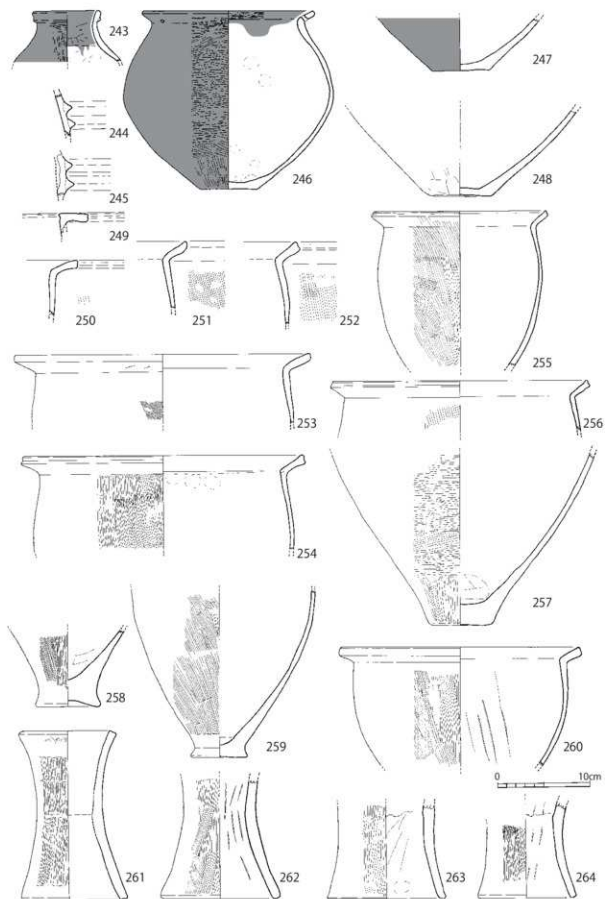
第99図 SH36実測図 (1/60・1/30・1/40)

〈床面直上域の状況〉 竪穴建物跡内の遺物の分布について触れておく。この遺構は、火災により焼失したように、その痕跡が観察される。特に目立つのが炭化した木材で、長いのは約2mに達する例がある。これらの多くは、竪穴建物跡の中央部方向を向くように倒れていたが、中にはこれと直交する方向を向いた例がある。こうした炭化木材は、建築部材であり、柱や梁であったと思われる。竪穴建物跡内に八つの主柱穴が存在することは既に記したが、この主柱穴の内と外での機能的な違いを窺わせるものに炭化したトチノキの実（炭化物）の分布がある。トチノキの実は、遺構のどこでもあるということとなり、柱穴圏の外側に遺構の西部と東北部（図でトーンの部分）に限定される。その分布状態は、帯状や不定形の塊状に広がっていた。その厚さは、3cm～5cmで、大小6か所の集中部分があった。このトチノキの実の分布は、最初から床面上に置いていたのではなく、民族事例からすると柱穴圏の外側の梁などで乾燥・虫殺しをしていた際に火災とともに落下したと考えられる。SIB6の東北部の壁寄りの部分で、3cm前後の小石が59個集積されており（第99図）、投弾の集積貯蔵場所と考えられる。

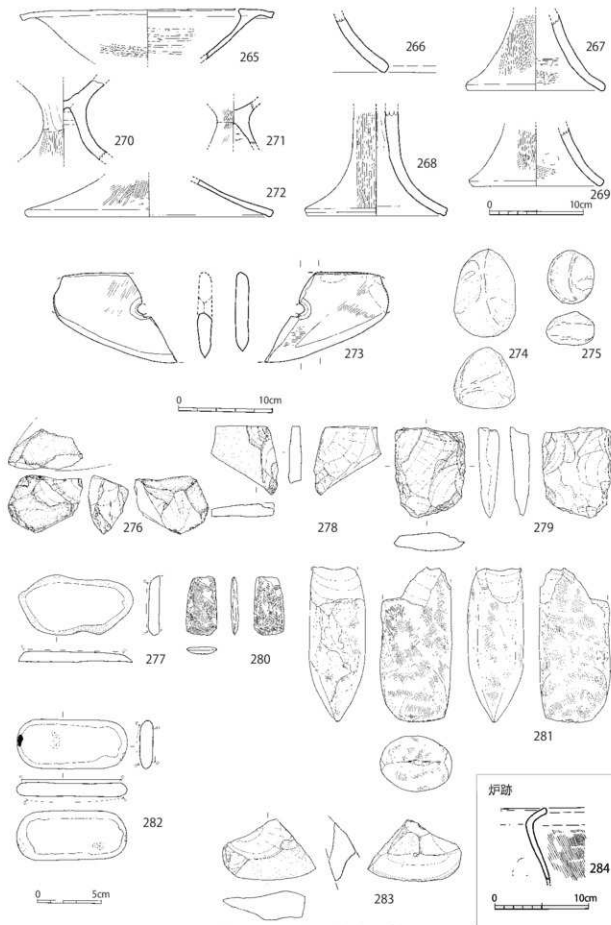
〈堆積土・整地土〉 1層・2層・a～g層・3層～4' b層は流入土と考えられる。5b層・6b層・6c層は貼床及び整地土である。

〈遺物〉 壺には、丹塗磨研の脚付注口壺の小破片があるほか（第100図243）、同じく丹塗磨研の無頸壺（246）、胴部外面に二条突帯がある大型壺の破片（244・245）、壺の底部大きな破片が2点ある（247・248）。無頸壺は、「遠賀川以東地域」に特徴的な丹塗磨研の壺で、口縁には必ずといってよいほど蓋取り付け時の紐通し用の穿孔がある。蓋は粗製で屈折口縁の蓋が多く（250～256、258～260）、底部の厚さが、厚い例と（258）、薄い例がある（259）。この中には、口縁部の口唇上部が跳ね上げ状の例がある。また口縁部の厚さが胴部の厚さとあまり変わらない例であり、須玖Ⅱ式新段階の土器である。丹塗磨研の鋤形口縁の破片は、おそらく蓋であろう（249）。筒形器台は4点あり、体部中央が絞まる例と（261・262）、やや幅広の例がある（263・264）。高坏には、鋤形口縁の坏部大破片がある（第101図265）。これは鋤形口縁部の外よりの半分ほどが僅かに垂れ気味である。そのほか脚部の破片がある（266～272）。石器類には、立岩産石包丁の破片（273）、投弾（274・275）、石楯（扁平打製石斧）の破片（279）、小型の砥石（277・282）、小型の磨製ノミ（280）、基部が破損した磨製石斧（281）がある。なお、小型の磨製ノミは両刃である。なお投弾は上述したように集積状態で59個出土した（第99図）。磨製石斧は、在地の石材を用いた太型始刃（巖斧・両刃）であるが、着装時の使用による衝撃で基部にL字状の亀裂と長軸方向に亀裂が入り破損している。以上、土器・石器を概観してきたが、完形品やほぼ完形近くまで復元できた土器は極めて少なく、石器についても投弾・小型砥石の砥石を除くとめばしい例はない。これは火災時に本竪穴建物跡から主要な土器・石器等を持ち出したが、民族事例から推定される梁にかけて掛け干していたトチノキの実は回収ができなかったことを物語っている。

巻末の小畑弘己の報告にあるように本竪穴建物跡からは、フローテーションの実施によりイネ、アワ、アズキ、マメ、イチイガシ、ノブドウが検出された。イネは水稲耕作、アワ、アズキ、マメは畑作、ノブドウと床面から出土したトチノキの実は山野で採集、という作業を物語る。このうちトチノキの実は、小畑の計算では357.3gで1,032個と推定されている。この数量は、出土状況から山野で採集した一括量を示している。例年、大分県内の竹田市地域でトチノキの実が落下するのは9月3日頃から10月15日頃までであるが、多くは9月10日までにその大半が落下・採集されることが記録されており（長岡1986）、四日市遺跡の場合も同じ頃採集したのだろう。動物もトチノキの実を食べるため、動物との競争を避けるため収穫季節における清掃をはじめ、棒などで落とすなどの木の管理の存在が推定される。このトチノキの実は、巻末に記してあるようにC14年代測定を実施している。

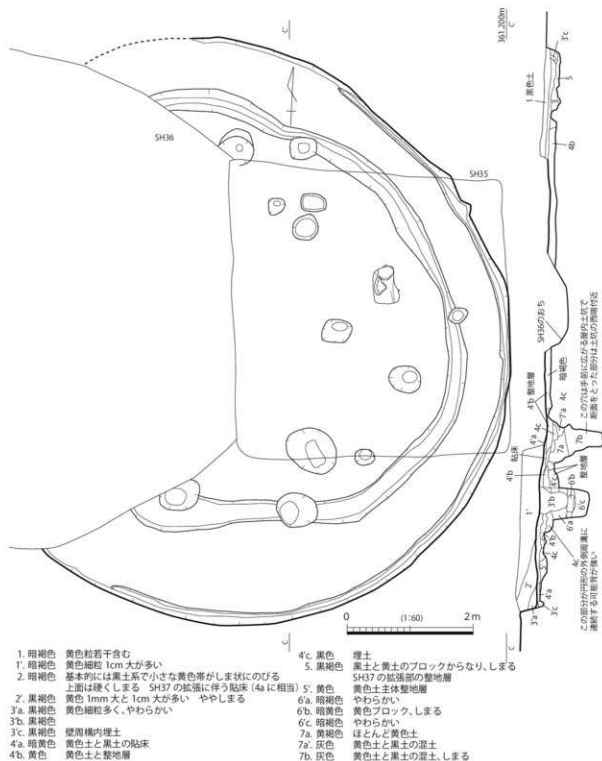


第100図 SH36出土遺物実測図①

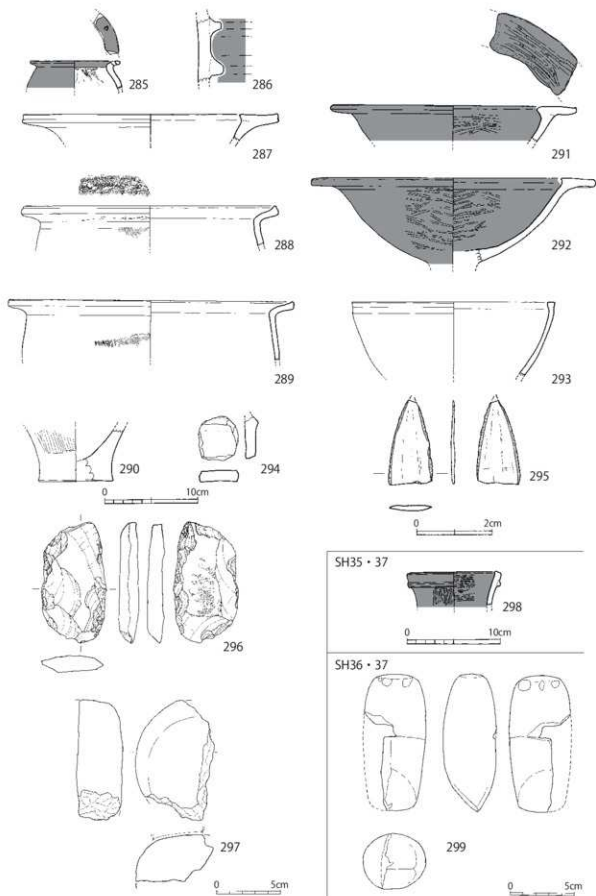


第101図 SH36出土遺物実測図②

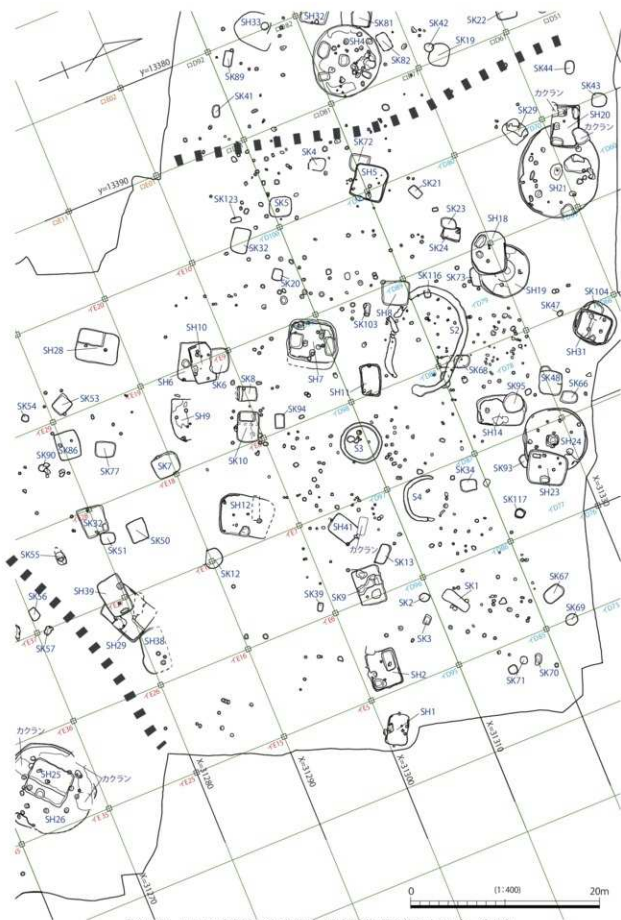
SH37 この竪穴建物跡は、北西部遺構群の中央にあたり、発掘区のロD54区に位置する（第5図）。同様な位置にSH36、SH35が位置しており、切られている。このため残存状況は良くないが、概ね865cmと前後の円形を基調とした大型の竪穴建物跡である（第102図）。壁から内側へ80cm～155cmのところに幅30cm、深さ12cm前後の周溝がめぐっている。柱穴は、この周溝とその内側沿いにめぐっているが詳細は不明である。周溝については当初段階の竪穴建物跡の壁周溝で、その外側は後に拡張した結果である可能性もあるが、断面観



第102図 SH37実測図 (1/60)



第103図 SH37出土遺物実測図～SH35・36・37混在資料～



第104図 四日市遺跡第1次調査区 中部遺構群詳細分布図 (1/400)

※波線内が中部遺構群

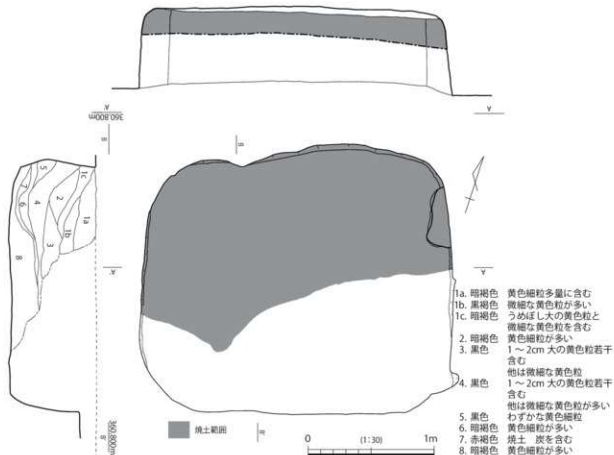
察でもこの点をはっきりしなかった。

〈遺物〉 小型丹塗磨研の無頸壺 (第103図285)、鋤形口縁の広口壺 (287)、屈折口縁もしくはL字状口縁の粗製甕 (288~289)、丹塗磨研の鋤形口縁の高坏 (291・292)、脚付鉢か (293)、円形土製品 (294)、石楸 (扁平打製石斧) (296)、磨製石楸 (295)、磨石の破片 (297) が出土している。このほか、SH35の出土例と接合した長頸壺 (298) と大型蛤刃の磨製石斧 (299) がある。

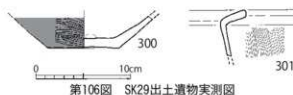
2 弥生時代中期後半の遺構と遺物 -中部遺構群- (第104図)

四日市遺跡の中部遺構群は、第1次調査区の中なかでもグリッド番号ロD51区北部とロD91区北部を結んだライン以東でイE26区中部とイE30区中部を結んだラインの北側の一群である。分布の中心には、円形周溝のS2があり、この遺構を取り巻くかのように遺構が展開している。

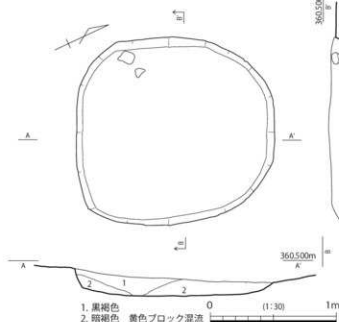
SK29 この土坑は、中部地区遺構群の北西部にあたり、区画でいえばD70区とロD61区の境界に位置し、大型の竪穴建物跡SH21の南西に隣接する (第104図)。このあたりは、比較的平らな地勢である。SK29は、幅広い隅丸長方形で (第105図)、その規模は、長軸250cm、短軸212cm、面積4.3㎡である。深さは63cmである。長軸の方位は、N-47°Wである。壁の立ち上がりは、上位が90°近くで、土坑底面との境界はあいまいで湾曲している。土坑最下底部の整地層上面は、ほぼ平らである。遺構内堆積土は、1a層~8層までが観察された。8層の下面は整地土上面であるが、この整地土は掘り下げていない。なお、土坑内の堆積土は1層~6層までは流入土であるが、7層・8層は焼土で、土坑の壁に被熱痕がなかったため、焼土を廃棄した可能性が高い。堆積土の断面観察から、北側の土坑外から南方向へ焼土を廃棄したことがわかる。位置的に



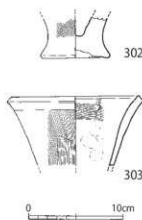
第105図 SK29実測図 (1/30)



第106図 SK29出土遺物実測図



第107図 SK43実測図 (1/30)



第108図 SK43出土遺物実測図

は、東に隣接するSH21と密接に関わる土坑と考えられ、廃棄した焼土などはSH21を含め、北や東方面から廃棄したのであろう。

〈遺物〉 格別特記するような出土状態はないが、

埋土に混在して丹塗磨研の壺の底部(第106図300)と、「く」の字屈折口縁の粗製甕の小破片(301)が出土している。

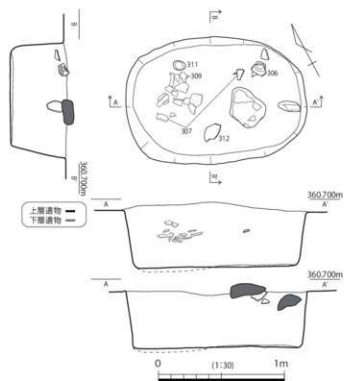
SK43 この土坑は、中部地区遺構群の北西部にあたり、区画でいえばD60区とロ051区の境界に位置し、大型の竪穴建物跡SH21の北西に隣接する(第104図)。位置からすればSH21の衛星遺構と考えられる。このあたりは、比較的平らな地勢である。SK43は、円形に近い隅丸方形で(第107図)、その規模は、南北160cm、東西148cm、面積約2㎡である。整地土上面までの深さが24cmと浅い皿状の遺構である。僅かに長い南北方向の方は、断面A-A'

ラインでN-25°-Eである。土坑最下底部の整地層上面は、ほぼ平らである。遺構内堆積土は、1層～2層までが観察された。2層の下面は整地土上面でもあるが、この整地土は掘り下げていない。なお、土坑内の堆積土は基本的には流入土である。

〈遺物〉 土坑内に土壌が堆積する過程で土器の小破片が混在しており、特記する出土状態ではない。甕は、底部と考えられ(第108図302)、浅いながら上げ底気味の特徴は須玖1式土器の甕と共通する。筒形器台の破片は、胴部がしまる例である(303)。

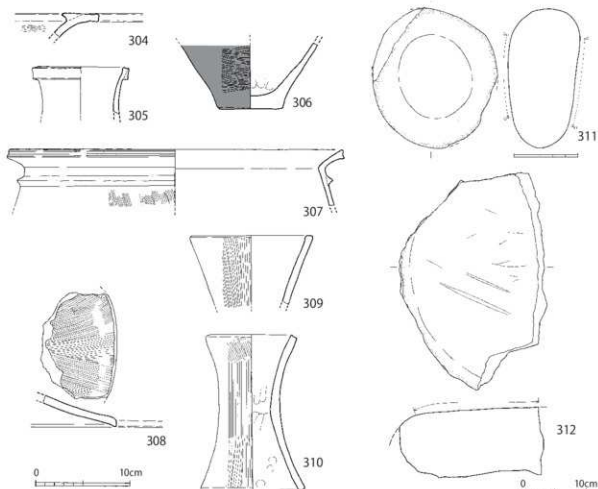
SK44 この土坑は、中部地区遺構群の北西部よりで、区画でいえばロ051区に位置する(第104図)。このあたりは、比較的平らな地勢である。SK44の平面形は、楕円形(小判形)である(第109図)。土坑の長軸方向の方はW-66°-Nである。土坑の規模は、長軸142cm、短軸100cm、面積約1.14㎡である。深さは、整地土上面までが50cm、整地土下の最下部は未調査である。壁の立ち上がり角度は、長軸側が80°と82°、短軸側が86°と77°で急角度である。土坑底部(整地土上面)は、平らである。土坑内堆積土は未調査である。

〈遺物〉 土坑からの遺物の出土状況は、上位と下位の2層に分けられる。上位の遺物は、土坑西半部の検出面から10cm程度下に台石や磨石などの礫類と若干の土器など、ややまばらに分布している(A群)。下位の遺物は、西半部のほぼ中央部で検出面から深さ12cm～30cmまでの間に一塊になって群集していた(B



第109図 SK44実測図 (1/30)

群)。特にB群には完形品が含まれておらず、破片ばかりであり、パーツの足りない土器があった。このことから、破損品を一塊にして廃棄した状況と推定される。上位から出土した遺物は、底径から丹塗磨研で鋤形口縁の壺の底部破片(第110図306)がある。下位出土の遺物は、両面に磨痕のある磨石(311)、頸部直下に断面三角突帯付き、口縁部が「く」の字屈折する口径35.5cmの中型甕破片(307)、破損しているが長軸35cm・短軸23cmの大型の台石(312)がある。層位不明の鋤形口縁をした広口壺の破片(304)、短頸壺の口縁部破片(305)、完形復元しているが破損していた筒形器台(310)、蓋破片(308)、筒形器台破片(309)からなる。その他、未実測資料にSH20の土器と同一個体の土器がある。



第110図 SK44出土遺物実測図

SH20 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の北西部にあたり、区画でいえばD60区とD51区の境界に位置する(第104図)。この辺りは、平らな地勢にある場所で、丁度巨大なSH21が埋没後、その北西の一部と遺構外にかけて大きく掘り込まれている。SH20は、検出面の平面形が楕円長方形である(第111図)。その規模は、長軸が450cm、東西が247cm、面積10.7㎡である。貼床面(整地土上面)までの深さは約30cmである。貼床の厚さは約8cmである。建物内の壁際ラインに沿って壁周溝がめぐっている。竪穴建物跡内の土坑は、北西隅部・南西側隅部・南側壁周溝前・南東隅部に各1基ずつある。

(層) 1層～8層までは流入土の可能性が高いが、9層～12層は火災、もしくは廃棄物の焼却と深くかわる可能性が高い。9層～12層には多量の炭化物片・炭化材・焼土が含まれている。特に床面中央のやや東よりで炭と焼土が観察された。

(柱穴) 主柱穴は、竪穴建物跡の長軸線に沿うように二本あると考えられるが、東側の主柱穴は確認しきれていない。これに付属する柱穴は、西側の小口の南東隅部の土坑内北部に1ヶ所だけ確認したが、貼床を全て除去していないので、正確な状況は不明である。

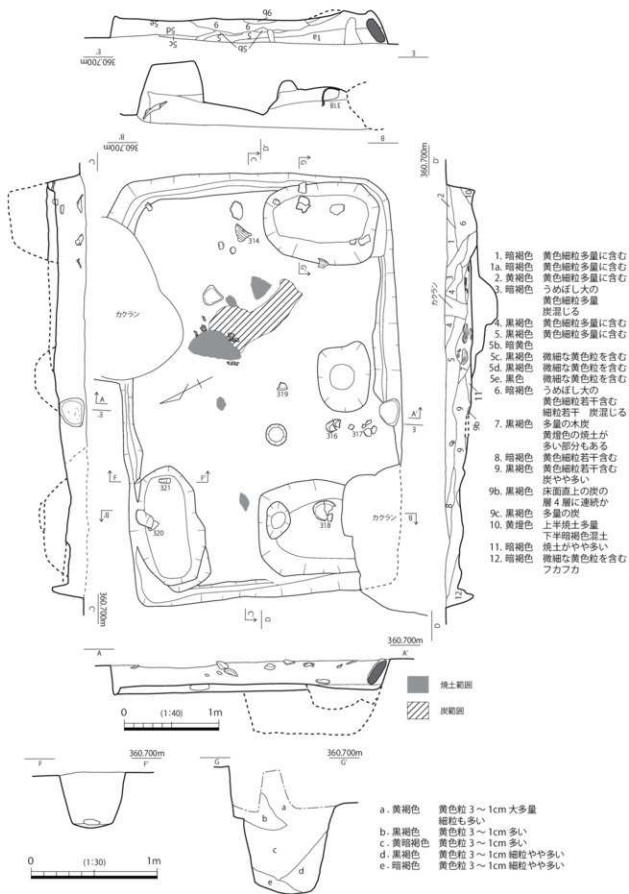
(南西側の土坑) 竪穴建物跡内で、その南西壁と南壁に接する土坑は、東西が150cm(幅広部分)と100cm(幅狭部分)であるが、南側を攪乱で破壊されている。その長軸の方位はN-25°-Eである。床面からの深さは、約50cmである。この土坑の底面には、破損した鉢(第112図318)が遺棄されていた。

(北西側の土坑) 竪穴建物跡内で、その長軸方向に合わせるように北壁と西壁に接する。その長軸の方位はW-70°-Eである。土坑の規模は、東西が136cm(長さ)と80cm(幅)である床面からの深さは、約43cmである。この土坑の底面には、磨製石斧(321)が遺棄されていた。

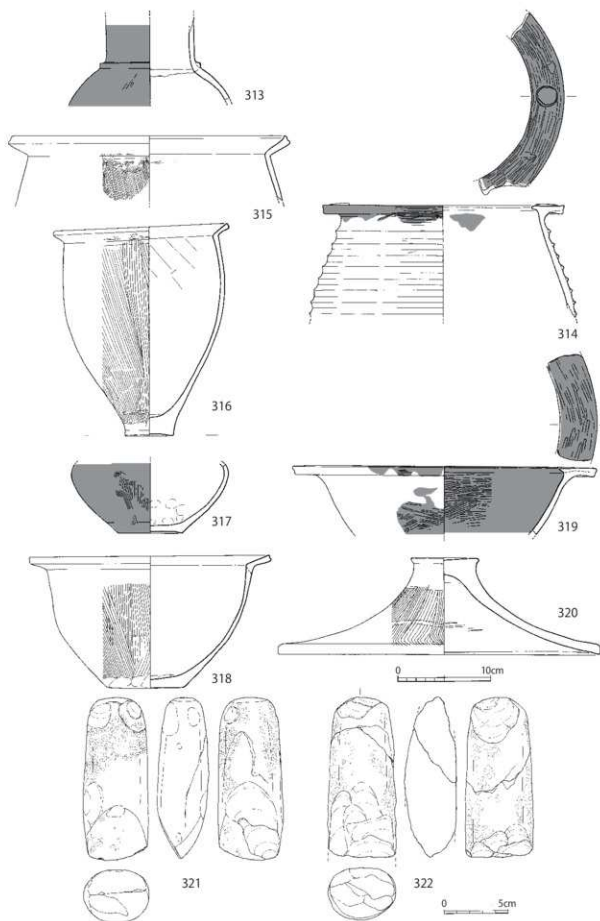
(南東側の土坑) 土坑は、竪穴建物跡の長軸方向と直交するように北壁と西壁に接する。その長軸の方位はN-28°-Eである。土坑の規模は、東西が62cm(長さ)と90cm(幅)である床面からの深さは、約50cmである。この土坑の底面から遺物は出土していない。

(南側の土坑) 土坑は、竪穴建物跡の長軸方向と平行するように南壁の壁周溝に接する。その長軸の方位はW-65°-Nである。土坑の規模は、東西が136cm(長さ)と80cm(幅)で、床面からの深さは、約26cmである。この種の土坑は、かつて大分県内の一部で「Kピット」とも称され、胎盤を埋納したのではないかといわれた土坑に相当する。

(遺物) SH20での遺物の出土状況として分布図をみると、密集するような場所はない。しかし、注意される出土状況が3点ある。1点は、南土坑の南西側の南壁に立てかけられた長幅30cmの台石である。付近で使用後に片づけられ立てかけたような出土状況である。次に、北西土坑内東端底面に土坑の長軸方向と直交するように磨製石斧(縦斧)が置かれていた事である。この場合、基部が北側、刃部が南側に向けているので、基部の部分から90°西方向へ柄が伸びていたことになる。この磨製石斧は始刃で(第112図321)、実測図のB面(裏面)の右下部分から左上方へ衝撃による破損剥離痕が生じている。このことから石斧(縦斧)のB面が左主面でA面が右主面ということになる。もう1点は南西土坑内底部の東壁より鉢が口縁部を上にして置かれていた例である(318)。この鉢は、屈折口縁であることから須玖Ⅱ式土器の範疇で理解される。これらの三例は、遺棄されたものと考えられる。次にその他の出土資料を紹介する。丹塗磨研の脚付直口壺は、球形の胴部に直口する口頸部が付くもので境界部に断面三角形の突帯がめぐる(313)。また南部土坑の西側から、直口壺の胴部とみられる丹塗磨研の壺が出土した。底部が僅かに上げ底気味である(317)。壺には栞製と粗製がある。「く」の字屈折口縁の粗製壺は、跳ね上げが顕著な例と(315)、そうでない例がある(316)。跳ね上げ口縁の壺は、その特徴から須玖Ⅱ式土器に相当する。跳ね上げ口縁ではない壺は、底



第111図 SH20実測図 (1/40・1/30)



第112図 SH20出土遺物実測図

部がやや厚い。精製の甕は(314)、浮文を有する鋤形口縁のみに丹塗磨研をし、そのまま胴張で樽形の胴部がつくが、外表面に微隆起線状の突帯が多数付いている。なお胴部は磨くが、丹塗りはしていないが、精良な素地を用いたのか、器面が黄白色である。これと同じ同一個体の破片がSH20の北西にあるSK44の未実測資料に含まれる。高坏も鋤形口縁の丹塗磨研である(319)。鋤形口縁については、甕も高坏にも顕著な垂れはない。甕の蓋が出ているが(320)、天井部が低平で薄いなど須玖Ⅱ式土器の特徴である。石器は、北西側の土坑で出土したものと同様の磨製石斧の縦斧がある(321・322)。

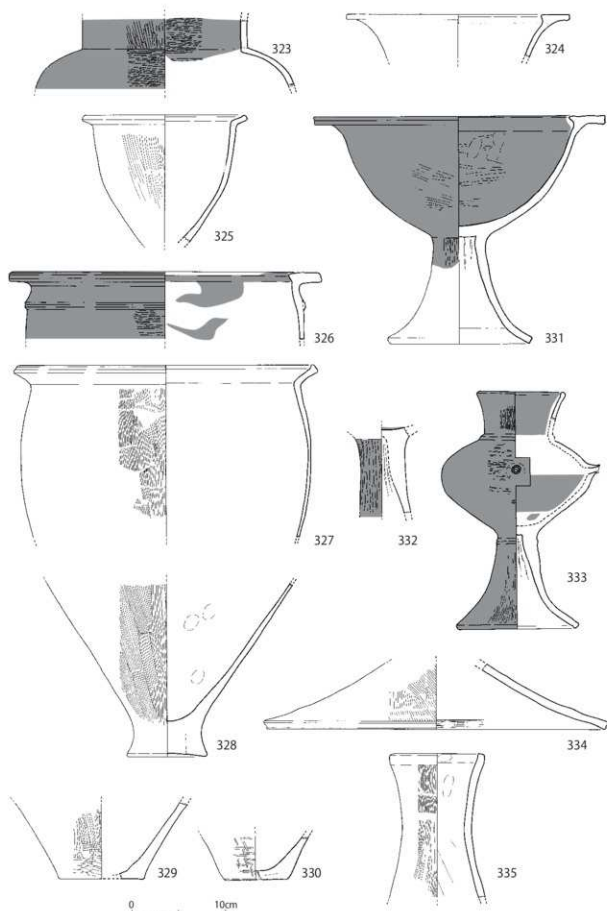
SH21 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の北西部にあたり、区画でいえばD60区とD70区の境界に位置する(第104図)。SH20と、ほぼ同様の地区にあり、同遺構から切られる関係(先行)にある。SH21は、検出面の平面形がやや長楕円形の大型竪穴建物跡である(第113図)。その規模は、長軸980cm、短軸845cm、面積約64.6㎡であり、その長軸方向はN-62°-Wである。貼床面(整地土上面)までの深さは約30cmである。貼床の下は未調査であり、詳細は不明である。建物跡内の南側壁際ラインに沿って壁周溝がめぐっている。竪穴建物跡内の土坑は、中央にある炉跡だけで、他は柱穴などの小ピットである。また、竪穴建物跡の柱穴圏内で貼床面が被熱により赤化している部分が3ヶ所あった。その場所は、①炉跡の東側に隣接する部分、②炉跡の南西約20cmの地点、③炉跡の西150cmの地点である。それらは20cm～40cmの被熱範囲があった。

〈層〉 主要な堆積層は、1層～9層までが流入土の可能性が高く、9層～12層は火災、もしくは破棄物の焼却と深くかわる可能性が高い。9層～12層には多量の炭化物片・炭化材・焼土が含まれている。特に床面中央のやや東よりで炭と焼土が観察された。

〈柱穴〉 主柱穴は、楕円形の竪穴建物跡の形の遺構ラインの内側約120cm～140cmの場所に位置する。大小10基の柱穴からなるが、径が小さいものは柱を立てた柱穴上部に貼床を兼ねた整地土が充填されているからである。柱穴は、竪穴建物跡の長軸線の北側の5基と南側の5基に分けられ、相互に相對する。柱穴間で最も幅広いのは、北側柱穴列と南側柱穴列で最も西側の柱穴2基の間で、約320cmもあり、この部分がその西側方向への通路・入口へ通じる導線であったと推定する。なお、台石は、北壁と南壁近くに設置されていた。

〈炉跡〉 炉跡は、竪穴建物跡の中央部に位置しており、炭や焼土が観察されるため炉で火を焚いたことがわかる。炉跡の外形は、隅丸の半月形で、その長軸は竪穴建物跡の長軸方向と一致している。規模は、長軸180cm、短軸125cm、面積約1.76㎡で、床面からの深さは約40cmである。炉跡から出土した土器小破片は、散布したかのような出土状況であった。

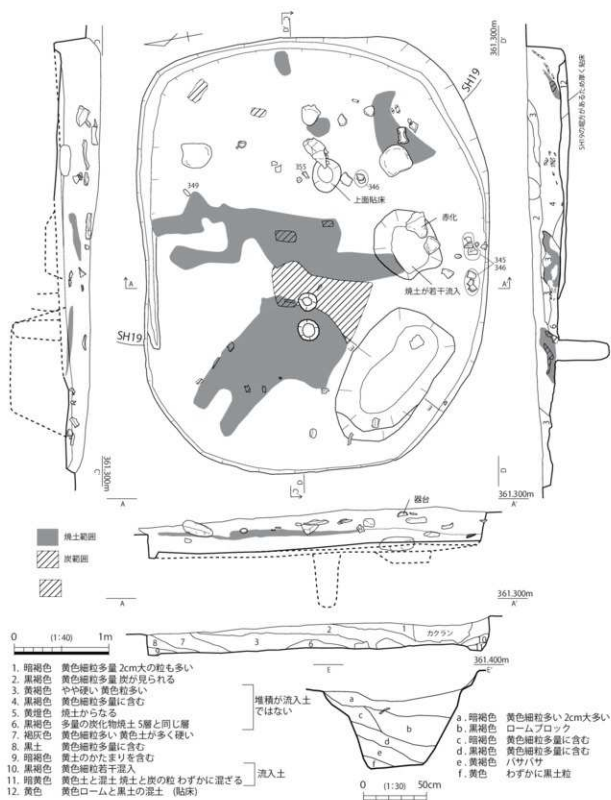
〈遺物〉 遺物の垂直分布は、その大半は上位の流入土中に含まれる。その一方で、床面直上域にも出土した。その中には、遺物が散布集中する部分がある。この床面直上域の遺物分布を竪穴建物跡全体の中で観察すると、そのほぼすべてが、中軸線より南側に分布していることがわかる。このことからすれば、家屋内での食生活における調理保存等の、間取りの違いを示している可能性もある。丹塗磨研の直口壺の破片(第114図323)、鋤形口縁の広口壺(324)、口径17cmと小型の屈折口縁の甕(325)、やや跳ね上げ口縁状の屈折口縁の甕(327・328)、丹塗磨研で鋤形口縁の甕(326)、北東の柱穴上部で見つかった丹塗磨研で鋤形口縁の高坏(331)、南壁近くで見つかった丹塗磨研脚付直口注口壺の破損品(333)、甕の蓋(334)、筒形器台(335)が出土している。跳ね上げ口縁状の屈折口縁の甕は底部が厚く須玖Ⅰ式の可能性がある。鋤形口縁の丹塗磨研甕は、M字突帯であるが口縁が垂れていないので須玖Ⅱ式でも古相と推定する。同じく、口縁が垂れていない鋤形口縁のうち広口壺は須玖Ⅰ式か須玖Ⅱ式土器の古相、高坏は坏部が深いことを加えると須玖Ⅰ式土器と推定する。以上みてきたうち破片が小さいものは須玖Ⅱの古相で、大きな破片か完形品の場合は須玖Ⅰ式の可能性がある。このことは、本来竪穴建物跡に遺棄されたものと、廃絶後の流入に関連するかの



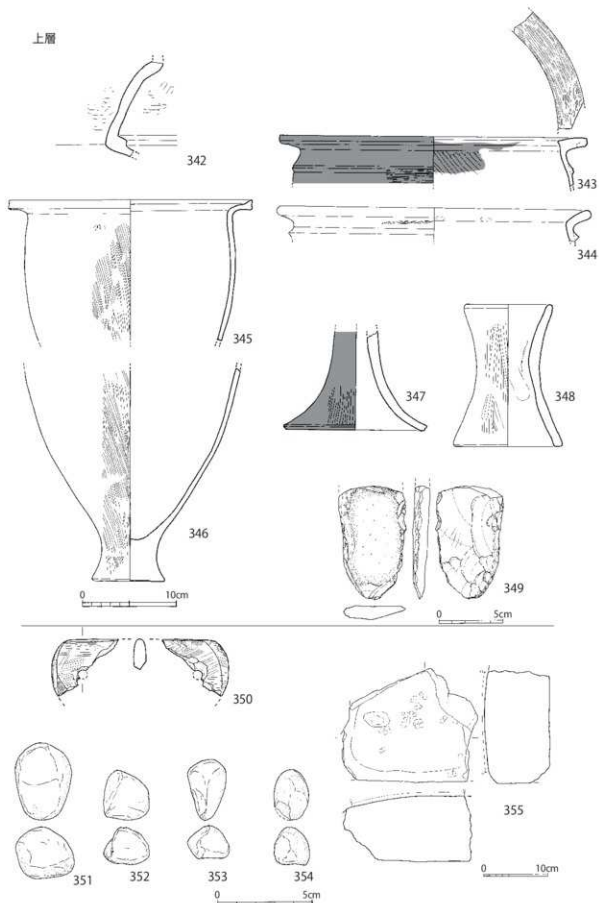
第114図 SH21出土遺物実測図①

屋内からである。更に、ロームブロックが多く入る層や土質がバサバサした層があることから流入土ではなく、埋土と推定している。

〔堆積土〕 竪穴建物跡の壁寄りに堆積した7層～12層は、その傾斜から流入土と推定される。その後堆



第116図 SH18実測図 (1/40・1/30)



第117図 SH18出土遺物実測図

積した堆積土をみると通常の凹レンズ状堆積をしていない。そして建物跡内を広く覆う焼土・炭を側方の見通し図と地層断面図でみると、床面直上から上位に分布の中心がある。このことから竪穴建物跡の廃絶後で、まだ埋まりきっていない段階に炭が多く分布する部分を中心として何らかの理由で火を禁じた状況が推定される。したがって7層以上の堆積土は、火を焚く中で生じたものに由来するものと、その後の埋土や廃棄物等に由来するものと推定する。

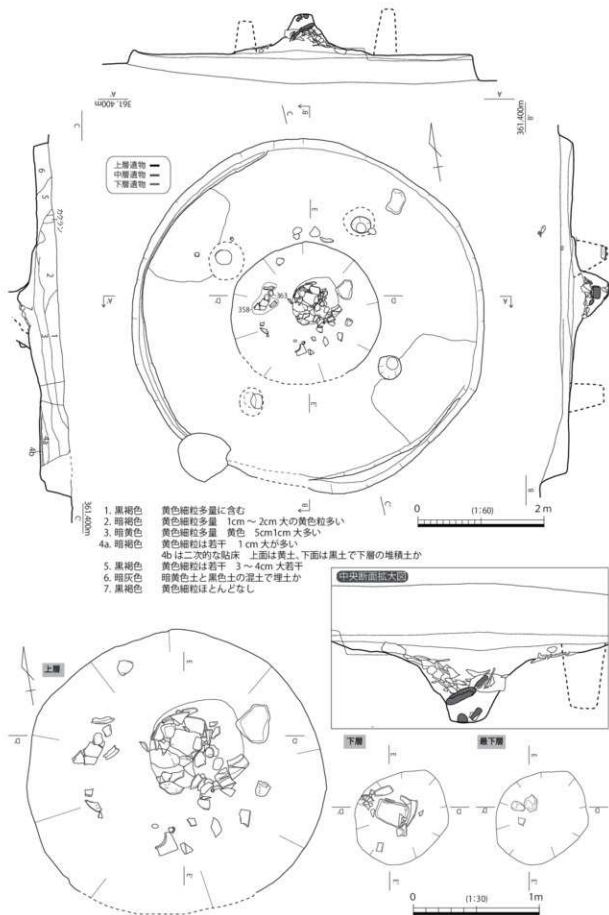
〈遺物〉側方からの見通し図でみると、出土した遺物の多くがSH18の廃絶後の埋土作業の中で混入したことがわかる。広口壺（第117図342）、丹塗磨研で鋳形口縁の甕（343）、屈折口縁直下に断面三角突帯を有する中型壺（344）、高杯の脚部（347）、石鍬（扁平打製石斧）は小破片・小遺物であり、埋土作業の中で混入したのであろう。L字状に湾曲する口縁で粗製の甕が一個体分あり（345・346）、まとまった状態で潰れている。筒形器台も（348）、欠けたパーツとともに至近距離で出土した。したがって、L字口縁の粗製甕と筒形器台は埋土作業のなかで廃棄されたものだろう。なおL字口縁の粗製甕は、底部が厚いものの、口唇端部上面が僅かに跳ね上げ状になっていることから須玖Ⅰ式土器段階まではさかのぼらず須玖Ⅱ式土器の古相と考えておきたい。鋳形口縁の甕はM字突帯であるが、口縁が垂れていないので須玖Ⅱ式土器の古相と考えておきたい。床面直上域から出土したものには、石包丁の破片（350）、投弾（351～354）、礫石もしくは台石（355）がある。

SH19 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の北西部にあたり、区画でいえばD69区とI79区との境界に位置する（第104図）。SH18とは、ほぼ同じ場所であり、同遺構から切られる関係（先行）にある。SH19は、検出面の平面形が円形竪穴建物跡である（第118図）。その規模は、直径がほぼ570cm、面積約24.6㎡である。貼床（整地土）上面までの深さは約50cmである。貼床の下は未調査であり、詳細は不明である。建物内の南側壁際ラインに沿って壁周溝がめぐる。北東部の支柱穴と壁との間に、約20cm×約40cmの大きさの台石が配置されている。

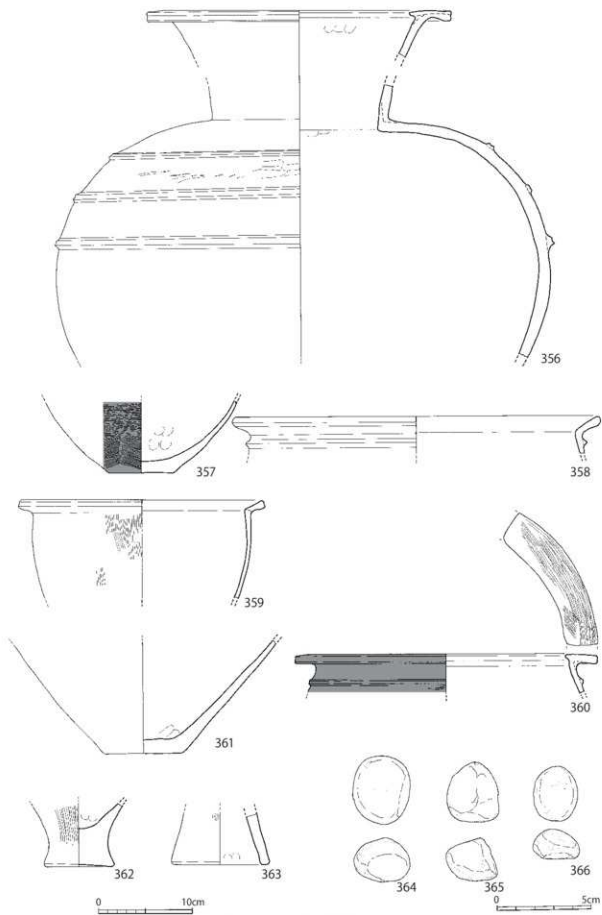
〈炉跡と周囲の付帯施設〉竪穴建物跡内の中央には炉跡と考えられる70cm×80cmで深さ60cmの深い土坑がある。この炉跡と考えられる土坑は、その周りを円形の浅い皿状の堀くぼみを取り囲む。この浅い皿状の堀くぼみは、直径280cm前後であり、縁部から中央にある炉跡までの距離が44cm～106cmある。そして浅い皿状の堀くぼみは、縁部から、緩やかに低くなり炉跡の縁部に移行する。この皿状の堀くぼみのすぐ外側に4基からなる支柱穴が位置する。この浅い皿状の堀くぼみは、その状況から炉跡の付帯施設の可能性が強いことから、着座空間ではないと考えられる。浅い皿状の堀くぼみと炉跡の面積である6.154㎡を、SH19の面積である25.504㎡からひいた19.35㎡が炉跡と周囲の付帯施設以外の利用可能空間となる。

〈柱穴〉支柱穴は4基で、ほぼ南北方向（N-4°-W）と東西方向（N-94°-W）の方位で並ぶ。丁度サイコロの四つ目状を呈している。柱穴の深さは、約55cm程度である。南東の柱穴を除いて構造を調査した。床面で柱穴痕を探した際に見つかったのが図上に実線で示した円形で、直径が約20cm・25cm・30cmであった。内部を調査すると径が拡大し、結果的に直径が約45cm・55cm・50cmの柱穴となった。これは、竪穴建物跡の竪穴と柱穴を掘削し、次に柱穴より小さい柱を立て、柱穴内に真込めとその上に貼床兼整地土で固めるという作業工程から生じていることがわかった。したがって、当初の小さい数値は、柱が腐朽した後の痕跡であり、いわゆる柱痕である。

〈柱穴間の空間〉柱穴間は、220cm前後であり、その間のすぐ前には炉跡に関する円形の浅い皿状の堀くぼみがある。また柱穴とその背後に位置する竪穴の壁との間は120cm前後で、あまり広くはない。このことから柱穴を対角線上で区分すると丁度ドーナツを四分割した形の着座空間が推定できる。



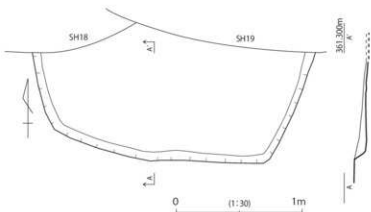
第118図 SH19実測図 (1/60・1/30)



第119図 SH19出土遺物実測図

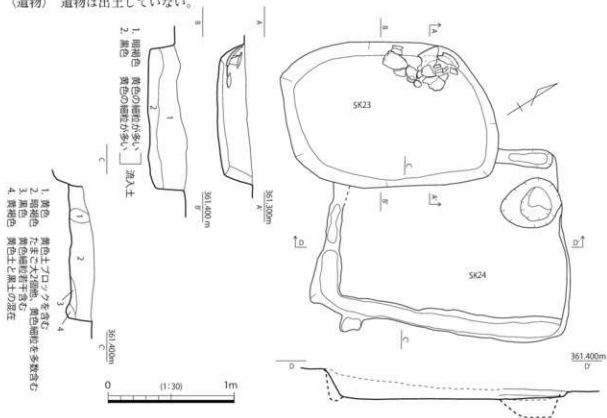
〈遺物〉 遺物は炉跡と円形の浅い皿状の堀くぼみ、それに接する床面の緑部に分布していた。炉跡内の最下部には焼礫が数個あり、その上の中位には19cm×25cm×15cmの大きさを有する台石が据えられていた。その台石上に破砕された大小の土器片を、ほぼ炉跡の全体をふさぐように被せられていた。この他、残余の土器片なのか、円形の浅い皿状の堀くぼみ面上に散らしていた。こうした状況は廃棄でもなく遺棄でもなく、住居を焼絶するにあたって一種の「カマド封じ」のような民俗学的な儀礼の存在が窺える。炉跡を中心として鉢形口縁の広口口縁で胴張の壺が出土している（第119図356）。この壺の口縁はあまり垂れないが、胴部にM字突帯三条がめぐっているので、須玖Ⅱ式土器古段階頃と考えられる。壺は、胴部にM字突帯のある丹塗磨研の甕（360）、屈折口縁の直下に断面三角形の突帯のある甕の破片（358）、屈折口縁で粗製の甕（359）とその底部破片（362）がある。甕の底部破片は、厚く、やや古相であると考えられる。この他、筒形器台の破片（363）と投弾が出土している（364～366）。

SK73 この土坑は、中部地区遺構群の北西部にあたり、区画でいえばD79区に位置し（第104図）、その北側の大半をSH18とSH19に切られる関係にある。残存部分からすると、長方形もしくは方形の遺構であったことが窺われる（第120図）。切られている部分の最大幅で227cmある。検出面からの深さは最大で10cmである。



第120図 SK73実測図（1/30）

〈遺物〉 遺物は出土していない。



第121図 SK23・SK24実測図（1/30）

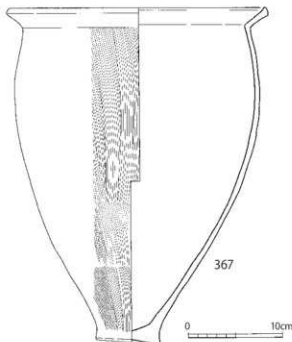
SK23・SK24 両土坑は、中部地区遺構群の北西部よりで、区画でいえばD80区に位置する（第104図）。このあたりは、比較的平らな地勢で、SK23がSK24を一部切る状況で同一方向を向いていた。平面形は、SK24がやや角度ある隅部を有する長方形であるのに対し、SK23はやや変形した隅丸長方形を呈している。（第121図）。SK23の長軸方向の方位はN-32°-Eである。SK23の規模は、長軸170cm、短軸114cmである。深さは、整地土上面までが30cm、整地土下の掘削面は未調査である。壁の立ち上がり角度は、短軸側が87°と79°と急角度である。土坑底部（整地土上面）は、やや皿状に緩やかな勾配がある。土坑内堆積土は、1層と2層の流入土からなり、いずれも流入土である。SK24の長軸方向の方位はN-40.5°-Eである。SK24の規模は、長軸200cm、短軸154cmであるが、北側の壁を若干削られている。なお土坑の深さは20cmである。このSK24で特異な状況は、壁周溝状の溝を有することである。この点については箱式石棺の抜き取り痕跡とも考え検討したが、その形跡はなかった。

〈遺物〉 SK23の東北隅部の壁際に破損した土器片を積み重ねるように一塊にして廃棄していた。接合すると屈折口縁の粗製の甕となり、底部が薄いので須玖Ⅱ式土器に比定できる（第122図367）。なおSK24からの遺物は出土していないが、切り合いにより新しいSK24の壁周溝状の溝が石棺の抜き取り痕跡である可能性はないといえる。

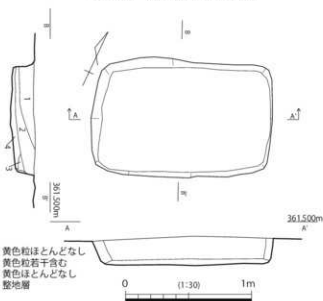
SK21 この土坑は、中部地区遺構群の西部よりで、区画でいえばD80区西部に位置する（第104図）。このあたりは、比較的平らな地勢で、南西にSH5が位置する。平面形は、やや角度ある隅部を有する長方形を呈している（第123図）。SK21の長軸方向の方位はN-66.5°-Eである。SK21の規模は、長軸144cm、短軸94cm、面積1.26㎡である。深さは、整地土上面までが14cm、整地土下の掘削面までが20cmである。壁の立ち上がり角度は、短軸側が98.5°と77°で、長軸側が94°と82°である。整地土より上の堆積土は1層～3層まであり、いずれも流入土である。

〈遺物〉 遺物は出土していない。

SH5 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の西部にあたり、区画でいえばD80区・D90区・D71区・D81区の交点に位置する（第104図）。SK72とはほぼ同様な地区にあり、同遺構を切る関係（後行）にある。SH5は検出面の平面形がやや方形の竪穴建物跡である



第122図 SK23出土遺物実測図

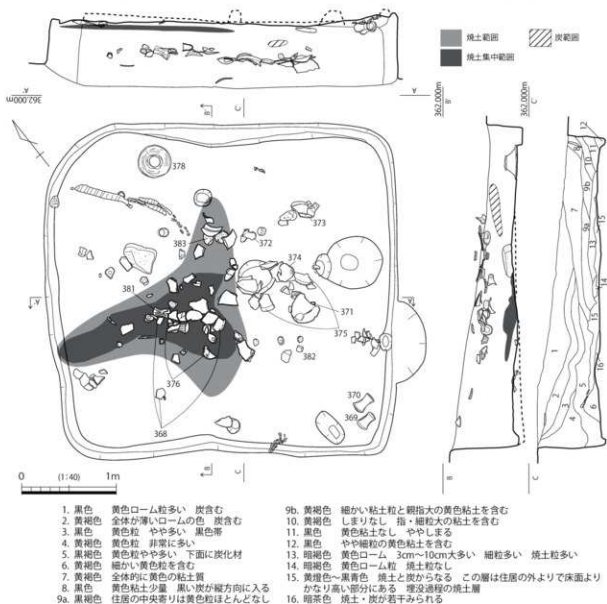


1. 黒褐色 黄色粒ほとんどなし
2. 黒褐色 黄色粒若干含む
3. 黒色 黄色ほとんどなし
4. 黄褐色 整地層

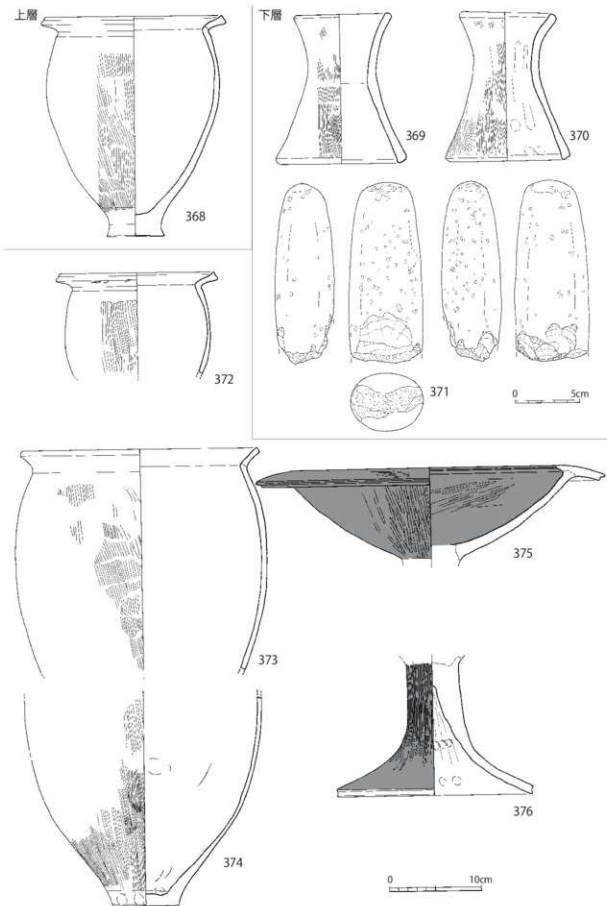
第123図 SK21実測図（1/30）

(第124図)。その規模は、東西が僅かに長く376cm、南北が350cm、面積11.16㎡である。その長軸方位はN-51°-Wである。SH5の貼床面(整地土上面)までの深さは最深で60cmである。貼床(整地土)の下は未調査であり、詳細は不明である。建物内の壁際ラインに沿って壁周溝がめぐっている。竪穴建物跡内の土坑は、東壁よりある楕円形の炉跡(50cm×60cm)だけで、他は小ピットである。この他、屋内施設として、東壁よりであるが、西壁から85cm内寄りに大型の台石(27cm×34cm)1基を床面上に設置していた。なお、主柱穴は、北東壁から内側へ75cm、南西壁から内側へ30cmのところにあり、主柱穴を結ぶラインの方位はN-32°-Eである。堆積土は、1層～16層まで確認した。特記する事項として、15層は焼土・炭からなり、西半部で帯状に分布していた。この層を追跡すると西半部で徐々に西壁の上端まで延びていた。このことから、建物外の西側から廃棄されたと推定できる。

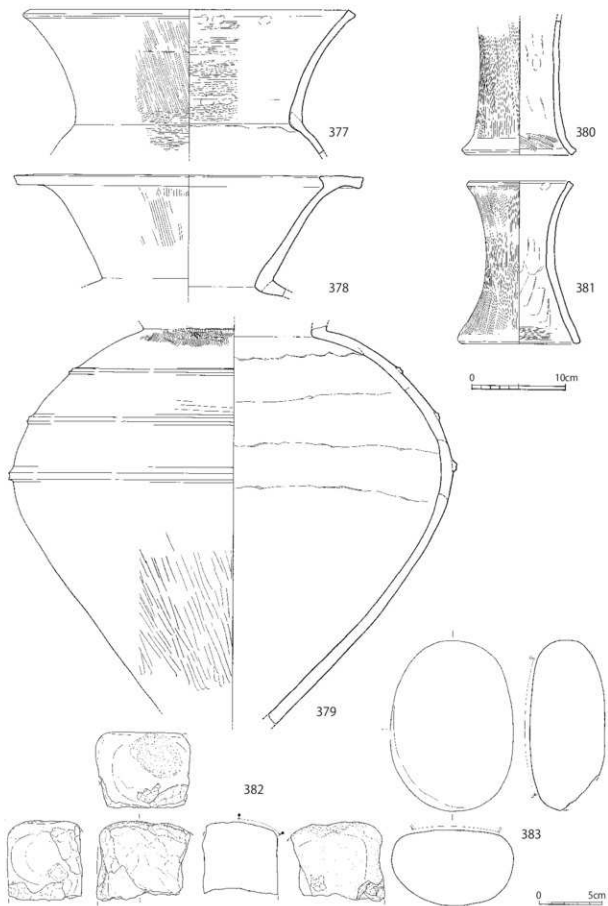
(遺物) 遺物は上層と下層に区別される。上層の遺物は全て流入土である1層中に含まれる。大きな破片や石器類もあるが、完形に復元できたものも、全て破損していた。分布や層中に集中性があることを考慮すると、上層の遺物は廃棄されたものといえる。その上層の遺物には、屈折口縁の粗製甕(第125図368・



第124図 SH5実測図(1/40)



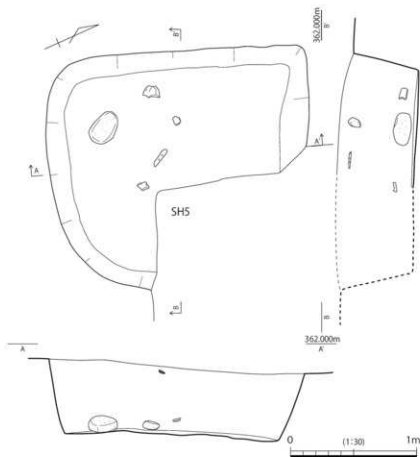
第125図 SH5出土遺物実測図①



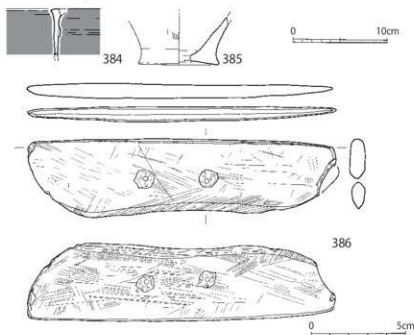
第126図 SH5出土遺物実測図②

372・373・374)、丹塗磨研で鐏形口縁の高坏(375・376)、広口壺(377・379)、筒形器台(380・381)、敲石(382)、磨石(383)がある。このうち鐏形口縁の高坏は、口縁が外側へ著しく垂れており、須玖Ⅱ式土器の新相と考えられる(375)。また広口壺の胴部内面をみると、最大径の部分で上下区分できようである。すなわち上半には5cm〜7cm幅の粘土帯の接合痕が残っているが、下半は丁寧にナデ消している(379)。おそらく胴部下半を先に作って生乾きさせ、その上に胴部上半を継ぎ足したが、内側の上半は死角となる為に接合痕が残ったのであろう。下層からは、筒形器台(369・370)、蛤刃形磨製石斧(371)、鐏形口縁の広口壺(378)が出土した。これらの遺物は、上層と異なって、床面直上に配置したかのような状況で出土している。このうち筒形器台は、南部の隅部に並べ置かれていた。こうした状況から遺棄された状況といえよう。

SK72 この土坑は、中部地区遺構群の西部にあたり、区画でいえばロD71区・ロD81区の交点に位置する(第104図)。SK72と、ほぼ同様な地区にあり、同遺構を切られる関係(先行)にある。このあたりは南側の標高が高く、北側へ低くなる緩斜面である。SK72は、検出面の平面形がやや歪な隅丸方形を基調とした土坑である(第127図)。SK72の規模は、南北275cm、東西250cmである。SK72の西壁の方位はN-21°-Eである。深さは、整地土上面までが77cmで、整地土下の掘削面は未調査である。壁の立ち上がり角度は、西



第127図 SK72実測図(1/30)



第128図 SK72出土遺物実測図

壁75°・北壁67.5°・南壁79°である。堆積土は、未調査である。

〔遺物〕 深度の差はあるものの全て流入土中から出土した。丹塗磨研で鋤形口縁の甕(第128図384)、粗製の甕の底部(385)、立岩産の石包丁(386)がある。なお鋤形口縁の甕は、口縁直下にM字突帯をはりつけており、須玖Ⅱ式土器と考えられる。石包丁は、ほぼ完形品であるが、使用の結果なにか僅かに刃部が欠けている。

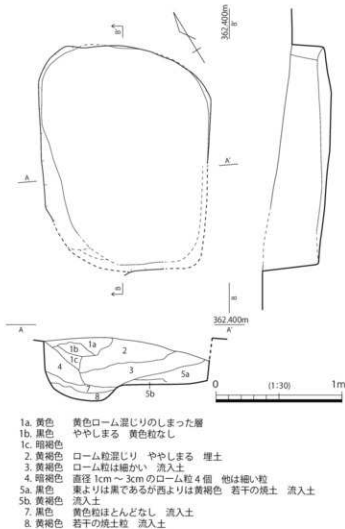
SK4 この土坑は、中部地区遺構群の西部にあたり、区画でいえばロD81区との交点に位置する(第104図)。このあたりは南側の標高が高く、北側へ低くなる緩斜面である。SK4は、検出面の平面形がやや歪な隅丸長方形を基調とした土坑である(第129図)。SK4の規模は、長軸178cm、短軸137cm、面積2.25㎡である。長軸の方位はN-32°-Eである。深さは、整地土上面までが45cmで、整地土下の掘削面は未調査である。壁の立ち上がり角度は北東壁86°・南西壁83°・南東壁84°である。土坑内は2段になっており、中央軸より西側が13cm程度一段低く、底部は湾曲し、徐々に北西壁として立ち上がり、上部は90°近い角度となる。堆積土は、1層から8層まで確認した。このうち1層から2層までは堆積が乱れており、あるいは埋土であった可能性がある。他の層は、流入土と推定している。

〔遺物〕 特記する遺物や出土状況はない。1点、無頸壺の底部破片が出土しているが、埋土や流入土に混在していたと思われる。

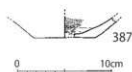
SK5 この土坑は、中部地区遺構群の西部にあたり、区画でいえばロD81区とロD91区の境界に位置する(第104図)。このあたりは南側の標高が高く、北側へ低くなる緩斜面である。SK5は、検出面の平面形が方形に近い隅丸長方形を基調とした土坑である(第131図)。SK5の規模は、長軸233cm、短軸210cm、面積1.25㎡である。土坑の長軸の方位はN-24.5°-Eである。深さは、整地土上面までが45cmで、整地土下の掘削面は55cmである。

壁の立ち上がり角度は北壁79°・南壁85°・東壁87°・西壁90°である。堆積土は、1層から2層まで確認した。このうち2層は整地土である。土坑の面積は、3.99㎡である。土坑平面の対角線方向に4基の柱穴があり、土坑を覆う建物の柱穴であろう。桁行308cm、梁間242cmである。桁行の方位はN-25.5°-Eである。整地土上面上に1基の極浅い小ピットが掘られていた。

〔遺物〕 極小さい甕の底部が出土しており(第132図388・389)、僅かに上げ底である。

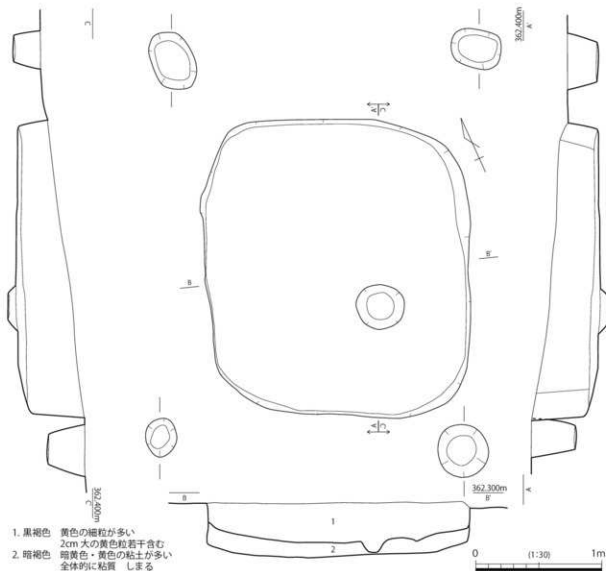


第129図 SK4実測図 (1/30)



第130図 SK4
出土遺物実測図

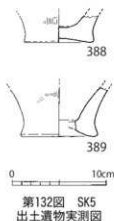
SK32 この土坑は、中部地区遺構群の西部にあたり、区画でいえばロD81区とロD91区の境界に位置する(第104図)。あたりは南側の標高が高く、北側へ低くなる。SK32は、検出面の平面形が方形に近い隅丸長方形を基調とした土坑である(第133図)。SK32の規模は、長軸265cm、短軸184cm、面積4.54㎡である。土坑の長軸の方位はN-54.5°-Nである。深さは、整地土上面までが75cmで、整地土下の掘削面は90cmである。壁の



第131図 SK5実測図 (1/30)

立ち上がり角度は短軸壁 $87.5^{\circ} \cdot 94^{\circ}$ 、長軸壁 $86.5^{\circ} \cdot 88^{\circ}$ と 90° 近い急な立ち上がりである。堆積土は、1層から11層まで確認した。このうち11層は整地土である。土坑の面積は、約4.25㎡である。土坑平面の対角線方向に4基の柱穴があり、土坑を覆う建物の柱穴であろう。桁行352cm、梁間242cmである。桁行の方位はN-25.5°-Eである。整地土面上に1基の極浅い小ピットが掘られていた。

〈遺物〉 遺物の出土層位は上層、下層に区分できる。特記するほどの資料は下層には出土していないが、北西壁付近と北東隅部の壁付近の整地土直上面に廃棄されていた。上層の遺物は1層から3層までの凹レンズ状堆積の中に廃棄されたのか、大半は直線的に分布している。無頸壺(第134図390)、磨研を加えた広口壺(391)、「く」の



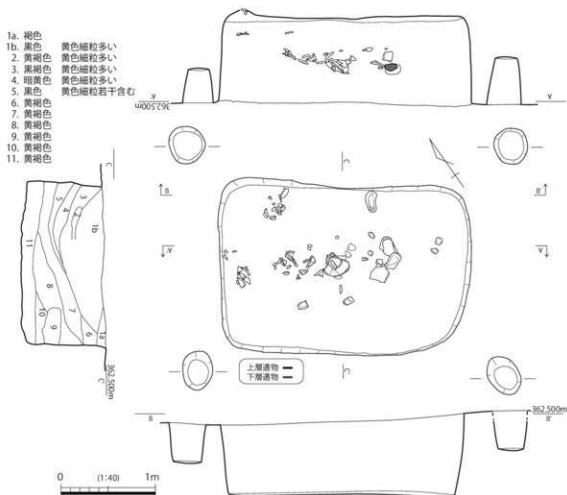
第132図 SK5
出土遺物実測図

字屈折口縁の甕 (392)、鉢の破片 (393)、丹塗磨研で鋤形口縁の高杯の破片 (394)、敲石 (396・397)、火山性発泡軽石 (研磨具?・398・399)、が出土した。甕の蓋は扁平で天井部が浅く、須玖Ⅱ式段階のものであろう。

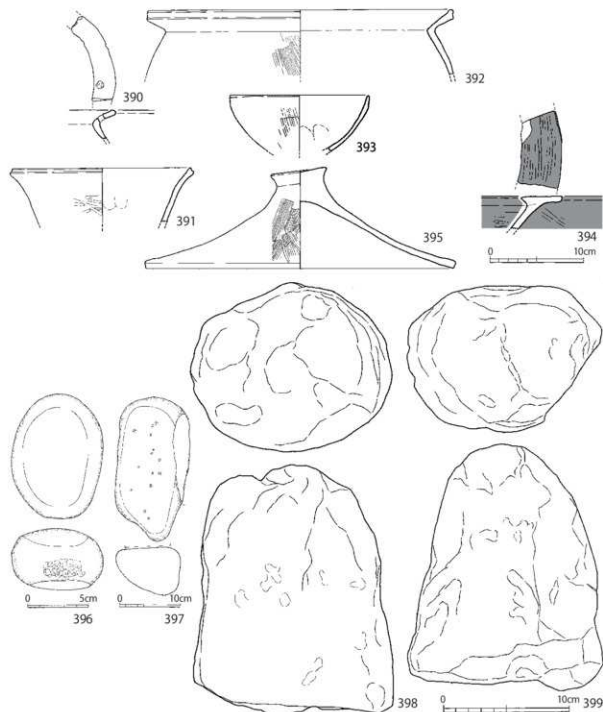
SK123 この遺構は、中部地区遺構群の西部にあたり、区画でいえばD91区に位置する (第104図)。このあたりは南側の標高が高く、北側へ低くなる緩斜面である。SK123は、検出面の平面形が隅丸長方形を基調とした土坑である (第135図)。SK123の規模は、長軸265cm、短軸184cm、面積0.55㎡である。土坑の長軸の方位はN-14.5°-Eである。深さは、整地土上面までが12cmで、整地土下の掘削面は未調査である。壁の立ち上がり角度は短軸壁62°・79°、長軸壁75°・73°の立ち上がりである。堆積土は、1層から11層まで確認した。このうち11層は整地土である。

〈遺物〉 遺物は細身の磨製石鏃が2点出土している。弥生時代中期頃の磨製石鏃がずんぐりした例であるの比べ、SK123の磨製石鏃は長さ6.7cm×幅1.9cm、長さ6.4cm×幅1.8cmと細身ながら大型である (第136図400・401)。磨製石鏃が2点出土したことで、土坑の機能性を考えると矢の貯蔵庫か墓の可能性はある。

SK20 この遺構は、中部地区遺構群の西部にあたり、区画でいえばD100区に位置する (第104図)。このあたりは南側の標高が高く、北側へ低くなる緩斜面である。SK20は、検出面の平面形が方形に近い隅丸長方形を基調とした小型の土坑である (第137図)。SK20の規模は、長軸120cm、短軸106cmである。土坑の長軸の方位は、N-51°-Wである。土坑の深さは、整地土上面までが53cmで、整地土下の掘削面は未調査である。壁



第133図 SK32実測図 (1/40)

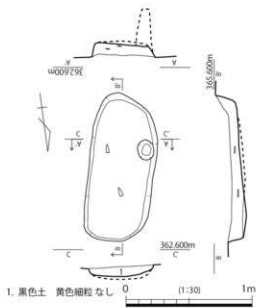


第134図 SK32出土遺物実測図

の立ち上がり角度は短軸北壁 86° ・短軸南壁 85° である。東西壁の立ち上がり角度は未調査である。堆積土は、1層から3層まで確認したが、1層・2層は流入土で、3層は埋土である。土坑の面積は、 1.2m^2 である。土坑外に対角線方向に4基の柱穴があり、土坑を覆う建物の柱穴であろう。桁行 316cm 、梁間 242cm で、その面積は、 7.65m^2 である。桁行の方位は $\text{N}56^{\circ}\text{E}$ である。柱穴が囲む範囲に比べ、土坑の規模が著しく小規模であることが、他の同種の土坑と異なっている。

〈遺物〉 特記するべき出土状態等はないが、屈折口縁の裏の底部と思われる例がある(第138図402)。

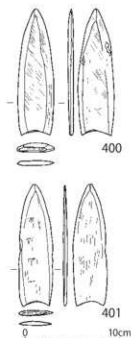
SH7 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の南部にあたり、区画でいえばイD89区とイD99区/イD100区の境界に位置し(第104図)、中央のS2を取り囲む竪穴建物跡の一つである。SH7は、検出面の平面形が隅丸方形の竪穴建物跡である(第139図)。このSH7は、深い竪穴部分と、南側に付設された浅い竪穴部分からなる。その規模は、南北547cm、東西520cm、面積約23㎡である。まず深い部分から



第135図 SK123実測図(1/30)

説明する。深い部分の規模は、南北547cmは変わらないが、東西は付設の浅い竪穴部分を除いた445cmで、面積は21.07㎡ということになる。そしてその平面形は隅丸長方形となり、長軸の方位はN-26°Eである。これが通常の竪穴建物跡と認識される範囲である。貼床(整地土)上面までの深さは約21cmで、貼床(整地土)の厚さは13cmである。建物内の北壁と東壁の一部を除き壁際ラインに沿って壁周溝がめぐる。主柱穴は2基で、ほぼ竪穴建物跡の南北軸線上にのる形で、南壁から内側へ195cmのところの主柱穴1、北壁から内側へ180cmのところの主柱穴2が位置する。二つの主柱穴を結ぶラインの方位は、N-31°Eである。主柱穴間の距離は、190cmである(主柱穴1の中心と主柱穴2の中心の距離)。この他、柱穴状のピットがあるが、配置に規則性がなく、補完的な柱穴と推定されるほか、北壁と南壁に接続するように、土坑が掘り込まれている。竪穴建物跡での火災、もしくは火を焚く行為によるのか、しばしば貼床面上が被熱によって赤化している部分がある。竪穴建物跡の中央部付近の、柱穴及びその間、北側土坑西側、東壁の一部、東側に付設された遺構の南東隅部で被熱痕がある。炭化木材や炭・焼土が竪穴内部から大量かつ広範囲に出土している状況は確認されず、火災の可能性は低いと考えられる。むしろ竪穴廃絶後に火を焚いた可能性のほうが強い。竪穴建物跡内の主要堆積土は、1層から15層まで識別した。このうち床面直上域の9~11層・15層には、炭・焼土が著しく多い。

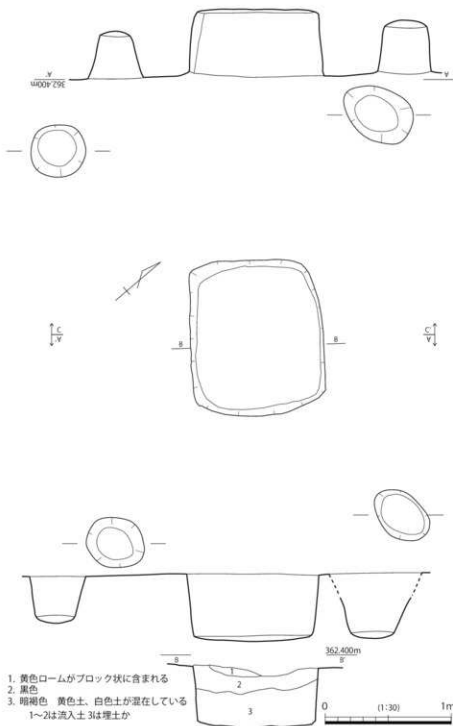
(柱穴) 主柱穴は2基で、サイコロの二つ目状を呈している。柱穴1の深さは、約58cm(掘削部分深度)、柱穴1から柱を抜いた柱痕の深さは50cmである。柱痕の直径は13cmで、柱穴1の直径35cmより小さい。断面図をみると、柱を立てた後、裏込め土(埋土)を充填し(柱穴1の4層)、その上に柱の根締めを兼ねて貼床(整地土)(柱穴1の2層・3層)を重ねている。柱穴1から柱が腐朽もしくは柱を抜き取った後に土が流入している(柱穴1の1層)。床面で柱穴痕が大きいのは、柱痕の調査後に掘り上げた状況である。柱穴2の深さは、約53cm(掘削部分深度)、柱穴2から柱を抜いた柱痕の深さは37cmである。なお柱痕の直径は16cmで、柱穴2の直径37cmより小さい。その後の工程は柱穴1と同様である。次に南側に付設された浅い竪穴部分について報告する。この部分は、深い竪穴の床面から上に23cm高いところに付設された浅い竪穴の床面がある。この付設された浅い竪穴の遺構ラインは、深い竪穴の北壁上部の遺構ラインから続き回り込んでいる。浅い竪穴の遺構ラインは、南側にかけて不明瞭となるが、その中央部分での深さは12cm程度であった。浅い竪穴の南東隅部にあたると思われる部分の床面上に被熱痕が観察された。

第136図 SK123
出土遺物実測図

〈竪穴建物跡内の付帯施設〉 前述したように竪穴建物跡内の北壁沿いと南壁沿いに2基の土坑が掘られている。北側の土坑は長軸100cm×短軸52cmの規模で、床面からの深さ20cmである。この土坑のすぐ南側と北側の建物外から土坑内部へ流入している。土坑内の最下層は、黄土（ローム）と黒土の混土であり、整地土の可能性もある。その上には流入土と思われる黒色土が堆積し、更にその上に土壌化した焼土が堆積していた。遺物の平面分布をみると、この土坑範囲に集中しているが、土壌化した焼土より上位の層で、層的には2層に含まれる。

土坑内からは格別遺物等は出土しなかった。南側の土坑は、比較的整った方形で、規模は東西160cm、南北140cmで、その深さは48cmであった。堆積土はE層からH層まで確認したが、埋土の可能性もあるF層を除き流入土である。遺物の平面分布をみると、この土坑範囲に集中しているが、層的には1・2層に含まれる。

〈遺物〉 遺物の分布が南北の土坑を中心とする集中域とその周辺に散在する遺物がある。北側土坑とその周辺の遺物（北群）として、鋤形口縁の広口壺（第140図403）、丹塗磨研で鋤形口縁の高坏（第141図412）、丹塗磨研の鉢（416）、台石（422）がある。また北側の土坑の西側の北壁にもたれかかるように巨大な台石が出土している



第137図 SK20実測図（1/30）



第138図 SK20
出土遺物実測図

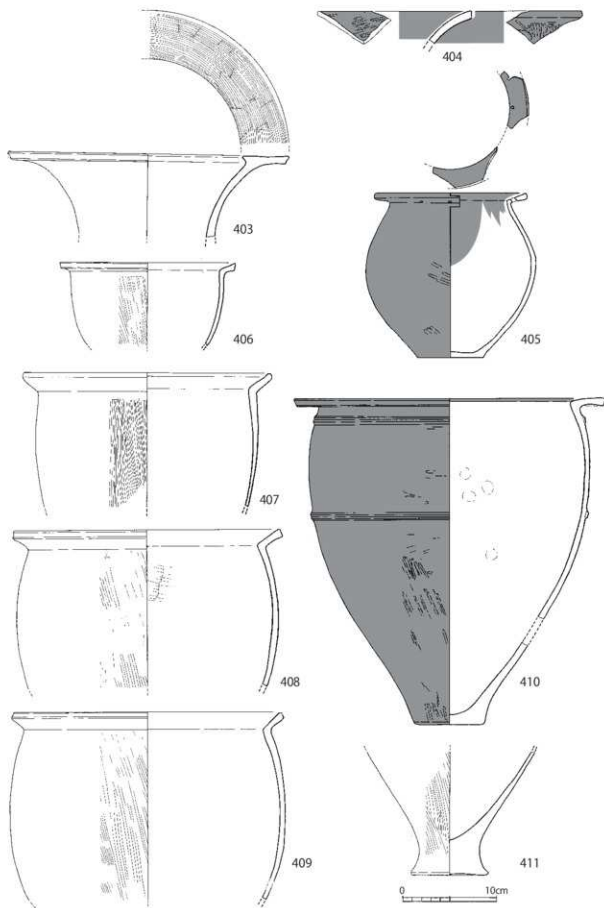
(423)。このうち鋤形口縁の高坏は、口縁の外側よりが垂れ気味になっており、須玖Ⅱ式土器の特徴がでている。南側土坑とその周辺の遺物（南群）として、丹塗磨研の無頸壺（第140図405）、「く」の字屈折口縁の粗製甕（407～409）、丹塗磨研で鋤形口縁の甕（410）、台石の破片（第141図421）がある。このうち、「く」の字屈折口縁の粗製甕は、口径に近いほど胴が張っていることから須玖Ⅱ式土器の中頃から後葉に位置づけられる。この他、北側と南側の土坑に挟まれた間には、破損した石包丁2点が出土している（417・418）。いずれにしても垂直分布図やレベルを見る限り、ほぼすべてが廃棄に伴うものと推定される。とりわけ北群・南群は、一塊にした集中部分があり、一括廃棄した様子が想定される。

SK103 この土坑は、中部地区遺構群の中部にあたり、区画でいえばイD89区の境界に位置し（第104図）、北側にS2やSH8が隣接している。あるいはこうした遺構の付帯施設とも考えられる遺構かもしれない。この辺りは地勢的に僅かに南側が高く、北側が低くなる場所である。SK103は、検出面の平面形が隅丸長方形であるが（第142図）、湾曲した部分もある歪な形をしている。長軸の方位はW-61°-Nである。また、内部は3段に分かれており、数回にわけて掘削されたのかもしれない。規模は、長軸140cm、短軸75cm、面積0.84㎡である。整地土上面までの深さは約21cmで、壁の立ち上がり角度は北壁55°・南壁75°・西壁41°・東壁53°（1段目）・東壁51°（2段目）であり、緩やかな立ち上がりである。

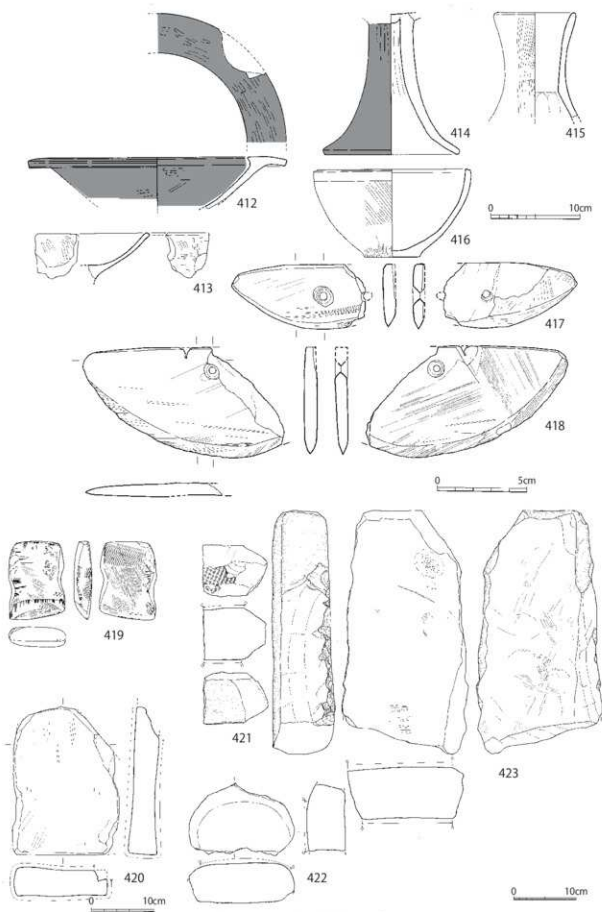
〈遺物〉 数回にわけて掘削された可能性を内包しつつも流入土の堆積はほぼ同時であったことを示している。すなわち、遺物の垂直分布図をみると、整地土面から10cm～20cmの高さを有しながら西から東へ高さを減じながら連なるように分布している。平面的な出土状況からすれば、一塊にして廃棄された状況が窺える。「く」の字形に屈折する口縁の直下に断面三角形の突帯がめぐる甕があるが（第143図424）、胴が張らないので須玖Ⅰ式土器の新相に位置づけられる。石鉄は、珍しく姫島産の黒耀石を石材としており、長さが4.85cmと大型で、基部よりの表裏両面に擦痕がある（425）。ここまで大きい大型品は、縄文時代にはほぼみられないので弥生時代中期の石器と推定する。火山性発泡軽石製品は、溶岩が発泡した石材で（426）、何かの研磨に用いたのであろうか。

SH8 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の西部にあたり、区画でいえばイD89区・イD90区・イD79の境界付近に位置する（第104図）。このあたりは南側の標高が高く、北側へ低くなる緩斜面である。SK5は、検出面の平面形が方形を基調とした竪穴建物跡である（第144図）。しかし、SK8の規模は、南北292cm、東西260cm、面積7.14㎡であることと、深さが32cmと面積の割に浅いことから竪穴建物跡と推定した。主柱穴がなく、建物としての構造や居住の痕跡の点で弱く、あるいは土坑である可能性も否定できない。SH8の方位は、やや長い南北方向を長軸とするとその方位はN-22°-Eである。整地土を除去し、掘削面の調査は行っていない。壁の立ち上がり角度は、北壁72°・南壁61°・東壁78°・西壁69°と断面が逆台形状を呈している。堆積土は、未調査である。

〈遺物〉 遺物の出土は、垂直分布図をみるとほぼ床面直上であるが、僅かに浮いている部分があり、土壌が流入し始めた頃に廃棄したと考えられる。遺物は、垂直分布図をみてわかるように、検出面からやや掘り進めたところで出土し始めるなど完全に埋没状態であったので、遺構検出時・検出以前に遺物が紛失したということは想定できない。そこで遺物の復元をみると、底部などのパーツが欠けていることと、一塊の単位という破片の集中性が見て取れ、明らかに破損場所で片づけた後にSH8に廃棄したということがわかる。次に遺物を報告する。広口壺は、胴径の最大幅が77.5cmもあり大型である（第145図427）。この壺は、口頸部と胴部の境が締り、ここに断面三角の突帯をめぐらしている。更に、胴部にも二条の突帯を密接する状況でめぐらしているが、上位の突帯は断面三角、下位の突帯は断面がコの字状で、いずれもやや上外方に向け



第140図 SH7出土遺物実測図①

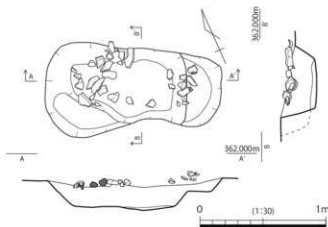


第141図 SH7出土遺物実測図②

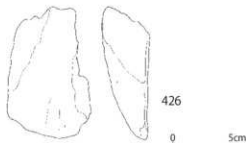
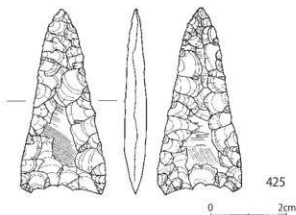
で突出する。その他、底部を欠く丹塗の長頸壺(第146図428)がある。甕には精製と粗製がある。精製の甕は、丹塗磨研で僅かに垂れる鋤形口縁の甕であり、口頸部直下と胴部にM字突帯をめぐらす須玖Ⅱ式土器に相当する甕である(429)。粗製の甕は、口縁をL字状や「く」の字状に屈折させる甕で、(430~433)。うち2例は胴張であり、須玖Ⅱ式土器の中へ後葉に位置づけが想定できる例である(431・432)。このうち2例には、口縁直下に断面三角の突帯をめぐらせている(432)。石器としては、長軸27cm・短軸20cmの大きさを有する台石があり、表面に打痕が著しくついている(434)。この台石は、北壁近くに床面から約10cm浮いた

状態で出土した。

SH11 この遺構は、中部地区遺構群の西部にあたり、区画でいえばD89とD88区の境界に若干かかる部分に位置する(第104図)。このあたりは、比較的に平らな場所である。SH11は、検出面の平面形が隅丸長方形を基調とした竪穴建物跡である(第147図)。SH11の規模は、長軸340cm、短軸220cm、面積6.9㎡である。竪穴建物跡の長軸の方位はN-62°-Wである。深さは、整地土上面まで440cmで、整地土下の掘削面は43cm(厚さ3cm)である。壁の立ち上がり角度は短軸側の北壁88°で、南壁が90°・長軸側の西壁92°・東壁が94°である。このように90°もしくは、90°近い急な立ち上がりである。とりわけ西壁・東壁は、90°を超えて内傾気味に立ち上がっているが、これは柱穴の傾斜角度と一致している。堆積土は、1層から11層まで確認したが、そのうち10層までは竪穴建物跡の南北両側から流入する凹レンズ状堆積をしている。このうち11層は貼床(整地土)である。竪穴建物跡の壁際の南東隅部を除き、ほぼ全周囲に壁周溝がめぐっている。竪穴建物跡平面の長軸線上で東西壁の壁に極接着して2基の柱穴がある。西壁際の柱穴は貼床上面からの深さが56cm、東壁際の柱穴は貼床上面からの深さが110cmというように比較的深く掘られているのがこの竪穴建物の特徴の一つである。柱穴の中心部までの間での桁行は、325cmである。桁行の方位は、竪穴の方位と同じN-62°-Wである。整地土面上に2基の極浅い小ピットが掘られていたが、この部分は上記したよ



第142図 SK103実測図(1/30)



第143図 SK103出土遺物実測図

うに壁周溝が途切れている部分でもあり、あるいは入口などがあった部分であろうか。この竪穴建物跡の構造で注目されるのは、長軸線上の壁際に掘られた2基の主柱穴で、しかも内傾する特徴である。柱穴が内傾

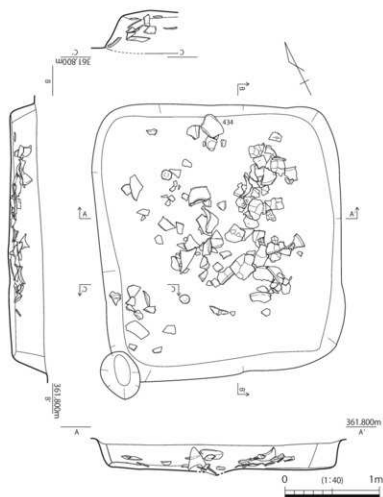
するという事は、両端の柱が「おじぎ」するように向き合っていたことを示している。

〈遺物〉 礫が床面直上から1点出土しただけで、他に特記するような遺物と出土状態はなかった。しかし、この生活感が極めて乏しいということと竪穴建物跡の構造的特徴とその小規模性を考えると、そこには臨時的・年齢的・性別的な機能の存在が窺える。

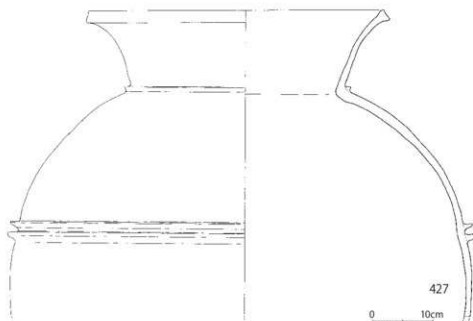
SK116 この土坑は、中部地区遺構群の中部にあたり、区画でいえばD79区の境界に位置し（第104図）、西半分をS2に切られる位置関係と先後関係にある。近隣遺構の付帯施設とも考えられる遺構かもしれない。この辺りは地勢的に僅かに南側が高く、北側が低い場所である。SK116は、検出面の平面形が隅丸方形の土坑であるが（第148図）、湾曲した部分もある。

東壁の方位は丁度N-0°-Wである。規模

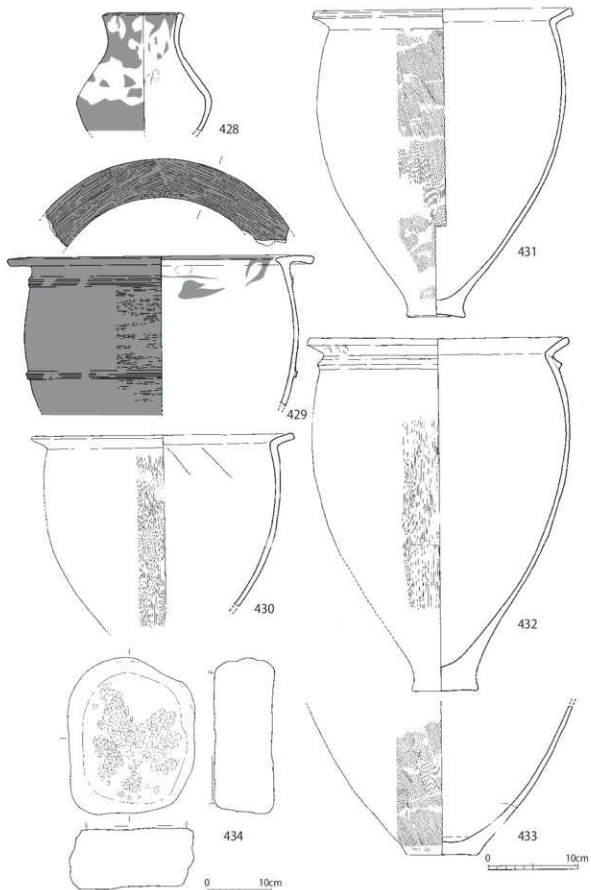
は、南北74cm、東西74cm、面積0.49㎡である。土坑内の堆積土は、1層から2層を確認したが、流入土であった。整地土の下は未調査で、上面までの深さは約20cmで、壁の立ち上がり角度は北壁70°、南壁72°・西壁66°・東壁63°であり、逆台形状の立ち上がりである。西壁



第144図 SH8実測図（1/40）



第145図 SH8出土遺物実測図①



第146図 SH8出土遺物実測図②

際に柱穴状の小ピットがあるが、SK116の一部なのか、先後関係があるか等については不明である。

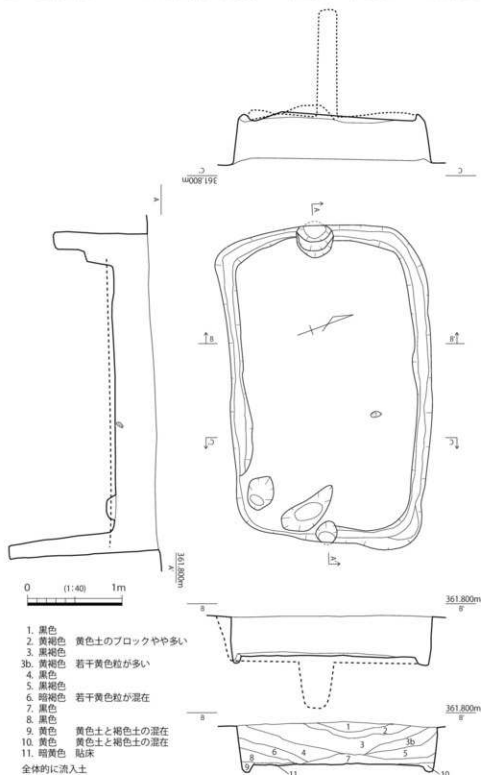
〈遺物〉 遺物について特記することはない。

SK68 この土坑は、中部地区遺構群の中部にあたり、区画でいえばイD78区とイD79区の境界に位置し(第104図)、中央部分をS2の北側溝に切られる位置関係と先後関係にある。近隣遺構の付帯施設とも考えられる遺構かもしれない。この辺りは地勢的に平坦な場所である。SK68は、検出面の平面形が隅丸方形の土坑で(第149図)、方位はN-23°-Eである。規模は、長軸344cm、短軸138cm、面積4.25㎡である。土坑の深さは、33cmで、内

部の堆積土は、1層から5層までが確認されており、各層とも流入土である。5層下の整地土は未調査である。

〈遺物〉 出土状態を特記する遺物はないが、屈折口縁の甕(第150図435)と筒形器台の破片(436)が出土している。

S2 S2は、円形周溝状の浅い溝である。この円形周溝状の溝は、中部地区遺構群の中部にあたり、区画でいえばイD78区・イD88区・イD79区とイD89区に位置する(第104図)。この辺りは、比較的北が僅かに低く、南側が高い地勢にある。S2の平面形は、楕円形である楕円形に近い形に溝がとりまく(第151図)。楕円形に



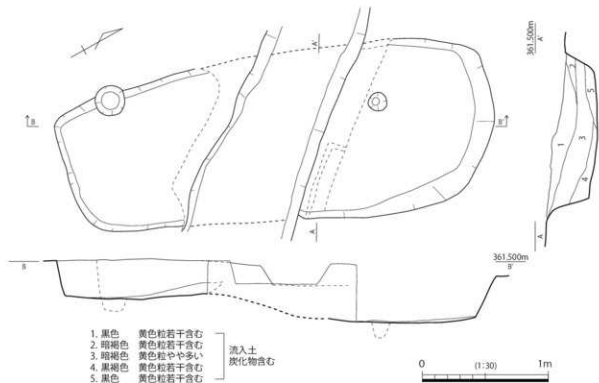
第147図 SH11実測図(1/40)

めぐる溝は、その長軸方位と規模は、N-46°-W、長軸1110cm（溝の外側基準）、長軸970cm（溝の内側基準）、短軸760cm（溝の外側基準）で、短軸600cm（溝の内側基準）である。深さは10cmと極めて浅い。断面を見ると溝底の標高で最も低い部分にあたるのが北側のC-C'断面で361.25m、逆に最も高いのは南側のD-D'断面で361.6mであり、その差35cmもある。このことは、溝低部の高さには規制がなかったことを示している。なお整地層上面は、



第148図 SK116実測図 (1/30)

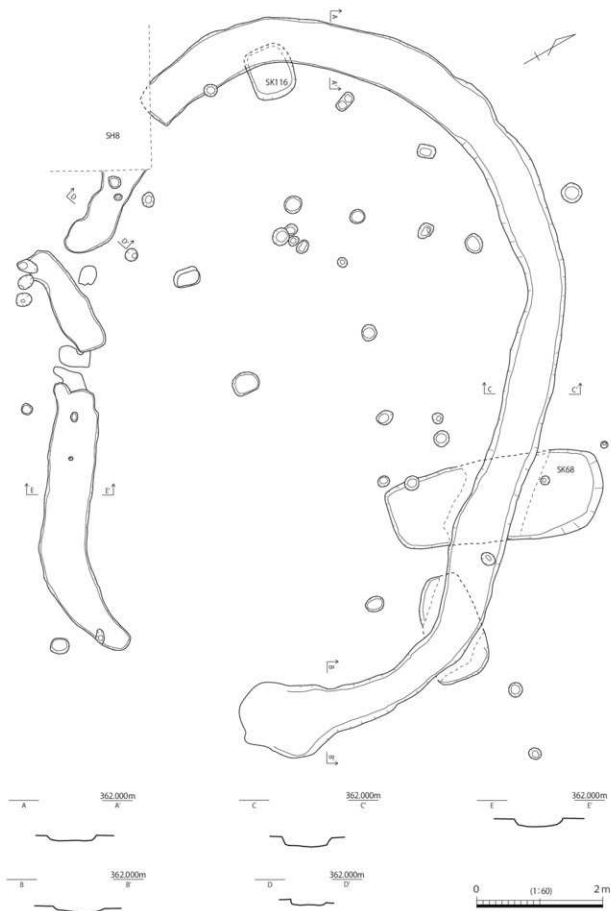
ほぼ平らであるが、実際は細かい起伏が著しい。また南側のD-D'断面・南側のE-E'断面は検出面から溝底部までの深さが極めて浅い。これは南側の方が高い地勢であることから、後世にフラットに整地する中で削平されたと考えられる。いずれにしても、各断面の深さは10cmから15cm程度しかなく、他の遺構の掘削深度を考慮すると、もともと深い溝が必要ではなかったことがわかる。こうした溝が一周するような遺構、例えば古墳・周溝墓・還溝集落等の場合、本体は溝ではなく、その内側にある遺構である。こうしたことからすれば、本遺構も内側に機能の本体があったとみなすべきである。しかし、内側には何ら溝との関係を物語



第149図 SK68実測図 (1/30)



第150図 SK68出土遺物実測図

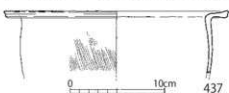


第151図 S2実測図 (1/60)

る遺構は検出されておらず、柱穴状の小ピットが分布していたに過ぎない。なお、周溝の東南部（楕円形の幅狭い部分）で、溝が一部分途切れている部分がある。この部分は、削平された可能性が高いが、出入口であった可能性も考慮できよう。なおS2の周囲には柱穴状のピットが多い。

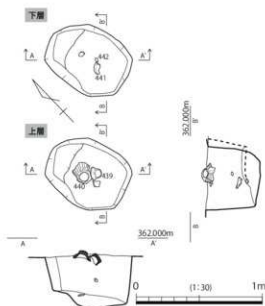
〈遺物〉 L字状の屈折口縁を有する甕の破片と（第152図437）、サヌカイトを石材とする石鏡が出土している（438）。石鏡は縄文時代の遺物が混入したものであろう。こうした、数少ない資料しかないということは、S2の機能的な意味が土器を使う作業・食生活とは関係の薄いことが推し量れる。むしろ、屋外での作業、例えば家畜小屋等、別の意味を考えるべきなのかもしれない。

SK47 この土坑は、中部地区遺構群の北部にあたり、区画でいえばD69区とD68区の境界付近に位置する（第104図）。このあたりは、比較的平らな地勢である。SK47の平面形は、角張った楕円形である（第153図）。土坑の長軸方向の方位は、N-22°Wである。土坑の規模は、長軸67cm、短軸52cm、面積0.27㎡である。深さは、整地土上面まで42cm、整地土下の掘削部は未調査である。壁の立ち上がり角度は、北壁76°・南壁85°・西壁86°・東壁84°と急角度である。しかも、整地土上面と壁との境界部分も直角近い角度で丁寧に掘削している。土坑内堆積土は全体的に流入土である。

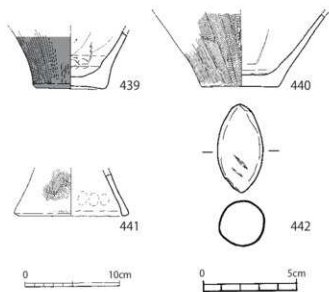


第152図 S2出土遺物実測図

〈遺物〉 遺物の文化層は、2層に区分できる。まず土壌が流入するなかで、下位から中位にかけて器台の破片（第154図441）や土製投彈（442）が混在したと考えられる。投彈はラグビーボール状の形をした典型的な資料である。いずれにしても資料としてはあまりに小さな小破片であり、それ自体を能動的に廃棄したとは考えられない。その後、ほぼ検出面近くまで土壌が流入した段階で甕の底部破片と（439）、壺の底部破片（440）について底を上にして伏せて並べ置き、更に図化はしていないが胴部破片をその脇に添えていた。これらの点から、上部で出土した底部破片と胴部破片は些細な状況ではあるが、意図的に廃棄したことが色濃く窺える。



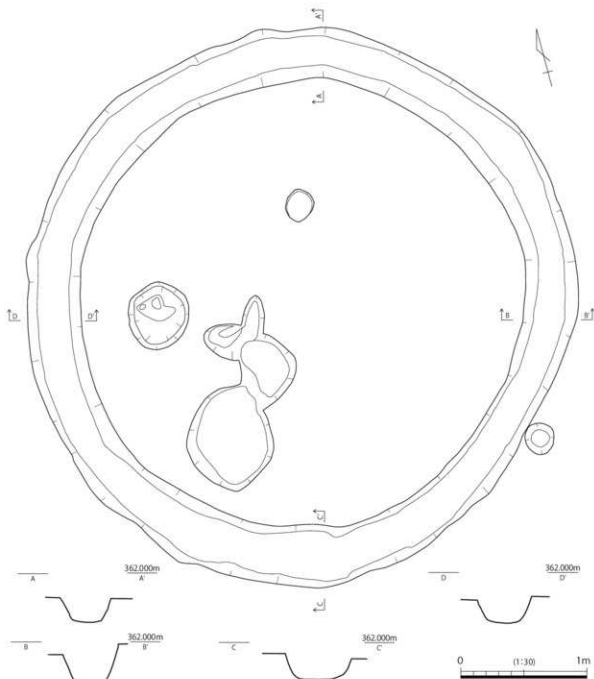
第153図 SK47実測図（1/30）



第154図 SK47出土遺物実測図

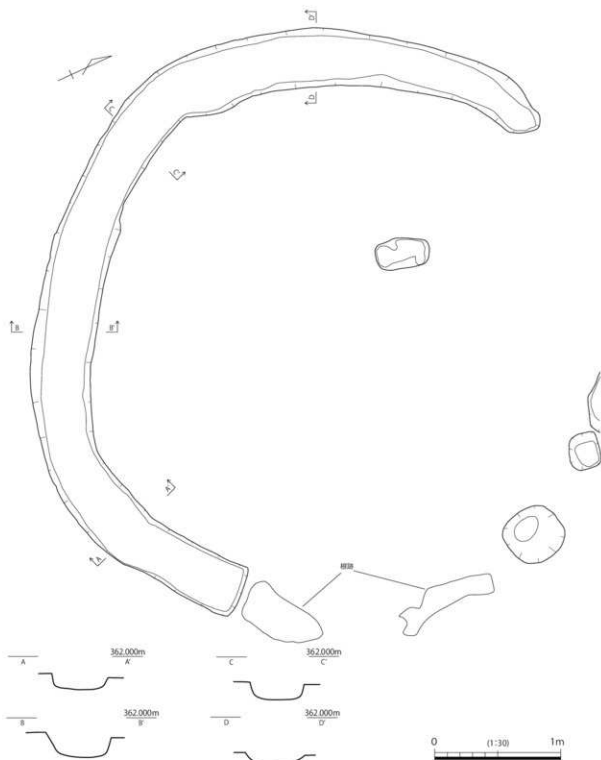
S3 S3は、円形周溝状の浅い溝である。この円形周溝状の溝は、中部地区遺構群の南部にあたり、区画でいえばイD88区・イD98区の境界付近に位置する(第104図)。この辺りは、比較的北が僅かに低く、南側が高い地勢にある。S3の平面形は、円形に近い形に溝がとりまく(第155図)。溝の幅は、平均43cmである。周溝の外側での直径が440cm前後、内径は352cm前後である。深さは20cm~28cm前後で残存しており、断面形は逆漏斗形である。断面を見ると溝底の標高で最も低い部分にあたるのが北側のA-A'断面と西側のD-D'断面で361.60m、逆に最も高いのは南側のB-B'断面で361.680mであり、その差8cm程度である。なお整地層上面は、細かい起伏が著しい。S2と同様、単なる周溝ではなく、その内側に利用の理由があったと考えられる。周溝の内側に小ピットが5カ所あるが、関連性は不明である。

〈遺物〉 S3からは特記するべき資料はない。



第155図 S3実測図(1/30)

S4 S4も、浅い溝形周溝状の遺構である。この円形周溝状の溝は、中部地区遺構群の東部にあたり、区画でいえばD87区に位置する（第104図）。この辺りは、比較的北が僅かに低く、南側が高い地勢にある。S4の平面形は、円形に近い形に溝がとりまく（第156図）。溝の幅は、幅広い部分で50cmである。溝の外側からの直径は465cm、または483cm前後、内径では400cm、または400cm前後である。深さは8cm～16cm



第156図 S4実測図 (1/30)

前後で残り、断面形は逆満鉢形である。断面を見ると溝底の標高で最も低い部分にあたるのが北西側のD-D'断面で361.64m、逆に最も高いのは南側のA-A'断面で361.73mであり、その差9cm程度である。しかし東半部の残りが悪く、詳細な状況は不明である。S1～S3と同様、単なる周溝ではなく、その内側に利用の理由があったと考えられる。なお、S4を含めこの付近にはS2、S3、が隣接集中している観があるとともに、相対するこれらの周溝間には小ピット以外に遺構がない。このことから居住空間と異なる作業空間であった可能性が高い。

〈遺物〉 特記するような遺物はない。

SK34 この土坑は、第1次調査区の中中部遺構群の東部に位置する。区画では、イD87区にあたる(第104図)。このあたりは、南側の比高が高く、北側へ向けて緩く標高を減じていく地勢である。こうした地勢上の方向に土坑の長軸を向けている。土坑の平面形は、幅広の隅丸長方形である(第157図)。その規模は、長軸177cm、幅134cm、面積2㎡である。長軸の方位は、N-24°-Eである。この土坑内の堆積土は、1層から4層までのうち2層が埋土の他は流入土である。この他、5層が整地土である。5層の整地土上面までの深さは36cmで、整地土の厚さは4cmであった。流入土は、南北方向の土坑外から交互に流入している。2層の埋土は、元は黄色をしたローム系の粘土であり、明らかに流入土とは違った土質である。壁の立ち上がりは、北壁72°・南壁78°・東壁67°・西壁84°と逆台形状である。

〈遺物〉 鋤形口縁の広口壺か高杯の破片と考えられる例が1点出土しているが、流入土・埋土に混在していたのだろう(第158図443)。この鋤形口縁は、外側が垂れており、須玖Ⅱ式土器に相当する。特記する出土状態はない。

SK48 この土坑は、第1次調査区の中中部遺構群の北東部に位置する。区画では、イD68区とイD78区の境界

部分にあたる(第104図)。このあたりは、比較的平坦な地勢である。こうした地勢上の方向に土坑の一边を向けている。土坑の平面形は、方形である(第159図)。その規模は、南北242cm、東西254cm、面積5.75㎡である。南北軸の方位は、N-30°-Eである。この土坑内の堆積土は、1層から7層までの層が流入土である。最初に大きく7層が北側から流入した後、4～6層が南から流入する。次に北側から2・3層が北から、最後に南から1層が流入している。この他、8層の整地土については未調査である。8層の整地土

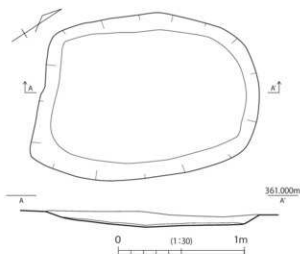
上面までの深さは67cmであった。流入土は、南北方向の



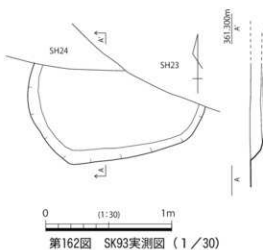
第157図 SK34実測図(1/30)



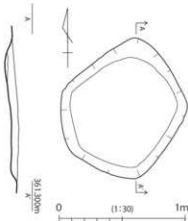
第158図 SK34
出土遺物実測図



第161図 SK66実測図 (1/30)



第162図 SK93実測図 (1/30)



第163図 SK117実測図 (1/30)

可能性が高い。

〈遺物〉 特記するような遺物の出土状態はない。

SH31・SK104 この竪穴建物跡と土坑は、中部地区遺構群の北部にあたり、区画でいえばイD68区北西の隅部に位置し(第104図)、遺構群中央のS2を取り囲む竪穴建物跡・土坑の一つで、位置する場所は比較的平坦な地勢である。SH31の範囲には先行する土坑であるSK4との切り合いと、SH31自体が面積を拡張してい

う。遠賀川以東系の須玖Ⅱ式土器と考えられる。

SK66 この土坑は、第1次調査区の中中部遺構群の北東部に位置する。区画では、イD68区にあたる(第104図)。このあたりは、比較的平坦な地勢である。こうした地勢上方向に土坑の長軸を向けている。土坑の平面形は、隅丸長方形を基本としているが胴張であり、かなり変容している(161図)。その規模は、長軸174cm、短軸130cm、面積2㎡である。深さは、11cmと浅く、その断面形は皿状を呈している。南北軸の方位は、N-32°-Eである。この土坑内の堆積土は、整地を含め未調査であるが、堆積土上位には1層だけが堆積していた。SK66は、SH24に切り合い無しで隣接し、方位を合わせる関係にあることから帰属する可能性が高い。

〈遺物〉 特記するような遺物の出土状態はない。

SK93 この土坑は、第1次調査区の中中部遺構群の北東部に位置する。区画では、イD77区にあたる(第104図)。このあたりは、比較的平坦な地勢である。こうした地勢上方向に土坑の長軸を直交するように東西方向に向けている。土坑の平面形は、隅丸長方形を基本とした小判形である(第162図)。その規模は、長軸は推定92cm、短軸は不明である。深さは、11cmと浅く、その断面形は皿状を呈している。長軸の方位は、N-81°-Eである。この土坑内の堆積土は、整地土を含め未調査であるが、整地土の上には1層だけが堆積していた。SK93は、北側をSH23・SH24に切られている(先行)。

〈遺物〉 特記するような遺物の出土状態はない。

SK117 この土坑は、第1次調査区の中中部遺構群の北東部に位置する。区画では、イD77区南東隅部にあたる(第104図)。このあたりは、比較的平坦な地勢である。土坑の平面形は、歪な形をした隅丸五角形である(第163図)。その規模は、長軸は102cm、短軸は94cm、面積0.76㎡である。深さは、7cmと極浅く、その断面形は皿状を呈している。この土坑内の堆積土は、整地土を含め未調査であるが、整地土の上には1層だけが堆積していた。北西に隣接するSH23かSH24に帰属する土坑の

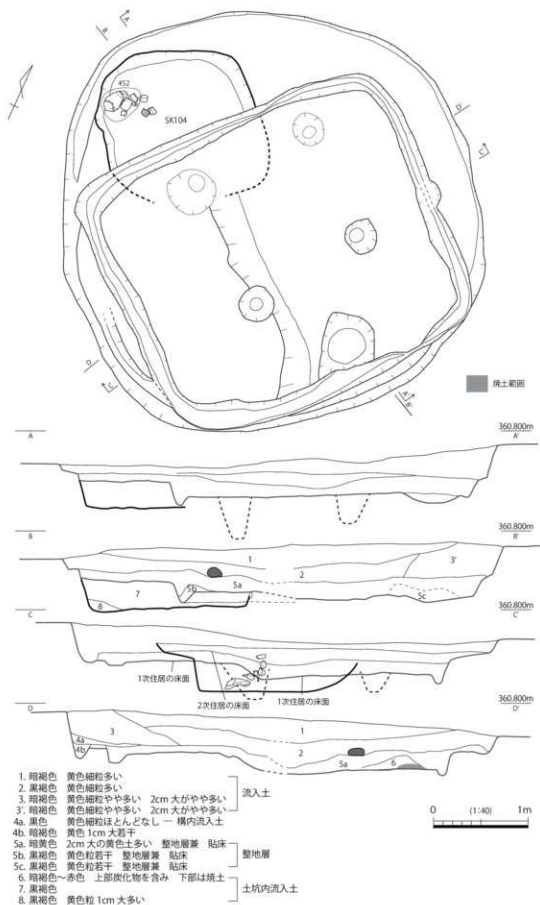
る。最初にSK104が堀削される(第164図)。このSK104の平面形は、隅部の曲率が大きい隅丸方形と推定される。その規模は推定で南北165cm、東西168cm、面積0.87㎡である。深さは、上面がSH31によって削平されているので明確ではなく、仮にSH31と同じ面を基準に考えると深さ約44cmとなる。SK104の方位は、東壁の方向性でいえばN-45°-Eである。SK104の堆積土は7層・8層で、いずれも流入土である。

〈遺物〉SK104の遺物は、SH31出土として取り上げたが、正確には遺構構築時期の異なる遺物である。その出土状況は、一個体分の小型の甕(第168図449)と壺の上半部を大きく欠く下半部の大型の破片(452)、それに若干の底部破片(未実測)が、土坑の西壁より一塊にして廃棄されており、土坑内では完全に埋設していた。こうした土器片のパーツが足りない状況は、他で破損後に片づけ、一塊にして廃棄したということになる。なお小型の甕は直立気味の胴部上半から口縁部を外方へ曲げるようにしている。

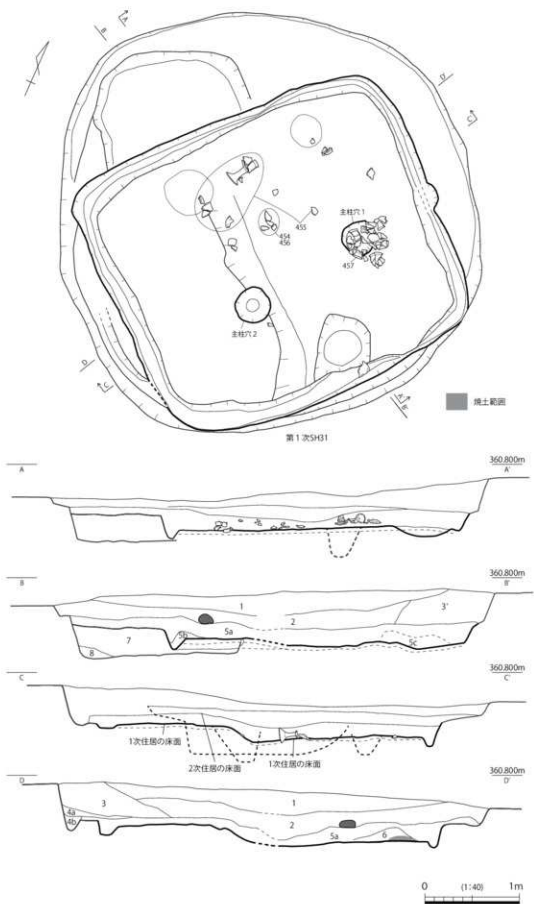
第1次SH31 SK104に流入土の堆積終了後に、その東南半分あたりを切る形で第1次のSH31が構築される(第165図)。第1次のSH31は、検出面の平面形が隅丸方形の竪穴建物跡で、その長軸方向の方位はN-43°-Eである。その規模は、長軸354cm、短軸314cm、面積約10.35㎡である。また貼床面までの深さは、約60cmである。竪穴建物跡内には、5a層・5b層・5c層が堆積しているが、これらの層は、流入土ではなく、拡張した第2次SH31構築時の整地土・埋土である。この層を除去すると、長軸線よりやや東方へシフトした部分に2基の主柱穴が見つかった。北寄りの主柱穴1は、その中心部から北壁までが約90cm、東壁までが約130cm、西壁までが約170cmで、南寄りの主柱穴2は、その中心部から南壁までが約130cm、東壁までが約123cm、西壁までが約195cmで、主柱穴間の距離が約130cmであった。主柱穴を結ぶラインの方位はN-35°-Eであり、長軸方向の方位とは8°のねじれがある。このほか、竪穴建物跡内の壁際に壁周溝、南寄りの主柱穴2から南壁までは若干高く、ベッド状になっていた。

〈遺物〉主柱穴1をふさぐような状況で一塊に廃棄した土器破片類が数個体出土している。ここから出土したのは、「く」の字に口縁部が屈折する小型甕がほぼ一個体分と(底部を欠く/第168図450)、別個体の「く」の字屈折口縁の甕がバラバラに破損した状況で出土した(451)。後者の甕は、遠賀川以東地域に多い口縁端部が鎌型を呈する跳ね上げではなく、四日市遺跡に多い上方へ山形に突出する跳ね上げであるが、須玖Ⅱ式土器に相当する例だろう。この他、小型の器台の破片が出土している(第169図457)。一方、主柱穴より西側にも1点または数点ずつ分布している。特に遺棄または廃棄された丹塗磨研で鋳形口縁の高坪を中心として、その東方向や南西方向へ1～2点ずつ同一個体のパーツが拡散していた(455)。この付近には、鋳形口縁の高坪で丹塗磨研を加えた別個体が、もう1点あり(454・456同一個体)、集中する4点の破片からなる。これらの第1次SH31の床面上にあった下層遺物は、第2次SH31構築時の整地土で埋められていた資料である。

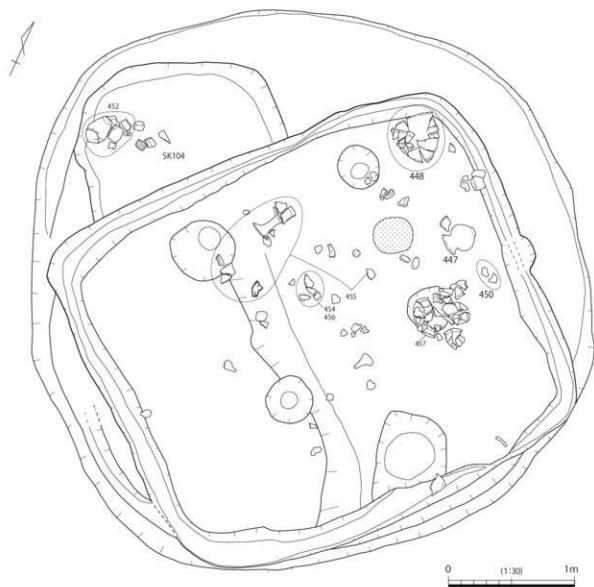
第2次SH31 第1次SH31が手狭になったのか、その北東・南・西の隅部を取り込み、北西・北東側へ大きく拡張した円形の竪穴建物跡を深さ約37cmまで掘り下げて構築している。したがって深さ37cm以上の第1次SH31の壁面は削平され、それ以下の建物内は整地の際に埋められている。整地に先立って、第1次SH31の主柱穴1・2のラインから北西方向へ90°屈折した、120cmと140cmの距離に主柱穴2基(主柱穴3・4)を掘削している。各床面下を精査した結果、第1次SH31の主柱穴と主柱穴3・4の他に柱穴は存在しなかった。この点から第2次SH31へ拡張するにあたって第1次SH31の主柱穴1・2をそのまま利用したことになる。他の竪穴建物跡の事例から、第2次SH31の場合も柱を立てた後に貼床(整地土)を充填したことが窺える。第2次SH31の直径は、歪ながら約470cmで、その面積は約17㎡である。壁周溝は、南壁の直下に僅かに残っていたが全体的には不明である。



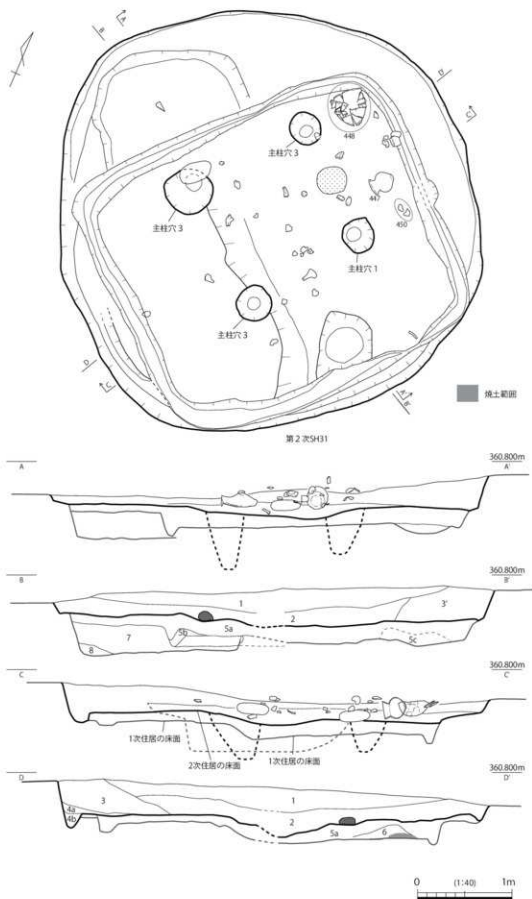
第164図 SH31内土坑 (SK104) 実測図 (1/40)



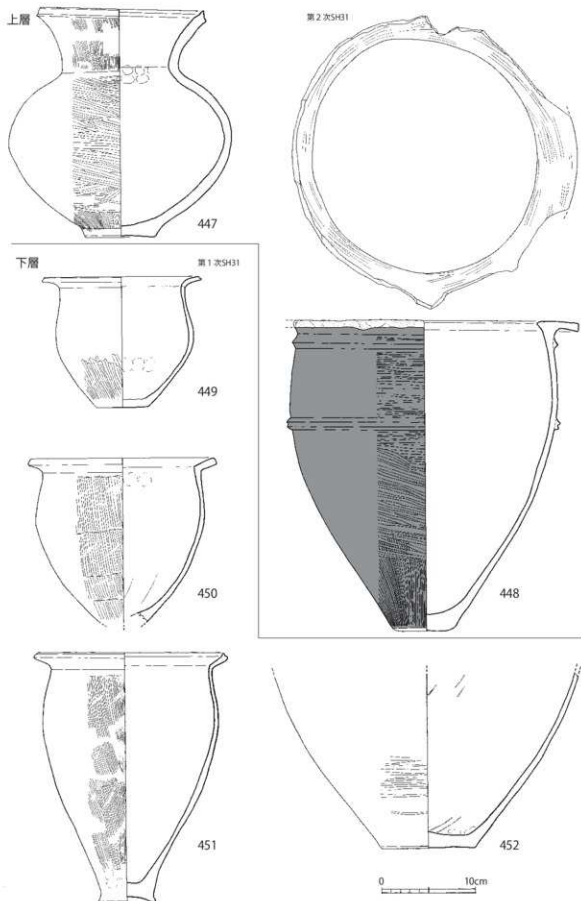
第165図 SH31 (SK104) 第1段階実測図 (1/40)



第166図 SH31 (SK104) 遺物出土状況 (1/30)

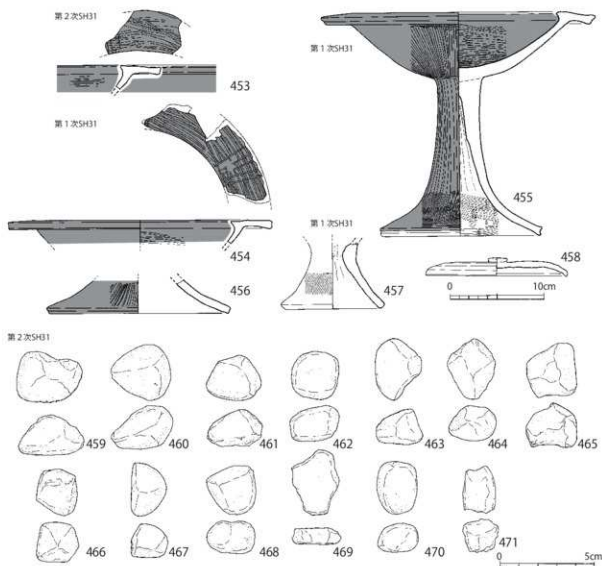


第167図 SH31 (SK104) 第2段階実測図 (1/40)

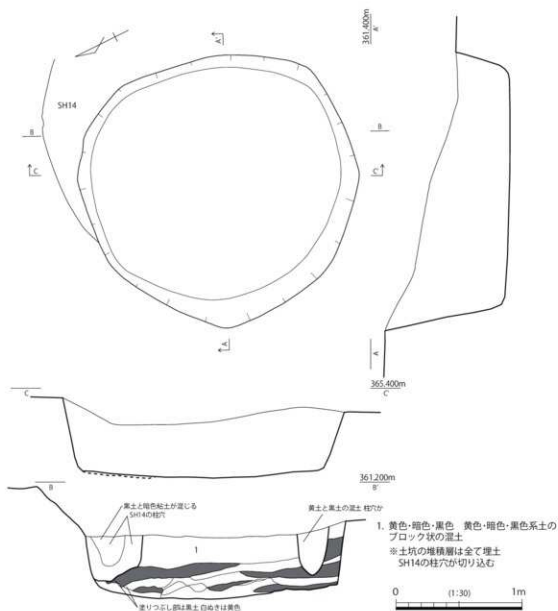


第168図 SH31出土遺物実測図①

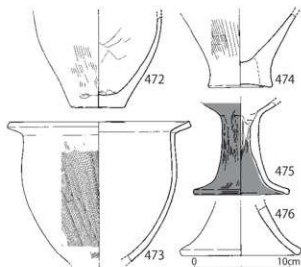
〈遺物〉 第2次SH31の遺物の出土状態で特記されるのは、支柱穴1・3の外側で横倒しになった完形の土器が遺棄されていた。一つは球形胴をした短頸壺の一種とも思われる壺で（第168図447）、口頸部が外反し、茎部と胴部のつけねに緩くカーブしながら立ち上がっている。口縁端部は跳ね上げというより、山型に尖っている。こうした壺は、以西地域・以東地域でも見られないことから、在地系（玖珠地域）の可能性はある。もう一つの土器は、丹塗磨研で鋤形口縁の甕であり（448）、口縁部直下に断面三角突帯、胴部には断面M字突帯をめぐらしていることから須玖Ⅱ式土器に相当する。この土器は、土圧によって押しつぶれた状態であったが、復元するとほぼ完形となった。しかし、鋤形口縁の縁周りから半分程度が欠けた状態で、他にパーツはなかった。著しく底面（設置面）が摩耗し、口縁鈎部の欠けた部分は、やや丸くなるなど、わざと打ち欠いたか、欠けたあとも大切に使用した痕跡と推定される。この他、第2次SH31では鋤形口縁の高杯で丹塗磨研を加えた例があり（453）、上面に縁と直交する方向に数本の沈線からなる暗文を施す。この高杯は、暗文の存在や縁の幅などから、あるいは第1次SH31に伴った高杯（454・456）と同一個体である可能性も高い。第2次SH35からは、石器として投弾が出土しており、ここでは13点を図化した（459～471）。これらの投弾は長さ2.5cm～3.5cm、幅1.7cm～2.7cm、厚さ0.7cm～2.2cmの大きさを有する角閃石安山岩などの自然礫を選択・使用している。SH36では同様の石を1箇所に集積・保存していた痕跡が認められることと大き



第169図 SH31出土遺物実測図②



第170図 SK95実測図 (1/30)



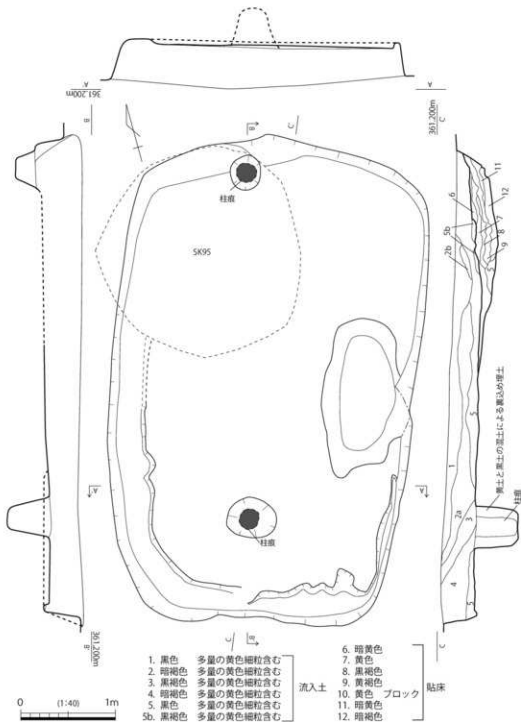
第171図 SK95出土遺物実測図

さから、これらの自然礫を投弾と考える。なお、巨大な台石が、主柱穴1・3の間、主柱穴4の上などに配置されていた。

SK95 この土坑は、中部地区遺構群の北東部にあたり、区画でいえばD78区に位置し(第104図)、SH14に切られる関係にある(先行)。このあたりは南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面である。SK95は、検出面の平面形が円形を基調とした土坑である(第170図)。SK95の規模は、南北214cm、東西207cm、面積4.25㎡である。SK95の整地土上面までの深さは、北寄りで60cm、南寄りで50cmで

ある。整地土の下は未調査。壁の立ち上がり角度は、南壁 72° ・北壁 76° 、東壁 73.5° ・ 78° と急な立ち上がりである。堆積土は、断面図では細かく分けたが、すべて1回の埋土(整地土)である。このSK95とSH14の断面図を総合すると、前者の埋土は後者の整地土・貼床に連続していた。すなわち、SK95内の堆積土はSH14の整地土として埋められた埋土である。したがってSK95は、まだ土坑として利用されていたが、SH14の掘削により急遽埋められたということになる。

(遺物) 小型で屈折する粗製の甕(第171図472・473)、中型の屈折する粗製甕の底部破片(474)、高坏は丹塗磨研と(475)、丹塗をしな例(476)がある。



第172図 SH14実測図(1/40)

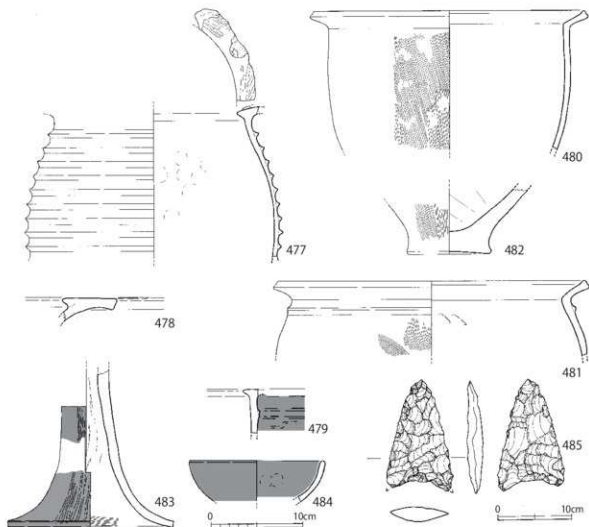
SH14 この
 竪穴建物跡
 は、中部地区
 遺構群の北東
 部にあたり、
 区画でいえば
 イD78区に位
 置し(第104
 図)、前述し
 たSK95を切
 る関係にあり
 (後行)、遺構
 群中央のS2
 を取り囲む竪
 穴建物跡・土
 坑の一つであ
 る。このあた
 りは南側の標
 高が僅かに高
 く、北側へ低
 くなる緩斜面
 である。

平面形は、
 やや細長い隅
 丸長方形を基
 本とした形で
 ある(第172
 図)。その規
 模は、長軸が
 推定508cm、
 短軸は326cm

である。深さは、32cmである。長軸の方位は、N-20°-Eである。なお、SH14の面積は、約13.6㎡である。このSH14の堆積土は、1層～12層まで確認したが、6層から12層は前述したようにSK95の埋土に連続するものである。この整地土上にSH14の支柱穴の一つが掘り込まれている。また壁沿いには、幅広い周溝が観察される。壁の立ち上がり角度は、南壁73°・北壁73°・東壁76°・西壁71°と急な立ち上がりである。柱穴は、支柱穴2基からなり、北よりの支柱穴は北壁から南へ30cm、南よりの支柱穴は南壁から北100cmにあり、その支柱穴間は370cmである。この支柱穴軸のラインは、N-15°-Eであり、竪穴建物跡とのねじれは、5°である。

〈遺物〉 出土状態等の記録はとっていない。壺には、鉢形口縁の無頸壺がある（第173図477）。無頸壺は、口縁の上部平面に浮文が付くほか、頸部直下から下方まで微隆起線状の断面三角突帯を多条の貼り付けをしている。別地点のSK86からも多条突帯の壺が出土しているが、同一個体の可能性がある。その他、丹塗磨研では、鉢形口縁の甕破片（479）、高坏の脚部破片（483）、高坏の坏部破片（484）、「く」の字屈折口縁の粗製甕破片（480～482）がある。鉢形口縁の甕破片は、突帯が断面M字突帯であり、須玖Ⅱ式土器に含まれる。他に石鏃が出土しているが（485）、縄文時代資料の混在であろう。

SH23 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の北東部にあたり、区画でいえばD77区に位置し（第104図）、後述するSH24を切る関係にある（後行）。遺構群中央のS2を取り囲む竪穴建物・土坑の一つである。

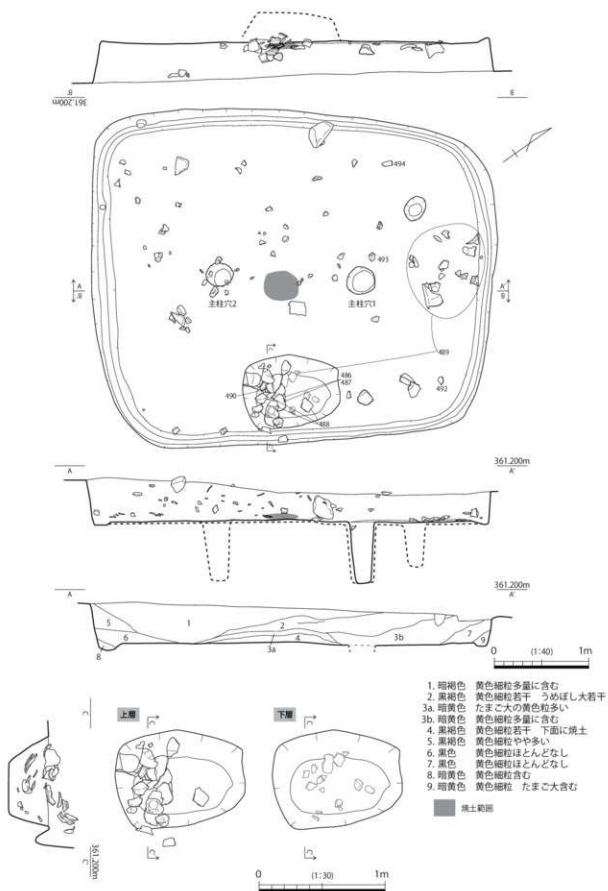


第173図 SH14出土遺物実測図

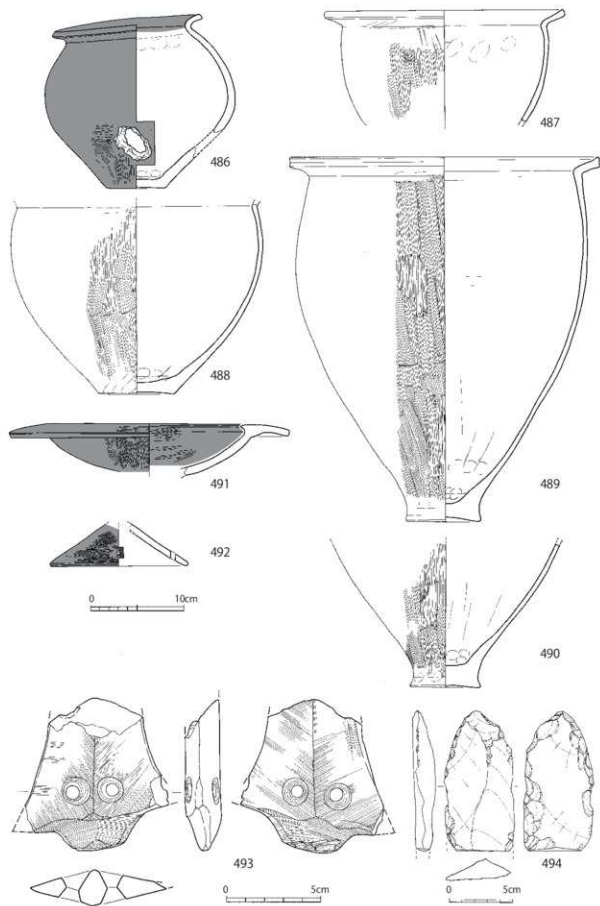
このあたりは比較的に平坦な地勢である。平面形は、隅丸長方形を基本とした形である（第174図）。その規模は、長軸が推定430cm、短軸は367cmで、その面積は約13.2㎡である。貼床面までの深さは、48cmである。長軸の方位は、N-37°-Eである。このSH23の堆積土は、1層～9層を確認したが、流入土であった。最下面は、貼床面（整地土）であるが、除去はしていない。貼床面の周囲には幅広い周溝が観察される。壁の立ち上がり角度は、南壁80°・北壁87°と急な立ち上がりである。柱穴は、主柱穴2基からなり、北寄りの主柱穴は北壁から南へ137cm（主柱穴1）、南寄りの主柱穴は南壁から北へ139cmの場所にあり（主柱穴2）、その主柱穴間は149cmである。主柱穴1は、直交する方向の東壁から172cm、西壁から166cm、主柱穴2は、直交する方向の東壁から179cm、西壁から179cmであり、ほぼ中心軸に沿った柱穴である。この主柱穴軸のラインは、N-37°-Eであり、竪穴建物跡の主軸方位と同じである。主柱穴間で床面のほぼ中央域で長軸36cm、短軸31cmの範囲が被熱している。また、二つの主柱穴からみて東側の東壁沿いの中央に長軸104cm、短軸75cm、深さ42cmの土坑がある。この壁沿いの土坑は、建物の入り口にあつて胎盤収納を行った土坑ではないかといわれたことのある遺構である。

〈遺物〉 東壁沿いの土坑内において、その当初の機能との関係は不明であるが、大型の土器破片類が夥しく出土した。その出土状況からすると一塊にして廃棄した状況とみなせる。しかし、この土坑での遺物の垂直分布をみると、上層と下層に分けられる。土坑の上層から出土したのは、屈折口頸部を欠く粗製の甕の破片（第175図488・490）、屈折口頸部のある大破片（487）、丹塗磨研で口縁を曲げるように屈折させた無頸壺（486）、などがあり、パーツが足りないながらも一塊に廃棄していた。この中にある丹塗磨研で球形の胴部を有する無頸壺は、胴部下半に内面側から孔を大きく穿って機能を停止させようとして廃棄している。下層の土器は、「く」の字屈折の粗製の甕であるが、少量しかなく、大半は北壁近くにばら撒いたかのように分布しており、両者の土器片が接合している。なおこの土器は、底部が薄く胴部上半が張る特徴から須玖Ⅱ式土器といえる。こうした土器に孔を開けて廃棄したり、一部を土坑に廃棄し、他はばら撒いたりしたかのような出土状況は多分に呪いの様相が窺える。この他、丹塗磨研で穿孔のある無頸壺の蓋（492）が東北の隅部に位置し、尖端側が破損した石戈（493）は、主柱穴1の西側で出土し、石銚（扁平打製石斧：494）は北西隅部に近い部分で出土している。このうち石戈の石材は、青みがかつた斑点のある岩石で、大分県内にはない石材である。高坪については、出土状況は明確ではないが、丹塗磨研で鋤形口縁の端部が垂れるので、これも須玖Ⅱ式土器といえる。台石は、竪穴建物跡中央で被熱痕のある場所の東に1基と、西壁に近い部分に2基が分布していた。この他、主柱穴の南東に礫が集積されている部分があった。

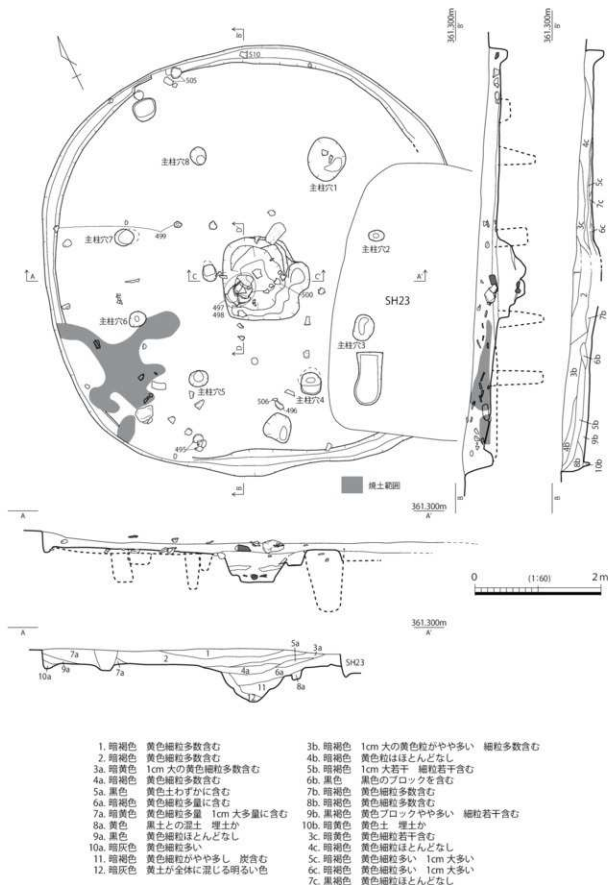
SH24 この土坑は、中部地区遺構群の北東部にあたり、区画でいえばD67区・D77区・D78区に位置し（第104図）、前述したSH23から切られる関係にある（先行）。中部地区遺構群中央のS2を取り囲む竪穴建物跡・土坑の一つで、あたりは比較的に平坦な地勢である。SH24の平面形は、円形を基本とした形である（第176図）。その規模は、直径が700cmで、その面積は約38.5㎡である。貼床面までの深さは、約40cmであるが、貼床・整地土の除去は行っていない。このSH24の堆積土は、1層～12層まで確認したが、流入土である。流入土の流入方向は、南東から北方区へ流入している。なお、西側の壁と柱穴との間の堆積土に多量の焼土が広がっていた。最下面は、貼床面（整地土）であるが、未調査である。床面の周囲には、幅広い壁周溝が観察される。壁の立ち上がり角度は、南壁74°・北壁85°・西壁85°である。柱穴は、主柱穴8基が壁からなり、壁から内側へ130cm～150cmの場所に位置する。円形に配置された主柱穴間の距離は、120cm～200cmである。この主柱穴間で最も間隔が広いのは、北東部の柱穴間と南西部の柱穴間で、約200cmであり、いずれかが入口部分との関係が想定される。竪穴建物跡のほぼ中央に、長軸130cm、短軸117cm、深さ47cmの土



第174図 SH23実測図 (1/40・1/30)



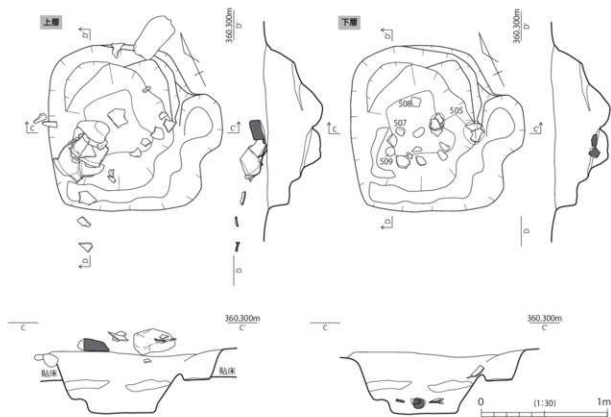
第175図 SH23出土遺物実測図



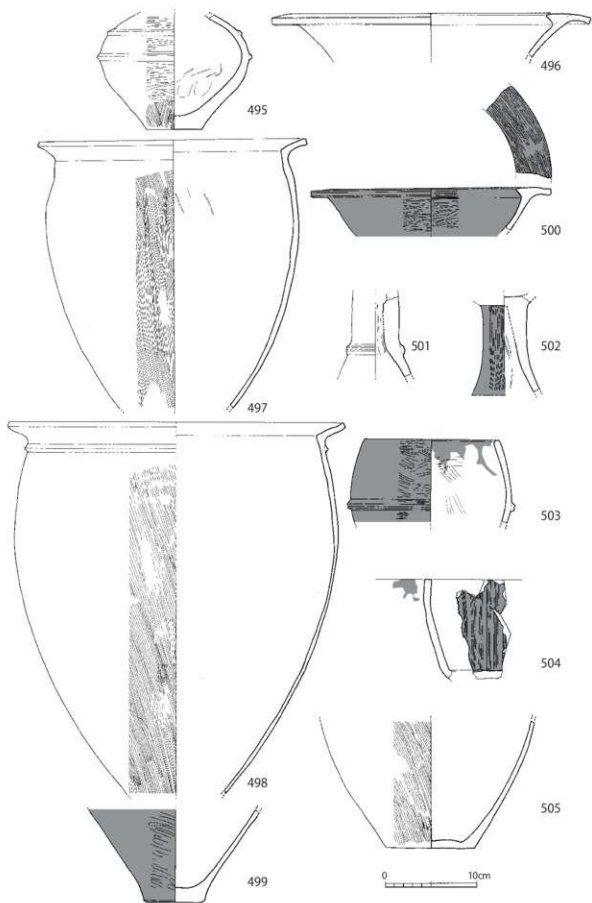
第176図 SH24実測図 (1/60)

坑があり、炉跡と推定され、その長軸方位は、N-22°-Eである。炉跡の内部は主に北側と南側に階段状の平坦な段がある。平面図をみると、この炉跡の短軸側の至近距離に柱穴状のピットがあるが、建物の上部構造か炉跡構造上の柱穴と推定される。

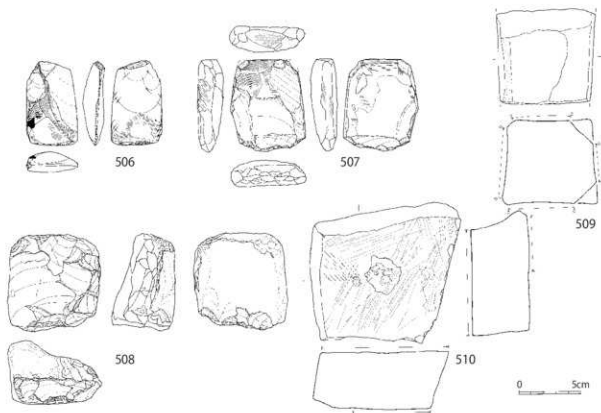
〈遺物〉出土遺物の大半は、上位の流入土層中に存在していた。それらは、流入しつつある土とともに流れ込んだものもあろうが、一部は意図的に廃棄したと考えられる例がある。主柱穴5の南東の壁際に別個体の破片と黒色磨研壺の胴部破片がやや集中しており、一塊に廃棄されたのだろう（第176図495）。この他、炉跡の西より部分で、4a層の直上域に、「く」の字屈折する甕の2、3個体分の大きな破片を積み重ねて廃棄していた（第177図、炉跡上層：497・498）。壁内周溝の上位で砥石も出土している（第179図510）。これらの甕は、胴張であり、須玖Ⅱ式土器に相当する。この炉跡は、最下底部域で火打石状の石もしくは石核（508）、リダクションの進行した磨製石斧（507）、半裁された砥石（509）、他に鎌など同程度の大きさのものを配置している（第177図）。また炉跡内の中央部分から炉跡の東斜面部に屈折口縁の粗製甕の底部破片を2、3片ずつ約20cmの幅とレベル差を空けて配置していた（第178図505）。この出土状態は、炉跡において火持ちをよくするためのなどの実際的な行為なのか、呪いなのかかわからないが、意味があるのであろう。この他、鋤形口縁の広口壺（496）、丹塗磨研で鋤形口縁の高坏（500）、丹塗磨研高坏の脚部破片（502）、裾部との境界に断面M字突帯をめぐらす高坏の脚部破片（501）、丹塗磨研で胴部に断面M字突帯をめぐらす素口縁の脚付無頸壺（503）、丹塗磨研で鈎状部が長く伸びた部分の表面に縦暗文のある複合口縁筒形器台（祭祀土器）の破片（504）が出土している。このほか丹塗磨研で鋤形口縁の甕と思われる底部破片が炉跡の北西で、床面から約15cm程度浮いた状態で出土した。石器については、長さ6.8cm・幅4.2cm小型の磨製石斧が柱穴4の西南で床面から約10cm上位で出土した（第179図506）。この磨製石斧は素材剥離時のボジ面や、それ以前のネガ面が残っており、剥片の端部両面を簡単に磨いただけの小型磨製石斧である。台石も数点出土し



第177図 SH24内土坑実測図（1/30）



第178図 SH24出土遺物実測図①

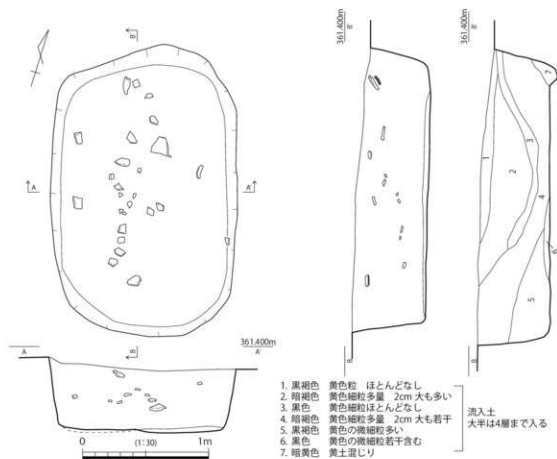


第179図 SH24出土遺物実測図②

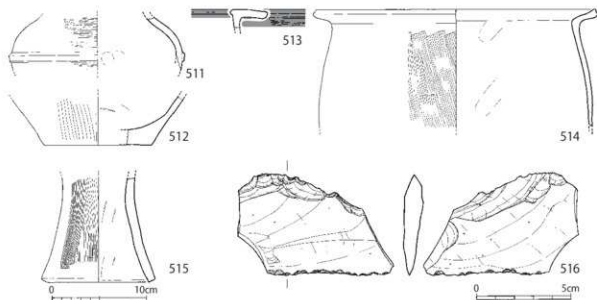
しており、図化はしていないが、伊跡の北側の落ち際付近の床面や、柱穴5の南西の壁際の床面上に設置されていた。この他、図化はしていないが、敲石も各所で出土している。

SK67 この土坑は、中部地区遺構群の中心であるS2から最も距離の離れた東部にあたり、区画でいえばイD76区南部に位置する（第104図）。このあたりは南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面である。SK67は、平面形が隅丸長方形を基調とした土坑で（第180図）、その規模は、長軸231cm、短軸149cmで、面積は約3.36㎡である。整地土上面までの深さは、58cmである。整地土の下は未調査である。壁の立ち上がり角度は、南壁82°・北壁76°・東壁80°・西壁83°とやや急である。このSH67の堆積土は、1層～7層まで確認したが、流入土である。

〈遺物〉 大半の遺物は1層から4層にかけて出土している。最下部の整地土上面に遺物はなかった。流入土中の遺物にまとまりはなく、ばらばらと分布している。仮にこれらの遺物が廃棄されたものであっても、それらを一塊にして廃棄したような状況は窺えない。全体的な遺物の平面的分布をみると、土坑の長軸方向に沿っているように見える。これは流入土の堆積が東壁・西壁方向から進んだために、長軸方向に沿う中軸付近が深く、そこに遺物が流れ込んだ際に寄せたということである。こうした経緯もあって、出土した土器に完形に近いような大型品はない。出土遺物には、磨研を加えた脚付直口壺の胴部破片（第181図511）、縦方向の磨研を加えた壺の底部破片（512）、丹塗磨研で鋤形口縁の甕の破片（513）、「く」の字屈折口縁の粗製の甕（514）、筒形器台の下半部破片（515）、石器ではスクレイパーがある（516）。このうち脚付直口壺の胴部は球形をしており、横方向に丁寧な磨きが観察され、最大径の部分にM字突帯がめぐっていることから、須玖Ⅱ式土器ということになる。丹塗磨研で鋤形口縁の甕も須玖Ⅱ式土器の範疇でおさえられる例である。スクレイパーは、在地系で質の悪い安山岩を用いており、別地点でローム層の最上位に含ま



第180図 SK67実測図 (1/30)



第181図 SK67出土遺物実測図

れていることから旧石器時代に使われた石器が混在したのだろう。いずれにしても、SK67から出土した遺物は、その土坑の掘削理由に由来するものではない。

SK69 この土坑は、中部地区遺構群の中心であるS2から最も距離の離れた東部にあたり、区画でいえばイD75区とイD76区に位置する(第104図)。このあたりは南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面で

ある。SK69は、平面形が僅かに南北方向に長いもの円形を基調とした土坑で（第182図）、その規模は、南北132cm・東西120cmで、面積は約1.24㎡である。整地土上面までの深さは、15cmと極めて浅い。整地土の下は未調査。壁の立ち上がり角度は、西壁65°・東壁62°・北壁90°で、南壁はオーバーハングするように抉れるという逆S字状の立ち上がりである。このSH69の堆積土は、2層まで確認したが、流入土である。最下層は、整地土であるが、未調査である。

〈遺物〉 遺物は出土しなかったが、土色と土の締りから弥生時代の遺構である。

SK70 この土坑は、中部地区遺構群の中心であるS2から最も距離の離れた東部にあたり、区画でいえばID85区に位置する（第104図）。このあたりは南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面である。

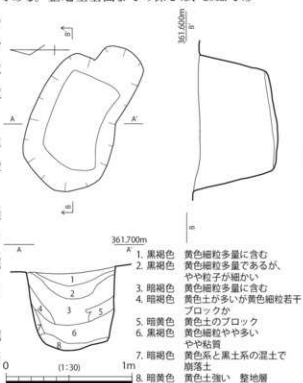
SK70は、平面形が僅かに東西方向に長い長方形を基調とした土坑で（第183図）、その規模は、長軸125cm、短軸70cm、面積0.7㎡である。整地土上面までの深さは、61cmである。整地土の下は未調査。壁の立ち上がり角度は、西壁77°・東壁71°・北壁81°・南壁84°である。このSH69の堆積土は、1層～8層まで確認したが、凹レンズ状に堆積する流入土である。

〈遺物〉 遺物について特記する事項はない。

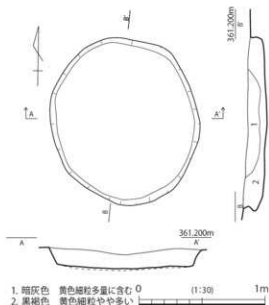
SK71 この土坑も、中部地区遺構群の中心であるS2から最も距離の離れた東部にあたり、区画でいえばID85区に位置し（第104図）、SK70の南に隣接する。このあたりは南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面である。SK71は、平面形が円形の土坑で（第184図）、その規模は、直径82cmで、面積は0.53㎡である。整地土上面までの深さは、25cmである。

整地土の下は未調査である。壁の立ち上がり角度は、西壁79°・東壁82°・北壁77°・南壁89°である。このSH71の堆積土は、1層～3層まで確認したが、全て埋土である。

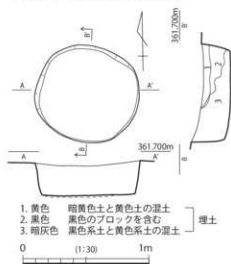
〈遺物〉 特記する事項はない。



第183図 SK70実測図 (1/30)



第182図 SK69実測図 (1/30)

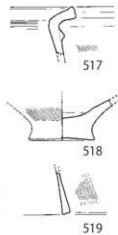


第184図 SK71実測図 (1/30)

SK1 この円形周溝は、中部地区遺構群の中心であるS2から最も距離の離れた東部にあたり、区画でいえばD86区に位置する（第104図）。このあたりは南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面である。SK1は、平面形が隅丸長方形を基調とした土坑で（第185図）、その規模は、長軸312cm、短軸129cmで、面積は約3.3㎡であるが、南西端部方向の幅が広い。長軸の方位は、N-60°-Eである。整地土上面までの深さは、55cmである。整地土の下は未調査。壁の立ち上がり角度は、西壁83.5°・東壁84.5°である。このSK1については、堆積土の観察を行っていない。

〈遺物〉屈折口縁の甕の小破片とその底部破片（第186図517・518）、筒形器台の破片（519）が出土しているが、いずれも混在である。

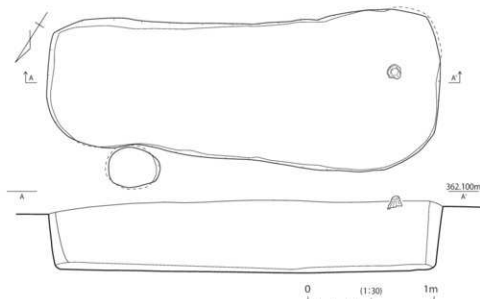
SK2 この遺構は、中部地区遺構群の中心であるS2から最も距離の離れた東南部にあたり、区画でいえばD96区に位置する（第104図）。このあたりは南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面である。SK2は、平面形が円形に近い楕円形の土



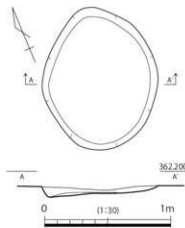
第186図 SK1
出土遺物実測図

坑で（第187図）、その規模は、長軸112cm、短軸90cm、面積0.8㎡である。深さは、最大で9cmと浅い。堆積土は記録していないが、1層だけである。

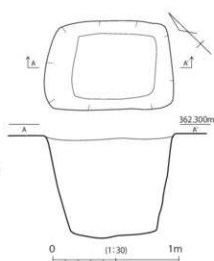
〈遺物〉特記する遺物はない。



第185図 SK1実測図（1/30）



第187図 SK2実測図（1/30）



第188図 SK3実測図（1/30）

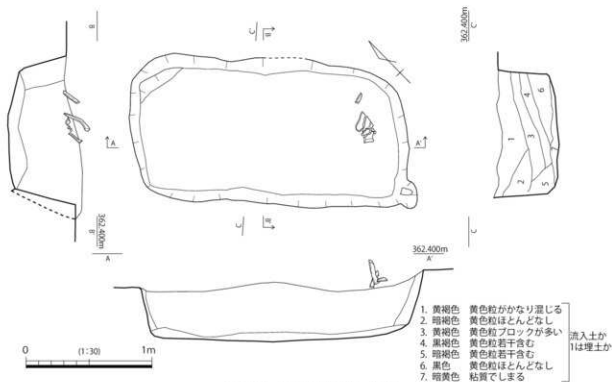
SK3 この土坑は、中部地区遺構群の中心であるS2から最も距離の離れた東南部にあたり、区画でいえばD96区に位置する（第104図）。このあたりは南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面である。既述したSK2の東方に隣接する。SK3は、平面形が比較的にかっちりした長方形の土坑で（第188図）、その規模は、長軸104cm、短軸70cm、面積0.73㎡であ

る。深さは、最大で80cmと平面規模に比べ深い。立ち上がりの角度は92°と75°である。長軸の方位は、W-35°-Nである。堆積土は記録していない。

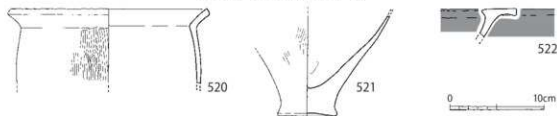
〈遺物〉 特記する遺物はない。

SK13 この土坑は、中部地区遺構群の中心であるS2から最も距離の離れた東南部にあたり、区画でいえばイD97区に位置する（第104図）。このあたりは南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面である。SK13は、平面形が隅丸長方形を基調としているが、やや平行四辺形気味の土坑で（第189図）、その規模は、長軸222cm・短軸115cmで、面積は約2.1㎡である。整地土上面までの深さは、43cmである。整地土の壁の立ち上がり角度は、北西壁78°・南東（小口）壁74.5°・南西壁77°・北東壁73°である。このSH67の堆積土は、1層～7層まで確認したが、1層が埋土、2層～6層は流入土で、7層は整地土で厚さ7cmである。流入土は短軸の外側方向から相互に流入している。

〈遺物〉 土坑の最上部域にあたる1層（埋土）中より屈折口縁の粗製の甕の破片と（第190図520）、おそらく同一個体と思われる底部破片（521）を一塊にして廃棄していた。SK13に堆積した2層・3層の上に埋め土作業を行う途中に廃棄したのであろうが、当初における土坑掘削の目的とは異なる由来をもっている。1層の埋土中から出土したこの甕は胴部の張りがないことと、底部が厚いことから須玖I式土器の可能性がある。他に混在していた土器片に、丹塗磨研で鋤形口縁の高杯がある（522）。



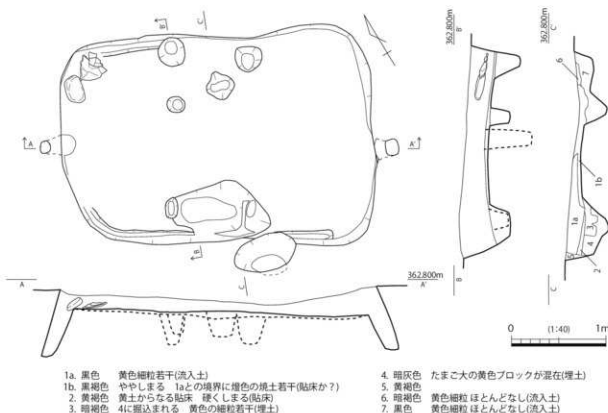
第189図 SK13実測図（1/30）



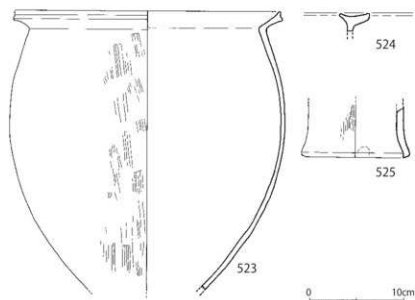
第190図 SK13出土遺物実測図

SH1 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の中心であるS2から最も距離の離れた東南部にあたり、区画でいえばイD95に位置する（第104図）。この辺りは、南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面である。後述するが、このSH1の西方へSH2・SK9・SH4Iが並んでおり、何らかの関連があるのかもしれない。SH1は、検出面の平面形が隅丸長方形で（第191図）、長軸の方位はW-60°-Nである。その規模は、長軸が330cm、東西が234cm、面積は約6.6㎡と小型の竪穴建物跡である。貼床面（整地土上面）までの深さは6cm～13cmと残りはよくない。貼床（整地土）の除去は行っていない。北壁や・南壁における一部の壁際には壁周溝がめぐっている。竪穴建物跡内の土坑は、南側壁前に1基ある。堆積土は、1a層・1b層・7層が床面上に堆積した基本的な流入土である。

（柱穴・土坑）主柱穴は、2基からなる。この主柱穴は、竪穴建物の下部構造である長軸方向の端部（小口）である東壁と西壁の壁面を掘削面として外側斜め下方へ掘り込んでいる（西壁は一部床面にかかる）。その傾斜角（立ち上がり角度）は、東壁69°・西壁75°である。柱穴の床面からの深さとその直径は、東壁側の柱穴で40cmと20cm、西壁側の柱穴では55cmと20cmである。したがって柱穴底部の平面的位置は、竪穴建物跡の外側になる。こうした柱穴の様子から、柱が斜めに立てられていたことを物語る。この相対する主柱穴間のラインの方位は、W-59°-Nであり、竪穴建物跡の長軸とは1°異なる。その他、主柱穴と直交する方向にも柱穴がある。北壁の壁沿いに掘られており、西壁から120cmの場と東壁から130cmの場に直径30cm前後の2基ある。二つの柱穴間は、80cmであり、その深さは30cm前後である。北壁にある二つの柱穴に対応する柱穴と思われるピットが実は南壁際の土坑部分にも2基ある。土坑は南壁に接合するように長軸を同じ方向に向けている。土坑の平面形は、隅丸変型であり、その規模は、長軸113cm、短軸65cmである。土坑の最深部の深さは、床面のレベルから23cm下にある。この土坑内の東端部にあるのが柱穴で、土坑本体との間



第191図 SH1実測図 (1/40)



第192図 SH1出土遺物実測図

は後のようにになっている。西側の柱穴は小型(長さ22cm、幅13cm、深さ30cm前後)で、東側の柱穴は臼鉢状に幅広く底部が狭い特徴(長さ35cm、幅27cm、深さ40cm前後)である。両柱穴間は、85cmであり、北壁沿いの柱穴間とほぼ同じである。特に西側の柱穴は小型であることから、柱も細いものであったことが窺え、北壁沿いの柱(柱穴)に対する補助的な柱が立っていたのだろう。なお、柱穴間にある土坑の堆積物は、2層～4層

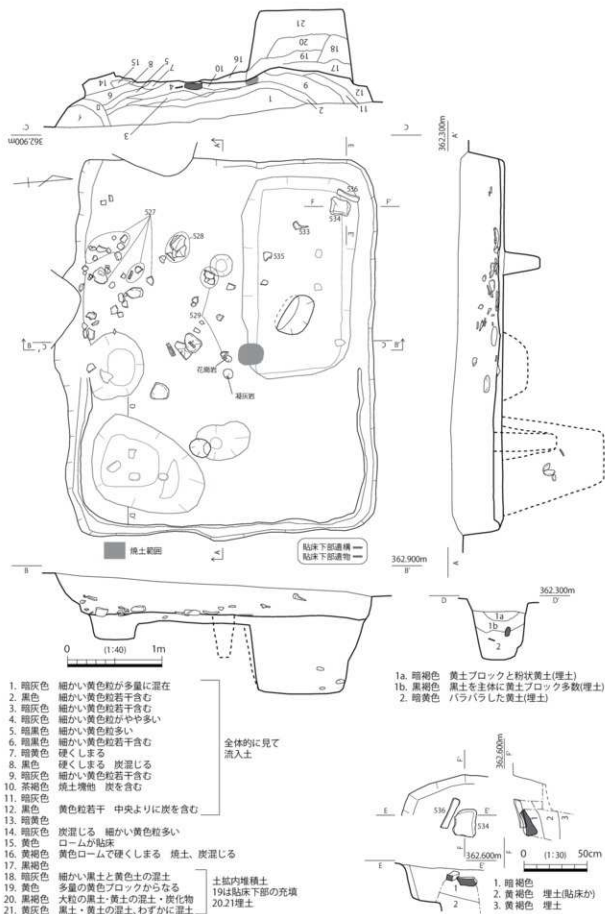
である。いずれも埋土であるが、4層の土を埋めたのち、掘り返して埋めた土が3層である。この上には黄色の粘土を薄く貼った2層で、固くしまっている。このことから、土坑が日常的な跡ではないことがわかる。なおこの土坑は、かつて民俗事例等から入口付近に設置した「胎盤収納」の土坑といわれたものに相当する。北壁と南壁際にある柱穴を結ぶとSH1は平面的に三分割でき、中央の細い部分は回廊状となり、入口部分と関連があるかもしれない。

〈遺物〉遺物は、台石と「く」の字屈折で粗製甕の破片が片づけ置かれるように西北隅部に廃棄されていた。「く」の字屈折で粗製の甕は、口縁端部上部が突出する跳ね上げ口縁であることと、胴張であることから須玖Ⅱ式土器に相当すると考えられる(第192図523)。その他、流れ込みの遺物として口縁が外側へ鈎状に突出する一方、上面が内湾しながら内側に鋭い稜のある肥後系甕の破片(524)、筒形器台の破片(525)がある。

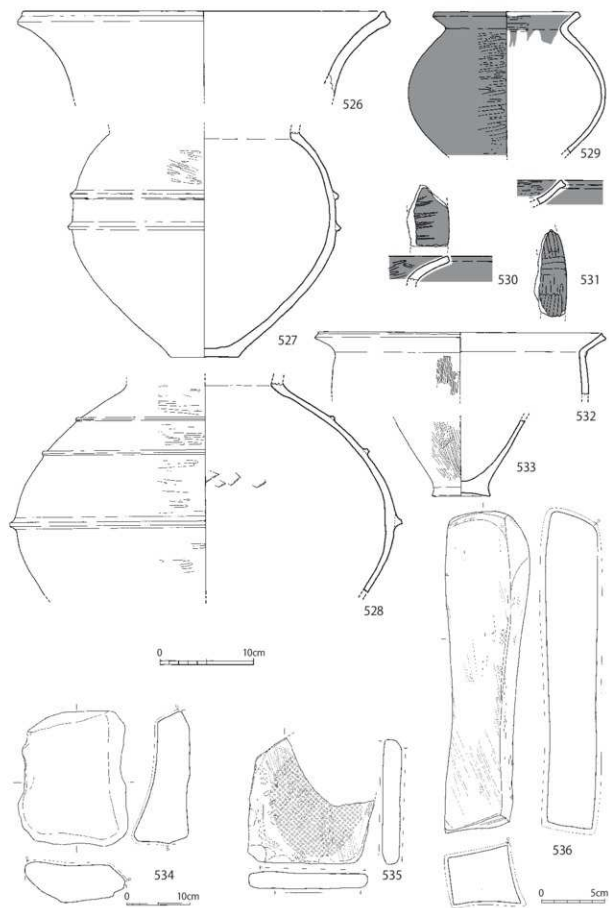
SH2 この竪穴建物は、中部地区遺構群の中心であるS2から最も距離の離れた東南部にあたり、区画でいえばD96に位置する(第104図)。この辺りは、南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面である。このSH2は、東方に既述したSH1が位置し、西方には後述するSK9・SH41が並んでおり、建物の方向性もほぼ共通することから何らかの関連があるのかもしれない。SH2は、検出面の平面形が隅丸長方形で(第193図)、長軸の方位はW-84°-Nである。その規模は、長軸が393cm、短軸が234cm、面積は約12.6㎡の竪穴建物跡である。貼床面(整地土上面)までの深さは45cmである。すべての貼床(整地土)の除去は行っていないが、10cm～13cmまでの厚さがある。西半部の壁際には壁周溝がめぐっている。竪穴建物跡内の土坑は、全て貼床(整地土)の下層から検出した。堆積土は、1層～15層が床面上に堆積した流入土である。なお後述する主柱穴間のやや北よりの床面が直径25cmの規模で被熱した痕跡(赤化)があった。

〈柱穴〉主柱穴は、2基からなる。東側の主柱穴は、北壁から170cm、東壁から103cm、南から153cmの距離に位置する。一方、西側の主柱穴は、北壁から163cm、西壁から113cm、南から144cmの距離に位置する。主柱穴間の距離は187cmで、その方位はW-84°-Nと建物の長軸方位と同じである。柱穴の床面からの深さとその直径は、東壁側の柱穴で65cm・35cm、西壁側の柱穴は44cm・23cmである。

〈遺物〉貼床面上の遺物は北西隅部に砂岩製の大型砥石(第194図534)と天草石製の角柱状砥石(536)を

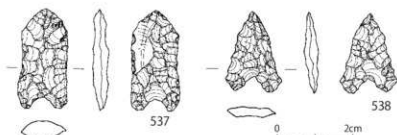


第193図 SH2実測図 (1/40・1/30)



第194図 SH2出土遺物実測図①

並べ置くように遺棄されていた。主柱穴間に敲石・磨石2点が廃棄されていた。この他、主柱穴の南側に3点の台石と1点の敲石が出土した。特に、台石は床面直上域にあり、あるいは使っていたものをそのまま遺棄した可能性もある。このあたり



第195図 SH2出土物実測図②

は、まともではないものの小破片が散在しており、その中に底部を欠く丹塗磨研の無頸壺の大破片がある(529)。この無頸壺は、球形の胴部に屈折する口縁がつく。主柱穴の南側で、西寄りの部分に破片多数が散布しており、集中性に欠けるが同一個体として接合できるものがある。ここから出土した土器に広口壺と思われる球形の胴部破片が2個体分あり、胴部に二条と三条の突帯がめぐっている(527・528)。この他、丹塗磨研の小破片(530・531)と屈折口縁の粗製甕の破片があるが(532・533)混入品か、廃棄物かと推定される。また、縄文時代後期頃の所産と推定される石鏃が2点ある(第195図537・538)。

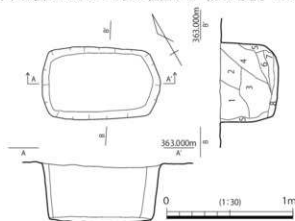
〈土坑〉 竪穴建物跡内の施設としての土坑は、全て貼床面下で検出した。北西部の土坑は、竪穴建物跡内の北西側隅部から北壁の中央部分まで、長軸213cm・短軸115cm・面積2.2㎡の土坑が平行するように掘削されている。本来の深さは75cm程度であったようであるが、埋めた(19層～21層)のち貼床を行ったものの(18層)、地盤が弱いせいもあって貼床面のレベルが下がっている。南西隅部には長軸138cm、短軸90cm、面積0.9㎡の規模を有する楕円形の土坑があり、深さは約93cmである。南壁沿いの中央部分にあるのが、「胎盤埋納の土坑」といわれていた土坑で、規模が長軸72cm、短軸60cmで深さが25cmであった。これらの土坑の内部は埋められ、最上部には黄色系粘土を混入させた貼床があった。

〈遺物〉 土坑内からは、敲石の可能性ある礫や、土器片が出土したが、特記するものはなかった。

SK39 この土坑は、中部地区遺構群の東南部にあたり、区画でいえばイE7区に位置する(第104図)。このあたりは、北側へ向け低くなる緩斜面である。SK39の平面形は、隅丸長方形である(第196図)。土坑の長軸方向の方位は、W-60°-E、である。土坑の規模は、長軸94cm、短軸58cm、面積0.52㎡である。深さは、整地土上面までが42cm、整地土の厚さは3cmである。壁の立ち上がり角度は、北壁86°・南壁89°・西壁84°・東壁83°と90°近い急角度である。しかも、整地土上面と壁との境界部分も直角近い角度で丁寧に掘削している。土坑内堆積土は未調査であるが、全体的に流入土で、概ね北側から流入している。

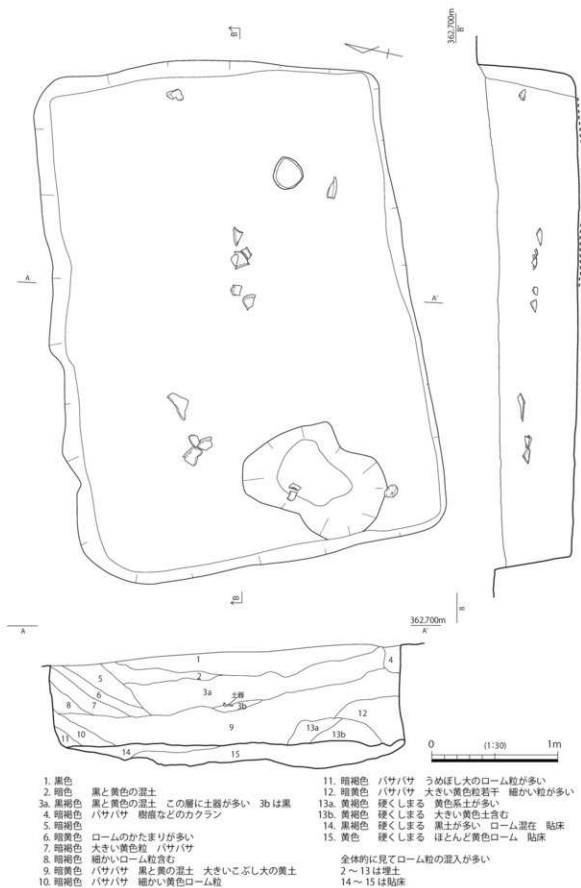
〈遺物〉 特記する資料は出土していない。

SK9 この土坑は、中部地区遺構群の東南部にあたり、区画でいえばイD96区とイD97区にまたがる位置である(第104図)。このあたりは、北側へ向け低

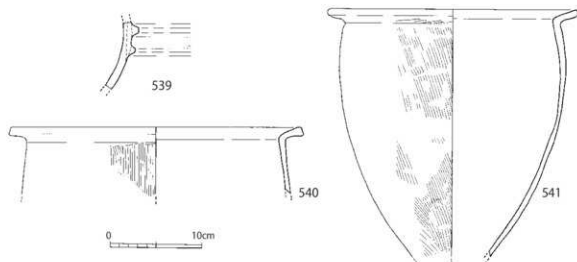


- | | | |
|--------|----------------------|-------|
| 1. 暗褐色 | 黄色粒ほとんどなし | } 流入土 |
| 2. 黒色 | 黄色粒ほとんどなし | |
| 3. 暗褐色 | 微細な黄色粒が多い | |
| 4. 暗褐色 | 黄色細粒ほとんどなし | |
| 5. 黄褐色 | 黒と黄色土の混土 | |
| 6. 黒褐色 | 微細な黄色粒多数含む | |
| 7. 暗褐色 | 微細な黄色粒ほとんどなし | |
| 8. 黄褐色 | 黄色土と黒土が混じり、粘質
整地層 | |

第196図 SK39実測図(1/30)



第197図 SK9実測図 (1/30)

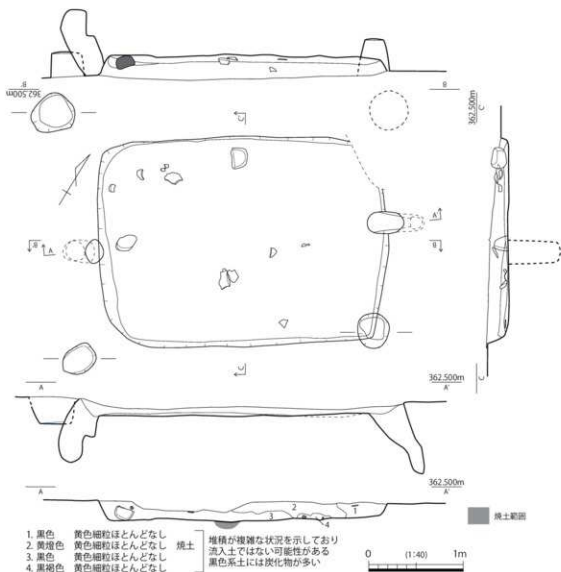


第198図 SK9出土遺物実測図

くなる緩斜面である。SK9の平面形は、隅丸長方形である(第197図)。土坑の長軸方向の方位は、N-72°-E、である。土坑の規模は、長軸406cm、短軸295cm、面積は10.2㎡である。深さは、整地土上面までが76cm、整地土の厚さは21cmである。内部には土坑があるが、他に柱穴・壁周溝等の遺構はない。堆積土は、1層から15層まであり、1層が流入土、2層～13層までは埋土、14・15層が整地土である。1層が流入土なのは、全て埋めた後、日が経ち埋土が沈み込んだ部分に流入したのだろう。

〈遺物〉 3a層・3b層付近の埋土中に土器片がやや集中する部分が2箇所あり、そのほとんどが屈折口縁で粗製の甕一個体の破片であった(第198図541)。これとは別に、屈折口縁で粗製甕の別個体が土坑内の南東部分のほぼ同じレベルから出土している(540)。これらには、同一個体である底部などの破片が足りず、他から運搬して廃棄したのであろう。他に、混入品として広口壺の胴部破片がある(539)。

SH41 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の中心であるS2から距離の離れた東南部にあたり、区画でいえばD97区に位置する(第104図)。この辺りは、南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面である。このSH41は、東方に既述したSH1・SH2・SK9から続く西端の竪穴建物跡である。SH41は、検出面の平面形が隅丸長方形で(第199図)、長軸の方位はN-57°-Eである。その規模は、長軸が307cm、短軸が222cm、面積は約6.4㎡の竪穴建物跡である。貼床面(整地土上面)までの深さは約20cmである。すべての貼床(整地土)の調査は行っていない。竪穴建物跡内には柱穴を含め、土坑もない。堆積土は、1層～4層が床面上に堆積した焼土であり、レンズ状堆積をしておらず、他所から焼土を廃棄したと考えられる。なお後述する主柱穴間のやや北よりの床面が直径25cmの規模で被熱した痕跡(赤化)があった。壁の立ち上がりは、北壁63°・南壁65°・東壁55°・西壁65°である。床面上の施設としては、北壁と西壁の近くに台石が配置されていた。柱穴は二本主柱穴であるものの、さらに竪穴建物の対角線上の屋外に柱穴があるなど、特殊な構造を示している。まず主柱穴の規模であるが、東側の柱穴は床面東端からやや内よりの部分から竪穴建物跡外の18cm部分までの長軸が35cmで幅は22cm、西側の柱穴も床面東端からやや内よりの部分から竪穴建物跡外へ15cm部分までの19cmで、これに直交する25cm幅であり、開口部から斜め外方下へ掘り進められている。そのため、柱穴は斜行し、柱穴底は地中ながら土坑外の地下に延びる。この斜めに掘られた柱穴の傾斜角度は、東側58°・西側59°である。なお柱穴の深さは、東壁側では63cm、西壁側の柱穴は50cmであった。このように斜行する柱穴から、立っていた柱も斜め方向に差し込まれ立てられていたことになる。したがっ



第199図 SH41実測図 (1/40)

て、上屋の低い建物であったことが窺える。なお主柱穴間の距離は、310cm前後であり、その方位はN-53°-Eである。対角線上で土坑の外側に柱穴があるのは、これまでもSK5・SK31・SK32などの土坑構造に見られたが、SH41は対角線上の屋外にある柱穴をもつ土坑と、長軸の両端部に2基の主柱穴をもつ小型竪穴建物跡との折衷といえる。対角線上の柱穴のうち、北東隅部外の柱穴のみ未検出であったが、その桁行（長軸）320cm、梁間は260cmである。これら対角線上の柱穴の深さは30cm～35cmと主柱穴に比べ浅い特徴を示す。これら、対角線上の柱穴と主柱穴との上部構造における関係については、建築学的な考証が必要な部分である。

この竪穴建物跡出土遺物については図化していない。

SH12 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の中心であるS2から見ると南部にあたり、区画でいえばIE8に位置する（第104図）。この辺りは、南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面である。このSH12は、検出面の平面形が隅丸長方形であるが（第200図）、傾斜面の変換点近くにあたることもあって、北半部が削平されている。その長軸の方位はN-32°-Eである。規模は、長軸が推定で約570cm、短軸が426cm、面積は約23.4㎡の竪穴建物跡である。貼床面（整地土上面）までの深さについては最大で約45cmあった。

SK12 この土坑は、中部地区遺構群の中心であるS2から見ると南部にあたり、区画でいえばIE7区・IE8区・IE17区・IE18区の交点に位置する（第104図）。この辺りは、南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面である。このSK12の北西にはSH12が近接しており、前者は後者に帰属する土坑の可能性がある。SK12の平面形は、隅丸方形であるが（第202図）、各辺がかなり膨張で円形に近い形である。なお南西部が近代の掘削により削平されている。規模は、南北196cm、東西が202cm、面積は約39㎡である。整地土上面までの深さについては最大で約33cmであった。整地土の調査は行っていない。堆積土は、1層～6層が整地土上の堆積土であり、5層を除き流入土と考えられ、凹レンズ状堆積をしている。5層は、固く締まる整地土の一部と推定しており、その厚さは8cmである。壁の立ち上がりは、北壁66°・南壁82°・東壁80.5°・西壁78°である。

〈遺物〉 鋤形口縁の広口壺と（第203図545）、屈折口縁と思われる粗製甕の底部破片が出土している（546）、出土状態に一括性はなく、流れ込みと考えられる。

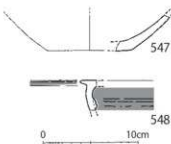
SK94 この土坑は、中部地区遺構群の中心であるS2から見ると南部にあたり、区画でいえばID99区に



第203図 SK12出土遺物実測図



第204図 SK94実測図（1/30）

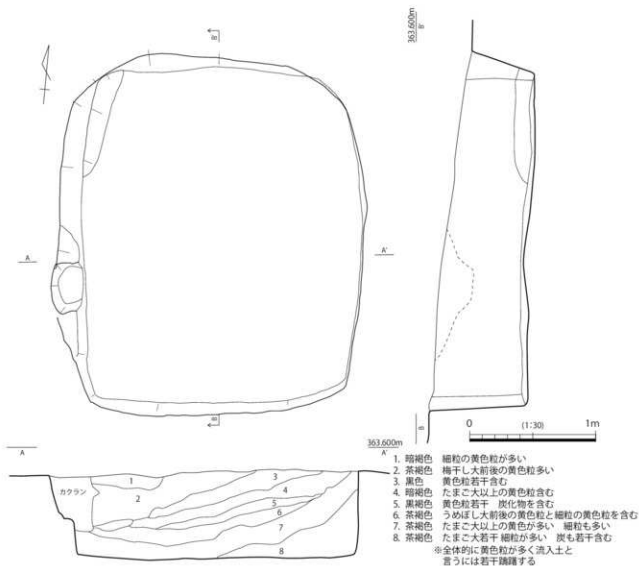


第205図 SK94出土遺物実測図

位置する（第104図）。この辺りは、南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面である。このSK94の南にはSK8・SK10などの方形系土坑が位置しており、その一辺の方向性を同一にすることや、連続するかのような配置からすると、SH6・SH9・SH10などの竪穴建物跡に帰属していた可能性がある。なお土坑検出面の平面形が長方形で（第204図）、隅部に円みがなく、遺構ラインも直線的であるなど、四日市遺跡の方形系遺構の中では最も整美であり、形を整美にしようとする掘削者の意思が窺える。土坑の規模は、長軸153cm、短軸が101cm、面積は約15.4㎡である。その長軸の方位は、W-68°Nを示している。整地土上面までの深さは、最大で約19cmである。整地土の調査は行っていない。堆積土は、1層～2層で、1層が埋土、2層は流入土である。各壁の立ち上がりは、北壁49°・南壁58°・東壁53°・西壁54°である。

〈遺物〉 復元するためのパーツの足りない一欠片又は数個体分の土器片が一塊にして廃棄され、多少ぼろついた状態で出土している。壺の底部破片（第205図547）、丹塗磨研で鋤形口縁の甕の破片が出土している（548）。鋤形口縁の甕の破片には、断面M字突帯が貼り付けられており、須玖Ⅱ式土器と考えられる。

SK7 この土坑は、中部地区遺構群の中心であるS2から見ると南部にあたり、区画でいえばIE9区・IE19区境界線の東よりでまたがる（第104図）。この辺りは、南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面である。このSK7の北西にはSH9が近接しており、前者は後者に関係する土坑の可能性がある。SK7の平面形は、幅広い隅丸方形であるが



第206図 SK7実測図 (1/30)



(第206図)、各辺がやや膨張である。規模は、長軸237cm、短軸が240cm、面積は約5.9㎡である。土坑の長軸の方位は、W-68°-Nを示している。整地土上面までの深さについては最大で約70cmであった。整地土の調査は行っていない。堆積土は、1層～8層までを整地土上で確認した。東西方向の断面図をみると全て東方から西方へ流入しているが、土坑の南側が北側より高い地勢を示すことを勘案すると、実際は南東から北西方向へ流入した流入土と考えられる。各層のうち7層は、下から二番目の流入土であるが、土坑の最上位から最下底面である整地土上面まで内湾曲するように堆積している。このことは南東側からの1回の流入が時間的には長く続き、結果的に短期間で土坑が埋没したことを物語っている。壁の立ち上がりは、北壁71°・南壁94°・東壁90°・西壁96°で、全体的に急角度の掘削を行っていることが窺える。

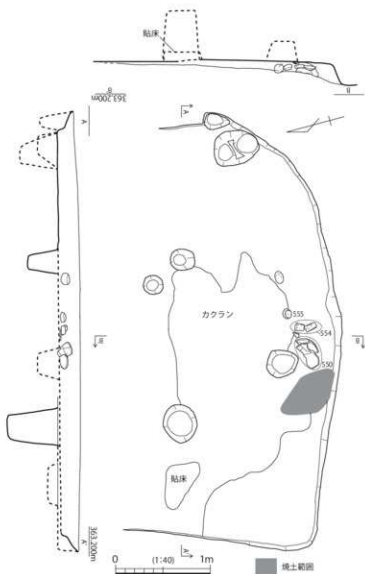
〈遺物〉遺物については、大きな土坑の割には極めて貧弱で、出土状態について何も記録していない。これは、逆にいえば、土坑自体の機能に土器・石器が含まれていなかったことを示すとともに、土坑の埋没スピードが速く、廃棄場所としても運用されなかったことを暗示している。ここで出土しているのは、「く」

の字屈折の粗製糞の小破片1点だけである(第207図549)。

SH9 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の中心であるS2から見ると南部にあたり、区画でいえばE9区に位置する(第104図)。この辺りは、南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面となる地勢である。このSH9の南東にはSK7、北にはSK8・SK10、西にはSK6・SH10・SH6が近接しており、相互に近い関係にあった遺構であろう。SH9は南半の遺構ラインと2基の主柱穴を検出したが、その北側は削平されていた。通例、主柱穴が四つ目状4基からなる場合、竪穴建物跡の平面形は方形もしくは円形になる場合が多い。また主柱穴は床面より深く掘られる場合が多いので、少し上面が削られても残る。その上でSH9の2基ある主柱穴の北側を精査しても対応する主柱穴は見つからなかった。したがって、SH9の平面形は、方形系で幅広の隅丸長方形と考えられる(第208図)。主柱穴とその南側の遺構ラインとの距離を北側へ折り返すと、規模は、長軸

434cm、短軸が320cm、面積は約11㎡である。SH9の長軸の方位は、南壁の西半と西壁南半のラインを参考にするとW-67°-Nを示している。各辺がやや膨張である。整地土上面までの深さについては現状で19cmであった。堆積土・整地土の調査は行っていない。上記した2基の主柱穴と残存する壁との距離は、東側の柱穴では東壁から140cm・南壁から165cm、西側の柱穴では西壁から120cm・南壁から160cmである。また主柱穴間は175cmの距離があり、その方位はW-75°-Nを示している。なお、南壁沿いに焼土、西側主柱穴の西側に厚さ13cmの貼床が残存していた。

〈遺物〉 南壁の中央沿いに土器、礫、敲石・砥石などが床面上に集中分布しており、一括廃棄されたことが分かる。この集中部分から胴が張る大口壺の大きな破片が出土している(第209図550)。この大口壺の大きな破片は器面に横方向のヘラミガキが残存しているほか、頸部との破損部に刻みを入れていた痕跡が残っており、頸部との付きをよくする措置と考えられる。砥石は(第210図554)、断面がやや扁平ながら方柱状で側面の4面とも摩耗痕があり、中には幅広く鋭い傷もあり金属器の使用が窺える。敲石は、側面形が餅状で、側面に著しい敲打痕が生じている(555)。なお、大口壺の大きな破片や砥石は、破損していることから一括廃棄されたのであろう。この他、小型の無頸壺の胴部破片(第209図551)、鉢の口縁部破片(552)、石

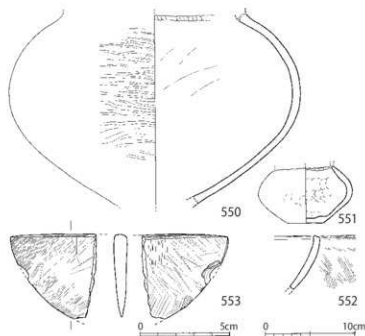


第208図 SH9実測図(1/40)

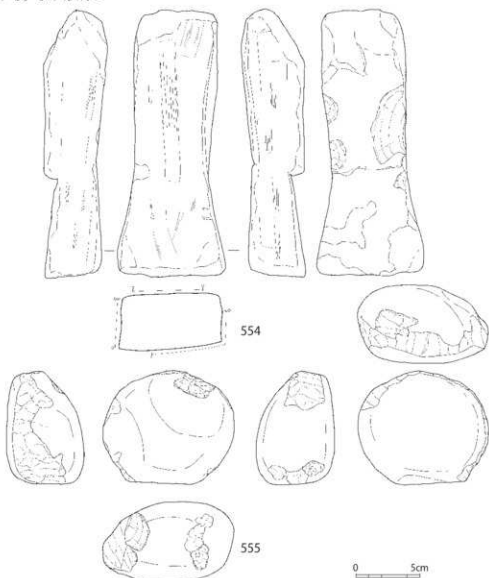
包丁の破片 (553) などが出土している。

SK10 この土坑は、中部地区遺構群の中心であるS2から見ると南部にあたり、区画でいえばE9区北東隅部に位置する (第104図)。この辺りは、南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面となる地勢である。このSK10の長軸西方向にはSK8が方向を合わせるように位置し、北にはSK94がその西辺の方向を合わせるように位置している。このSK10は、二つの異なる時間を隔てた時期に形成・運用された別の土坑から成り立っている。そこで土坑の形成順に説明する。まず形成されたのがSK10Bである (第212図)。

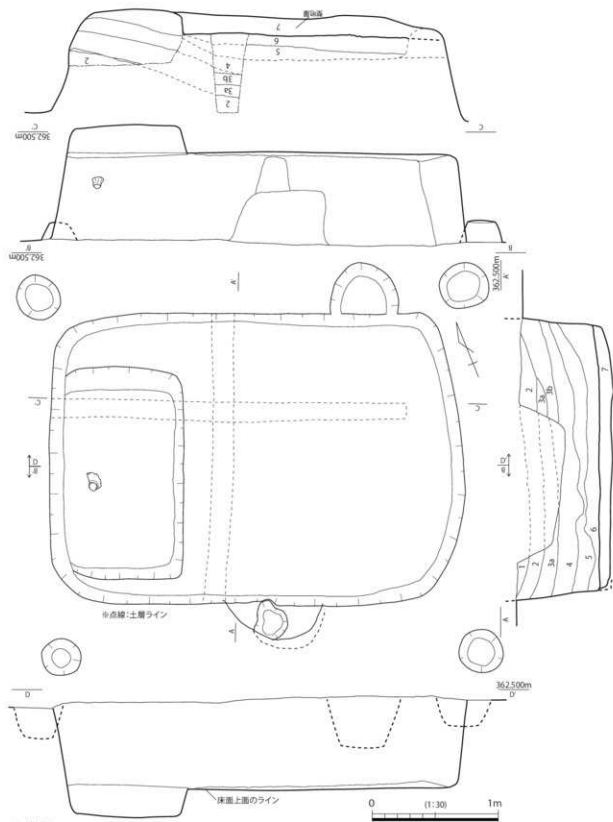
その長軸の方位は $W-69^{\circ}-N$ である。規模は、長軸が約330cm、短軸が推定で230cm、面積は約7㎡の土坑である。整地土上面までの深さについては最大で約70cmであった。なお整地土の厚さは15cmであることから、当初は深さ85cmまで掘削していたことになる。壁の立ち上がりは、南壁 83° ・北壁 84° ・東壁 84° ・西壁 80° である。土坑内の西壁側にはSK10B本体の長軸に直交



第209図 SH9出土遺物実測図①



第210図 SH9出土遺物実測図②

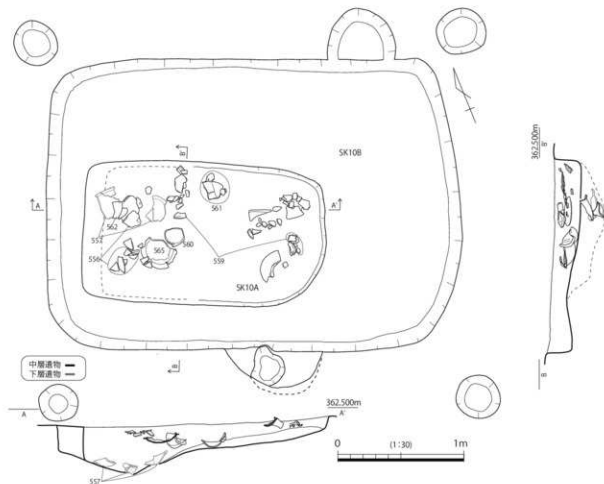


1. 黄褐色
 2. 黒褐色
 - 3a. 黄褐色
 - 3b. 暗茶褐色
 4. 暗褐色
 5. 黄色
 6. 黒褐色
 7. 黄色
- 黒色土中に3cm大の黄土が若干 流入土
 黄色土系が多い 粘質でしまる
 チョコレート色の粘質でしまりのある土 黄色の微細粒は若干 3aに伴う埋土か
 黒色系の土に均等に微細な黄色粒が多くある 流入土
 ほとんど黄色ロームでややぼらつきがある 埋土
 5~6cm大の黄色ブロックが見られる これは埋土か
 ほとんどがロームブロックからなり、わずかに暗色系のしみが観察される 掘削直後の整地層 ※黄色土系の層が交互に見られる

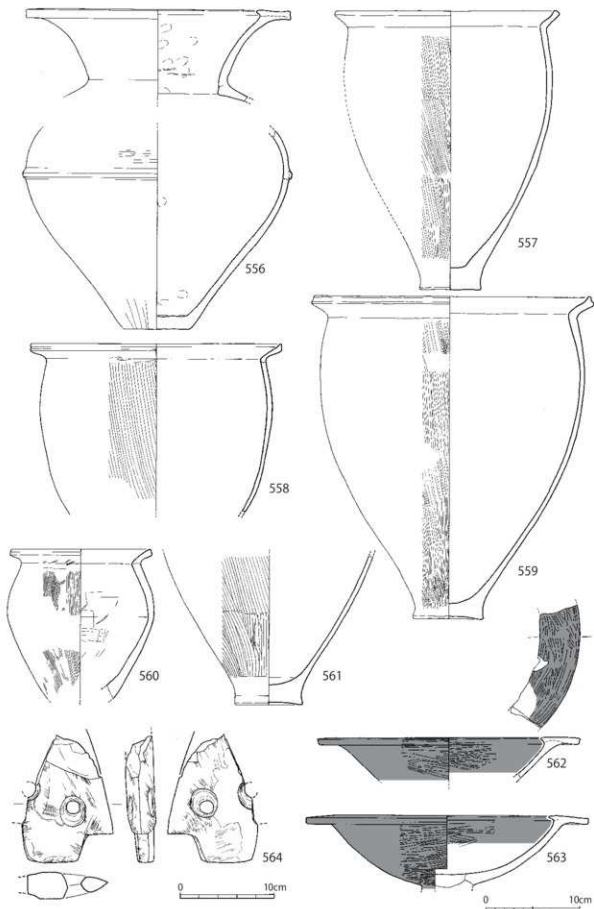
第211図 SK108実測図 (1/30)

する方向に土坑を掘り込んでいた。この掘り込みは、SK10Bの整地土（7層）を除去することで形成されていた。この小型土坑の規模は、長軸（東西）118cm、短軸（南北）107cmであった。こうした内部構造の整備とともに土坑外の対角線上に浅い柱穴を掘削している。その桁行は、南北列とも340cm、梁間は、東西列とも290cmであり、土坑の上に入屋構造があったことを示している。土坑内の堆積土の観察では、その運用後に若干埋め（5・6層）、次に外部から土が流入し（4層）、再び埋め（3b・3a層）、再び外部から土が流入し（2・1層）、埋没が終了。このSK10Bは、埋没したものの僅かに窪んでいたのか、その長軸に合うように堆積土上面にSK10Aが掘り込まれている（第212図）。その規模は、長軸144cm、短軸113cm、面積約1.5㎡である。SK10Aの深さと方位は、西半部39cm・東半部20cmで、長軸の方位は、W-65°-Nである。堆積土の観察は行っていない。

〈遺物〉SK10Bであるのか、SK10Aであるのか、帰属が明らかでないが、破損した磨製石戈が出土している（第213図564）。その他は、SK10Bから出土したが、その個体数は10個体前後と推定している。完形復元している例もあるが、実際は反転復元しており、パーツの足りない個体ばかりである。その出土状況は数個体が一緒の大きな一群と小破片数点からなる一群で出土する場合があります、それらが相互に接合する関係にある場合もある（第212図）。鋤形口縁の広口壺は、同一個体ながら約100cm離れていた（第213図556）。跳ね上げ状の口唇端部を有する「く」の字屈折の粗製甕は、80cm離れていた（559）。また、「く」の字屈折口縁の小型粗製甕は（560）、上記した鋤形口縁の広口壺、丹塗磨研で鋤形口縁の高環の坏部（563）などと一塊で出土している。別の丹塗磨研で鋤形口縁の高環の坏部は（562）、上記した鋤形口縁の広口壺の胴部と一塊で出土



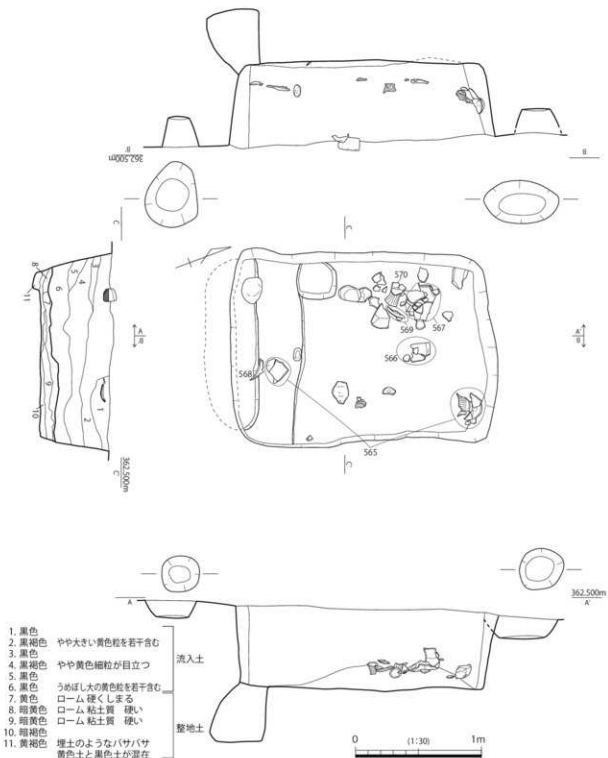
第212図 SK10A実測図（1/30）



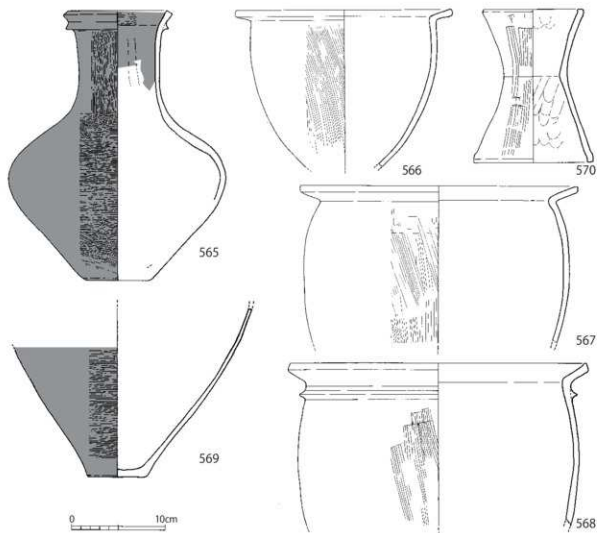
第213図 SK10出土遺物実測図

している。この他、「く」の字屈折口縁の甕の同一個体と思われる破片も一塊で出土している（561/※558と同一個体か）。下層からも、「く」の字屈折口縁の甕が二分の一の残存状態で出土した。全体として、SK10Bの全域にわたって分布しているが、潮れた場所から他の物質とともに一塊にして廃棄した結果と推定している。

SK8 この土坑は、中部地区遺構群の中心であるS2から見ると南部にあたり、区画でいえばイD99区とイE9区の境界部に位置する（第104図）。この辺りは、南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面となる地勢である。このSK8の長軸東方向にはSK10が方向を合わせるように位置している。SK8の方位はW-69°-N



第214図 SK8実測図（1/30）



第215図 SK8出土遺物実測図

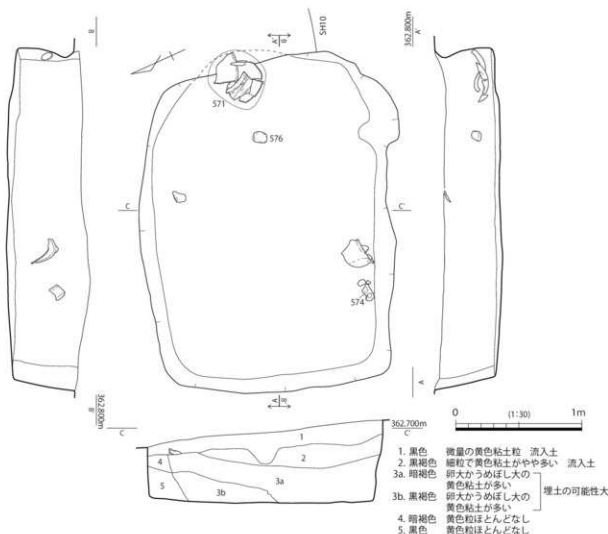
である(第214図)。規模は、長軸が約212cm、短軸が157cm、面積は約3㎡の土坑である。整地土上面までの深さについては、最大で約43cm～49cmで、整地土の厚さは、20cm～27cmである。壁の立ち上がりは、南壁85°・北壁80°・東壁77°・西壁76.5°である。土坑の南壁下底から北へ22cm、南へ24cm(オーバーハング)の46cm幅で短軸幅一杯に深さ48cm(掘削下底面：整地土下)の副室を掘り下げている。整地土との関係を調査しきれなかったが、整地土の上から掘り込まれていたとすると更に20cm～27cm深かったことになる。こうした内部構造の整備とともに土坑外の対角線上に浅い柱穴を掘削している。その桁行は、南北列とも280cm、梁間は東西列とも280cmであるなどほぼ方形で、土坑の上に上屋構造があったことを示している。柱穴は15cm～25cmと浅い。この方形の上屋構造の西半部よりに土坑本体が位置している。土坑内の堆積土の観察では、土坑内の運用後に土坑外から土が流入している(1～6層)。

〈遺物〉流入土の2層を中心として4、5個体前後を一塊に廃棄したようにSK8の北半よりの西半部に大破片がある。この集中部に、「く」の字屈折口縁の甕の破片(第215図567)・丹塗磨研の甕の胴下半部破片(569)、筒形器台(570)がある。これらは、欠けたパーツのないものばかりで、破損したために廃棄したことが分かる。また北半よりの中ほどに「く」の字屈折の甕破片が折り重なって出土している(566)。この他、南端のオーバーハングした副室への落ち際と北東隅部に約140cmの間をあけて、同一個体の丹塗磨研の

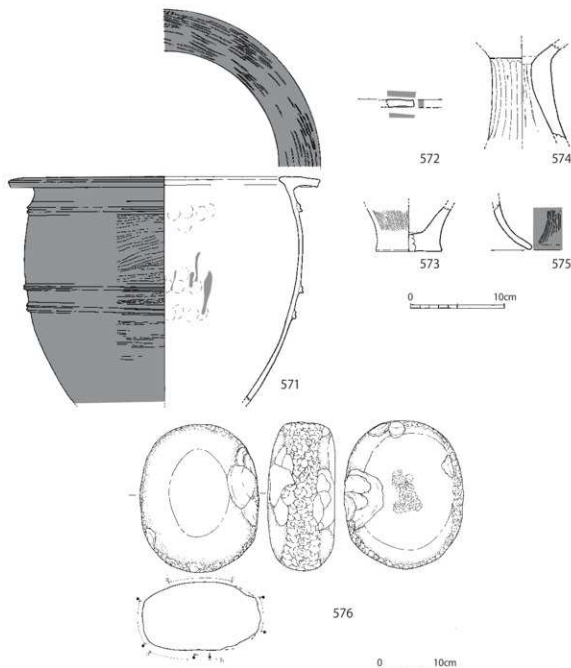
長頸壺が接合した(565)。この長頸壺の一部が存在していた場所と同じ南端の福室の落ち際には、「く」の字屈折の甕破片が出土している(568)。なお、長頸壺は、やや開き気味の口縁直下に断面三角形の突帯をめぐらしているのに加え、胴部から茎部への移行が緩やかに湾曲している特徴から須玖1式土器と考えられる。このほかの、「く」の字屈折の粗製甕は、跳ね上げ口縁が未発達であることと、胴部の張が弱いために須玖1式土器と考えられる。

SK6 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の中心であるS2から見ると南部にあたり、区画でいえばIE9区とIE10区の境界隔部に位置する(第104図)。この辺りは、南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面となる地勢である。このSK6は、SH10の北辺を切る関係(後行)にある。SH10は、その南にあるSH6を切る関係(後行)にある。これらの方形遺構は、方向を合わせたかのように位置している。SK6の長軸方位はW-64°-Nである(第216図)。規模は、長軸が約266m、短軸が200m、面積は約5㎡の土坑である。整地土上面までの深さについては、最大で約64cmであるが、整地土の厚さは未調査である。壁の立ち上がりは、南壁83°・北壁88°・東壁97°(オーバーハング)・西壁78°である。土坑内堆積土は、1層〜3b層まで確認している。うち4・5層は流入土として土坑内に堆積したと考えるが、再掘削されたことにより切られている。その後、3b層・3a層を埋め、2層・1層が流入している。

(遺物) 丹塗磨研で鋤形口縁の甕が、東壁のオーバーハング内に割り重ねられたように大きな破片が出土



第216図 SK6実測図(1/30)

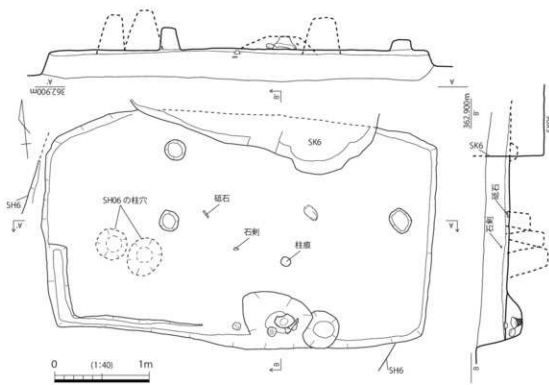


第217図 SK6出土遺物実測図

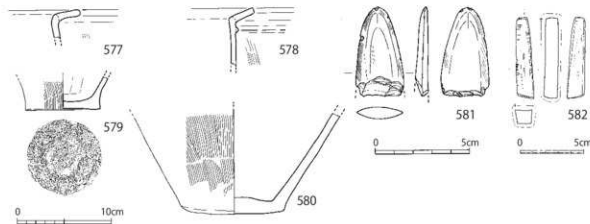
した(571、埋土内)。投げ捨てられたような分布の乱れはなく、配置したかのような遺棄である。この他、中位の流入土中で南壁沿いに屈折の粗製甕破片(未図化)、高坏の脚部破片(574)が隣接して廃棄していた。敲石・磨石は2点あるが、いずれも散発的に整地土面から約15cmの高さにあった(576のみ図化)。このうち、丹塗磨研で鋤形口縁の甕は、胴部に断面M字突帯がめぐらされており、須玖Ⅱ式土器といえる。敲石・磨石は、周縁部と一部表面に著しい敲打痕が残り、表裏両面には磨痕が残る。この他、丹塗磨研で鋤形口縁の小破片(572)、屈折口縁の粗製甕底部破片(573)、丹塗磨研の高坏の脚部破片(575)がある。

SH10 この堅穴建物跡は、中部地区遺構群の中心であるS2から見ると南部にあたり、区画でいえばIE9区とIE10区の境界隅部に位置する(第104図)。この辺りは、南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面となる地勢である。このSH10は、その北辺をSK6に切られる関係(先行)にある。SH10は、その南に

あるSH6を切る関係（後行）にある。これらの方形遺構は、方向を合わせたかのように位置している。SH10の長軸方位はW-81°-Nである（第218図）。規模は、長軸が約415m、短軸が250cm、面積は約8.8㎡の、やや細長い堅穴建物跡である。整地土上面までの深さについては、最大で約25cmあるが、整地土の厚さは未調査である。壁の立ち上がりは、南壁75°・東壁66°・西壁69°である。堅穴建物跡内堆積土は、未調査である。主柱穴は2基で、SH10の長軸に沿うように配置している。その位置は、東側主柱穴が南壁から120cmと西から135cmの場所で、東側主柱穴は南壁から130cmと東から36cmの場所である。その主柱穴間の距離と方位は、245cm・W-84°-Nである。このほか、南壁沿いのやや東よりに「胎盤取納のピット」といわれた土坑がある。その形は逆台形で、長軸77cm、短軸61cmの規模を有する。なお、西壁の南から南壁の西側に壁溝が残存していた。



第218図 SH10実測図 (1/40)

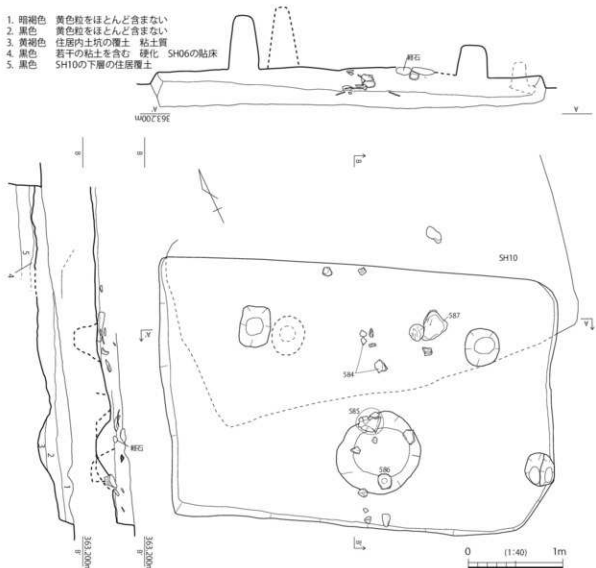


第219図 SH10出土遺物実測図

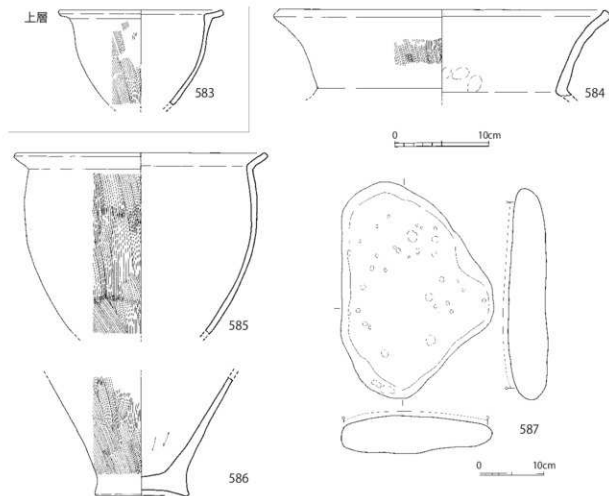
〈遺物〉「胎盤収納のピット」内の最下底部から屈折口縁の粗製甕の底部破片が、口縁部側を上にして置かれており、遺棄の可能性がある。この他は、小型の遺物ばかりが散漫な分布を示しており、流入土中に混在していた疑いも濃い。口縁が湾曲して屈折する粗製の甕の破片（第219図577）、屈折口縁の粗製の甕で口縁直下に断面三角突帯のある破片（578）、屈折口縁の粗製甕の底部破片（579）、磨製石刻の切っ先部破片にスクレイパー状の再加工（リダクション）を加えた例（581）、方柱状の携帯用小型砥石（582）が出土している。

SH6 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の中心であるS2から見ると南部にあたり、区画でいえばIE9区とIE10区の境界閉部に位置する（第104図）。この辺りは、南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面となる地勢である。このSH6は、その北側のSH10を切る関係（後行）にある。SH10は、その北にあるSK6に切られる関係（先行）にある。したがってSH6とSK6→SH10という形成経過を示している。また、これらの方形遺構は、方向を合わせたかのように位置している。SH6の長軸方位はW-65°Nである（第220図）。規模は、長軸が約422m、短軸が276cm、面積は約10.4㎡の、長方形竪穴建物跡である。整地土上面までの深さについては、最大で約20cmで、整地土の厚さは8cmである（4層）。壁の立ち上がりは、南壁78°・東壁71°・西壁64°である。竪穴建物跡内堆積土は、1・2層が流入土、3層は土坑内の流入土である。主柱穴は

1. 暗褐色 黄色粒をほとんど含まない
2. 黒色 黄色粒をほとんど含まない
3. 黄褐色 住屋内土坑の覆土 粘土質
4. 黒色 若干の粘土を含む 礫化 SH06の胎床
5. 黒色 SH10の下層の住居覆土



第220図 SH6実測図（1/40）

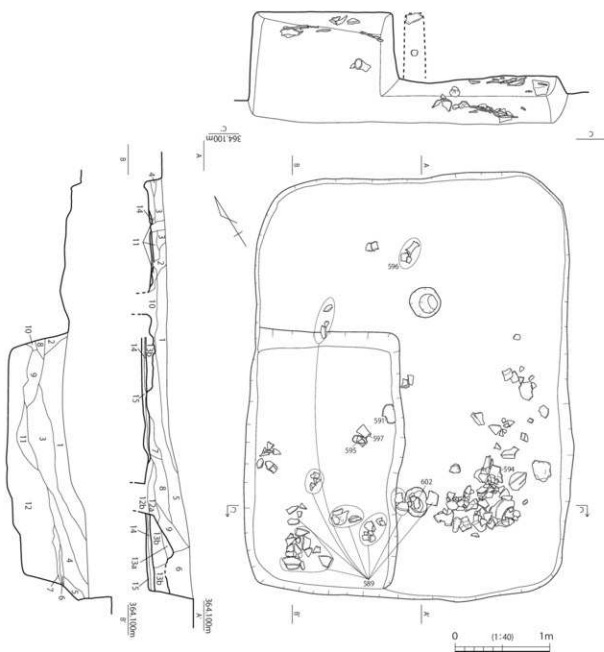


第221図 SH6出土遺物実測図

2基で、SH10の長軸に沿うように配置している。その位置は、東側主柱穴が南壁から200cmと東壁から75cmの場所で、西側主柱穴は南壁から200cmと西壁から100cmの場所である。その主柱穴間の距離は245cm、方位はW-64°Nである。このほか、南壁沿い近くに「胎盤収納のビット」といわれた土坑がある。その形は円形で、長軸90cm・短軸82cmの規模を有し、深さは約15cmであった。やや勾配のある傾斜面に位置するため、北半部の残りが悪い。

〈遺物〉 台石が東側主柱穴の内側(西)の床面直上に置かれていた。台石に近接して焼けた軽石(火山性の発泡軽石)が位置していた。柱穴間から、土坑付近にかけて全体的に小破片が散乱している状態で、1層に含まれている。前者には、台石(第221図587)、素口縁で朝顔形に口縁が開く広口壺(584)がある。後者には、「く」の字屈折口縁の粗製甕(585:1層)、「く」の字屈折口縁の粗製甕の底部(586:2層)がある。そのほか層位不明であるが、小型のL字屈折口縁の粗製甕がある。なお広口壺(584)は、口頸部の締まりがあり、あるいは須玖1式土器に相当する可能性がある。

SH28 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の中心であるS2から見ると南部にあたり、区画でいえばE20区の北よりに位置する(第104図)。この辺りは、南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面となる地勢である。SH6の長軸方位はN-34°Eである(第222図)。規模は、長軸が約454cm、短軸が348cm、面積は約19.5㎡の、長方形竪穴建物跡である。整地土上面までの深さについては、最大で約20cmで、整地土の厚きは8cmである(4層)。壁の立ち上がりは、南壁77°・北壁78°・東壁62°・西壁87°である。竪穴建物跡内



B-B土層

1. 暗褐色 1~2cm 大の黄色粒や多い
2. 暗灰色 黄色細粒と黒色細粒の混土
3. 暗褐色 5cm 大~1cm 大の黄色粒が多い
4. 黒褐色 黄色ブロックが多い
5. 黒色 黄色粒若干含む
6. 暗褐色 黄色粘土
7. 黒褐色 黒色土中に黄色土がしみ状に広がる
8. 暗褐色 黄色粘土と黒色土の細粒混色でしまる
9. 暗黄色 黄色粘土と黒色土の細粒混色でしまる
10. 暗褐色
11. 黒褐色 黄色ブロックが多量にいる
12. 黄色 黄色土のばら土でしまる

全体的に埋土と
考えられる

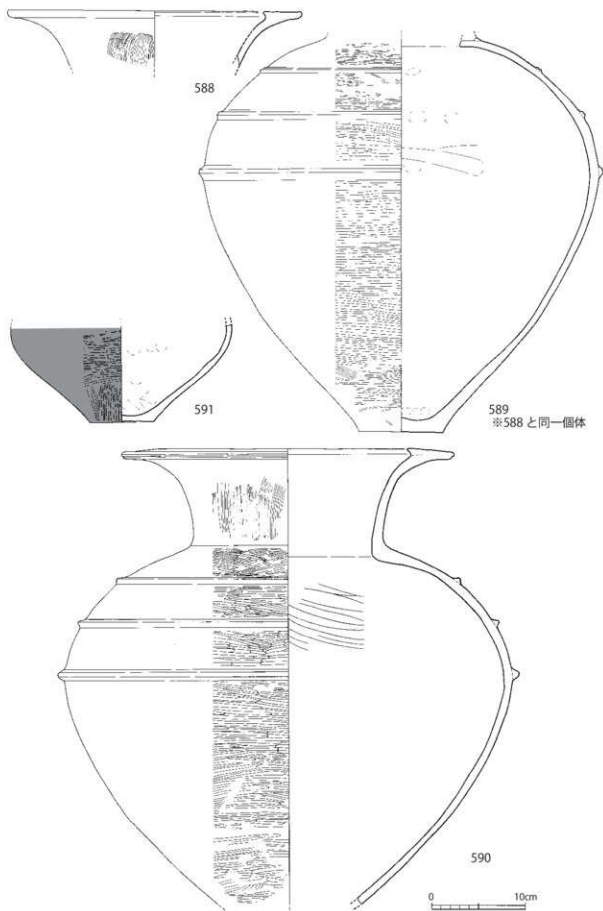
A-A土層

1. 暗褐色 黄色細粒若干含む
2. 暗褐色 灰土が多い
3. 暗褐色 黄色土若干含む
4. 黒色 黄色土若干含む
5. 暗褐色 霜降り状の黄土 13b 付近で焼土
6. 暗褐色 黄色の細粒が多い
7. 暗黄色 黄色ブロックが多く 8 に連続する
8. 暗褐色 3cm 大~2 大の黄色土が多い
9. 黒色 2cm 大のロー層若干 焼土(橙色)
10. 黒色 細粒ほとんどなし
11. 暗黄色 黄色ブロックが多い
- 12a. 黒色 3cm 大の黄色土を若干含む
- 12b. 黒色
- 13a. 暗黄色
- 13b. 黄色
14. 黒色 床面
15. 黄色 整地層

黄色粘土による第2次床面の整地層

※遺物は 13a より上層で出土

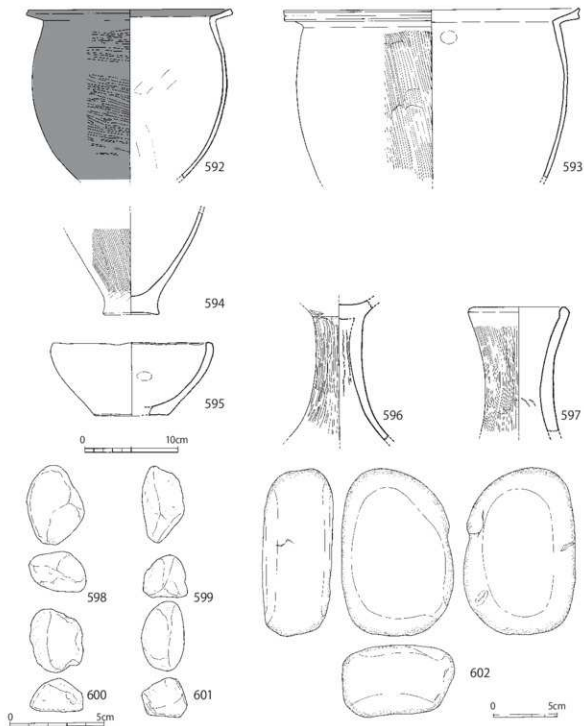
第222図 SH28実測図 (1/40)



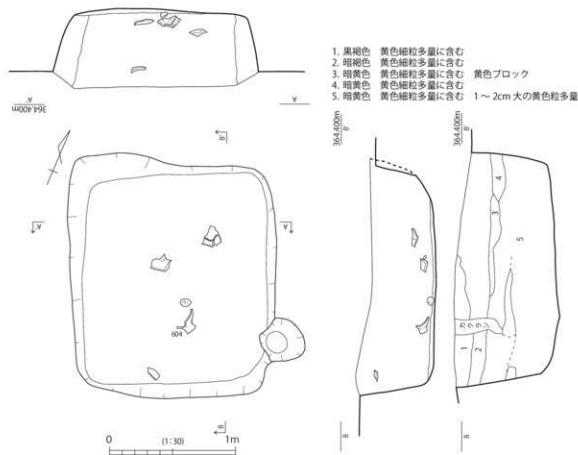
第223図 SH28出土遺物実測図①

第3章 調査の成果

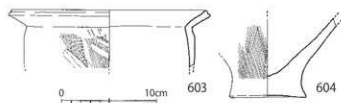
堆積土は、1～12層が流入土であるが、埋土の可能性も高い。この点については、後述する。第1次床面（整地土）が14・15層、第2次床面（整地土）が13a・13b層である。第2次床面は、北壁沿いをやや高く盛り上げているので、南より高く、深さが25cmで、中央部分では48cm（南壁の高さから）である。主柱穴は2基で、SH10の長軸に沿うように配置している。その位置は、南側主柱穴が南壁から104cmと東壁から160cmの場所で、北側主柱穴は北壁から136cmと東壁から146cmの場所である。その主柱穴間の距離と方位は、210cm・N-36°Eである。柱穴の深さは、北が67cm、南が77cmである。柱穴の北側で、南西隅部を起点に南北278cm・東西170cm・面積約4.5㎡・深さ57cmの規模有する屋内土坑がある。この土坑の堆積土は1層から12層



第224図 SH28出土遺物実測図②

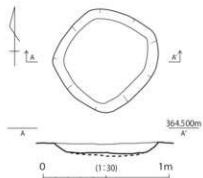


第225図 SK53実測図 (1/30)



第226図 SK53出土遺物実測図

までで、全て埋土と認識した。埋土の1・3・4層は、最上部が土坑外から埋めており、既述した土坑外の5～9層も埋土の可能性がかなり高い。



第227図 SK54実測図 (1/30)

〈遺物〉 出土土器の全ては、破片となっているが、その出土状態は大小の一塊に区別されるなど、廃棄された単位と推定しており、竪穴建物跡の南半に多い。垂直分布図で、上下二層になっているのは、第2次粘床・整地土である13a/13b層が南寄り高く盛り上がり、その勾配に合わせて各層位が堆積し、廃棄土器が堆積しているからである。各一塊の集中部分に含まれる土器は、同一個体だけでなく別個体も含まれていた。集中部分間の接合は普通で、土坑内遺物との接合関係もあった。おそらく破損した場所で一塊にかき集め、廃棄したことが窺える。こうした廃棄行為は、

勾配等を考え合わせると、竪穴建物跡の南側から北側方向へ投棄・廃棄したようで、遺物が遠くでは飛び散るかにように拡散している。やや扁平な鋤形口縁の大型の広口壺が2点出土している(第223図588・589・590)。SI28の廃棄土器片のなかで主体を占めており、口縁の特徴から須玖Ⅱ式土器といえる。口縁を欠く、丹塗磨研の壺は胴部が著しく張る例である(591)。その他、壺には屈折口縁の例があり、丹塗磨研をしてい

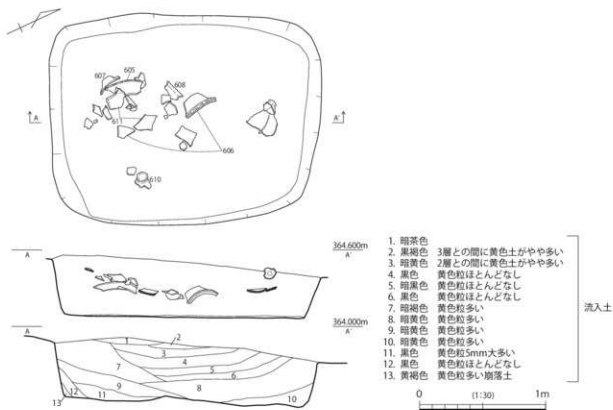
る(593)。丹塗磨研の鉢があり、上位で内湾する(595)。その他、高坏の脚部破片と筒形器台が出土している(596・597)。石器には、投弾(598~601)と磨石がある(602)。

SK53 この土坑は、中部地区遺構群の中心であるS2から最も距離の離れた南部にあたり、区画でいえばE20区に位置する(第104図)。このあたりは南側の標高が僅かに高く、北側へ低くなる緩斜面で、SH28の南東隅部ある。SK53は、平面形が隅丸長方形を基調としているが、やや方形気味の土坑で(第225図)、その規模は、長軸193cm、短軸165cmで、面積は約8㎡である。整地土上面までの深さは、80cmである。整地土の壁の立ち上がり角度は、北壁83°・南壁81°・西壁74°・北東壁79°である。このSK53の堆積土は、1層~5層まで確認したが、すべて流入土である。整地土は調査していない。

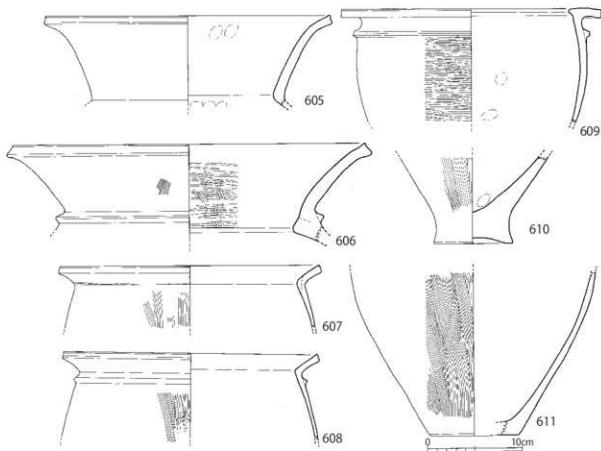
〈遺物〉 屈折口縁の粗製甕(第226図603)と、同種の甕の底部破片である(604)。

SK54 この土坑は、中部地区遺構群の中心であるS2から最も距離の離れた南部にあたり、区画でいえばE40区に位置する(第104図)。このあたりは平坦な地勢で、SK53の南部ある。SK54は、平面形が円形もしくは隅丸多角形の土坑で(第227図)、その規模は、直径84cmで、面積は約0.55㎡である。整地土上面までの深さは、10cmである。整地土の壁の立ち上がりは湾曲しながら皿状になる。

〈遺物〉 特記する状況はない。



第228図 SK77実測図(1/30)

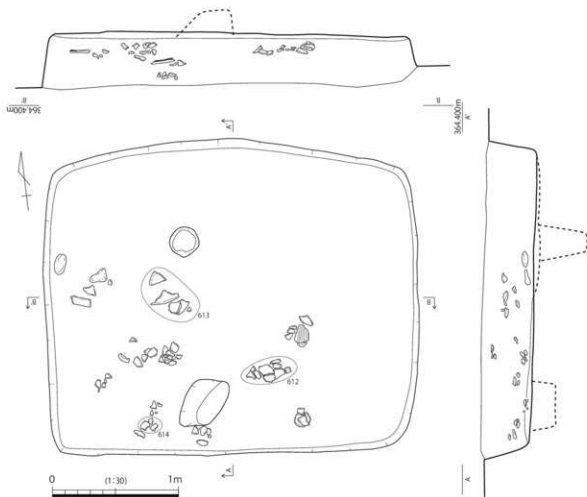


第229図 SK77出土遺物実測図

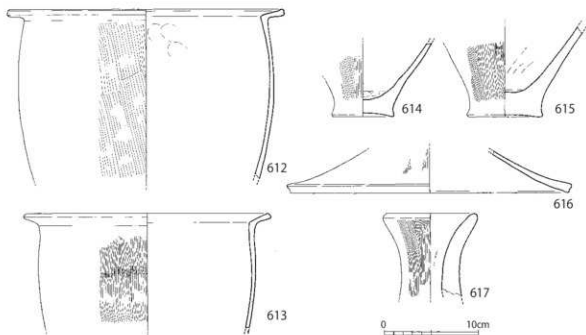
SK77 この土坑は、中部地区遺構群の南部にあたり、区画でいえばイE19区に位置する（第104図）。このあたりは南側の標高が高く、北側へ低くなる緩斜面である。SK77は、検出面の平面形がやや歪な隅丸長方形を基本とした土坑である（第228図）。SK77の規模は、長軸（南北）217cm、短軸（東西）169cm、面積3.2㎡である。SK77の方位はN-25°-Eである。深さは、整地土上面までが42cmで、整地土下の掘削面は未調査である。壁の立ち上がり角度は、北壁76°・南壁81°である。堆積土は、1～13層まで確認し、全層流入土であり、凹レンズ状堆積である。その堆積方向は、南側から北方向（13層～9層）、北側から南方向（10層～8層）、南側から北方向（7層）、北側から南方向（6層～2層）、南側から北方向（1層）と交互に堆積している。

〈遺物〉 土器は破片状態で、一塊にして廃棄している。垂直分布をみると、7層～6層が流入する頃に廃棄したことがわかる。その分布をみると、南北両側から中央よりの部分で長軸に沿うように分布している。これは、土坑の短軸方向からも流入土が流れ込み、廃棄面が細長く断面が楕円状であったことから、これに規制される形で分布したということになる。朝顔形に開く素口縁の広口壺が2点出土しており（第229図605・606）、いずれも口頭部と胴部の境界がしまり、うち1点は断面三角形の突帯がめぐる。甕は精製と粗製の二者がある。粗製では、「く」の字屈折口縁が2点あり（607・608）、うち後者は断面三角形の突帯がめぐる。またそうした粗製甕の底部も2点あり（610・611）、前者はやや上底で厚いので須玖Ⅰ式土器の可能性が高い。精製の甕では、鋤形口縁の甕があるが、丹塗はしておらず、断面台形の突帯が一条めぐる（609）。この鋤形口縁の甕は、須玖Ⅱ式土器の精製甕に見られる断面M字突帯とその二条突帯が確立していないことから須玖Ⅰ式土器に相当する。

SK86 この遺構は、中部地区遺構群の南部にあたり、区画でいえばイE19区とイE29区の境界に位置する



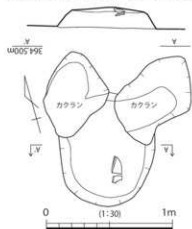
第230図 SK86実測図 (1/30)



第231図 SK86出土遺物実測図

(第104図)。このあたりは比較的平坦な地勢である。SK86は、検出面の平面形が隅丸長方形を基本とした土坑である(第230図)。SK86の規模は、長軸(東西)297cm、短軸(南北)250cm、面積7.1㎡である。SK77の方位はW-84°-Nである。深さは、整地土上面までが約44cmで、整地土下の掘削面は未調査である。壁の立ち上がり角度は、北壁80°・南壁74°・東壁75°・西壁83°である。柱穴状のピットが2基あるが、配置上のずれと、うち1基は形が変形している。あるいは堅穴建物かもしれないが、台石・壁周溝・「胎盤収納用土坑」などが一つもなく、違和感がある。

(遺物) 遺物は、土器破片を中心として大小の集中部分が南西寄りにシフトする状況で散在する。しかも整地土上面にあるのではなく、おそらく流入土中に廃棄されたのだろう。屈折口縁で粗製の壺の破片(第231図612・613)と同種の底部破片(614・615)、甕蓋(616)、小型の筒形器台(617)がある。

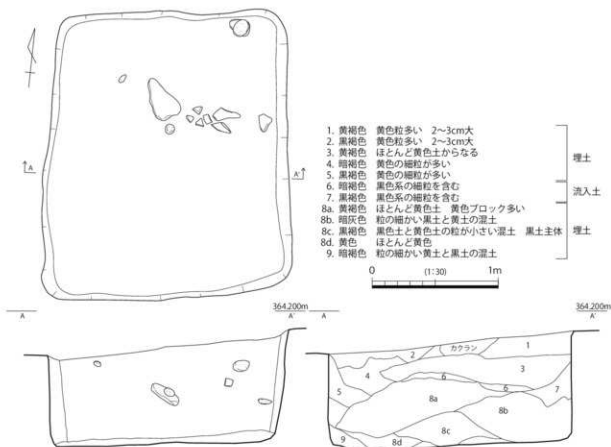


第232図 SK90実測図(1/30)

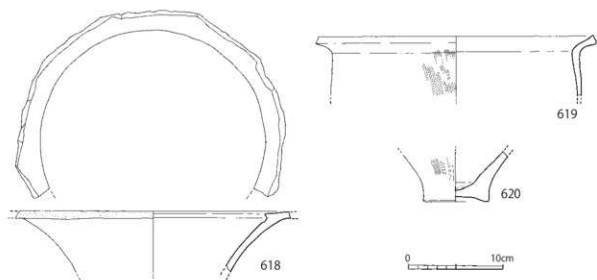
SK90 この土坑は、中部地区遺構群の南部にあたり、区画でいえばE29区に位置する(第104図)。このあたりは比較的平坦な地勢である。SK86は、楕円形の土坑で、長軸90cm、短軸77cmの規模があり(第232図)、深さは17cmである。

(遺物) 底面直上に、土器破片が出土した。

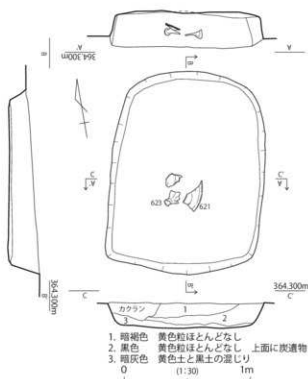
SK50 この土坑は、中部地区遺構群の南部にあたり、区画でいえばE18区に位置する(第104図)。この辺りは、南東から西北方向へ下り勾配となる緩斜面である。SK50は、検出面の平面形が隅丸長方形の



第233図 SK50実測図(1/30)



第234図 SK50出土遺物実測図



第235図 SK51実測図 (1/30)

SK51 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の南部にあたり、区画でいえばイE18区とイE28区の境界付近に位置する(第104図)。このあたりも南側の標高が高く、北側へ低くなる緩斜面である。SK51は、検出面の平面形がやや歪な隅丸長方形を基本とした土坑である(第235図)。SK51の規模は、長軸(南北)136cm、短軸(東西)120cm、面積1.8㎡である。SK51の方位はN-14.5°-Eである。深さは、整地土上面までが29cmで、整地土下の掘削面は未調査である。壁の立ち上がり角度は、北壁58°・南壁72°・東壁81°・西壁74°である。堆積土は、1～3層まで確認し、全層流入土である。

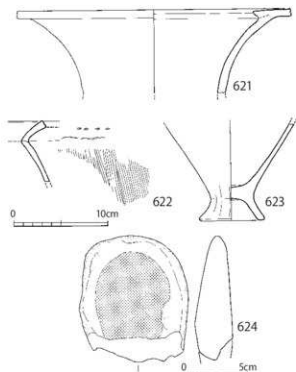
〈遺物〉 土坑の中央やや南で、深さの中間に数個体の土器が一塊に集中廃棄している。鋤形口縁の広口壺

土坑の規模は(第233図)、長軸(南北)230cm、短軸(南北)197cm、面積4.1㎡である。SK50の方位はW-4°-Eである。深さは、整地土上面までが約87cmで、整地土下の掘削面は未調査である。壁の立ち上がり角度は、東壁90.5°・西壁91°と急角度である。土坑内堆積土は1～9層まで確認した。6、7層を除く各層は埋土である。6、7層は、雨天等の一時埋め土作業の休止を意味するのかもしれない。少なくとも、ほぼ全ての土量が埋土であり、急速に埋めなければならない理由があったのであろう。

〈遺物〉 平面分布では集中しているが、垂直分布図をみると、上下に散漫な分布をしている。埋め土作業中に廃棄したのだろう。鋤形口縁の縁部を打ち欠いた広口壺の大きな破片(第234図618)、「く」の字屈折口縁の粗製の甕(619)と、同種の甕の底部破片(620)がある。

の破片（第236図621）、胴の張る「く」の字屈折口縁の甕破片（622）、上げ底の黒髪式系の甕破片（623）が出土している。石器は、磨石が1点出土しているが、出土状態は記録していない。

SK55 この土坑は、中部遺構群の南部にあたり、区画でいえばイE28区の境界に位置する（第104図）。このあたりは、比較的平らな地勢である。SK55の平面形は、隅丸方形であるが（第237図）、内部に横穴を掘削し、甕を設置した甕棺墓である。土坑の長軸方位は、N-23°-Eである。SK55の規模は、長軸（南北）103cm、短軸（東西）71cm、面積0.6㎡である。まず、深さ14cmまで掘り下げた部分に三日月形の段が形成されており、更に深さ57cm・50cmの部分まで掘り下げている。深さ57cmの部分は、柱穴遺構の底部で、深さ50cmの



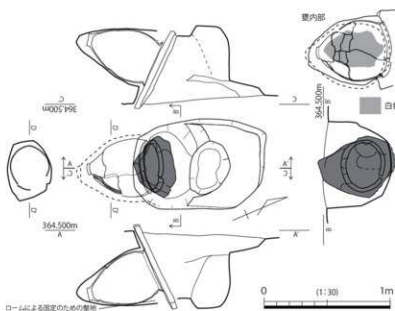
第236図 SK51出土遺物実測図

部分は南側の一段高い部分である。柱穴は、長軸41cm、短軸31cmの規模を有している。甕棺を設置した後、何らかのモニュメントになるような柱を立てていたのかもしれない。深さ50cm部分の一段高い部分には、そこから南へ横穴を掘削している。横穴の間口は、高さ44cm、幅55cm、横からの角度18°である。横から見た時の間口の角度を起点に斜め下方（南方向）へ掘削している。掘削した穴の縦断面・横断面等の形状は、甕棺の形に合わせ、土器との間が10cm前後空いている。この横穴の奥行は68.5cmで、60cm部分にまで甕棺を差し入れている。次に甕棺の口縁から胴部にかけての下位に整地土を充填し、横からみた横穴間口の角度と口縁の角度を合わせるようにしている。幼児の遺体を納入後、長軸77cm、短軸49cm、厚さ4cmの板状石を蓋として甕や横穴間口を塞いでいる。

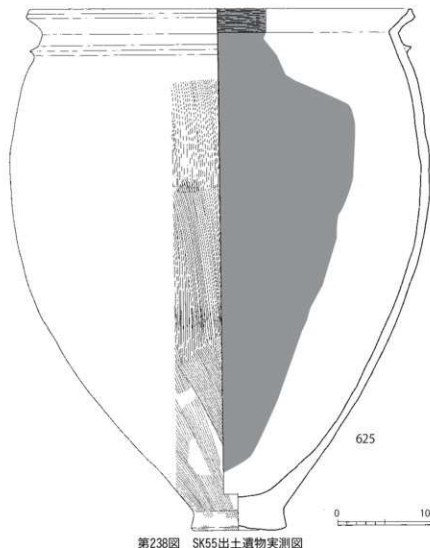
〈遺物〉 遺物は、遺体の棺として用いられた甕で

ある（第238図625）。甕は胴部上半が張る屈折口縁である。口縁端部の上位は跳ね上げ状を呈しており、付け根部の直下に断面三角形の突帯がめぐる。甕は高さ55cm、胴直径44.2cm（内部直径42.2cm）で、内面には長軸47cm、短軸29cmの範囲に白い付着物が沈着していた。幼児用の甕棺としたことからすれば、遺体の脂肪であることは確実である。なお、この甕はC14年代測定を行っている（巻末参照）。

SK52 この遺構は、中部地区



第237図 SK55実測図（1/30）

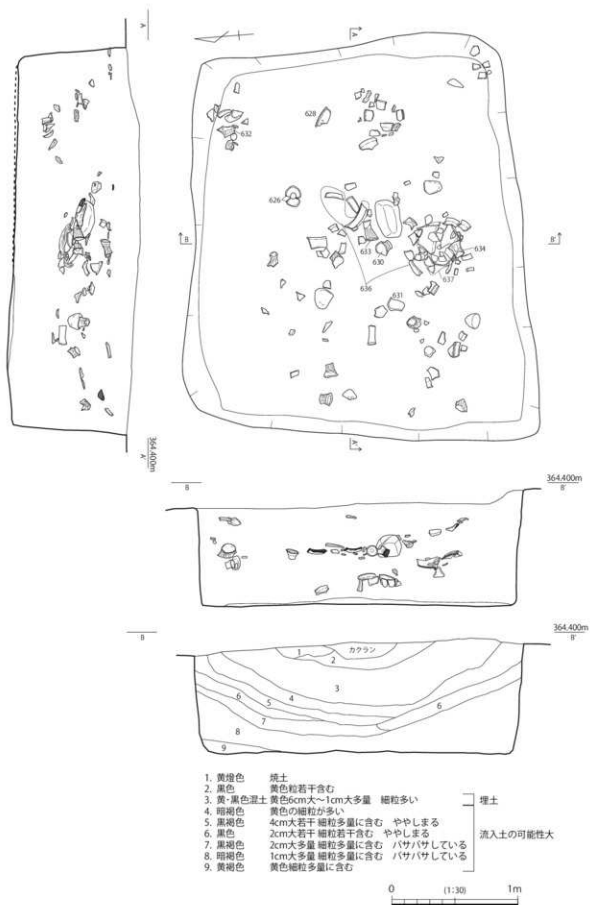


第238図 SK55出土遺物実測図

遺構群の南部にあたり、区画でいえばE18区・E28区・E19区・E29区の交点付近に位置する(第104図)。この辺りは、南東から西北方向へ僅かに下り勾配となる緩斜面である。SK52は、検出面の平面形が北壁と東壁が僅かに短い隅丸長方形の土坑で(第239図・第240図)、その規模は、長軸(東西)324cm、短軸(南北)280cm、面積7.5㎡である。SK52の方位はN-89°-Eである。深さは、整地土上面までが約100cmで、整地土下の掘削面は未調査である。壁の立ち上がり角度は、東壁86°・西壁96°・南壁85.5°・北壁86°と急角度である。土坑内堆積

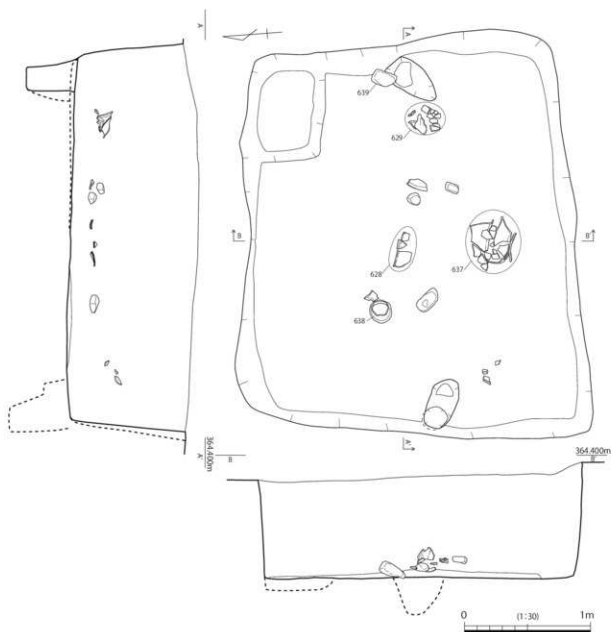
土は1~9層まで確認している。3層を除く各層は、凹レンズ状に堆積した流入土である。3層は、特に分厚い黄色土・黒色土の混土であり、明らかに埋土である。その後、埋土が沈み、そこへ2層・1層が堆積したのであろう。最も深い整地土上面の東西壁際に柱穴が1基ずつ計2基ある。竪穴建物跡でいえば2基の主柱穴ということになる。なぜ竪穴建物跡に分類しなかったかという点、最下底部までが約100cmとこれまでの竪穴建物跡に比べて深かったからである。東壁際の柱穴は、北壁から155cm、南壁から125cmの場所にあり、深さ40cm、西壁際の柱穴は、北壁から120cm、南壁から121cmで、深さ50cm、その柱穴間の距離は274cmで方位はN-89.5°-Eである。こうした、柱穴の存在は、当然ながら上屋構造の存在を物語っている。

〈遺物〉 整地土直上域では東側柱穴に北接する台石があるが(第241図639)他にはない。遺物は、垂直分布図を参考にすると凹レンズ状堆積土中の勾配に沿うように3枚の分布がわかるが、上位の2分布を上層、下位の1分布を下層として区分しながら説明する。下層は、5層~8層にかけて分布しており、同一個体に含まれるまとまりはあるもの、別個体を含めた一塊のような密集状況はない。下層から、小型の屈折口縁の粗製甕(628・638)がある。この他、下層では8層上位にあたる部分で、ほぼ復元完形にできた「く」の字屈折口縁で胴の張る甕が集中的に出土している(629)。上層では、底部を欠くので、破損した屈折口縁の粗製甕の破片を一塊に一括廃棄した状況で出土した(637)。その他、屈折口縁の粗製甕と思われる底部破片がある(630・632)。このうち前者は、僅かに上げ底で、厚い特徴が観察されるので、須玖1式土器など

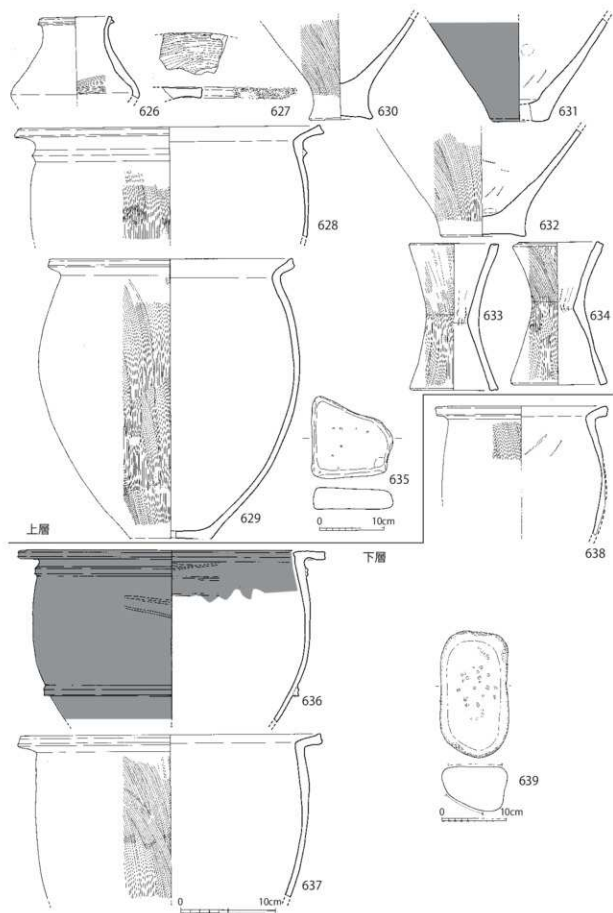


第239図 SK52上層実測図 (1/30)

古相の土器を示している。甕には、丹塗磨研で鋤形口縁甕の大きな破片 (636)、その胴部から底部にかけての破片などもある (631) この他の器種として、胴中央が締まった筒形器台 (633・634)、頸部と胴部が緩やかに一体化した長頸壺 (626) などがあるが、後者は最大径部分がやや角張った特徴を示す。石器としては、扁平な台石、もしくは砥石がある (635)。全体的にみて、大きな破片などの密集状態は一個体ずつが廃棄面に数多く分布する状況である。この廃棄パターンの形成要因としては、破損した各土器の廃棄物と、何か有機物のようなものと一緒に集め渾然一体として廃棄した様子が想定できる。なお、丹塗磨研で鋤形口縁の甕は、口縁直下と胴部に断面M字突帯がめぐるので、須玖Ⅱ式土器に位置づけられる。この他、器種不明ながら丹塗磨研で鋤形口縁の破片が出土している (627)。

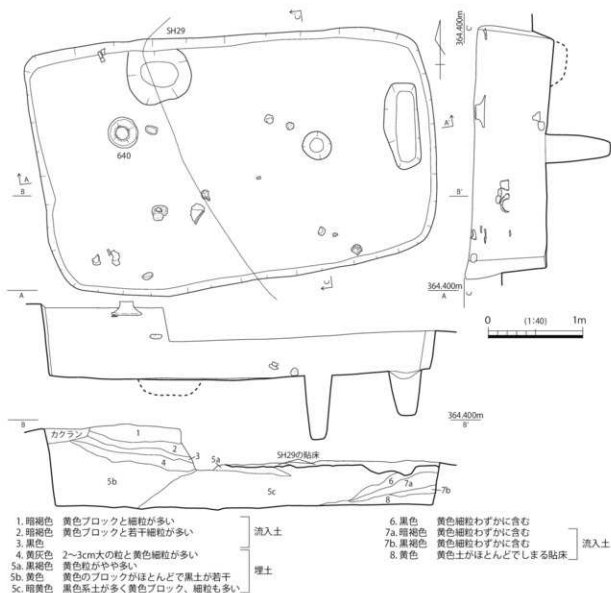


第240図 SK52下層実測図 (1/30)



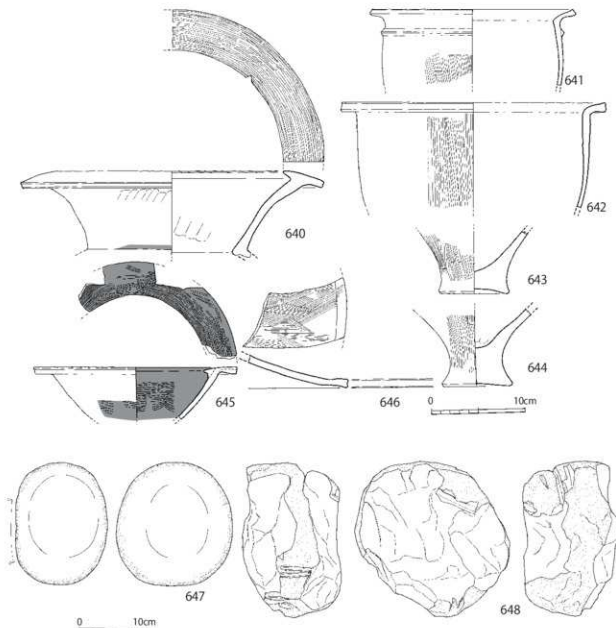
第241図 SK52出土遺物実測図

SH39 この堅穴建物跡は、中部地区遺構群の南部にあたり、区画でいえばE17区・E18区・E27区・E28区の交点付近に位置し（第104図）、後述するSH29から切られる関係にある（先行）。SK53からSH38まで東西に並ぶ堅穴建物跡・土坑の一つである。あたりは比較的平坦な地勢である。SH39の平面形は、隅丸長方形である（第242図）。その規模は、長軸（東西）415cm、短軸（南北）272cm、面積は約10.6㎡である。長軸の方位は、N-83°-Eである。貼床面までの深さは、約83cmであるが、貼床・整地土の厚さは約11cm以上ある。このSH24の堆積土は、整地土である8層を除き1層～7層まで確認した。その埋没過程は、SH39が廃絶後、最初に南東部分に7b・7a・6層が流入し、埋土（5c層・5b層・4層）、最後に3層～1層が流入し埋没が終了している。この堆積土を切り込む形でSH29が構築されている。壁の立ち上がり角度は、西壁80°・東壁80°である。柱穴は、主柱穴2基からなると思われるが、西側の主柱穴は探しきれなかった。東側の主柱穴は、東壁から内側へ126cm、南壁から内側へ133cmの場所に位置するが、本来存在したであろう西側の主柱穴も、東側の主柱穴位置を反転した位置にあると推定される。この他、北壁沿いに「胎盤収納」ピット、東壁沿いに短いながら細長い溝状のピットがある。



第242図 SH39実測図（1/40）

〈遺物〉 土器、石器の出土状況は、散発的で群集性はない。ただし、鋤形口縁で広口壺の口頸部破片は(第243図640)、大型でその存在感は大きく単に流れ込みとは考えられない。おそらく2層堆積時で、意図的に伏せて廃棄したと推定される。この土器は、鋤形口縁の上面だけを研磨しているとともに、一部に丹塗の痕跡が残っていた。その他の遺物は、流入土や埋土、あるいはその他の廃棄物中に混在していたと推定される。丹塗磨研で鋤形口縁の高環の坏部破片(645)、「く」の字屈折口縁の粗製甕の破片(641)、L字屈折口縁の粗製甕の破片(642)、おそらく屈折口縁の粗製甕の底部破片(643・644)、甕か広口壺用の蓋の破片(646)がある。「く」の字屈折口縁の粗製甕の破片は(641)、頸部直下に断面三角形の突帯がめぐる。なお、鋤形口縁の広口壺の大きな破片は、口縁端部が外傾していることから、須玖Ⅱ式土器に相当する。石器類・石製遺物には、磨石(647)と火山性の発泡軽石(648)がある。後者は、縦12.1cm・横12cm・厚さ7.4cmもある大型品でありながら、重量が極めて軽く214.2gしかない。表面には鋭い工具痕があり、軟質であるという特性をいかした研磨具等の用途が想定される。

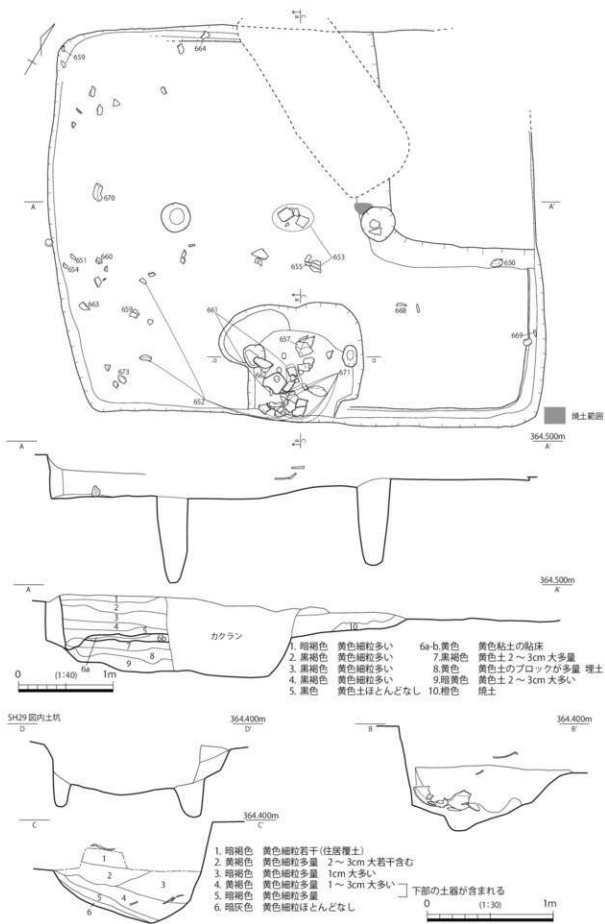


第243図 SH39出土遺物実測図

SH29 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の南部にあたり、区画でいえばIE17区・IE18区・IE27区・IE28区の交点付近に位置し(第104図)、前述したSH39を切る関係にある(後行)。SK53からSH38まで東西に並ぶ竪穴建物跡・土坑の一つである。付近は比較的に平坦な地勢である。SH29の平面形は、隅丸長方形である(第244図)。その規模は、長軸(東西)515cm、短軸(南北)417cmで、その面積は約21.2㎡である。長軸の方位は、N-61°-Eである。貼床面までの深さは、約40cmであるが、貼床・整地土の厚さは約8cm以上ある。このSH29の堆積土では、SH39の堆積土である7～9層を除き1層～5層・10層・11層を確認した。なお、6a層・6b層は整地土である。壁の立ち上がり角度は、南東壁78°・南西壁83°である。柱穴は、主柱穴2基からなり、東側の主柱穴は、東壁から内側へ167cm、南壁から内側へ213cmの場所に位置するが、西側の主柱穴は西壁から内側へ135cm、南壁から内側へ204cmの場所に位置しており、その主柱穴間は215cmである。この主柱穴軸のラインは、N-62°-Eであり、竪穴建物跡とのねじれはほとんどない。なお、東側の主柱穴の西に接する床面上に赤化した被熱痕がある。その位置からすると、炉跡である可能性はないが、やや離れた位置に炉跡が位置することを示しているのかもしれない。この他、北側両部よりに「ベッド状遺構」がある。その規模は、上面：長軸230cm、短軸152cm、下裾端部：長軸約250cm、短軸190cmである。「ベッド状遺構」の上面での面積は、約3.3㎡である。

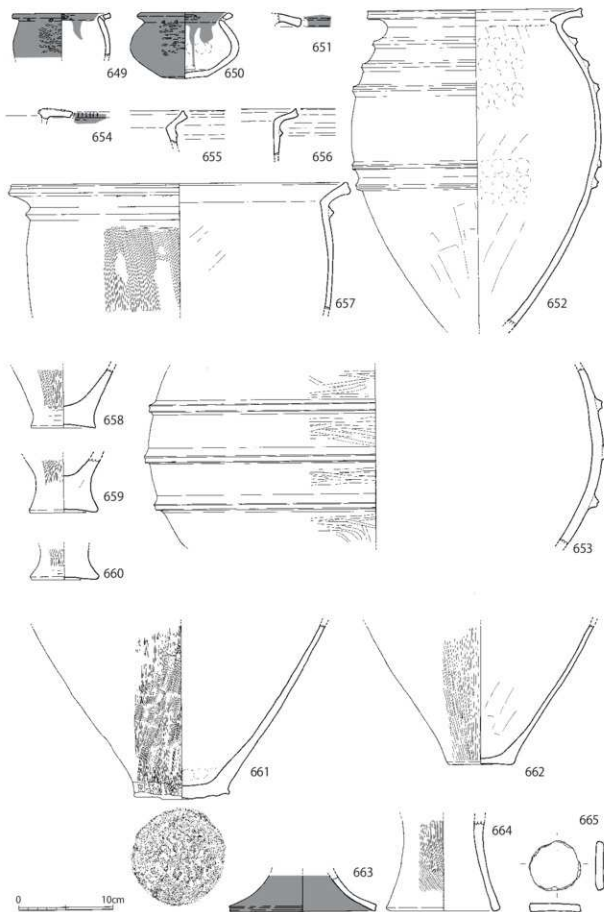
〈土坑〉南東壁沿いに「胎盤収納」用の土坑がある。この土坑は、最大幅152cm・壁までの奥行137cm、深さ54cmを測る。他の竪穴建物内の「胎盤収納」用土坑でしばしば見られたように、壁から離れた内よりの幅が広いことと、土坑中央部を挟む2基の柱穴がある。2基の柱穴間は104cmで、柱穴の深さは24cm、28cmである。これらの柱穴は、主柱穴に対する補助的な機能を持っていたことが考えられるが、土坑とセットになるため、それとの関係も考えられる。この土坑内の堆積物には、格別顕著な炭や焼土が含まれていないことと、燃えやすい上部構造に近く、炉跡ではありえない。したがって土坑を挟む柱穴は、何か棚状のものを設置するための支柱的な機能を持っていたことが想定される。以上が、竪穴建物跡内の主要遺構であるが、その配置をみると間取りが画されていることがわかる。まず主柱穴の延長上の空間では、「ベッド状遺構」とその西側の空間に区分できる。「ベッド状遺構」とその西側の空間の面積は、約6.4㎡である。主柱穴の南側では、「ベッド状遺構」の南側に「胎盤収納土坑」の東側に挟まれた部分、南側の「胎盤収納土坑」と主柱穴に挟まれた部分、「胎盤収納土坑」の西と主柱穴に挟まれた部分に区分できる。

〈遺物〉柱穴間の中央に土器片を一塊に廃棄した部分がある他は、その周囲、西側の主柱穴の西で西壁沿いに土器片を中心に散漫な分布をしている。これらは混入・混在による分布とも思われるが、土坑内に一括廃棄された破片と接合する鋤形口縁で長胴の無頸壺があるので(第245図652)、一部は意図的に散布したのか、土坑への廃棄時にこぼれ落ちたと解釈するべきかもしれない。この無頸壺は、胴部上半に三条、下半に二条のM字突帯をめぐらせており、須玖Ⅱ式土器に相当する。その他、丹塗磨研で口径が約10cm程度になる小型の無頸壺がある。これには、蓋を括り付けるための穿孔がある(649・650)。この他の壺には、広口壺で球形の胴部破片があり、柱穴間で別個体の破片とともに一塊にして廃棄されていた(653)。この壺にはM字突帯が三条めぐっており、須玖Ⅱ式土器に相当する。屈折口縁の粗製甕の破片は、いずれも口縁直下に断面三角形の突帯がめぐり(655～657)。屈折口縁の粗製甕の底部破片には、底部の薄い例(658)と厚い例(659・660)がある。器種は不明であるが、丹塗磨研で鋤形口縁の破片がある(651・654)。その他、丹塗磨研の高杯の脚部破片(663)、丹塗磨研で杓子形土器破片(第246図673)、筒形器台(第245図664)、土器片利用の円形土製品(665)などがある。このうち丹塗磨研で杓子形土器は、四日市遺跡では本例以外に出土例はなく、使用頻度の少ない祭祀土器と考えられる。なお、杓子形土器という器種名については今後変更され

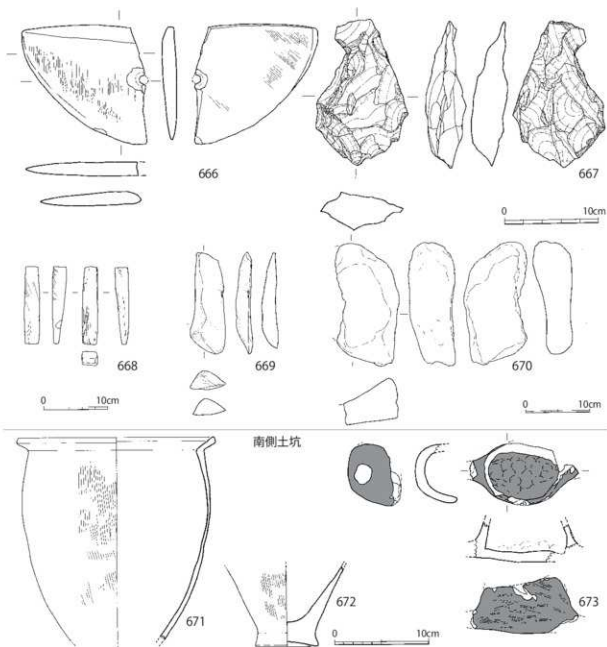


第244図 SH29実測図 (1/40・1/30)

第3章 調査の成果

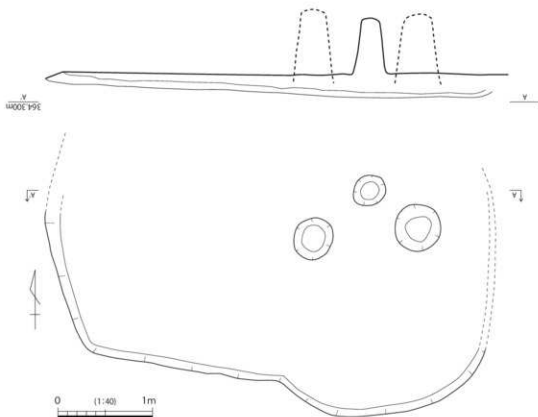


第245図 SH29出土遺物実測図①



第246図 SH29出土遺物実測図②

る可能性がある。石器類には、石包丁(第246図666)、小型柱状ノミ形石器(668)、礫石の破片(669)、礫石(670)、旧石器時代遺物の混入品かとも推定される石核(667)などがある。屋内土坑内からは、屋内土坑外とは違った出土状況が観察された。土坑内で観察された層は、1層から6層までであるが、このうち1層と2層は土坑外の4層もしくは5層に由来すると推定している。また3層~6層までが流入土であり、3層を除いて床面側から流入している。これらの土器は、土坑内層位の4・5層から出土しており、完全に埋没していた。出土した土器は、おそらく5、6個体前後の土器の大破片が密集状態で廃棄されていた。廃棄した段階に、既に5層が堆積しつつあったことがわかる。それらは、完全に復元できるものではなく、器体のどこかが欠けた大破片で、最終的に片づけられ、壁際の土坑に廃棄されることが想定できる。土坑内から出土した土器には、上記した鐏形口縁で長胴の無頸壺(652)、おそらく屈折口縁で断面三角形の突帯がめぐるとともに胴が張ると思われる甕の胴部下半から底部にかけての破片がある(661・662)。



第247図 SH38実測図 (1/40)

SH38 この竪穴建物跡は、中部地区遺構群の南部にあたり、区画でいえばイE17区・イE27区にまたがる場所に位置する(第104図)。SK53からSH38まで東西に並ぶ竪穴建物・土坑群の東端に位置する。あたりは比較的に平坦であるが、僅かに北側が高く南側が低い地勢である。SH29の平面形は、隅丸長方形であるが(第247図)、北半分の残りが極めて悪い。その規模は、長軸(東西)約480cmであるが、短軸(南北)は明確ではない。貼床面までの深さは、最大で約25cmである。柱穴は、3基を確認したが、竪穴建物との位置的な関係は分からなかった。柱穴は、いずれも60cm～70cmの深さがあるしっかりとした柱穴である。

〈遺物〉 特記する遺物は出土しなかった。

3 弥生時代中期後半の遺構と遺物 -南西部遺構群- (第248図)

四日市遺跡の南西部遺構群は、第1次調査区のなかでもグリッド番号イE26区中部とイE30区中部を結んだラインの南側に分布する一群である。この地区の南西部は、次第に高度を上げていく傾斜面であり、調査を行った遺構と時間切れで未調査のままで終了した遺構が入り混じっている。この地域は、第3次調査として調査が行われた地区の一部で、次年度以降に報告書が刊行される予定である。主な遺構は、竪穴建物跡、溝、土坑であるが、あまり多くない。とりわけ、竪穴建物跡は、6基だけで、そのうち大型例が3基、中型例1基、小型例が2基だけの歪な構成となっている。SD1の南に平行するように祀堂とも目される大型掘立柱建物跡が位置しており(イE50区付近)、祭祀空間が広がっている。

SH25 この竪穴建物跡は、南西部地区遺構群の北東部にあたり、区画でいえばイE36区に位置する(第248図)。このあたりは崖に近い部分にあって、東側の珍珠盆地の眺望がよいところである。SH25は、先行するSH26が埋没後に、その中央部分に掘り込まれており、平面形は、隅丸長方形である(第249図)。その規模

は、長軸465cm、短軸387cmで、その面積は約17.8㎡である。長軸の方位は、N-51°-Eである。貼床面までの深さは、約80cmであるが、貼床・整地土の厚さは未調査である。このSH29の堆積土は、1層～14層を確認した。このうち南側隅部の堆積が乱れており、8層から12層は埋土である。その他は、流入土である。壁の立ち上がり角度は、長軸（北東）壁71°・短軸（北西）壁87°・短軸（東南）壁79°である。

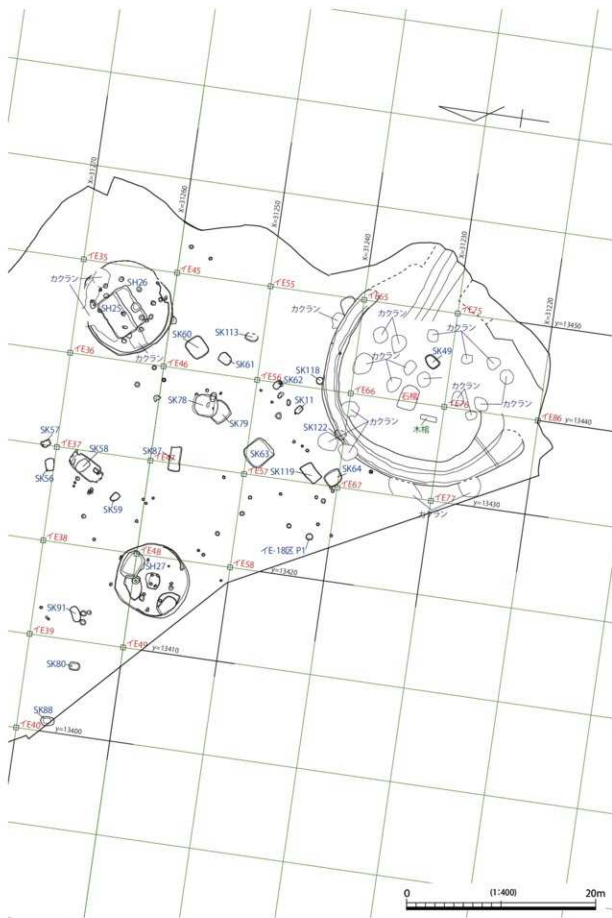
〈柱穴〉 主柱穴1基からなり、長軸北東壁から内側へ230cm、長軸西南壁から内側へ230cm、短軸北西壁から内側へ185cm、短軸東南壁から内側へ195cmの場所に位置しており、ほぼ竪穴建物跡の中央に位置している。

〈炉跡〉 主柱穴と西南壁との間の床面上に赤化した被熱痕がある。その位置からすると、炉跡である可能性が高い。

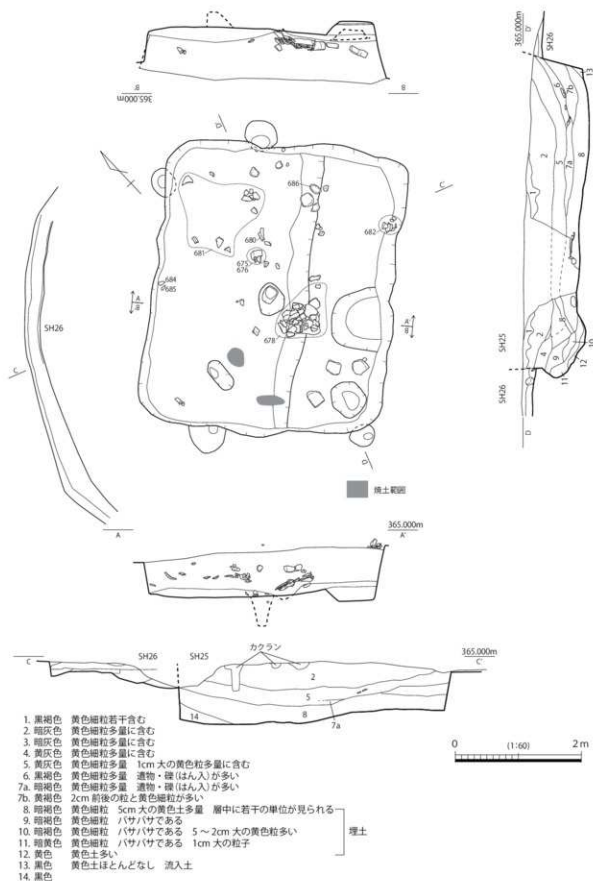
〈ベッド状遺構〉 主柱穴の東南に隣接し、東南壁沿いに平行する一段高いという意味で「ベッド状遺構」に相当する高い部分がある。その規模は、上面：長軸約425cm、短軸約115cm、下裾端部：長軸約425cm・短軸約145cmである。「ベッド状遺構」の上面での面積は、約4.6㎡であり、低い床面からの高さは約20cmである。

〈土坑〉 「ベッド状遺構」の上面には、2基の土坑が掘り込まれている。一つは、「胎盤取納土坑」と呼ばれた土坑であり、この土坑によって「ベッド状遺構」は二つに画されている。この「胎盤取納土坑」は東南壁に接するように配置されており、平面形は半円形を呈し、壁沿いに接続する幅が約105cm、壁から竪穴建物跡の内側方向への幅が80cmである。その深さは23cmである。もう一つの土坑は、東南壁と西南壁が接する南側隅部に掘られている。この楕円形の土坑は、長軸57cm、短軸52cmで、深さは約15cmと浅い。この隅部の土坑内からは何も出土しなかったが、その外側（竪穴建物内側）に接するように約25cm前後の幅を有する台石状の配石が設置されていた。「ベッド状遺構」に平行する一段低い床面上には、主柱穴の他に浅い窪みと上記した炉跡の可能性のある部分があるだけで、他に特徴はない。しかし、一段低い床面は、約9㎡の広さを有する主要空間である。

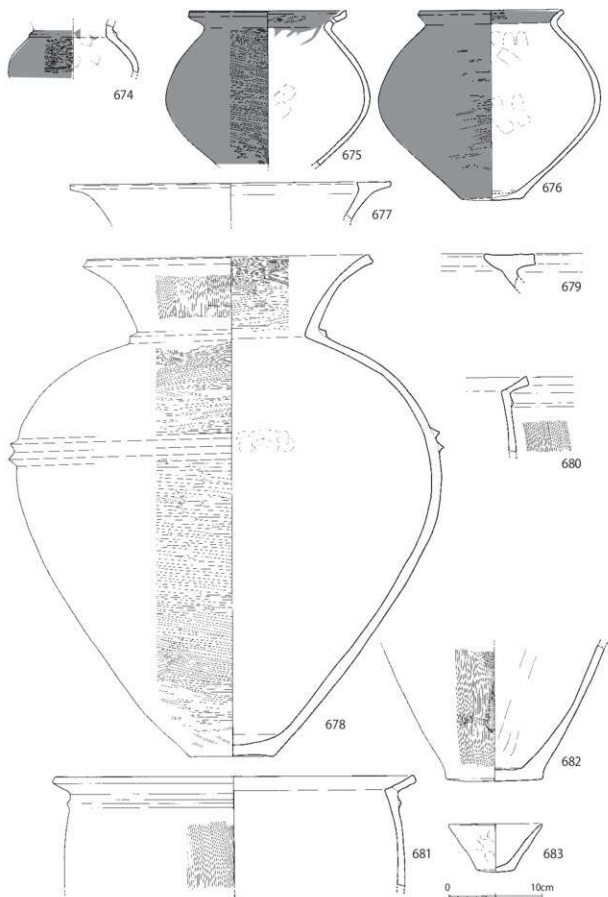
〈遺物〉 ほとんどの遺物が、流入土が堆積する中で、廃棄・流入している。主柱穴と北側隅部間の2層下部で、150cm×140cmの範囲に「く」の字屈折口縁の粗製甕破片が散在しており（一部破片が密集）（第250図680・681）、有機質的なものと一緒に廃棄したため、散在する分布となったのだろう。ほぼ同様な場所の2層下部では他に丹塗磨研で球形削した屈折口縁の無頸壺2個体が折り重なった状態で廃棄されていた（675・676）。5層では、屈折口縁の粗製甕と思われる底部破片を一塊にして東南壁際最上部の2層、もしくは5層に廃棄されていた（682）。他に5層では北東部斜面部の上方で、3点の礫が一塊に廃棄されていた。この中には、大型楕円形の台石が含まれていた（第251図686）。一個体分の素口縁で広口の口頸部が短く開きながらつく短頸壺の大きな破片が（第250図678）、積み重ねられた状態で床面よりやや浮いた8層中位から出土した（「ベッド状遺構」と下面部との境界にあたる斜面部）。更にこの短頸壺は、口頸部の付け根が開き、外側に張る胴に二条の三角突帯がめぐるとの特徴もあり、須玖1式土器に相当すると考えたい。北西壁に接する14層中位では、破損した石包丁（第251図684）と扁平両刃の鏝（685）が近接して出土している。ばらついた出土状況からすると、廃棄にあたって投げ捨てたのではなく、並べ置いたという状況である。なお破損した石包丁は、斜行する破損部に直交するように磨きを加え、角を除去するなどのリダクションがみられる。また、出土層位は記録されていないが、おそらく丹塗磨研で脚付直口壺の破片（第250図674）、鋤形口縁で長胴の無頸壺の破片（679）、鋤形口縁が未発達な広口壺の破片（677、須玖1式土器）、小型の鉢（683）などがある。その他、後述するSH26との接合関係の認められたものに、丹塗磨研で碗形の坏部をもつ高坏（第251図687）、筒形器台（688）がある。各層で廃棄・流入した遺物であるが、全体的に須玖1式土器段階に相当する可能性が高い。



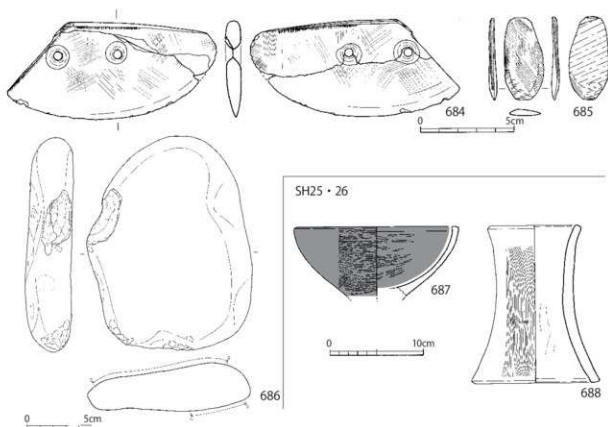
第248図 四日市遺跡第1次調査区 西南部遺構群詳細分布図(1/400)



第249図 SH25実測図 (1/60)



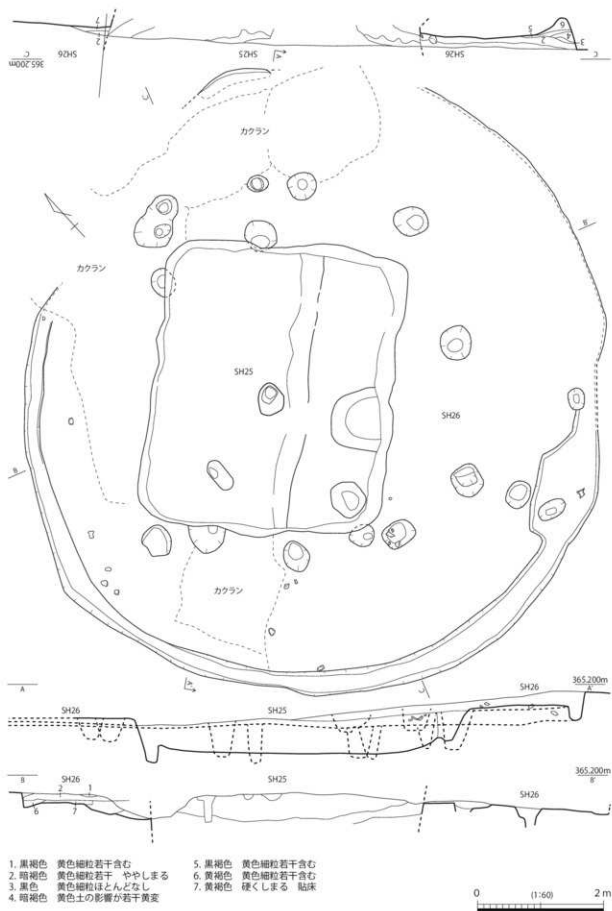
第250図 SH25出土遺物実測図①



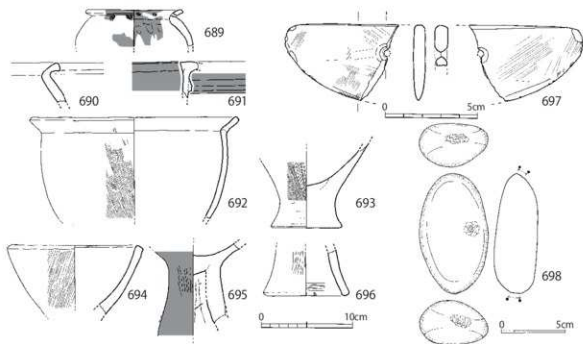
第251図 SH25出土遺物実測図② SH25・SH26出土遺物実測図

SH26 この竪穴建物跡は、南西部地区遺構群の北東部にあたり、区画でいえばE36区に位置する（第248図）。このあたりは崖に近い部分にあって、東側の玖珠盆地の眺望がよいところである。SH26が埋没した後の中央部に後行するSH25が掘り込まれる。SH26の平面形は、楕円形で（第252図）、その規模は、長軸993cm、短軸920cm、面積約71.75㎡である。貼床面までの深さは、最大で20cmと極めて浅く残りが悪い。貼床・整地土の厚さは約5cmである。このSH26の堆積土は、1層～6層を確認した。台地の東端部に位置することもあって、SH26の東半部の残りが悪く、竪穴建物跡の外形ラインは痕跡程度である。西半部もかろうじて壁周溝の残存によって外周が分かる程度である。支柱穴は、8基からなるが、北側に柱穴はなく、最も近い支柱穴で510cmの間がある。壁と支柱穴までの距離は、南側で200cm程度空いているが、北側は不明瞭ながら約90cm前後である。支柱穴の深さは、50cm～60cm前後と深い。この他、施設的な装備としては石台が東側の壁から内側へ150cmのところにかけていた。この石台は、長さ幅とも約50cmをはかる巨大なものである。

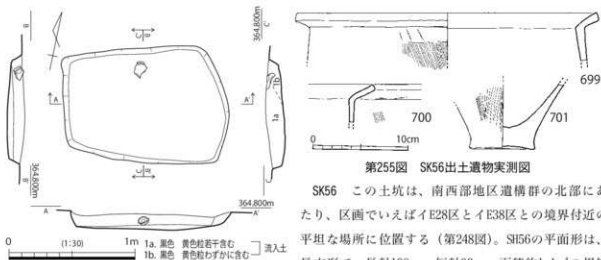
〈遺物〉 遺物の出土状態は、その全てが散漫な分布をした小破片であり、破損した残骸であれ、部分的に集中するという事はなかった。壺には丹塗磨研の無頸壺（第253図689）と、そうでない無頸壺（690）の破片があった。この小型の無頸壺は、口縁部を曲げて作出した屈折口縁で、胴部は球形である。丹塗磨研で錐形口縁の甕の小破片もある（691）。この他、甕には屈折口縁で粗製甕の底部があるが、厚いのが特徴であり、須玖1式土器に相当する。高坏は、椀形の坏部破片（694）と見込み部分から脚部上位の破片がある（695）。とりわけ後者の見込み部の接合を見つと充填しており、武末純一のいうB技法に相当する。鉢は、屈折口縁の例がある（692）。その他、筒形器台（696）、石包丁の破損品（697）、敲石（698）がある。



第252図 SH26実測図 (1/60)



第253図 SH26出土遺物実測図



第255図 SK56出土遺物実測図

第254図 SK56実測図 (1/30)

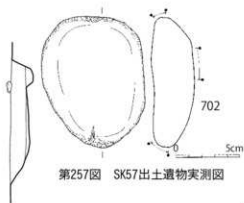
10cmと極めて浅い。こうした土坑は上面が削られていたとしても、元々浅い土坑であったことが考えられる。土坑内の堆積土は調査していない。

〈遺物〉 極めて小規模で浅い土坑ながら、土器片が少量出土している。出土した土器片は全て、「く」の字屈折の粗製の甕と(第255図699・700)、その底部破片である(701)。口径復元した例も13cm×7cmの小破片で、その他の破片を含めて流入と推定される。

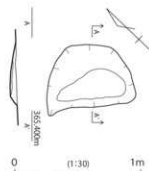
SK57 この土坑は、南西部地区遺構群の北部にあたり、区画でいえばE27区とE28区との境界付近の平坦な場所に位置する(第248図)。SK56は、SK57の東100cmの場所にあたる。SH56の平面形は、長方形を基本とするが、北西端部付近が鍵形状に歪な形をしている。土坑の規模は、長軸102cm、短軸70cm、面積約0.63㎡の規模を有する。長軸の方位は、W-34°Nである。深さは、最深で15cmと極めて浅い。壁の立ち上がり角度は、北西壁(長軸)65°・南東壁(長軸)55.5°・北東壁(短軸)66.5°・南西壁(短軸)75.5°である。この土坑は上面が削られていたとしても、元々浅い土坑であったことが考えられる(第256図)。土坑内の堆



第256図 SK57実測図 (1/30)



第257図 SK57出土遺物実測図



第258図 SK92実測図 (1/30)

横土は、埋土が1層のみである。土坑内部には、北東側が高く、南東側が低い段が長軸に平行するように形成されている。また北西端部の壁際に直径18cm・深さ6cmの穴がある土坑利用上の支柱などをたてていたのだろう。

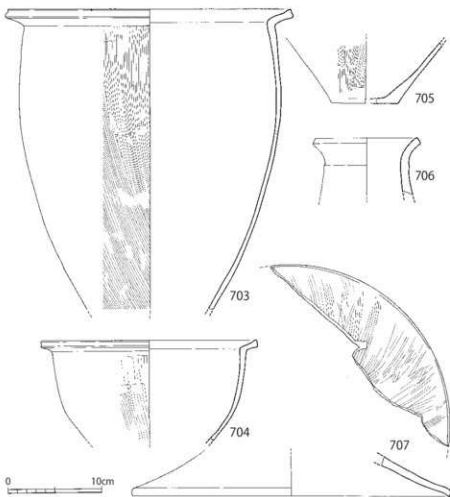
(遺物) 土坑内北西部の壁際付近の検出面で、埋土内に蔽石が

1点出土した(第257図702)。

SK92 この土坑は、南西部地区遺構群の北部にあたり、区画でいえばイE37区とイE47区との境界付近にあたる(第248図)。SH9の平面形は、長方形を基本とし、半月形の浅いピットである(第258図)。

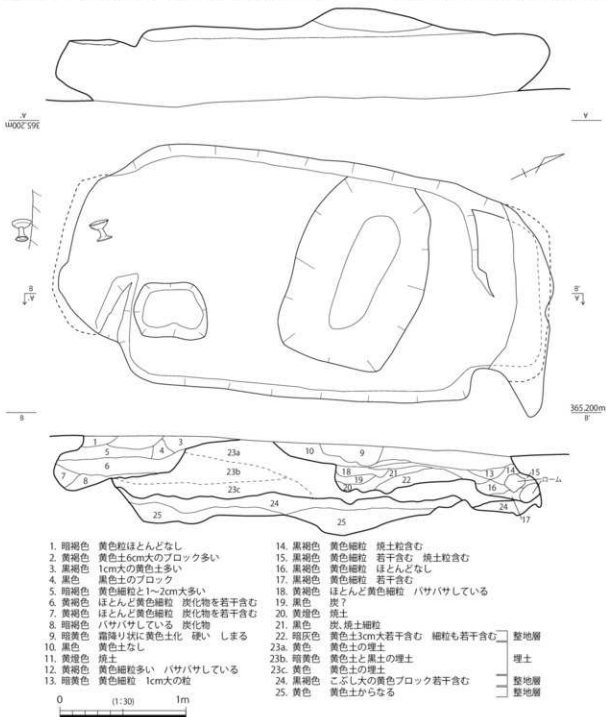
〈遺物〉「く」の字屈折の粗製甕(第259図703)、「く」の字屈折の鉢(704)、「く」の字屈折の鉢(704)、「く」の字屈折の鉢、もしくは粗製甕(705)、筒形器台もしくは長頸壺の破片(706)、甕の蓋(707)などがある。

SK58 この土坑は、南西部地区遺構群の北部にあたり、区画でいえばイE38区に位置する(第248図)。このあたりは比較的平坦な面である。SK58は、検出面の平面形が円形を基調とした土坑で(第260図)。SK58の規模は、長軸340cm、東西190cmである。面積は約4.5㎡である。壁の立ち

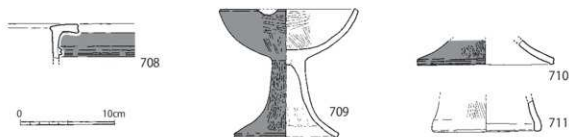


第259図 SK92出土遺物実測図

上がり角度は、長軸側の小口で20cm～25cm程度奥行きが長く、湾曲するようにオーバーハングしている。最下底部は凹凸があるが、24層・25層の整地土で整地している。堆積土は、1層～23c層までである。堆積土の状況から2時期に区分できる。まず遺構内が23a層・23b層・23c層等の黒土と黄色土の埋土で、土坑内を埋める。その後、北側と南側長軸方向の小口側の埋土である23層・24層と部分的にローム層を再度掘削している。この掘削部分を再び埋めた埋土が1層～22層である。これらの埋土の中には、6～8層・14層・15層・19層・20層など炭や焼土が著しく多い土が廃棄されていた。この土坑の最大の特徴は、長軸の端部が横穴状に抉れるというオーバーハング状況にある点だろう。更には、流入土が堆積する間もなく、土坑を意図的に埋めていることにある。後述する、祭祀用の高坏をオーバーハング内に安置して埋めたことが機能を暗示している。



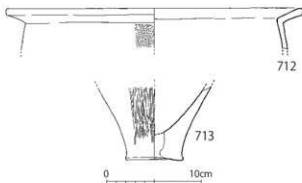
第260図 SK58実測図 (1/30)



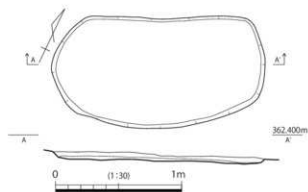
第261図 SK58出土遺物実測図



第262図 SK59実測図 (1/30)



第263図 SK59出土遺物実測図



第264図 SK91実測図 (1/30)

示しているのかもしれない。この土坑においては、埋めるまでの機能、埋めたことの意味、再び掘削・埋めたことの意味等、機能にまつわる行為の痕跡を内包している。

〈遺物〉半球形直口の丹塗磨研の高坏は、緑を意図的に欠いたのか、アクシデントで欠けたのか明確でないが、ほぼ完形品が出土している(第261図709)。この高坏は、南側小口のオーバーハング内(当初は奥行きが約40cmあったが、調査中に崩落)

に横倒し状態にして整地土(24層)上面に遺棄されていた。他は、丹塗磨研の甕破片(708)、高坏の脚部破片(710)、筒形器台の破片(711)が出土している。

SK59 この土坑は、南西部地区遺構群の北部にあたり、区画でいえばイE38区に位置する(第248図)。このあたりは比較的平坦な面が広がっている。SK58は、検出面の平面形が咽円形を基調とした土坑で(第262図)、その規模は、長軸105cm、東西71cm、面積は約0.5㎡である。長軸の方は、W-49°Nである。深さは、最深で17cmと極めて浅い。壁の立ち上がり角度は、西壁(長軸)53°・東壁(長軸)65°・北壁(短軸)63°・南壁(短軸)47°である。土坑内の堆積土は、流入土が1層のみである。

〈遺物〉「く」の字屈折口縁の粗製甕の破片と(第263図712)、同様な粗製甕の底部破片(713)が混在して出土した。後者は、僅かに上げ底で厚いので、須玖I式土器であろう。

SK91 この土坑は、南西部地区遺構群の北西部にあたり、区画でいえばイE39区に位置する(第248図)。このあたりは比較的平坦な面が広がっている。SK58は、検出面の平面形が咽円形を基調とした土坑で(第264図)、その規模は、長軸170cm、短軸86cmである。面積は約1.2㎡である。長軸の方は、W-49°Nであ

る。深さは、最深で6cmであり、検出面が削られていたとしても元々浅かったのだろう。堆積土は、観察していない。

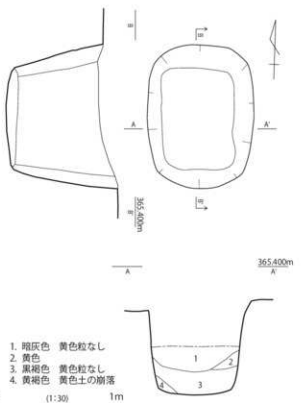
SK80 この土坑は、南西部地区遺構群の北西部にあたり、区画イE40区に位置する(第248図)。このあたりは比較的に平坦な面が広がる。SK80は、検出面の平面形が小判形の隅丸長方形を基調とした土坑で(第265図)、その規模は、長軸113cm、東西85cmである。面積は約1.36㎡である。長軸の方位は、 $W-2^{\circ}-N$ である。深さは、最深で90cmと極めて浅い。壁の立ち上がり角度は、西壁(短軸) 83° ・東壁(短軸) 83° ・北壁(長軸) 75° ・南壁(長軸) 81° である。土坑内の堆積土は、掘削途中から観察を開始し、流入土を4層確認した。

(遺物) 土器および土製品には、「く」の字屈折の粗製甕の破片(第266図714)、壺かと思われる底部破片(715)、素口縁の鉢の破片(716)、筒形器台の破片(717)、丹塗磨研の把手(718)、土製投弾(719)がある。石器及び石製品には、砥石が1点ある(720)。砥石は、現代のものときほど変わらず、鉄製品を研ぐためのものと考えられる。

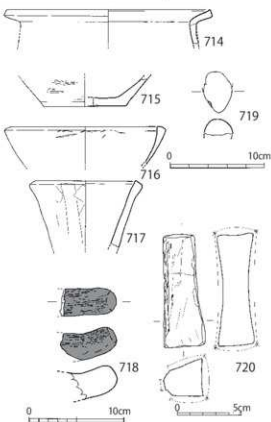
SK88 この土坑は南西部地区遺構群の北西端部に位置し、区画はイE40西部に位置する。平面形は楕円形で、長軸143cm、98cm・面積約1.1㎡の規模を有する。その深さは96cmである。遺物は出土していない。

SH27 この堅穴建物跡は、南西部地区遺構群の北西部にあたり、区画でいえばイE39区・イE49区に位置する(第248図)。調査区の南東にあつて、台地東側の崖際から40m西へ入った部分である。検出面の平面形は円形である(第268図)。やや形が歪な円形であるが、南北が780cm、東西が790cmである。内側の壁際ラインの平面形も基本的に検出面の形に連動する。検出面から貼床面までの深さは56cmで、標高が365.45mから365.50mの間にある。

(柱穴) 規則的に並ぶ柱穴は6ヶ所の主柱穴が確認できた(第268図)。これに付属的な柱穴については1ヶ所ある状況と考えられるが、貼床を全て除去することには

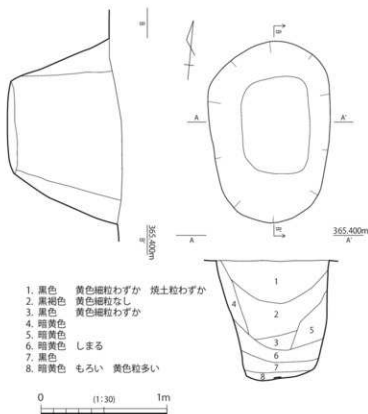


第265図 SK80実測図 (1/30)



第266図 SK80出土遺物実測図

及ばず、正確な構造をつかんでいない。炉跡の北側に位置するはずの柱穴は、貼床除去後に現れた土坑の掘り下げ時に確認した。柱穴の並び方は、平面配置が六角形の頂部に柱穴を配置したような状態で、さらに竪穴建物跡の外形線から150cm～180cm内側に柱穴の中心がくるようにしている。これらの柱穴は、その位置により北柱穴、北東柱穴、南東柱穴、南柱穴、南西柱穴、北西柱穴と貼床面で観察された柱穴の直径は、最も小さいもので20cm、大きいもので約50～60cmある。南東の小さい柱穴は、内部を掘り進むと深さ10cm前後のところで広がる状況にある。これは本来、より直径の大きい穴を掘り、柱を立て、埋土で埋め、その後に貼床土・整地土で床面整地していることに起因している。要するに床面上で



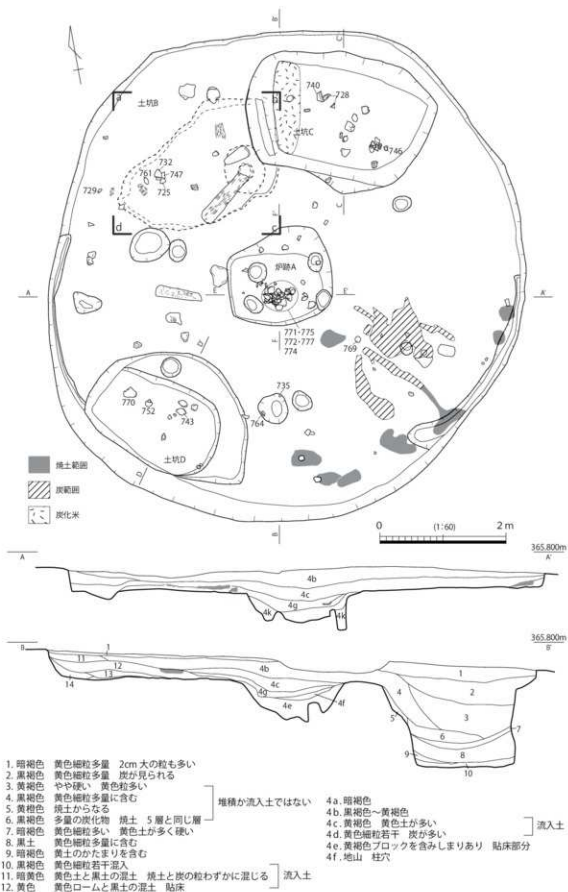
第267図 SK88実測図（1/30）

観察された直径20cmの穴は柱の大きさにほぼ等しいと言える。押図上で大きい穴は、内部の土を掘る中で貼床土・整地土などの上位部分を掘り広げたことも大きい。

なお部分的に貼床を除去した部分では、北東柱穴の西側、南柱穴の西側にも柱穴があった。これらの柱穴は貼床を除去すると黒色系土が現れ、これを除去した段階で確認したが、このことから貼床を除去した後に見つかった柱穴は貼床下の炉跡、北西の土坑などで見られる二重構造と係る柱穴であろう。つまり住居利用の最終段階以前の、竪穴建物跡利用の当初段階の床面造作に係る柱穴と推定したい。

〈北西側の土坑〉この土坑は、貼床下の面に掘り込まれ、貼床後に掘削された北東側の土坑に切られる関係にある（第268図・第269図中段/下段）。北側の土坑は、長軸280cm、短軸170cm、深さ70cmの規模をもつ。土坑内には1層から7層までの層があった。6、7層は炭化物ブロックを少量含む整地層である。3～5層は埋土である。3層の上面（床面からの深さ約20cm）で長軸75cm、短軸63cm、深さ52cmの楕円形の北側支柱穴が見ついている。この柱穴状遺構の深い部分は、土坑の底面にほぼ同じである。2層は竪穴建物跡使用の休止期に黒褐色の土が流入したことを示す流入土である。2層の上に1層の貼床がくる。この土坑最上部の1層は、土坑外の竪穴建物跡床面と最終的には同じ平面上の床面として利用されているが、貼床の形成時期は遅れる可能性が高い。

〈北東側の土坑〉竪穴建物跡内北側の土坑は、長軸300cm、短軸240cm、竪穴建物跡床面からの深さ135cm（標高363.6m）の規模をもつ（第270図上段）。内法は長軸240cm、短軸145cm、平面形は外形に規制された扇形である。土坑内には1層から7層までの層があった。土坑内の断面観察では1～11の層が識別できた。土坑内の各層は、竪穴建物跡廃絶直後から流入土によるレンズ状堆積であり、埋土は見られない。土坑内堆積物の上半部は直接土坑外堆積層に連続する層さもある。この土坑内堆積物の上半部で竪穴建物跡床面と同じ



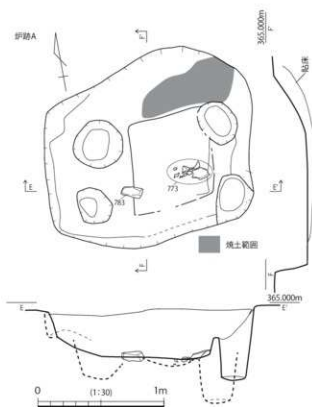
第268図 SH27実測図① (1/60)

レベール付近に床面とした硬化面は観察されなかった。竪穴建物跡の壁面と土坑上部の肩部との間は、約25cm幅の間隔がある。したがって、この部分を含めた土坑周囲の竪穴建物跡内の床面上に木材を差し渡していたと推定できる。土坑の床面には若干の黄色土（ローム層を掘った際の残り土）で整地しており、概ね平らである。土坑底部の11層は、炭化物が多く、土坑北側小口の土坑床面には炭化した初付きの米が大量に出土した。このことから焼失前の土坑内には米などの食品しかなかったことになる。SH27の構造物が焼失した際に米などが蒸焼き状況になって、残ったことになる。土坑内部の流入土の中で遺物がややまとまって出土したのは8層～10層であり、床面直上の11層にはほとんどない。焼失し、住居が廃絶した後、黒色土が流入し始め、その早い段階において竪穴建物跡の外方向からの流入土に土器破片が混入している。土器破片は比較的に大きい破片が多いが、完全に復元できるような例はない。また土器片は総量的には多くなく、平面分布も格別多いとはいえない状況である。したがってどのような状況で流入したかはやや明確でなく、竪穴建物跡の外側から遺物が流入したか、有機物を含むものなどと共に土器片を塵捨場としての竪穴建物跡内土坑に廃棄したことも考えられる。なお土坑の5層は、SH27全体の共通の層番号の4層に対応する。

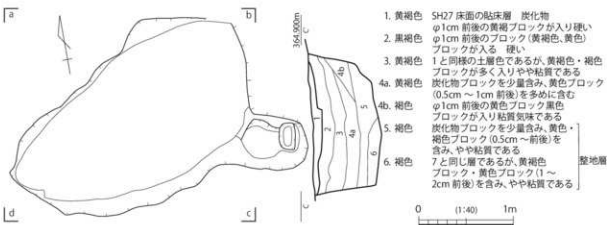
〈南西側の土坑〉 竪穴建物跡内南西側土坑の外法は、長軸275cm、短軸187cm、竪穴建物跡床面からの深さは1段目約35cm（標高364.6m）、2段目土坑の深さ約75cm（標高約364.15m）の規模をもち、外側の形は竪穴建物跡の外形に規制された扇形である（第270図下段）。2段目を含めた1段目の内法は、外法より10～20cm縮小した大きさである。土坑の西側壁面と竪穴建物跡壁面とは連続しているが、土坑断面図を見ると連続部分が急斜面ではなく、僅かに緩斜面となっている。本来、この部分と土坑周囲の竪穴建物跡床面とを木材で差し渡していたと推定できる。また竪穴建物跡北側と西側方向とに偏る状況で、2段目土坑を掘り窪めている。2段目の土坑は、長軸218cm、短軸137cm、深さは上述したとおりである。これらの段によって土坑内の南側壁から東側壁に沿って三日月形の平面形を持つ断面が階段状となっている。実は、1段目の土坑が掘り窪めて利用されてから更に深く掘り窪めたのが2段目の土坑である。つまり1段目の土坑の底部である上述の三日月状部分に、土坑構築時の整地層である10層が15cmの厚さで残っており、この整地層を切るように掘り窪めたのが2段目土坑であることから分かる。10層は黄土と黒土の混土である。2段目土坑底面の整地層は断面図に記していないが、11層とするべき10cm前後の整地層が8層下位にある。

土坑内の底部付近に流れ込みでない遺物について明確なものはない。遺物は、竪穴建物跡廃棄後に、その中央部方向から流れ込んだ流入土の中に含まれていた。その為、土器片は傾斜する層に合わせて傾いた状況であった。

〈炉跡〉 炉跡と考えた中央部土坑の平面形態は五角形であるが（第269図上段）、概ね南北に主軸をとる長方形であると考えられ、長軸162cm、短軸150cmの規模である。この中央部土坑は床面からの深さが27cm、標高が364.75m付近に土坑底面があり、ここに4j層と呼ぶ厚さ数cmの暗褐色粘土を貼っている。竪穴建物跡床面と接する部分には4j層の貼付けが途切れる部分もあるが、4j層の上面には竪穴建物跡内から土坑内に連続する流入土が堆積している。炉跡内から原形を留めない程に破損した土器破片40数片が火山性発泡軽石と共に集中した状況で見つかった。この土器群が含まれる4g層は炉址外から流入する土であるが、炭粒が多い。4g層を除去すると4j層の貼り床状の堅い層となる。4j層を除去すると、4k層となる。この4k層は黄褐色のローム質土であることから考えて、炉跡内の整地土と推測される。この土坑内底部には土坑の形にあわせるように4本柱穴が見うけられるが、炉跡内の貼り床状の堅い層の上面か、4k層：整地土下部の遺構掘削面であるのかの判断は調査時の観察ミスから不明である。しかし、地層断面図をみる限りにおいては4k層：整地土下部の遺構掘削面からの掘込みである。この炉跡内柱穴は、2基ずつ東西に分かれて、



上図は3層の焼土上面にピットが掘られた状況である
レベルは3層土面のレベル
2層は流入土と認められ焼土が層状に観察される



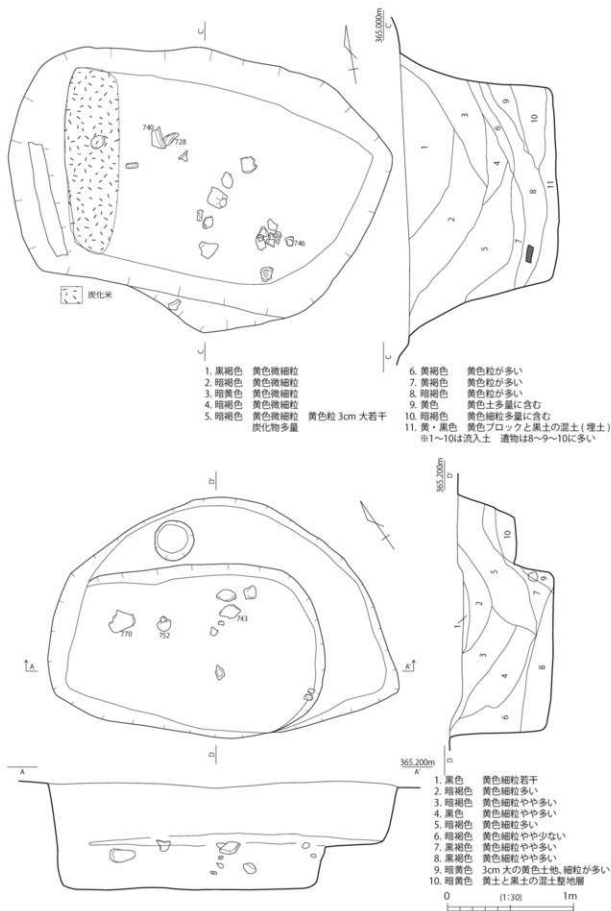
1. 黄褐色 SH27床面の粘床層 炭化物
φ1cm 前後の黄褐色ブロックが入り硬い
φ1cm 前後のブロック(黄褐色、黄色)
ブロックが入る 硬い
 2. 黒褐色
 3. 黄褐色 1と同様の土層色であるが、黄褐色・褐色
ブロックが多く入りやや粘質である
炭化物ブロックを少量含み、黄色ブロック
(0.5cm～1cm 前後)を多めに含む
 - 4a. 黄褐色
 - 4b. 褐色 φ1cm 前後の黄色ブロック黒色
ブロックが入り粘質気味である
炭化物ブロックを少量含み、黄色・
褐色ブロック(0.5cm～前後)を
含み、やや粘質である
 5. 褐色
 6. 褐色 7と同じ層であるが、黄褐色
ブロック・黄色ブロック(1～
2cm 前後)を含み、やや粘質である
- 整地層

第269図 SH27実測図②(1/30 1/40)

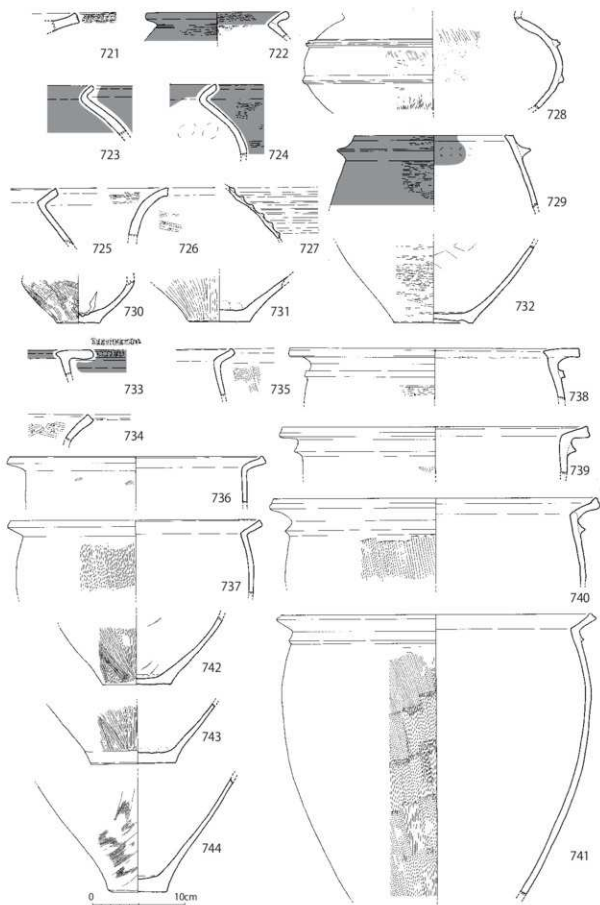
それぞれ柱穴中心部までの距離が70cm、80cmである。その東西間の距離は、柱穴の中心間の距離が130cmと150cmある。この炉跡内柱穴は、その配置からすると、炉を利用する上での機能と密接に関係していたことが推定される。例えば、建物構造とは関係のない「囲炉裏」状の仕掛けを構築するための柱穴であったことが考えられる。

〈構造物〉 竪穴建物跡の床面直上、その上部の流入土内に住居の上部構造であったと推定される部材が確認できた。北柱穴と北西柱穴の間で、両柱穴間方向に両端に向けた直径23cm、残存長100cmの巨大な炭下材が見ついている。北西柱穴と南西柱穴間では、竪穴建物跡外方向と炉跡方向に両端に向けた直径18cm、残存長73cmの炭化材が見ついている。この他、炭化材が集中するのは東西南北を基準として竪穴建物跡の炉跡と南東部間である。炭化材は5～6本と推定でき、直径は8～9cmである。炭化材の方向は概ね竪穴建物跡の壁と炉跡方向を向いている。この付近は橙色の焼土が多く、炭化材と共に出土している状況である。焼土の表面レベルは、竪穴建物跡壁方向が高く、炉跡方向が低くなるという勾配が観察される。このことから炭化材は外側から内側へ倒れ込んだ状況である。またこの領域にある南柱穴と南東柱穴には焼土が被っていた。

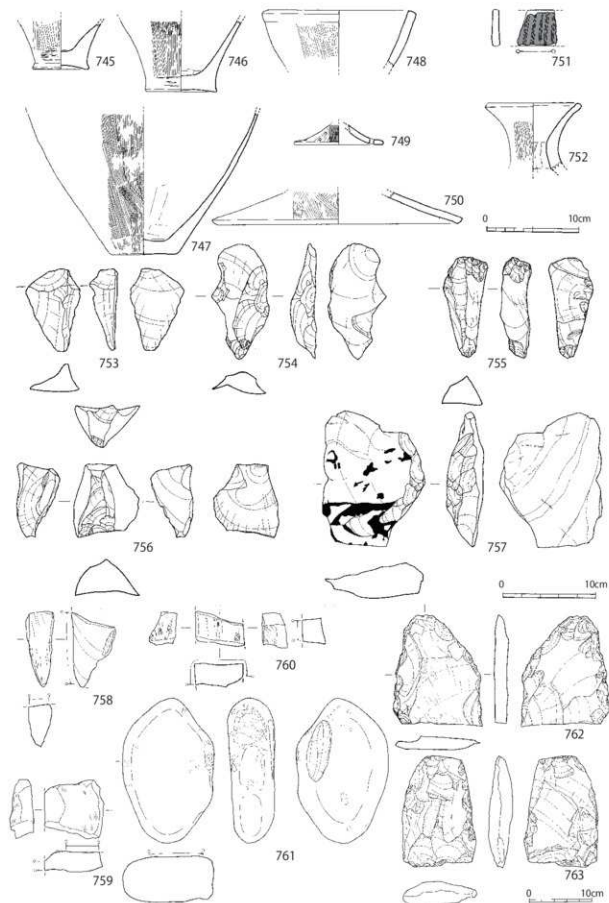
また明確な建築部材と確認できなかった



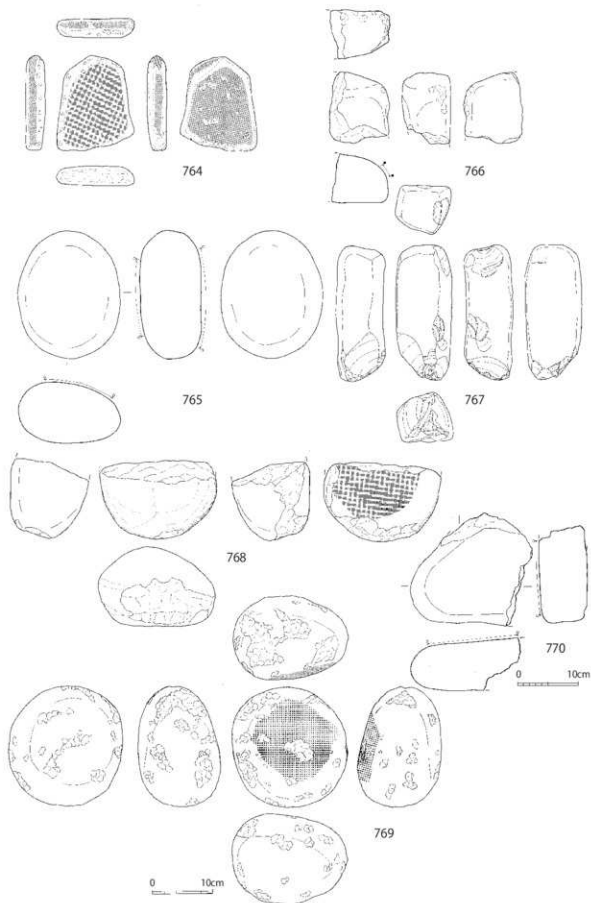
第270図 SH27実測図③ (1/30)



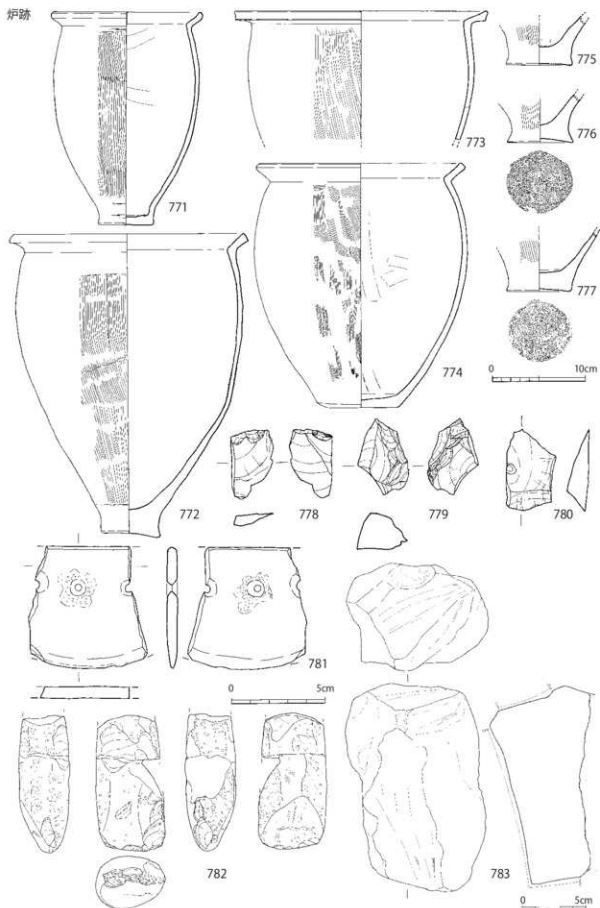
第271図 SH27出土遺物実測図①



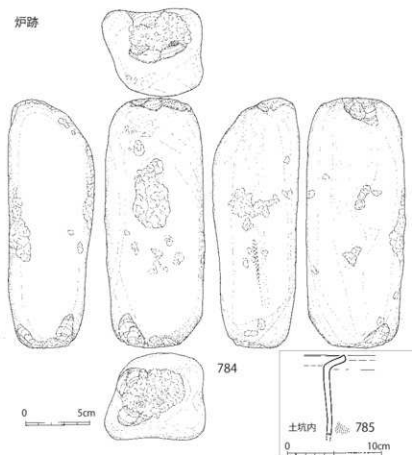
第272図 SH27出土遺物実測図②



第273図 SH27出土遺物実測図③



第274図 SH27出土遺物実測図④



第275図 SH27出土遺物実測図⑤

穴建物跡の壁から70cmと、180cm 2箇所で見つかったおり、廉状の炭化物を若干被っていた。3箇所目は炉跡の西側縁に接するような位置で見つかった最も大きな石皿である。4箇所目は南東柱穴の柱痕に接するようで見つかった大きな石皿である。この石皿の上に磨石が焼土・炭化物を被るように位置していた。

〈遺物の分布〉 土器については多量の遺物が見つかったが、発掘時において完全な形や、完全な形になりそうな潰れた状況の大きな破片は極僅かであった。この竪穴建物跡が火災を受けた時点で、既に土器は住居に入れていなかったことを反映している可能性が高い。竪穴建物跡の東側の壁周辺には、玉製の小型の石核やチップが目立った。これは通常の打製剥片石器とは異なり、玉製作等に関わる破片と考えたい。軽石は竪穴建物跡の東側壁付近と、南西側土坑の北側、南西側土坑内に観察された。土製勾玉は北西部分で見つかった。磨石は北側土坑の2層（上部流入土）、南東部の焼土や炭化物が分布する範囲に数点散在している。遺物としては発掘時に土製の投弾が、竪穴建物跡側で、炉跡の東側でも出ている。

〈遺物〉 小破片が多く、炉址の例を除き、かなりの部分が流れ込みによって由来する遺物と推定される。壺では、胴部が球形となる無頸壺の小破片が出土している（第271図722～725）。この無頸壺の胴部下半の破片も丹塗磨研である（730）。口縁部が鋤形口縁の広口壺と推定する壺があり、頸部のつけ根がしまるものの胴部が張る特徴がある（728）。その他、胴張で長胴の無頸壺（729）や、その可能性のある破片がある（727）。壺には口縁部が屈折する大型粗製の壺が多い（735～737・738～741）。この中には、遠賀川以東系の跳上げ口縁の壺もみられるが、跳上げの突出は弱い（740）。壺としては、口縁部が鋤形口縁で丹塗磨研の精製壺がみられる（733）。その他、小型無頸壺の蓋（第272図749）や壺の蓋とも考えられる大型の蓋（750）、小型の筒形器台（752）、丹塗磨研の土器片を利用した小型加工品（751）がある。その他、素口縁の鉢がある

が、北側土坑の西側に廉状の炭化物が見つかった。

〈施設の配置〉 SH27が構築された当初、竪穴建物跡内土坑が配置されたのは、北東部の住居の壁に沿う部分である。その後、何らかの理由で北西土坑は埋められる。新たに埋められた北西土坑の西側に北側土坑と、炉跡を挟んだほぼ反対側の南西にも土坑が掘られた。炉跡は竪穴建物跡の中央部に配置している。石皿は可動性が低いが、その性格から施設的な意味もあり、SH27では4箇所に石皿が配置されていた。いずれも貼床面直上に若干の土で安定させている。このため竪穴建物跡廃絶時まで使用されていたことが分かる。石皿は北側土坑西側で、竪

(748)。石器には、砥石(758～760、第273図764、第274図783)、石楾(扁平打製石斧(第272図762・763)、敲石(第273図761・766・767)、敲石・磨石(768・769)、磨石(765・770)などがある。これらのうち、壺または甕の底部破片(743)、蓋(750)、器台(752)は、南西土坑の底面から20cm～30cm浮いた状況で流入土の5層・7層中から出土した。また北東土坑では、壺の破片(728)、甕の口縁部破片(740)と底部破片(746)が底面から30cm前後上位から出土しているが、小規模で部分的に集中する傾向があり、廃棄したのもあったことが分かる。

炉跡から出土した土器は屈折口縁の粗製の甕が4個体で(771～774)、完形か、それに近い程度復元されている。その出土状態は、炉跡内の南寄りに甕だけが押しつぶれる状況で集中するもので、破損したものをそのまま廃棄したものと推定される。このような複数個体の土器破片を炉跡内に集中させる行為は、一種の儀礼的な行為と考えられる。炉跡から出土した石器には、石包丁(781)、磨製石斧(782)、砥石(783)、敲石(第275図784)がある。石包丁は、破損したために補修・追加しようとしたか紐かけ用の孔が通例より多い三つ穿たれている。磨製石斧(第274図782)は、使用によって中央部で破損しているほか、刃部の刃こぼれが著しい。まだ未成品状態のものを使用していたのか、体部に石斧加工時の敲打痕が残るなど、琢磨の工程が丁寧に行われていなかった状況が窺える。擦過痕のある軽石は、火山噴出物で発泡した火山性発泡軽石で、炉跡やその周辺で出土することが多い。軽石の民俗事例では、鍋などの磨きなどの作業に使用されてきた石である。擦過痕は、何かの物を磨く作業に用いた痕跡であろう。

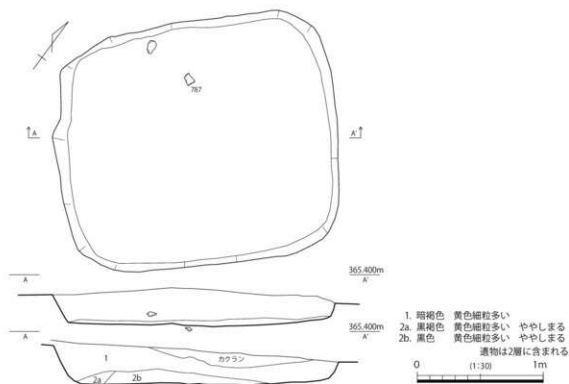
炉跡で出土した土器以外の遺物は、小破片の土器や石器が床面に散乱しており、炭化した木材や焼土・炭などが被るような状況がみられた。このことからSH27の廃絶にあたって、中央の炉跡で土器の大破片を遺棄するなどの儀礼を行った後、土器の完形品等を持ち出し、火を焚いた状況が推定できる。

SK60 この土坑は、南西部地区遺構群の北東部にあたり、区画ではIE46区に位置する(第248図)。このあたりは東方の玖珠盆地側に向けて次第に標高が減じていく緩斜面である。SK60は、検出面の平面形が隅丸長方形を基調とした土坑で(第276図)、その規模は、長軸220cm、短軸129.5cmである。面積は約2.04㎡である。長軸の方位は、W-47°-Nである。深さは、最深で30cmである。壁の立ち上がり角度は、長軸南西壁約60°・長軸北東壁72°と開く。土坑内の堆積土は、1層～2層からなる流入土を確認した。SK60に最も近い竪穴建物跡は、SH25・SH26であり、それらへの帰属が推定される。なお、このSK60を起点に南西方向で1号周溝墓の北西辺あたりまで中小の土坑・ピットが分布している。

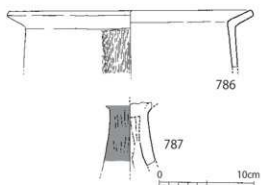
〈遺物〉土坑内の最下部層である2層から土器片などの遺物が出土している。その分布は、散漫であり、何らかの意図性は窺えず、流入土と一緒に混入したのだろう。出土遺物には、「く」の字屈折口縁で粗製産の破片(第277図786)と高杯の脚部破片がある(787)。このうち、高杯の破片は、脚部から環部が外れているとともに、脚部内面側から最上部を見ると斜め上方へ滑り込むような断面形が観察される。この点から、高杯の見込み部の接合状況は、武末純一のいう「組み合わせ環部うわのせ充填技法」に相当すると推定される。

※参考文献 武末純一1991『土器から見た日韓交渉』学生社、58～78

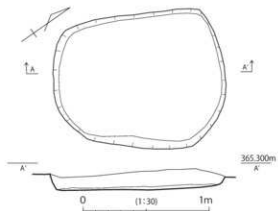
SK61 この土坑は、南西部地区遺構群の北東部にあたり、区画ではIE46区に位置する(第248図)。このあたりは東方の玖珠盆地側に向けて次第に標高が減じていく緩斜面である。SK61は、検出面の平面形が隅丸長方形を基調とした土坑であるが(第278図)、南側小口部分の幅が狭い。その規模は、長軸137cm、短軸109cmである。面積は約1.24㎡である。長軸の方位は、N-36°-Eである。深さは、最深で15cmと浅い。壁の立ち上がり角度は、長軸南西壁約60°・長軸北東壁72°と開く。土坑内の堆積土は、1層からなる流入土を確認



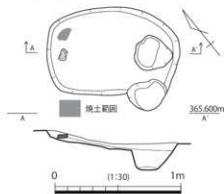
第276図 SK60実測図 (1/30)



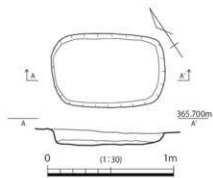
第277図 SK60出土遺物実測図



第278図 SK61実測図 (1/30)



第279図 SK62実測図 (1/30)



第280図 SK11実測図 (1/30)

した。SK61に最も近い堅穴建物跡は、SH25・SH26であり、それらへの帰属が推定される。

SK62 この土坑は、南西部地区遺構群の中部から東部にあたり、区画ではイE56区とイE57区に跨った場所に位置する（第248図）。このあたりは東方の玖珠盆地側に向けて次第に標高が減っていく緩斜面である。SK61は、検出面の平面形が隅丸長方形を基調とした土坑で（第279図）、その規模は、長軸106cm、短軸70cmである。面積は約1.24㎡である。長軸の方位は、 $W-52^{\circ}-N$ である。深さは、最深で6cmと浅い。土坑は地勢の勾配に比例するように検出面や底面が南東方向（玖珠盆地方向）へ向けて次第に標高が減っており、残存状況はよくない。土坑内の堆積土は、浅いためはっきりしなかった。なお土坑内北西隅部に焼土と炭化材があったので、ここで火を焚く行為のあったことがわかる。また、土坑内南東端部には、2基の柱穴状の浅い掘り込みがあるが、土坑との関係は分からない。SK62に最も近い堅穴建物は、SH25・SH26であり、それらへの帰属が推定される。

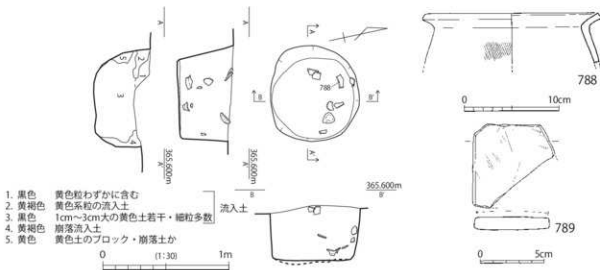
〈遺物〉 特記する遺物は出土していない。

SK11 この土坑は、南西部地区遺構群の中部から東部にあたり、区画ではイE57区に位置する（第248図）。このあたりは東方の玖珠盆地側に向けて次第に標高が減っていく緩斜面である。SK61は、検出面の平面形が均整のとれた隅丸長方形を基調とした土坑で（第280図）、その規模は、長軸90cm、短軸59cmである。面積は約0.48㎡である。長軸の方位は、 $N-57^{\circ}-W$ である。深さは、最深で12cmと浅い。土坑内の堆積土は、浅いためはっきりしない。なお土坑内北西隅部に焼土と炭化材があったので、ここで火を焚く行為のあったことがわかる。また、土坑内南東端部には、浅い円形の掘り込みがあるが、土坑との関係は分からない。SK62に最も近い堅穴建物跡は、SH25・SH26であり、それらへの帰属が推定される。

〈遺物〉 特記する遺物は出土していない。

SK118 この土坑は、南西部地区遺構群の中部から東部にあたり、区画ではイE56区とイE57区の境界付近で、南側にある1号周溝墓の周溝に切られる（第248図）。このあたりは東方の玖珠盆地側に向けて次第に標高が減っていく緩斜面である。この土坑は、検出面の平面形が円形を基調としており（第281図）、その規模は、南北80cm、東西76cm、面積は約0.47㎡である。深さは、最深で44cmと深く、その断面形は箱形であるように、立ち上がりの角度は、東壁 86° ・西壁 76° ・南壁 87° ・北壁 82° である。土坑内の堆積土は、3層の流入土を中心とし、これに崩落土・混入土が僅かに混じる。

〈遺物〉 平面的な遺物の出土状況は、北半に集中しているようにみえるが、垂直分布での集中性はなく、レベル差が大きい。流入土中に混在したのであろう。出土した遺物には、「く」の字屈折口縁で粗製の甕と



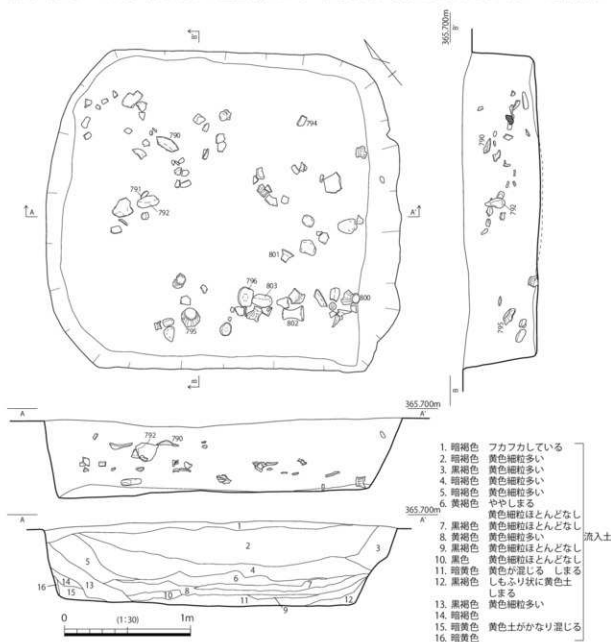
第281図 SK118実測図（1/30）

第282図 SK118出土遺物実測図

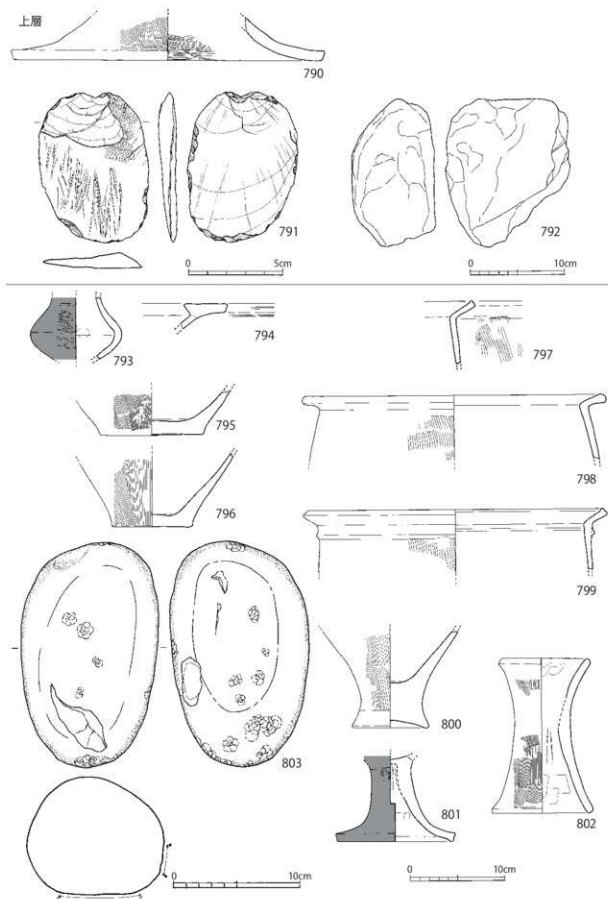
(第282図788)、破損した扁平な砥石がある(789)。その他、未実測資料の中には敲石がある。

SK63 この土坑は、南西部地区遺構群の北東部にあたり、区画ではイE47区とイE57区の境界に位置する(第248図)。このあたりは比較的平坦な面である。SK63は、検出面の平面形が隅丸方形を基調とした土坑で(第283図)、その規模は、僅かに長い長軸は282cm、短軸250cmである。面積は約5.75㎡である。長軸の方位は、 $W-51^{\circ}-N$ である。深さは、最深で62cmである。壁の立ち上がり角度は、長軸南東壁 65.5° ・長軸北西壁 80° ・短軸北東壁 86° ・短軸南西壁 80° である。土坑内の堆積土は、1層~16層からなる流入土を確認した。

〈遺物〉 南東壁に沿うように細長く分布する遺物群の北西方向への側面垂直分布は、中央方向に向かって高さを減じるように傾いており、南東の土坑外方向から土坑内へ廃棄したことが窺える。この部分の遺物には、壺の底部破片(第284図795、796)、中央部が絞まった筒形器台(802)その他、大型の敲石・磨石(803)、などがある。北西方向への垂直分布をみると、北東方向へ高さを減じるように傾いた遺物集中の



第283図 SK63実測図 (1/30)



第284図 SK63出土遺物実測図

小単位があり、廃棄の小単位と考えられるが、概して散漫な分布に近い。そのうち中央よりやや北側に、垂直分布で上位に位置する集中がある。これらのうちには、大型の蓋（第284図790）があり、石器には軟質の石材の表面に線条痕が残るスクレイパー（791）、火山噴出物で発泡した火山性発泡軽石（792）がある。この他、丹塗磨研で小型の無頸壺（793）、鋤形口縁で広口壺の破片（794）、「く」の字屈折口縁の粗製甕の破片（797～799）と底部破片（800）、丹塗磨研の高坏で脚部破片（801）、がある。また、未実測資料の中にも、敲石・磨石、火山性発泡軽石、壺や甕の底部破片、広口壺の口縁部破片がある。以上をまとめると、南西壁沿いに併行しながら集中性の高い分布を示す一群は、その外側方向からの廃棄によるものと考えられるが、中央付近から北東よりの諸群は集中性が低いことと、遺物間の間隔がやや空いており、別の有機物のものと一緒に数回廃棄したことに由来する可能性が高い。なお「く」の字屈折口縁の粗製甕の底部は、厚く上げ底になっていることから須玖1式土器である（800）。

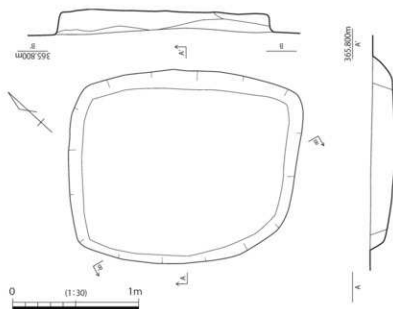
SK64 この土坑は、南西部地区遺構群の中部から東部にあたり、区画ではイE57区とイE67区の境界付近で、1号墳の北西に隣接する（第248図）。このあたりは比較的平坦な面が広がっている。SK64は、検出面の平面形が隅丸長方形を基調とした土坑で（第285図）、短軸幅が張る。その規模は、長軸185cm、短軸153cmである。面積は約2.46㎡である。深さは、最深で19cmと面積に比べ浅い。長軸の方位は、W-41.5°-Nである。立ち上がりの角度は、長軸北西壁80°・長軸南東壁83°・短軸南西壁59°・短軸北東壁43°であり、長軸方向の角度は急で、短軸方向の角度は開き気味である。土坑内の堆積土は、1層～3層の流入土からなる。〈遺物〉 特記する出土状況はないが、鋤形口縁の広口壺の破片と思われるものが出ている（第286図804）。

SK119 この土坑は、南西部地区遺構群の中部から東部にあたり、区画ではイE57区の西よりで、1号墳の北西に隣接する（第248図）。このあたりは比較的平坦な面が広がっている。SK119は、検出面の平面形が長方形を基調とした土坑である（第287図）。この土坑の際立った特徴は、これまで四日市遺跡の土坑を報告してきた例と違って、隅部が鋭角的で、遺構ラインは直線に近い。その規模は、長軸219cm、短軸135cmである。面積は約2.7㎡である。深さは、最深で22cmと面積に比べ浅い。長軸の方位は、N-46°-Eである。立ち上がりの角度は、長軸北東壁61°・長軸南西壁62°・短軸北西壁61°・短軸南東壁77°である。土坑内の堆積土は、1層～3層の流入土からなる。なお長軸方向の整地土上面は、緩やかな凹凸があるが、短軸方向の整地土上面は平らである。なお、遺構ラインが鋭角なため、当初中世墓の可能性も考えたが、堆積土の状況からその可能性はない。

（遺物） 特記する遺物は、

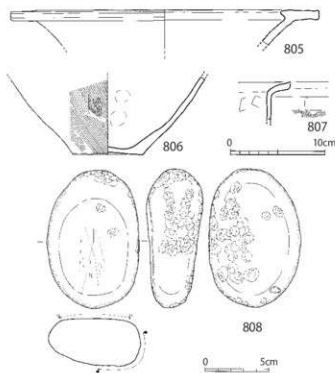
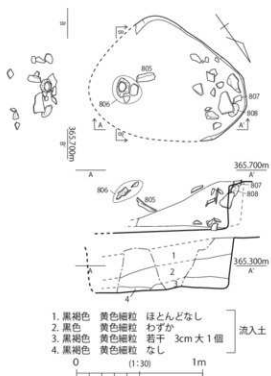
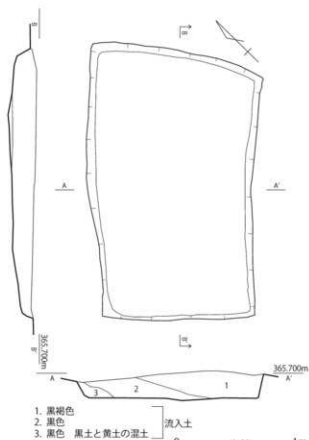
はない。

SK122 この土坑は、南西部地区遺構群の中部から東部にあたり、区画ではイE57区の南よりで、1号墳北西部の周溝から切られる（先行）（第



第285図 SK64実測図（1/30）

第286図 SK64出土遺物実測図

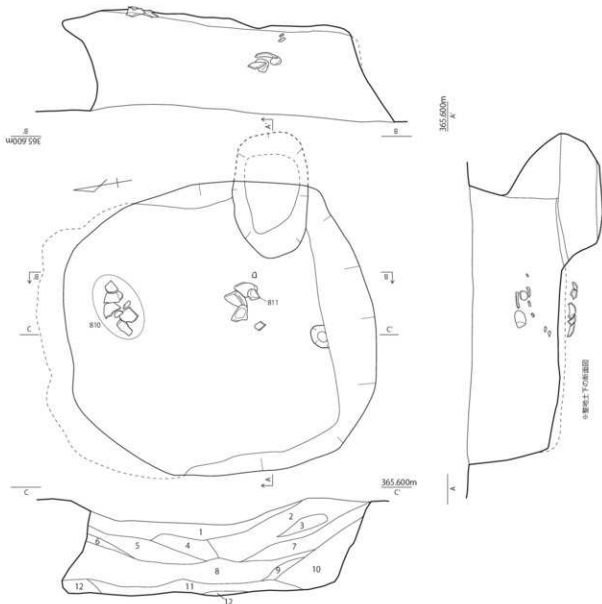


248図)。このあたりは比較的に平坦な面が広がっている。SK122は、検出面の平面形及び残存した上面の形から楕円形の土坑である(第288図)。その規模は、推定長軸125cm、短軸95cmである。深さは、最深で40cmである。立ち上がりは、北壁で 83° である。土坑内の堆積土は、1層～4層の流入土で、北西側の土坑外から南東方向へ流入している。4層の下位層である整地土は未調査であるが、その上面は平らである。

〈遺物〉堆積土の流入方向から一塊の遺物が廃棄されている。概ね遺物の出土層位は1層と3層に垂直分布の中心を置いた二群に区分できる。ここでは形の方かる1層出土遺物を提示する。

丹塗磨研で広口壺の口縁部破片(第289図805)、甕の底部破片(806)、L字形屈折口縁の甕の破片(807)、敲石・磨石(808)がある。このうち、広口壺は喇叭形口縁の上面が外側へ垂れていないので須玖I式土器の可能性が高い。

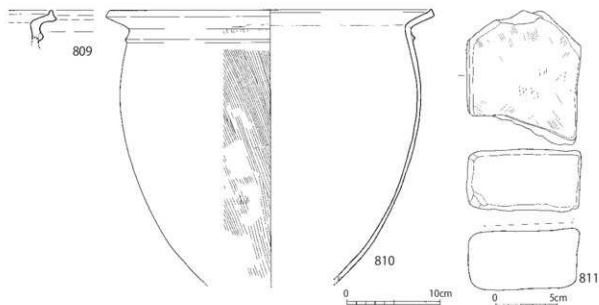
SK78 この土坑は、南西地区遺構群の中部から東部にあたり、区画ではイE47区にある。ほぼ同じ場所にあるSK79を切る（後行）（第248図）。このあたりは比較的平坦な面が広がっている。SK78は、検出面の平面形及び残存した上面の形から方形の土坑である（第290図）。僅かに長い方向を土坑の長軸とすると、長軸（南北）244cm・短軸（東西）231cmで、面積は、約4㎡になる。深さは、整地土上面までが73cmである。この整地土の厚さは、約20cmである。したがって当初の土坑掘削深度は、少なくとも100cm近くあったことになる。立ち上がりの角度は、長軸南壁 66° ・短軸西壁 79° ・短軸東壁 73° からなる長軸北壁は、深さ42cmま



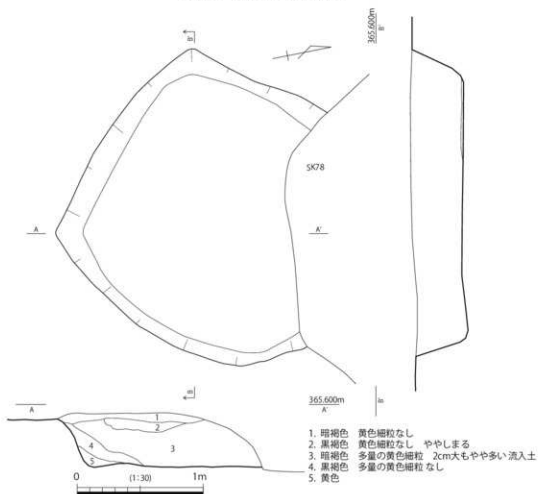
1. 黒色 φ0.3~0.5cm程の黄色土ブロックを含み、ややしまり気味である
2. 褐色 φ0.5~1cmの黄色黄褐色ブロックを含み、ややしまる
3. 黒色 炭化物を含みしまりはない
4. 黒色 φ1cm程の黄色土ブロックを含み、ややしまり気味である ブロックを多く含む 5の前位層
5. 黒色 黄色土の粒子をやや含み、しまりがある 炭化物を含む
6. 黒褐色 φ1.5cm程の黄褐色ブロックを含み炭化物を含む ややしまりがある
7. 黒色 黄色土粒子をやや多く含み、しまりがある
8. 褐色 φ0.5~1.5cm程の黄褐色土ブロックを多く含み炭化物ブロックも含む しまりがある
9. 黒褐色 φ1cm程の黄色土ブロックを含みしまりがある 10の前位層
10. 黒色 黄色土粒子をやや多く含み炭化物も含む ややしまりがある
11. 黄褐色 SK078の整地層 炭化物を含みしまりがある
12. 黄色 SK078の整地層 しまりがある

第290図 SK78実測図（1/30）

では98°で、そこから126°の角度でオーバーハングしている。土坑内の整地土上面を精査すると、南東隅部近くの東壁で南北に直交するように小土坑が掘削されており、その半分は横穴状にオーバーハングしている。このオーバーハングする小土坑部分は、東壁の深さ約30cm部分から掘り始められていた。この小土坑の



第291図 SK78出土遺物実測図



第292図 SK79実測図 (1/30)

規模は、長軸98cm、短軸60cmである。このオーバーハングする小土坑内には、何の痕跡も残っていないが、この土坑が貯蔵穴であったとすれば、横穴状の小土坑はその排水施設であった可能性も考えられる。

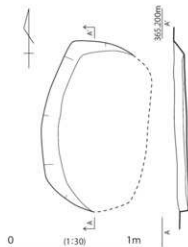
〈遺物〉 遺物集中部は二つある。一つは土坑の中央部にあって、層位的には2層（下半）・7層（末端）・8層（上部）が直接接する部分に、L字屈折口縁の甕（未実測資料）、砥石（第291図811）、礫2点からなる遺物が一塊に廃棄されていた。もう一つは、北壁より、整地土の下位の掘削面上に「く」の字屈折で、胴の張る粗製の甕が、底部を欠く状態で出土した（810）。

SK79 この土坑は、南西部地区遺構群の中部から東部にあたり、区画ではイE47区にある。ほぼ同じ場所にあるSK78から切られる（先行）（第248図）。このあたりは比較的平坦な面が広がっている。SK79は、検出面の平面形及び残存した上面の形から方形の土坑である（第292図）。土坑は、幅223cm、それに直交する幅が222cmと、ほぼ同じで、面積は、約3.4㎡である。堆積土は1層～5層までの流入土を確認した。整地土は未調査。壁の立ち上がりは65°と73°である。

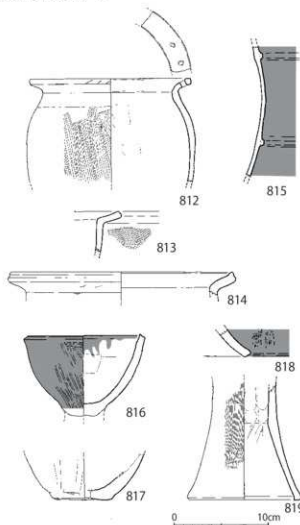
〈遺物〉 土器の小破片が数点出土したが、特記するものはない。

SK113 この土坑は、南西部地区遺構群の中部から東部にあたり、区

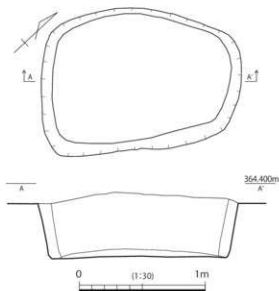
画ではイE46区にある（第248図）。このあたりは、東側の玖珠盆地方向に向けて標高が減っていく場所である。そのためSK113は、東半部の残りが悪いものの、平面形が隅丸長方形と推定される土坑である（第293図）。その規模は、長軸（南北）133cm、短軸（東西）84cmで、面積は、約0.9㎡である。深さは、整地土上面までが9cmと浅い。土坑の方はN-7.5°-Eである。壁の立ち上がりは、北壁37°・南壁80°である。



第293図 SK113実測図（1/30）



第295図 SK49出土遺物実測図



第294図 SK49実測図（1/30）

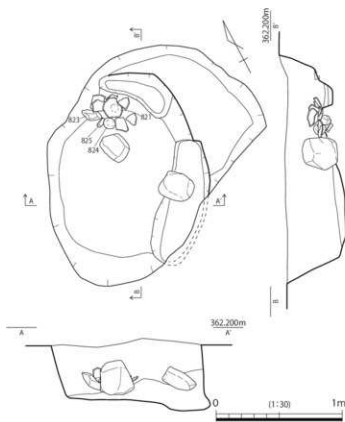
〈遺物〉 特記する事項はない。

SK49 この土坑は、南西部地区遺構群の東部にあたり、区画ではイ66区にある（第248図）。このあたりは、東側の玖珠盆地方向に向けて標高が減っていく場所である。またSK49は、1号周溝内において、地山整形で最上部が削られているものの、掘削深度が深かったこともあるのか、平面形は良く残っている。その平面形は、やや歪ながら隅丸長方形の土坑である（第294図）。また規模は、長軸（南北）159cm、短軸（東西）114cm、面積約1.5㎡である。深さは、整地土上面までが44cmである。土坑の方位はN-41°-Eである。壁の立ち上がりは、長軸北東壁80°・長軸南西壁77.5°である。堆積土及び整地土の観察は行っていない。

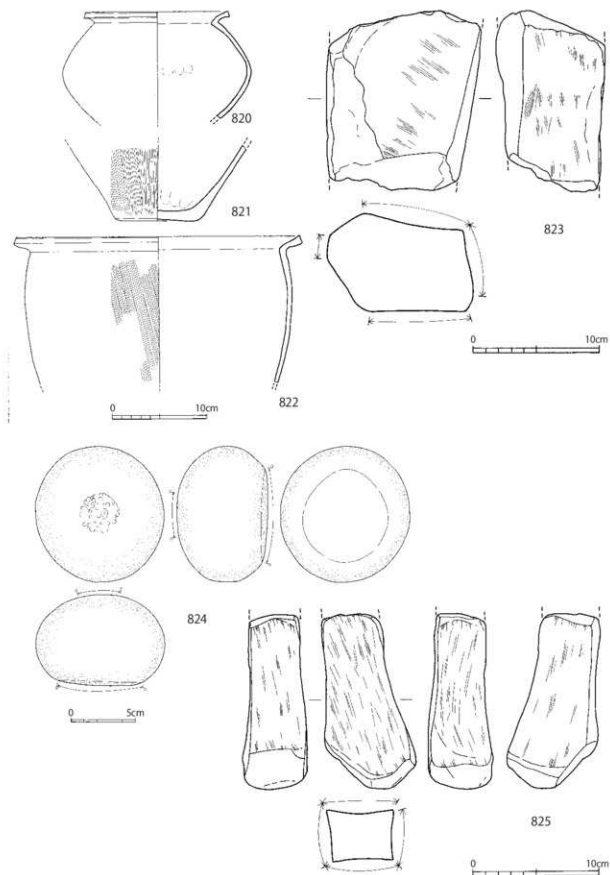
〈遺物〉 出土状態の記録はしていないが、大きな土器破片が多く出土している。その狭い土坑面積からすると土器破片が占める状況は密集状態に近いと推定され、廃棄に由来する一群と推定される。出土した土器には、外方へ折り曲げるような口縁に特徴のある球形胴の無頸壺の破片（第295図812）、丹塗磨研で鋳形口縁をした甕の破片（815）、「く」の字屈折口縁の粗製甕破片（813、814）、丹塗磨研の台付鉢～高坏破片（816）、丹塗磨研の高坏の脚部破片（818）、鉢（817）、筒形器台（819）がある。このうち、折り曲げた屈折口縁の無頸壺や丹塗磨研の鋳形口縁でM字突帯のある甕は、須玖Ⅱ式土器の特徴である。

その他 これまで南西部地区遺構群について報告してきた。南西部地区遺構群の分布図では、北東部から東部へSK88・SH27・SK64と1号墳の周溝南端を結ぶ線より南西側でも第1次調査区で幾つかの遺構を発掘したが、今回はその報告を見送った。それらの遺構番号を記すと、SD 1、SK99、SK110、SK111、SK112、SH16、SH30、SH40、SK105、SK106、SK107、SK108、SK109である。これらの遺構が存在する地域は第3次調査地区と入り組んでいることから、別々に報告すると分かりにくいので、今回の報告書には記載していない。次年度以降、第3次調査区の遺構と一緒に報告する。なお、弥生時代中期の南西部遺構群の連続性を確認する場合は、第3図を参照されたい。

SK65 この土坑は、北西部遺構群に含まれるべきかとも考えたが、第1次調査区北西部の調査区端部近くに位置するものの、北西部遺構群とは約13m前後の遺構のない間隙がある（第5図）。おそらく、SK65の北側・西側・南側に別の遺構群があり、それらに含まれる遺構群と思われる。そのため、南西部地区遺構群の後ではあるが、ここで報告する。ここは、区画ではロD66区・ロD67区・ロD77区の境界に跨る。このあたりは、比較的平坦な面が広がる場所である。SK65は、検出面の平面形が一ヶ所角（隅部）のある長楕円形を基調とした土坑で（第296図）、その規模は、長軸200cm、短軸131cmである。面積は約4.7㎡である。長軸の方位は、N-63°-Eである。深さは、最深で50cmである。壁の立ち上がり角度は、長軸東壁約69°・長軸西壁64°・短軸南壁93°・短軸北壁73°である。土坑内の堆



第296図 SK65実測図（1/30）



第297図 SK65出土遺物実測図

第3章 調査の成果

積土は、未調査である。この遺構の内部構造は、東寄りが一段高く、西寄りが一段低い部分であり、段下部分には短い溝状の部分が二か所ある。

〈遺物〉北側の段下部分には、壺の底部破片（第297図821）、砥石（823・825）、敲石・磨石（824）や台石状の礫が一塊に廃棄されていた。その他、この遺構からは、屈折口縁の無頸壺（820）、「く」の字屈折口縁の粗製甕（822）が出土している。なお、「く」の字屈折口縁の粗製甕の口縁端部が肥厚しており、須玖1式土器と考えられる。

第3節 弥生時代後期末の遺構と遺物

口D53区・口D54区・口D63区・口D64区の境界付近を調査中に極めて特徴的な竪穴建物跡があった。既に報告したSH37・SH36を切るようにSH35と遺構番号がつけられた、方形の竪穴建物跡が掘り込まれていた（第298図）。その竪穴建物跡は、壁のラインが直線的で、隅部の曲率半径の小さい鋭角な屈折であることに特徴がある。それまでに見つかった弥生時代中期の方形竪穴建物跡や長方形竪穴建物跡の壁が外側に張り気味であることと、隅部が曲率半径の大きい隅丸であることからすれば際立った特徴である。

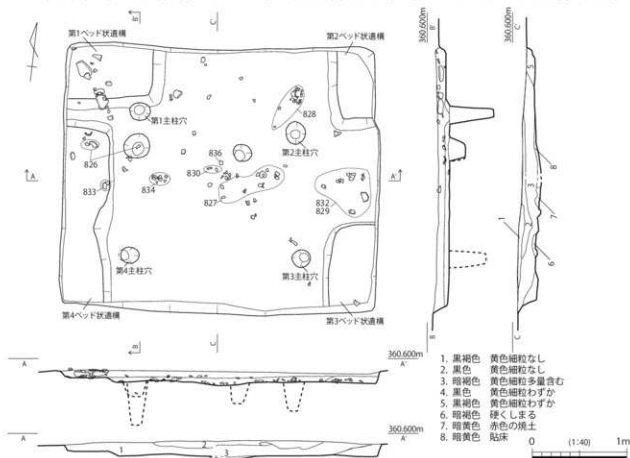
こうしたSH35のような竪穴建物跡は、その後、北側約11m地点と北東7m地点でも検出された。これらの竪穴建物跡は、全体的に見ると疎らな分布であるが、第2次調査区・第13次調査区側には見られず、第1次調査区の北西部に集中していることから3棟前後からなる村落共同体が形成されていたことが窺える。

SH3 この竪穴建物跡は、第1次調査区の北西部域に位置し、区画では口D33区・口D34区・口D43区・口D44区の交点で、調査区の北限に位置する（第298図）。このあたりは、比較的に平坦な面が広がる場所である。SH3は、検出面の平面形が長方形を基調とした竪穴建物跡で（第299図）、その規模は、長軸335cm・短軸280cmである。面積は約9.38㎡である。長軸の方位は、N-85.5°-Eである。深さは、整地土までが約20cm、整地土の厚さが4cmであり、下底面が24cmとなる。6層～8層が床面・整地土である。壁の立ち上がり角度は、長軸東壁約71°・長軸西壁56.5°・短軸南壁59°・短軸北壁61°である。土坑内の堆積土は、1層～5層まで確認し、すべて流入土であった。この遺構の内部構造は、柱穴・ベッド状遺構・その他床面からなっている。柱穴は、4基の主柱穴を中心として、他に2基の補助的支柱穴からなる。なお、断面図に7層とした貼床・整地土は、上面が著しく被熱した焼土面となっている。この7層はSH3のなかでは中央部分にあたり、地床がとして使われた場所である可能性がある。

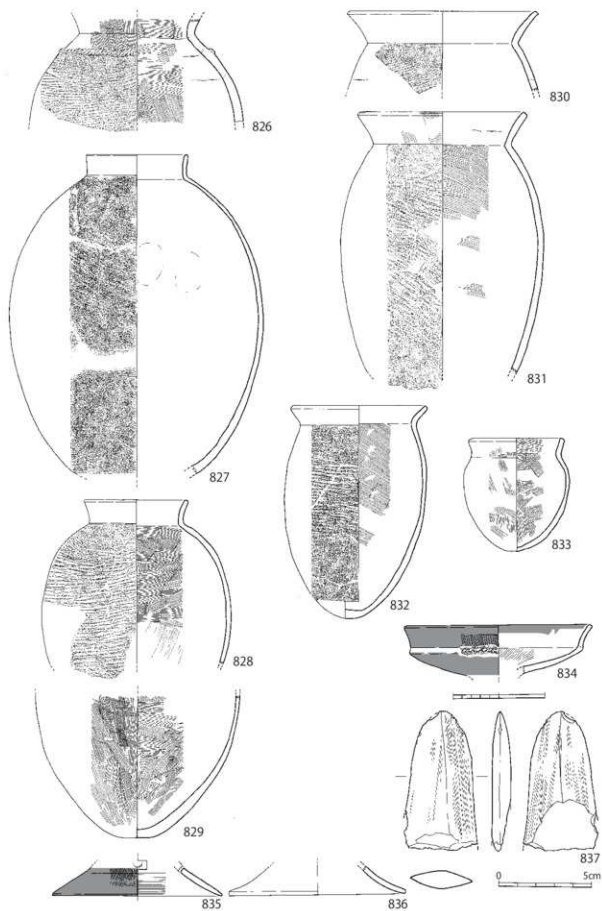
主柱穴は、竪穴建物跡の北西部第1主柱穴、北東部第2主柱穴、南西部第3主柱穴、南東部第4主柱穴から構成されている。第1主柱穴は北壁から内側へ70cm・西壁から内側へ82cmの場所、第2主柱穴は北壁から内側へ90cm、東壁から内側へ90cmの場所、第3主柱穴は南壁から内側へ60cm、東壁から内側へ80cmの場所、第4主柱穴は北壁から内側へ55cm、東壁から内側へ70cmの場所ある。第1主柱穴と第2主柱穴との間は167cmで、その方位がN-92°-E、長軸の方位とは6.5°の差がある。第2主柱穴と第3主柱穴との間は130cmで、第1主柱穴と第2主柱穴を結ぶラインからの屈折角度が102°と開く。第3主柱穴と第4主柱穴との間は186cmで、その方位はN-84°-Eであり、長軸の方位とは1.5°の差があるとともに第2・第3主柱穴を結ぶラインとの角度が86°である。第4主柱穴と第1主柱穴との間は153cmで、第3・第4主柱穴を結ぶラインからの屈折角度が85°、第1・第2主柱穴を結ぶラインからの屈折角度は87°となる。各主柱穴の深さは、第1主柱穴が91.5cm、第2主柱穴が57cm、第3主柱穴が82cm、第4主柱穴が76.5cmと、しっかりとした深さをもっている。2基の補助的支柱穴の位置と深さは、第1主柱穴のすぐ南で深さ31.5cm、第2主柱穴の南西で深さ43cmであり、主柱穴に比べ浅いことが特徴である。なお、補助的支柱穴の構造的な意味は不明である。

ベッド状遺構は、竪穴建物跡の北西隅部から時計周りに第1～第4までのベッド状遺構が各隅部側に設けられている。第1ベッド状遺構は、規模が105cm×70cm (0.73㎡) で北壁沿いに長く、西壁沿いが短い長方形である。第2ベッド状遺構は、規模が50cm×87cm (0.43㎡) で北壁沿いに短く、東壁沿いが長い長方形である。第3ベッド状遺構は、規模が95cm×56cm (0.53㎡) で東壁沿いに長く、南壁沿いが短い長方形である。第4ベッド状遺構は、規模が55cm×194cm (1.07㎡) で南壁沿いに長く、西壁沿いが長い長方形である。

〈遺物〉 施設的な意味が強いものの、若干の可動性をも内包する遺物として台石がある。この台石は、SH3のなかでは第1ベッド状遺構に集中している。この他、磨石・敲石類も台石周辺に集中している。第1支柱穴の南に隣接する支柱穴の南東30cm地点では、屈曲する部分に刻目のある高坏の坏部が出土した (第300図834)。第2支柱穴の南西にある支柱穴の南側からは、壺は、口頸部が短く立ち上がる直口壺と (827)、口頸部が外傾する長胴の甕 (830)、高坏の裾部 (836) が出土した。第2支柱穴の北側では、一塊にまとまった状態で口頸部が短く立ち上がる直口壺が出土している (828)。第3ベッド状遺構の北側では、口頸部が外傾する長胴の甕と (832)、タタキ目はないが、壺と同様な胴部形状を有する胴部下半から底部にかけての土器 (829) があり、底部が凸レンズ状である。第4ベッド状遺構の北端部に遺物が集中している。ここからは、おそらく複合口縁壺と思われるものと (826)、小型広口壺も出土している (833)。後者は、口径が胴部最大径より僅かに小さい例で、底部は丸底である。このうち第2支柱穴の南西にある支柱穴の南側と第3ベッド状遺構の北側の遺物分布は広いが、少量ずつ集中する状況が窺える。出土遺物の特徴を付け加えると、直口壺や複合口縁壺は、胴部が長楕円形で張り、外面にタタキ目が残る (826～829)。甕も口頸部が直線的に外傾し、最大幅が上半にあるものの張りの少ない長胴甕で、外面にタタキ目があり (830～832)、このうち下半を縦にナデ消す甕があるほか (832)、削る甕もある (831)。これまで述べた、壺や甕は、底部



第299図 SH3実測図 (1/40)



第300図 SH3出土遺物実測図

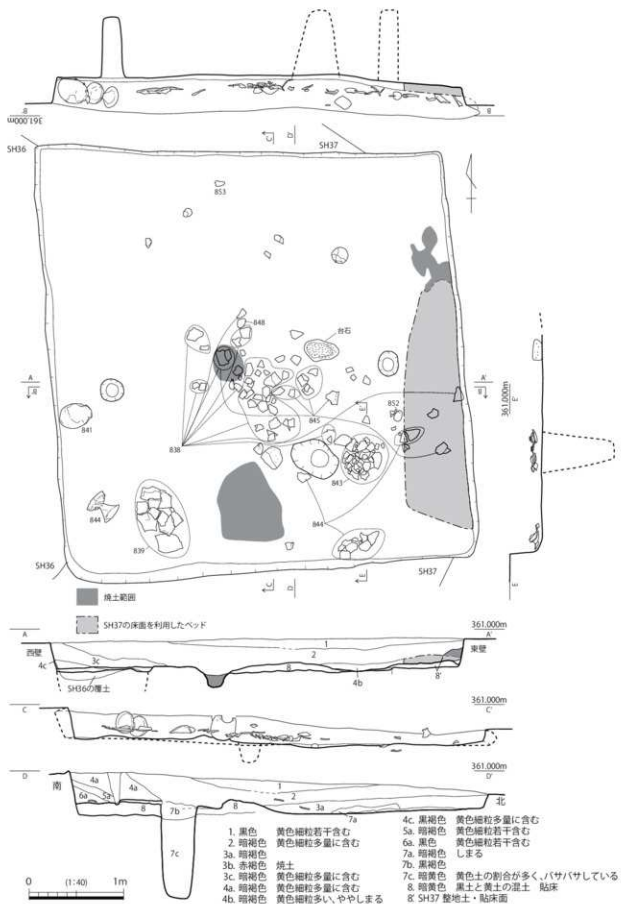
が残る例は、尖り底に近い(829、832)。この他、第1主柱穴の北東40cmの地点、第2ベッド状遺構の南西角部の南側にも分布する。この他、遺物には、高坏の裾部(835・836)、流れ込みの石剣がある(837)。特に、石剣は破損後にリダクションを加えている。

SH35 この竪穴建物跡は、第1次調査区の北西部域に位置し、区画では口D53区で口D63区・口D64区・口D54区に近い部分に位置する(第298図)。このあたりは、北側に向けて僅かながら下り勾配の場所である。SH35は、先行する弥生時代中期のSH36とSH37と同じ場所に位置し、両遺構を真上から切る関係にある(後行)。またSH35は、検出面の平面形がほぼ方形を基調とした竪穴建物跡で(第301図)、その規模は、長軸(南北)462cm、短軸(東西)440cmである。面積は約20.24㎡である。長軸の方位は、 $W-5^{\circ}-N$ である。深さは、整地土までが約33cm、整地土の厚さが12cmであり、下底面が45cmとなる。8層が床面・整地土である。壁の立ち上がり角度は、長軸北壁約 67° ・長軸南壁 78° ・短軸西壁 78° ・短軸東壁 80° である。竪穴建物跡内の堆積土は、1層～7層まで確認し、すべて流入土であった。この遺構の内部構造は、柱穴・先行するSH37の整地土を利用したベッド状遺構・その他床面からなっている。

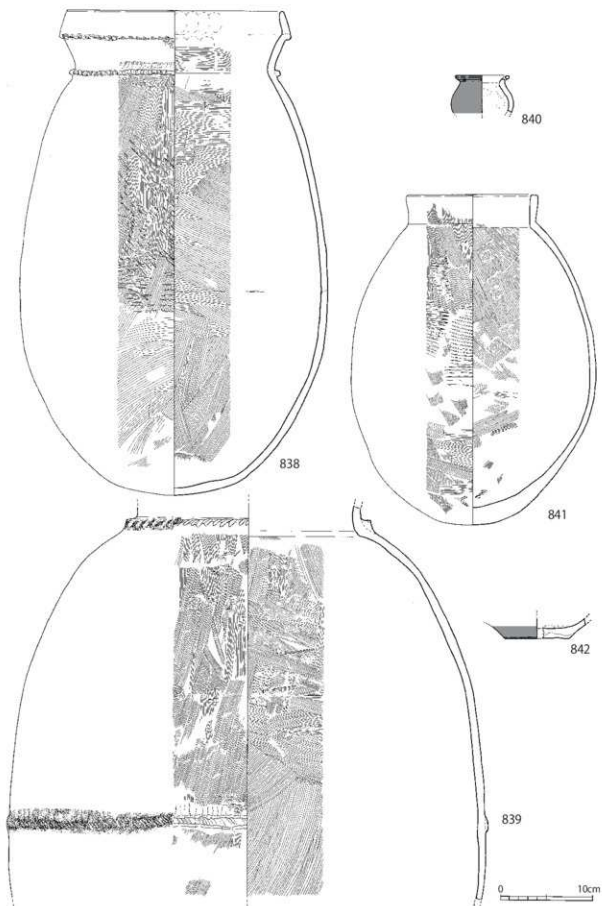
〈柱穴〉 柱穴は、東西に向き合う2基の主柱穴を中心として、他に1基の補助的支柱穴からなる。東側の主柱穴は、北壁から223cm、壁から208cm、東壁から80cmで、西側の主柱穴は、北壁から257cm、南壁から204cm、西壁から63cmの場所にあるなど、やや南寄りに位置する。この東西の主柱穴間は、294cmで、その方位は $W-85^{\circ}-N$ である。これらのことから、2基の主柱穴は竪穴建物の短軸方向に構築されている。

〈その他の遺構〉 ベッド状遺構は、南北200cm・東西50cmで、西壁の南よりにシフトしており、先行するSH37内にある拡張部分(第102図:壁周溝の外側にとりまく部分)をそのまま利用している。焼土は、ベッド状遺構の北側とSH35のほぼ中央、そして南壁寄りに位置するが、中央の焼土以外は、地床炉との関係は窺えない。しかし、中央に位置する焼土も、直径20cm、深さ10数cmの浅い掘り込みで観察されたが、地床炉というには規模が小さすぎる。この浅い掘り込みを含めた周囲が地床炉であったのかもしれない。このほか、東側主柱穴の西70cmの場所で大型の台石が出土した。台石は、長軸36.5cm、短軸23.5cm、厚さ約13cmの大きさを有する。

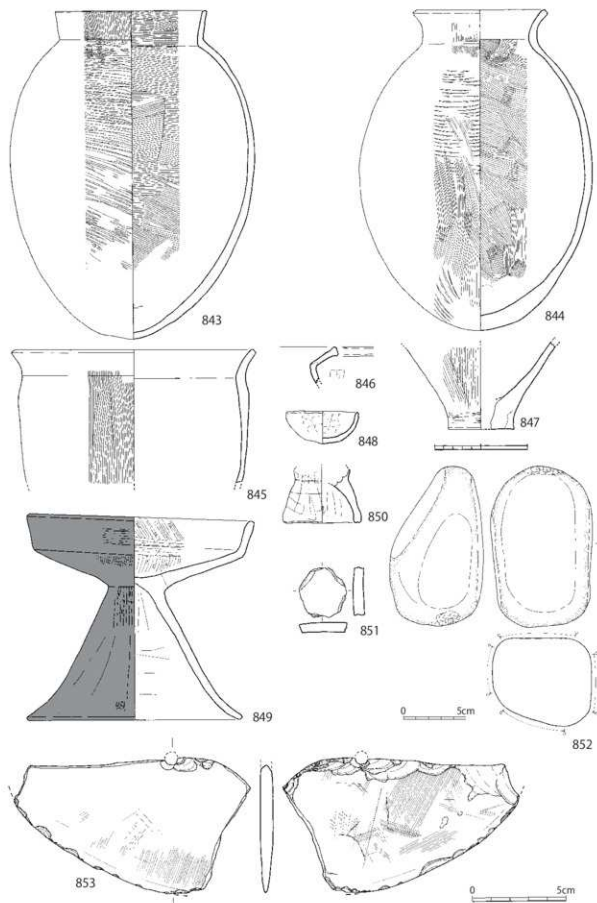
〈遺物〉 遺物は、そのほとんどが床面より10cm程度上位で出土した。出土状況は、A:破損しているが、ほぼ完全形で出土したものがある。このAに属するものに直口壺と直口高坏がある。このうち直口壺は、胴部が長楕円形で張り、底部が凸レンズ状の丸底で、上半にタタキ目が残る(第302図841)。もう一例は、丹塗磨研の直口高坏(第303図849)がある。B1:破片として一塊に出土したもの。このB1に属する例として、複合口縁で長胴の壺がある(第302図839)。この壺は、頸部の付け根に断面三角の突帯、胴部に断面台形の突帯を巡らせ、刻目を入れており、胴部上半にタタキ目を入れた後に縦ハケで調整している。これらは南西の西壁沿いに位置していた。B2:一塊の一群と、やや離れた場所の個体もしくは小群との接合関係にあるもの。この一群には、南東に主要分布域がある口頸部が外傾する長胴の甕(第303図844)と胴部が長楕円形で張り、底部が尖り底の直口壺がある。これら二者には上半から下半にタタキ目残り、下位をナデ消す。竪穴建物跡の中央部から南東方向に散在するかのような分布を示すものに、口縁部が軽く外反する甕の大破片がある(845)。また中央部に密集するとともに、その周辺と南東の東壁付近にまで広く散布する例として長胴で丸底の複合口縁壺がある(第302図838)。これは口頸部の屈折部と付け根に貼り付けた突帯に刻目を施すほか、上半部にタタキ目が残る。こうした各個体の破片と混在するような状況で、手ずくねの小鉢も出土している(第303図848)。石器としては、第2支柱穴の南側で磨石が出土した(852)。次に弥生時代中期の遺構から混入した遺物を報告する。縦にへう削りした脚部破片(850)、周囲に打ち欠き痕の



第301図 SH35実測図 (1/40)



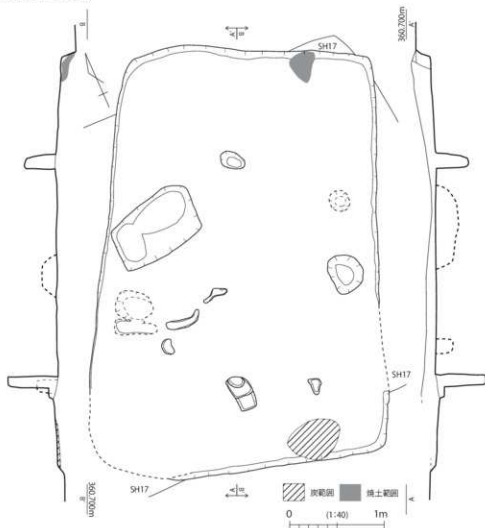
第302図 SH35出土遺物実測図①



第303図 SH35出土遺物実測図②

ある土器円形加工品 (851) がある他、屈折口縁の甕 (846) と同底部 (847) が出土している。土器円形加工品には打ち欠き整形後、外周側面端部に擦り痕が観察される。丹塗磨研の小型無頸壺も出土している (第302図840)。石器としては、東側支柱穴の南側で磨石が出土した他 (第303図852)、石包丁が北壁沿いで見つかった (853)。

SH34 この竪穴建物跡は、第1次調査区の北西部域に位置し、区画ではロD42区とロD52区の境界を跨る部分に位置する (第298図)。このあたりは、比較的に平坦な場所である。SH34は、SH35から切られる関係にある (後行)。SH34は、検出面の平面形がほぼ長方形を基調とした竪穴建物跡で (第304図)、その規模は、長軸 (南北) 460cm、短軸 (東西) 317cmである。面積は約12.7㎡である。長軸の方位は、N-26°-Eである。深さは、整地土までが約20cm、整地土下は未調査である。壁の立ち上がり角度は、長軸北壁約71°である。竪穴建物跡内の堆積土は、掘削され見つからなかった。この遺構の内部構造は、柱穴と土坑からなっている。柱穴は、南北二つの支柱穴からなる。北側の支柱穴は、北壁から120cm、西壁から120cm、東壁から150cmで、南側の支柱穴は、南壁から98cm、西壁から158cm、東壁から160cmの場所にある。支柱穴間の距離は、232cmで、その方位はW-23°-Nである。これらのことから、2基の支柱穴は竪穴建物の長軸方向から3°北よりに構築されている。なお北側の支柱穴は、深さ35cm、直径16cm、南側の支柱穴は、深さ43cm、直径14cmと細い支柱穴である。その他、北壁ぎわに小規模被熱痕が観察され、南壁際には小規模なトチノキが炭化した状態で出土した。



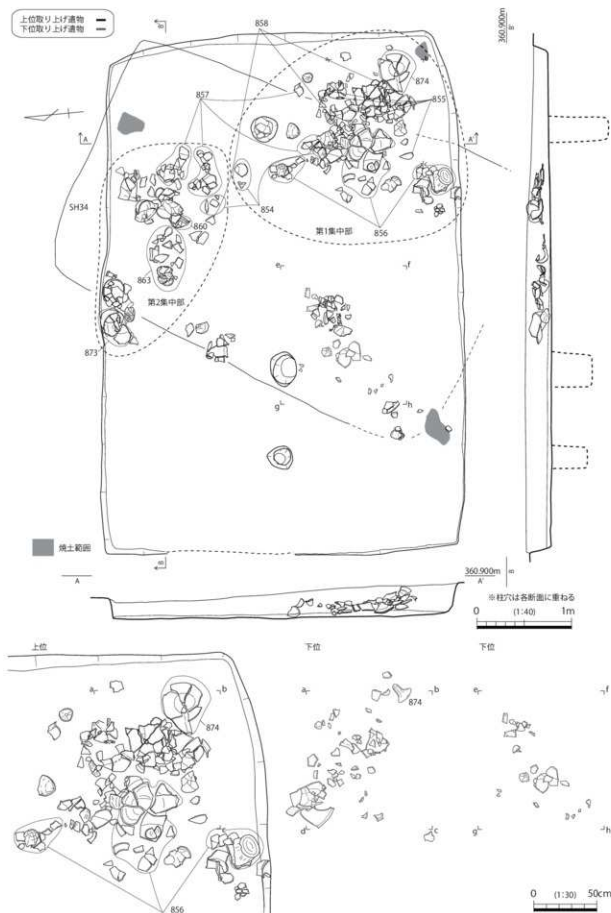
《遺物》SH35から掘削されたことにより攪乱され、めぼしい資料はなかった。しかしSH34自体は、弥生時代後期終末頃の竪穴建物跡である。なお、上記したように南壁際の炭化物からはトチノキの実が出土したが、このほかイネ・アズキ・イチイガシが出土している。詳細は、巻末の小畑弘己氏の報告を参照されたい。

第304図 SH34実測図 (1/40)

SH17 この竪穴建物跡は、第1次調査区の北西部域に位置し、区画では口D42区と口D52区の境界に近い部分に位置する(第298図)。このあたりは、比較的平らな地勢である。SH17は、先行する弥生時代後期終末のSH34と同じ場所に位置し、同遺構を真上から切る関係にある(後行)。SH35は、検出面の平面形がほぼ長方形を基調とした竪穴建物跡で(第305図)、その規模は、長軸(東西)552cm、短軸(南北)385cmである。この竪穴建物跡の特徴は、壁の部分の張りが少なく直線的であることと、隅部が鋭く屈折している点にある。面積は約20.9㎡である。長軸の方位は、 $W-84^{\circ}-N$ である。深さは、貼床面・整地土までが約51cm、その下は未調査である。壁の立ち上がり角度は、長軸東壁約 67° ・長軸西壁 76° ・短軸南壁 78° ・短軸北壁 79° である。竪穴建物跡内の堆積土は、未調査であるが、遺構の内部構造は、柱穴だけで、他に屋内遺構はない。柱穴は、東西に向き合う2基の支柱穴を中心として、他に1基の補助的支柱穴からなる。東側の支柱穴は、北壁から172cm、南壁から198cm、東壁から93cmで、西側の支柱穴は、北壁から190cm、南壁から195cm・西壁から100cmの場所にある。この東西の支柱穴間は、357cmで、その方位は $W-86^{\circ}-N$ である。これらのことから、2基の支柱穴は、ほぼ竪穴建物跡の長軸方向に構築されている。支柱穴の規模は、東側が、直径27cm、深さ63cm、西側が、直径25cm、深さ40cmである。その他、支柱穴の主軸線上にほぼ乗る形で、支柱穴が1基掘削されており、東側支柱穴跡から262cm、西側支柱穴から96cmのところである。その他、北東隅部の北壁よりと、南東隅部、更に南西隅部に近い南壁際に小規模な焼土・被熱部分がある。

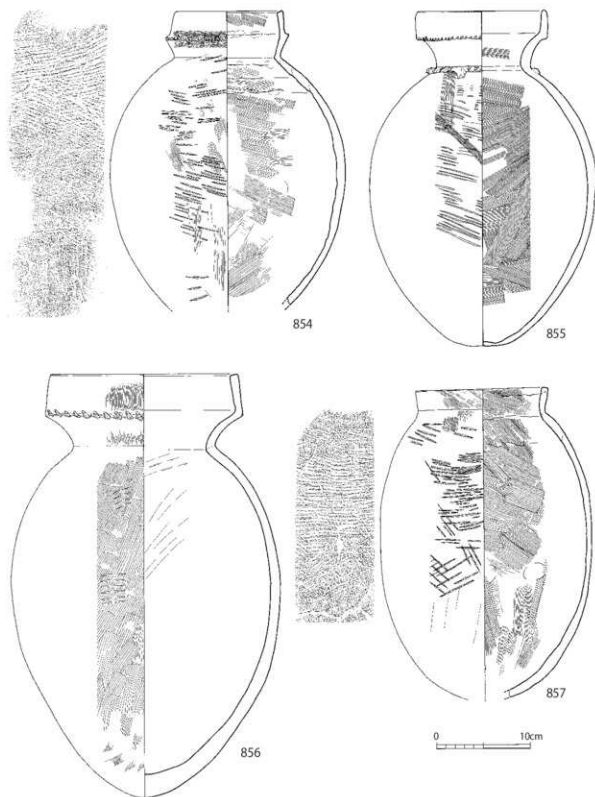
〈遺物〉 SH17から出土した遺物は、意図的に遺棄・廃棄されたほとんどが土器である。この土器のほとんどが東側支柱穴の南側に分布する第1集中部と西側支柱穴の北側に分布する第2集中部に集中する。第2集中部は、その北西の北壁沿いのA群と、南東のB群に区分できる。その他、支柱穴の北側と南側に極小規模な集中部が点在するだけである。出土状況を見ると、二つの集中部は、更に細かい集中単位が見取れる状況であるが、ここでは煩雑になるため細かくは記載しない。しかし、ほぼすべてが破損しており、そのうち並べ置かれた後(遺棄)に破損した可能性のある第2集中部A群を除いてすべて廃棄されたことが窺える。垂直分布を見ると、第1集中部の東壁よりの部分と第2集中部B群北壁に近い方のレベルがやや高い状況から土壌の流入が窺える。このことは、SH17の竪穴建物跡の機能が終了・廃絶後に青天井下での廃棄場所となったことを示している。さらに細かい集中単位は、一塊の土器破片の廃棄単位に等しいと考えられ、そうした単位が累積しつつ形成されたのが第1集中部・第2集中部B群ということであろう。第1集中部・第2集中部B群と区分したが、このいずれかに土器個体ごとの主要分布域をもちつつ、別の集中部間の破片とも接合する状況である。直口壺：口頸部が直立し長胴で丸底の器形有するもので、外面の上位から3分2にはタタキ目、その下に刷毛目やナデ調整を加えた例(第307図858、859)。その他の壺としては、複合口縁壺がある。これらには、口縁中部の屈曲部に段のある例(第306図854)、複合口縁の直立部分がやや内傾し、底部が平底気味の丸底例(855)、複合口縁の直立部分がやや内傾し、底部が尖り気味の例(856)がある。甕A：高さ25cmまでの長胴甕で、口頸部が緩く外反し、底部は丸底か丸底に近い尖り底(860、863)。外面にタタキ目を有する。甕B：胴部が張るが、口頸部が緩く外反し、底部は凸レンズ状の丸底(861)。外面にタタキ目を有する。甕C：長胴で、口頸部が屈曲し、底部が尖り底(864、第308図867)、狭小な平底(866、868、869、871)、丸底(870、873)がある。僅かな例を除いて(866、871)、外面にタタキ目を有する。甕D：球形の胴部(底部丸底)から、口頸部が緩く屈折する例で(第307図862、865)、外面にタタキ目を有するが、内面調整は前者が上方へのへら削りとハケ目、後者はハケ目のみで行なわれている。高環A：環部の下半が直線的で、上端から広く外転するように口縁部が外反し、脚部は下半で急に裾広がりとなる(874)。高環B：環部の下半が内湾するように立ち上がり、上端から広く外転するように口縁部が外反

第3章 調査の成果

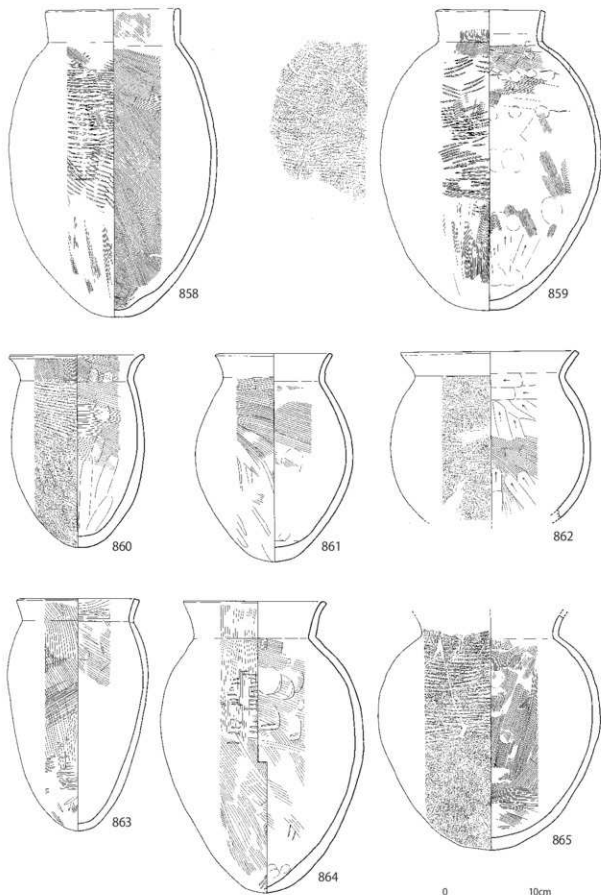


第305図 SH17実測図 (1/40・1/30)

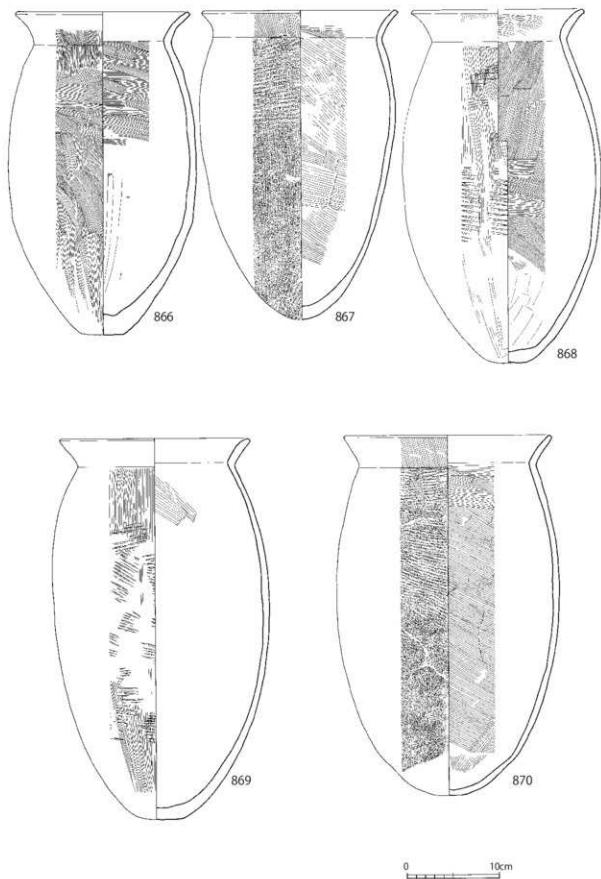
し、脚部は下半で急に裾広がりとなる (875~877)。高坏C：坏部の下半が箱形状に立ち上がり、上端から広く外転するように口縁部が外反する (878)。台付鉢 (879)、鉢 (880~889) がある。この他、流れ込みの投弾がある (890, 891)。



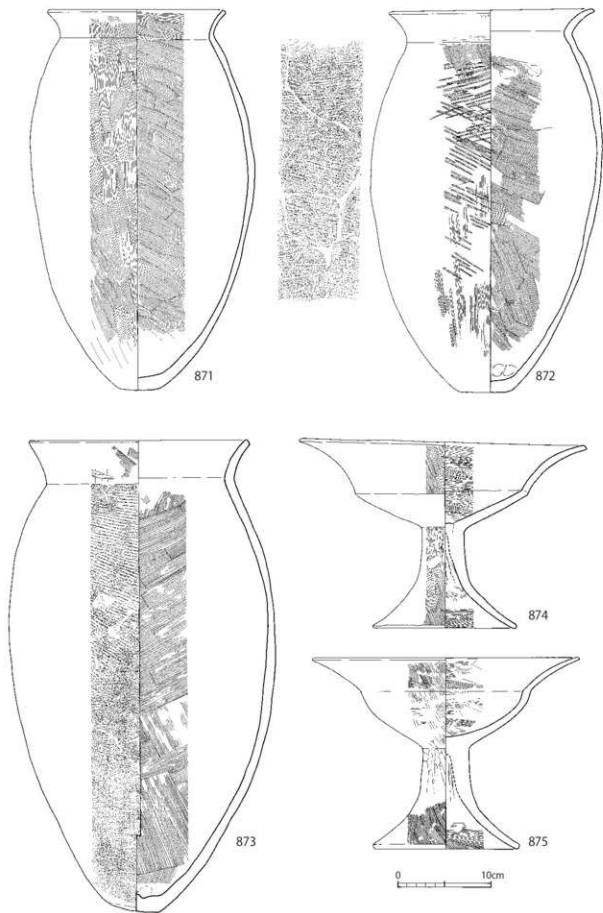
第306図 SH17出土遺物実測図①



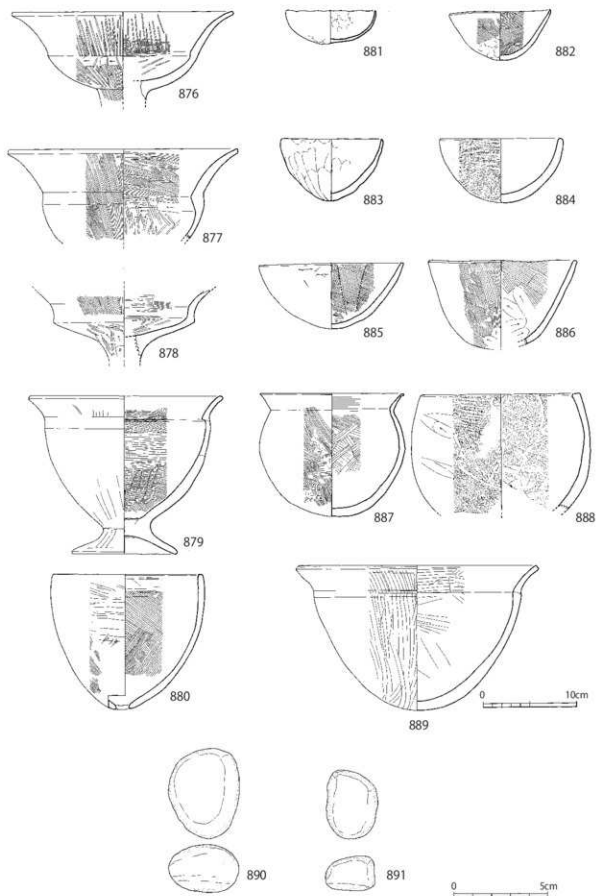
第307図 SH17出土遺物実測図②



第308図 SH17出土遺物実測図③



第309図 SH17出土遺物実測図④



第310図 SH17出土遺物実測図⑤

第4節 古墳時代前期の遺構と遺物

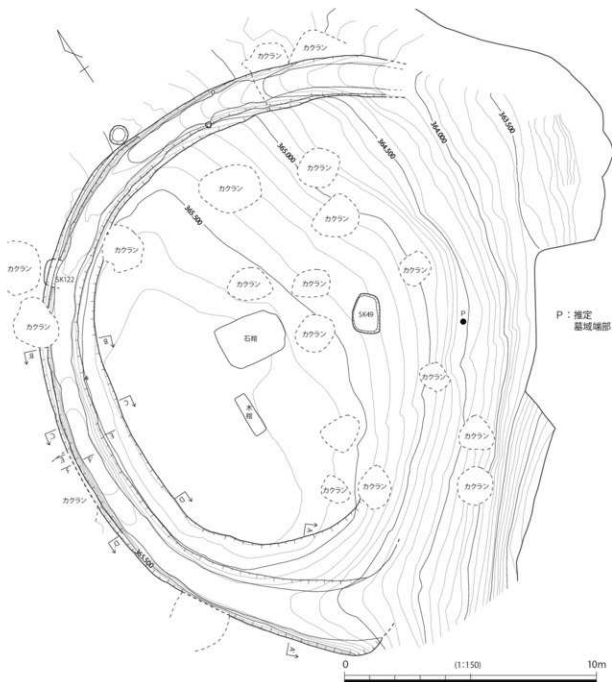
四日市遺跡が立地する台地は北西から南東へ延びる台地であるが、この南東端に古墳時代前期の周溝墓が見つかっている（1号周溝墓）。その後、北側に隣接する第13次調査地区でも古墳時代前期の周溝墓が3基見つかっており、台地の南東部一帯が墓地であることがわかった。ここでは古墳時代前期の周溝墓1基について報告する。

1号周溝墓 この遺構は、第1次調査区の南東部に位置し、区画ではイE56区・イE57区・イE55区・イE56区・イE57区・イE76区・イE77区に跨る部分に位置する（第298図）。このあたりは、1号周溝墓の南西側の台地頂部から延びる傾斜と東へ下り勾配になっている地勢である。1号周溝墓は、幅が約150cmの溝が半円形にめぐる「C」字形をした周溝で、南東傾斜面側は掘り落としている（第311図）。周溝の幅は、南側の掘り落とし部分が300cmであるほかは・短軸（南北）150cm～170cmである。この「C」字形をした周溝の内径は1,920cm、外径2,360cmである。1号周溝墓の北東から南側（珍珠盆地側）は、急激に標高が減る急斜面となっており、墓域端部の境界は明確ではない。しかし僅かに地形的变化のある部分（第311図のP地点）を墓域端部と考えておく。このP地点から西側周溝（内側溝）までが墓域ということになる。なお、周溝が囲む内側には盛土はほとんどない。

〈周溝〉周溝の断面観察は西側から南側にかけて行った（第311図・第312図）。その理由は、表面が削られ浅くなり、十分な観察ができなかったからである。A-A'ラインは南側の溝開口部に近い場所である。底面は皿状で、緩やかに立ち上がる。上位から1層（1a, 1b, 1c, 1d, 1e層）の黒褐色軟質土（自然流入土）が堆積している。2層と3層が盛土の流入土である。5層は、周溝掘削時の整地土である。D-D'ラインは、周溝南西部にあたり、上位から1層（1c, 1b, 1a層）の黒褐色軟質土（自然流入土）が堆積している。このうち、1b層と1a層の間に混入したのが、1'層で盛土の流入土である。2層、3層、3'層も古い盛土の流入土である。7層が盛土である。このD-D'ラインでの壁の立ち上がりは、外側が85°から60°の角度屈折する壁で、内側は湾曲しながら20cm立ち上がり、20°の角度で中央方向に延びる。C-C'ラインでの壁の立ち上がりは、外側が55°屈折する壁で、内側は湾曲しながら44°の角度で約40cm立ち上がる。堆積はA-A'ライン/D-D'ラインと同じである。B-B'ラインでの壁の立ち上がりは、外側が51°屈折する壁で、内側は湾曲しながら33°の角度で約15cm立ち上がる。堆積はA-A'ライン/D-D'ライン/C-C'ラインと同じである。この周溝の外側・内側の角度をを観察すると、内側が低い状況である。周溝墓が斜面際に構築されたために東西でローム層の標高が違うことと関係している。標高の違いは、盛土で補正したのであろうが、周溝掘削時の土量だけであれば差ほど高くなかったと推定される。また、周溝内や内側壁からの立ち上がりに葎石のないのも、この周溝墓の特徴である。

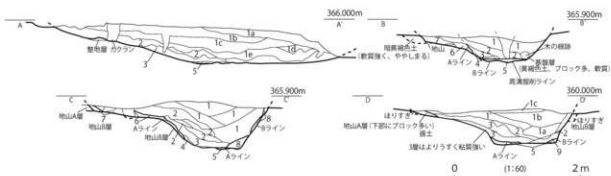
〈遺物〉西側の周溝で、底部と西壁立ち上がり部分から小型の壺だったと記憶するが、赤色顔料が内部に少量残存する状況で出土したが（第312図下段）、現在行方不明となっている。出土位置は、C-C'ラインの南側E-E'ライン付近で、整地土上面で出土した。その他、周溝墓に伴うものは、「く」の字に口頸部が屈折する胴部球形の布留式系の甕と（第315図895）、細長い脚部の下位が屈折して開く裾に特徴のある高杯の脚部破片（897）だけである。布留式系の甕は、外面がハケ目、内面が斜行するヘラ削りに特徴がある。これらのことから布留式の甕と高杯は、高橋徹編年の「古墳Ⅱ期（前期前葉）」に相当すると考えておく（高橋2001）。実年代でいえば4世紀初頭前後になろうか。その他、周溝内から出土した遺物は、鋤形口縁の広口壺（892）、素口縁の広口壺（893）、無頸壺（894）、粗製甕の底部（896）、扁平打製石斧（898）などの破片で、扁平打製石斧を除き、弥生時代中期須玖式段階の土器で、周辺から流入したものと考えられる。

〈1号主体 石棺墓〉 外側の墓坑ラインは、周溝南側の内縁から約950cmの場所に南側ライン、周溝西側の内縁から約550cmの場所に墓坑西側ライン、周溝北側の内縁から約660cmの場所に墓坑北側ラインが位置する。墓坑は、長軸（東西）275cm、短軸（南北）175cm、面積約4.05㎡の規模を有する隅丸長方形である（第313図）。①：墓坑は、その範囲すべてを掘り下げておらず、西側で端部から31cm内側、北側で端部から42cm内側、東側で端部から15cm内側、南側で端部から45cm内側に、斜めもしくは10cm～20cm掘り下げた内側の墓坑ラインがある。墓坑はクロボク層最下部、または黄色ローム層上面からローム層を掘り下げており、盛土中ではない。②：内側の墓坑ラインは、長軸（東西）229cm、短軸（南北）86cm、面積約1.97㎡の規模を有する隅丸長方形で、ここから下位に掘り下げている。墓坑の深さは、西側小口部分で隣接する外側墓坑ラインから下へ81cm（棺材差し入れ部で86cm）、内側墓坑ラインから下へ64cm（棺材差し入れ部で68cm）で



第311図 1号周溝墓実測図 (1/150)

ある。③墓坑内の両端小口部分に板状石材を立てる。このうち、西側の板状石材は、幅47cm・縦幅95cm・厚さ4cmで、下端が掘削面より下へ15cmり込んでいた。東側の板状石材は、幅44cm・縦幅71cm・厚さ4cmであった。④-1：墓坑内の西側より、西側小口板状石の北側縁部へ接するように北側側石として幅（長さ）約130cm・縦幅81cm・厚さ5cmの板状石材を設置する。同時に西側小口板状石の南側縁部へ接するように南側側石として幅（長さ）約127cm・縦幅72cm・厚さ4cmの板状石材を立てて設置する。南北の両板状石材の間は、内側面の下位の距離が56cm（南側板状石の最深部を基準とした横方向の距離）、外側の上位の距離が39cmであり、南側板状石が内傾することによって上位幅が下位幅に比べ幅狭い。④-2：墓坑内の東側より、東側小口板状石の北側縁部へ接するように北側の側石として幅（長さ）約121cm・縦幅81cm・厚さ3cmの板状石材を立てて設置する。ほぼ同時に東側小口板状石の南側縁部へも接するように南側の側石として幅



1. 黒褐色 軟質土（微細な黄色土粒子が、多く含む）→自然埋没土

1a.

1b. 層はわずかな濃淡の差で1b層が濃い

1c.

2. 淡黒褐色 軟質土（やわらか、粘質あり）（1~2ミリの黄色土粒子多）→1と3層漸移層

3. 暗茶褐色 1・2層よりしる 1~2ミリの黄色土粒子非常に多い→盛土のまじった初期流土

4. 淡茶色 粘質土 5層のブロック

5. 黄褐色 粘質土（基礎土）と淡茶褐色粘質土の混層→周溝掘削の整地層である

6. 黄茶褐色 粘質土（しる）5cm大の黄色土ブロック含む

7. 淡茶褐色 （しる）3cm大の茶色ブロック含む

地山A 黒茶色 粘質でしる

地山B 黄褐色 粘質でしる→基礎 黄色粘土ブロック盛土？

8. 黒茶色 粘質土でしる→粘着強し→初期流土である3層ががぶり、

周溝の穴へはりつづくので、整地層または、化粧土かもしれない（断定できない）

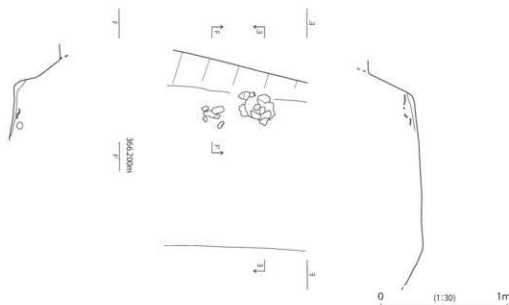
9. 黒褐色 粘質土で3cm大の黄色土ブロックを少し含む、自然堆積というよりブロックといえる

Aライン、周溝、墳丘完成時のライン

内側はかなり盛土があったことを窺わせる

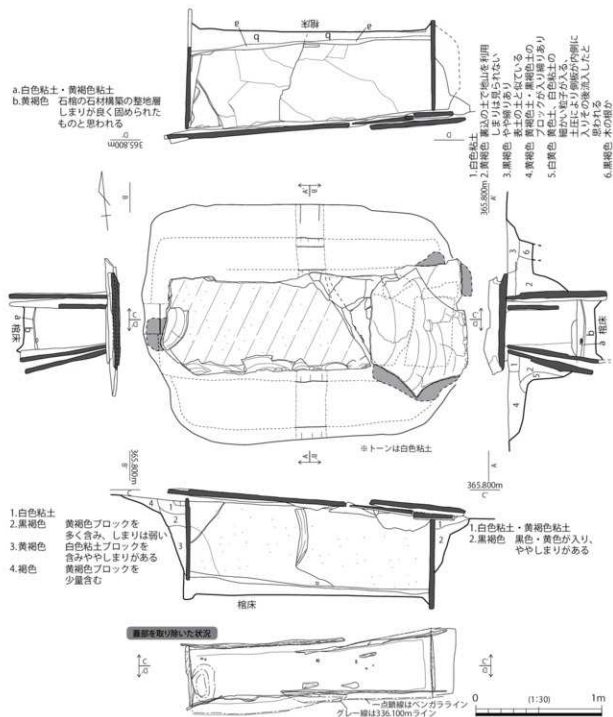
1~2ミリの黄色土粒子を含まない区別点

Bライン、掘削ライン



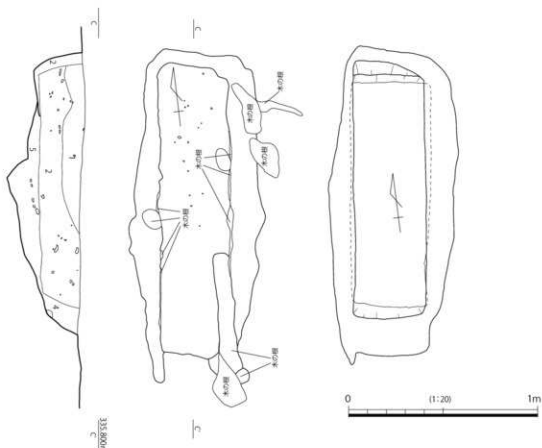
第312図 1号周溝墓断面実測図（1/60・1/30）

(長さ)約131cm・縦幅86cm・厚さ3～4cmの板状石材を立てている。南北両板状石材の設置にあたっては、既に立てられている西寄りの南北板状石材の内側に重ね接するようにして立てている(北側で40cm、南側で52cmの重なり)。更にいえば、南北の各側石は両小口の板状石の縁部を挟み込むように設置している。南北の両板状石材の間は、内側面の下位の距離が40cm(南側板状石の最深部を基準とした横方向の距離)、外側の上位の距離が28cmであり、南側板状石が内傾することによって上位幅が下位幅に比べ幅狭い。以上述べてきた④-1と④-2の工程における板状石材を立てるにあたって、両石材は前処理として、ハツリによる整形を行っている。特に上端は、細かい連続剥離によって直線的なラインを作りだそうとしたことが窺える。また



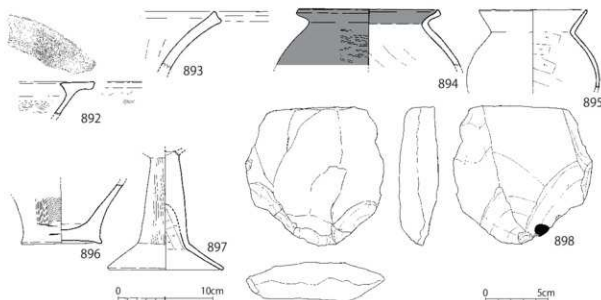
第313図 1号周溝墓1号主体実測図(1/30)

立てる作業は、当然のことながら上縁部の高さを揃えるように立てているが、下端がロームにめり込むような状況が認められるため、上端から叩き込むようにして揃えたことが窺える。以上述べてきた①工程から④工程を行うごとに、板状石材の固定・安定のために墓坑壁と間に裏詰め土を充填している。⑤：次に、棺内の調整である。⑤-1工程として最初に掘削した最下面上に、黄褐色のローム質土（b層）を整地土として4cm～17cmの厚さで敷き詰め固める。⑤-2工程として、b層の上面に厚さ1cm～4cmの白色粘土（a層）を化粧土として貼り付ける。⑤-3工程として、石棺内の西端部に長さ30cm、幅17cm、高さ4cmの規模を有する楕円形の枕を白色粘土で造形している。⑥：遺体を搬入する。⑦：遺体に赤色顔料を振りかける。このことで、白色粘土の床に赤色顔料が沈着している。⑧：石棺の蓋を閉める。蓋は、166cm×77cm（西側）・70cm×26cm（東側下位）・57cm×55cm（東側下位）・32cm×65cm（東側下位）・77cm×104cm（東側上位）という大小5枚の板状石材を用いている。岩石名は未調査。蓋石で閉めた後、蓋石の西端部と東北隅部・南東の南縁部付近に白色粘土を充填したり、被せたりして封印している。しかし蓋石には僅かな隙間が空いており、ここから土壌が内部高の3分2近くまで流入していた。以上が、石棺墓の構築・埋葬過程である。未確定な部分がある。周溝の南側開口部付近の急傾斜面を掘削中、明らかに石棺材の破片とみられるものが出土している。この小破片の片側の面には、赤色顔料が塗布されていた。このことは、A：石棺を製作直後



1. 黒褐色 赤色粒子(ベニガラ)、黄色ブロック少量、黒色ブロック(炭化物跡か)を含みしまりがある
2. 褐色 黄色ブロック(φ2cm粒)を多く含む
白色ブロック(φ2cm粒)、黒色ブロック(炭化物跡か)を少量含む、しまりがある
3. 黄褐色 埋り方、黄色ブロックを少し含む、しまりがある
4. 褐色 黄色ブロックを含み、しまりがなく、バサバサした土である
5. 黒褐色 黄色ブロック、白色ブロックを含み、しまりがある
(φ2～3cm粒)

第314図 1号周溝墓2号主体実測図(1/20)



第315図 1号周溝墓出土遺物実測図

に他の場所で赤色顔料を塗布したか、B：⑦の段階に石棺の内面に赤色顔料を塗布した、というケースが考えられる。Aの場合は、周溝墓周辺で製作されたことになるが、そうだとすれば石棺の残片があまりに少なく難しい。Bの場合であれば、⑦の段階における立てた板状石材の微調整（打ち欠き調整）、⑧の段階における蓋石への微調整（打ち欠き調整）があり、現状では最も想定しやすい。石棺内部の白色粘土床の上には、枕の中央を起点に南壁沿いの80cm・112cm、北壁沿いの126cm部分から細長い人骨片が出土した。人骨の残りはよくないが、北壁沿いの126cm部分から出土した細長い人骨片は、その位置と形状から脛骨である可能性が高い。身長は、150cm前後ということになる。

〈遺物〉 石棺内は、極めて人念に精査したが、遺物は確認できなかった。上述したように蓋石の合わせ部分に僅かな隙間があり、ここから小さな近現代の染付破片が流入していたことを考えると、盗掘を受けていた可能性を完全には否定できない。床面上の土壌を採取しているが、今回の報告書には間に合わなかった。来年度以降、整理する予定である。

〈2号主体 粘土椀〉 2号主体の粘土椀は、石棺墓の墓坑西側小口の南北方向の南延長上約2m地点に粘土椀の東壁が始まる。粘土椀の規模は、長軸164cm、短軸67cm、面積0.96㎡で、平面形は短冊状を呈している。その長軸方向の方位は、N-6°-Eである。粘土椀は木棺を粘土で包んだ形式の墓であるが、その粘土の厚さは、北側5cm、西側18cm、東側16cm、南側14cm、底17cmの厚さを有している。粘土の内側には直線的な木棺のラインが残っていた。この木棺のラインの規模は、長軸129cm・短軸38cm・面積0.49㎡で、平面形は長方形を呈している。木棺の深さは27cmである。遺構検出面で精査を行った結果、微細な赤色顔料が点在しており、このことから木棺の内面に丹を塗布していたことが分かる。

〈遺物〉 緑色で直径数mmのガラス製小玉が数個検出面から出土した。現在行方不明である。

《参考文献》

高橋 徹2001「大分の弥生・古墳時代土器編年」『大分県立歴史博物館研究紀要』2、大分県立歴史博物館、1-32

第5節 古代の遺構と遺物

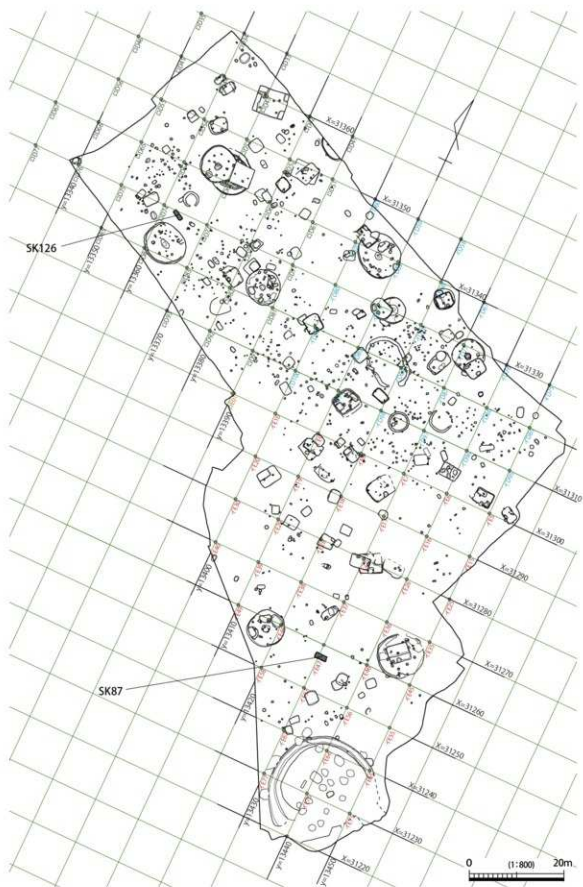
古代については、崇峻5年(592)の飛鳥遷都から、荘園公領制の開始直前の11世紀中ごろまでとしておく。この古代の遺構・遺物については、逆「く」の字形をした広大な第1次調査区において、数少ないながらも分布している。しかし、平成28年度の調査で四日市遺跡の発掘調査は15次となるが、古代の遺構・遺物の出土は第1次調査区だけである。むしろ、四日市遺跡全体における古代の遺構・遺物が少なく、墓地や居住地としての土地利用が希薄な時代であったことが窺える。

そこで第1次調査区における古代の遺物であるが、最も古いものは、弥生時代中期の竪穴建物跡SH31から出土した須恵器の坏蓋である(第169図458)。当然、SH31で出土したのは、攪乱による混入に由来する。この坏蓋は、ツマミがあるが、端部内面側にかえりのないのが特徴である。端部が強く屈折していないものの、概ね長直信の分類では坏蓋CI1にあたる(長2012)。こうした須恵器の坏蓋は、従来の須恵器の実年代観・編年観でいえば694年から710年までの飛鳥Vに相当する。したがってSH31から出土した坏蓋は、飛鳥Vに平行する飛鳥時代最終末期に位置づけておく。この坏蓋が位置する7世紀末～8世紀初頭頃における台地上の遺跡があれば、カマド付竪穴建物跡や掘立柱建物跡の存在が予測される。しかし、そうした遺構は一切なく、この時期の遺物は、坏蓋が唯一の資料である。この四日市遺跡が立地する台地下方の崖面には6世紀・7世紀頃かと思われる横穴墓が形成されており、おそらく横穴利用者等の居住地はその周辺の緩斜面・微高地・低地と考えられる。したがってこの居住者等の系譜に連なる構成員による畑作利用等の際に残されたものと推定しておきたい。

遺構の分布 遺構は、木棺墓が2基だけで、北部と南部の弥生時代遺構群が分布する中にある。2基の墓は、間隔が約101m前後あり、それぞれの周囲に関連する時期の遺構は一切ない(第316図)。

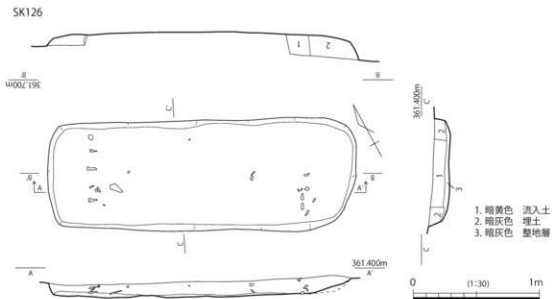
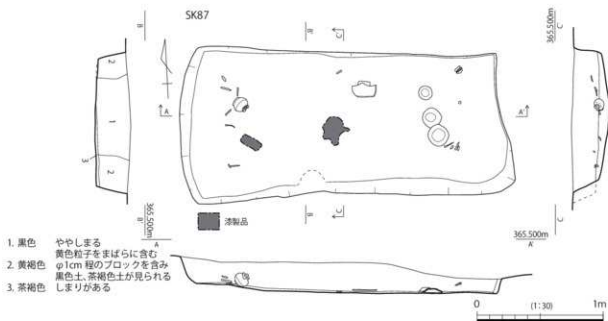
SK87 この墓は、第1次調査区の中では、東西に長い台地の東端部付近に位置しており、弥生時代中期の南西部遺構群が分布する地域である。墓付近の微地形は比較的に平らな地勢であり、東方や南方に珍珠地域の中核部である珍珠盆地が眼下に望める地点である。墓の位置は、区画でいえばE47区とE48区の境界にあたる(第316図)。SH87の平面形は、長方形で、その墓坑規模は、長軸260cm(大尺換算で、7.3尺)、短軸110cm(大尺換算で、ほぼ3尺)である(第317図)。内法(下場)では長軸250cm(大尺換算で、ほぼ7尺)、短軸110cm(大尺換算で、2.8尺)である。墓坑の深さは、検出面から約23cmである。墓坑長軸の方位は、ほぼ東西方向のN-87°-Wである。当初、中世墓である可能性が強いと考えていたので、墓坑の短軸方向に対し堆積土観察ベルトを設け、掘り下げを行った。その結果、垂直方向に立ち上がる木棺の側板ラインと、木棺蓋没後の内部流入土である1層が確認された。したがって2層は、木棺と墓坑壁の間にある埋葬時の裏込め土ということになる。裏込め土と木棺の下にある3層はしまっており、墓坑掘削時の整地土である。その上で掘り下げていく中で鉄釘、隅入方鏡、坏(土師質土器)、漆の塗膜が出土した。和釘の出土状況と断面にみる木棺側板の立ち上がり状況から、図示したような配置が復元できる。すなわち、木棺の小口は、墓坑端部から北側で約38cm・南側で約32cmの間をあけている。その規模は、長軸185cm(大尺換算で、5.2尺)、短軸68cm(大尺換算で、ほぼ1.9尺)である(第317図)。木棺長軸の方位は、東西方向のN-90°-Wで、墓坑長軸の方位より3°西側に傾いていることになる。その他、整地層上面まで慎重に精査したが、木炭を充填したような痕跡などは確認していない。

〈遺物と遺体の埋葬方向〉 和釘の位置と裏込め土の立ち上がりから木棺位置が推定されることは既にふれたが、遺物は、全て木棺の内側に位置していた。そして木棺内の位置においてそれらは概ね西群・中群・東群という三つのグループに分けることができる。西群は、木棺内の西側小口付近にある一群で、北側から



第316図 四日市遺跡第1次調査区 古代墓分布図 (1/800)

青磁の唾壺、その南側の漆の塗膜である。中群は、木棺内の中ほどにある一群で、北側側板よりの隅入方鏡、その南西よりの漆の塗膜である。東群、木棺内の東側小口付近にある一群で、北側から南東方向の斜めに坏3点（土師器）を口縁部に下に伏せた状態で並べていた。埋葬時の頭位については、残存人骨がないため明確ではない。しかし、豪華な出土品の編りが西半城にあることと、越州窯青磁唾壺のある付近の整地土上面の比高が僅かに高いことから遺体の頭位は木棺内の西よりにあったと推定しておく。そうすると、出土遺物の西群は頭部に隣接し、中群は腹部から腰部に、東群は足先に隣接することになる。西群の越州窯青磁唾壺は、小型の壺で、球形の胴部から短く頸部が立ち上がり、アサガオ状に坏部が開き、底部に輪高台が付く（第318図899）。全体的な器形は、胴部最大径が僅かに上位で長胴形をしている。胎土は、灰白色で硬質、軸は青色の薄い青灰色であるものの光沢軸である。高台は、輪高台であるものの、やや方形状である。なお、坏部と胴部は別づくりであり、坏の孔部と壺の口縁部を嚙状に引っかけて接合している。この



第317図 SK87・SK126実測図（1/30）

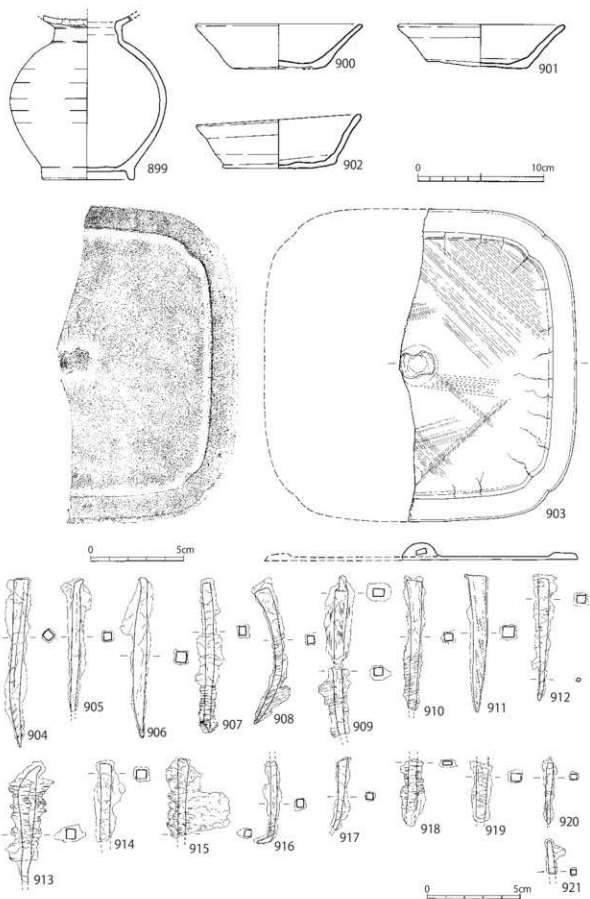
唾壺は、葬送儀礼にともない口縁端部から中ほどまでの全周囲を打ち欠いており、器高は現状で13.2cmである。西群と中群の漆の塗膜は暗紫色をし、それぞれ16cm×7cm・23cm×20cmの大きさがあつたものの取り上げることができなかったが、格別文様等は見られなかった。あるいは、文箱のようなものであつたのかもしれない。中群の半裁された陶入方鏡は、鏡面を上に向けて出土した。背面を見ると、半裁は対向する縁の中央部付近を含めて割ろうとしていたようであるが、鈕の存在からその部分を回り込むように割れている（第318図903）。本鏡は、鈕の存在から最大幅が縦横25.3cmで、陶入部分間は僅かに外湾している。縁の幅は、2.3cmの幅で背面側にもぐっている。縁の内区側の形は、外側の形と同じである。内区部は、縁の部分から内側へ髭上の銚残りが1cm～3cmの長さで伸びている。この他、内区部には、直線的な粗い研磨痕（線条痕）が残っている。坏（土師質土器）は、3点出土しており（第318図900～902）、いずれもヘラ切離しである。50°～60°の角度で外方へ直線的に立ち上がる。坏の法量等は、器高：3.4cm・3.4cm・4cm、口径：13.5cm・13.7cm・13.4cm、底径：7.4cm・8.2cm・9cmなどで、ほぼ差がない。この種のヘラ切の坏については、弥生寺で類似例が出土しており、その年代観から9世紀代のものとみなしておく。

〈和釘〉このほか、埋葬儀礼に伴う直接的な遺物ではないが、木棺の部材を連結するために用いられた和釘がある（第318図904～921）。ほぼ完形のもので、6.5cm・7.3cm・7.5cm・8cm・9cmなど様々な長さがある。断面は、方形である。和釘の分布をみると、木棺の小口方向で最下底部に多い。この点から、木棺の底板と小口側板を連結するものみられる。和釘には、直交する方向の脈を有する木質部が残存している。中には、木質部範囲から、木棺の板材が4.5cmの厚さと考えられる和釘がある（第318図915）。木棺の板材については、同定作業を実施しておらず、不明である。

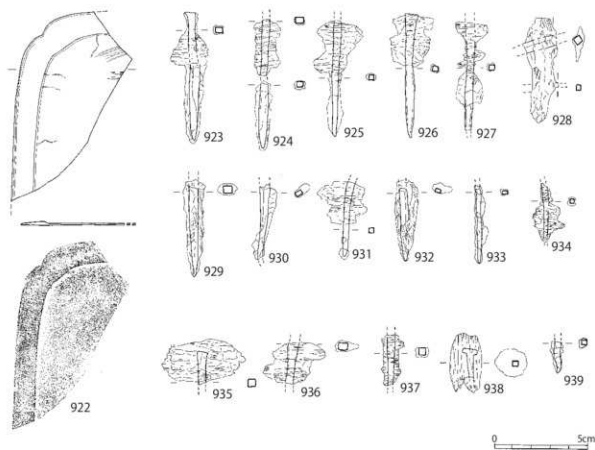
SK126 この墓は、第1次調査区の中では、北部付近に位置しており、弥生時代中期の南西部遺構群が分布する地域である。墓付近の微地形は、北側に向けて高さが少しずつ減じていく極緩やかな緩斜面である。墓の位置は、区画でいえばロD64区とロD74区の境界にあたる（第316図）。SH126の平面形は、長方形で、その墓坑規模は、長軸246cm（唐代の大尺換算で、8.3尺）、短軸90cm（唐代の大尺換算で、ほぼ3尺）である（第317図）。墓坑の深さは、検出面から約14cmである。墓坑長軸の方位は、ほぼ東西方向のN-61°-Wである。当初、中世墓である可能性が強いと考えていたので、墓坑の短軸方向に対し堆積土観察ベルトを設け、掘り下げを行った。その結果、垂直方向に立ち上がる木棺の側板ラインと、木棺蓋撤去後の内部流入土である1層が確認された。したがって2層は、木棺と墓坑壁の間にある埋葬時の裏込め土ということになる。裏込め土と木棺の下にある3層はしまっており、墓坑掘削時の整地土である。その上で1層を掘り下げていく中で鉄釘、銅鏡が出土した。鉄釘の出土状況と断面にみる木棺側板の立ち上がり状況から、図示したような配置が復元できる。すなわち、木棺の小口は、墓坑端部から北側で約32cm・南側で約37cmの間をあけている。その規模は、長軸175cm（唐代の大尺換算で、ほぼ6尺）、短軸54cm（唐代の大尺換算で、ほぼ1.8尺）である。木棺長軸の方位は、東西方向のN-60°-Wで、墓坑長軸の方位より1.5°北側に傾けていることとなる。この他、整地層上面まで慎重に精査したが、木炭を充填したような痕跡などは確認していない。

〈遺物と遺体の埋葬方向〉SK87と同様に和釘の位置と裏込め土の立ち上がりから木棺位置が確定されることは既にふれたが、遺物は、陶入方鏡だけで、木棺内の西端部よりに位置していた。埋葬時の頭位については、残存人骨がないため明確ではない。しかし、SK87と同様な観点から豪華な出土品である陶入方鏡の位置する木棺内の西方向に遺体の頭位を向けていたと推定しておく。

ところで、SK126の遺物が異常に少ないが、これは遺構の検出深度と関係がある可能性が高い。この遺構はローム層上面で確認したが、周辺の地層観察からすれば、本来縄文時代に堆積したアカホヤヤクロボク



第318図 SK87出土遺物実測図



第319図 SK126出土遺物実測図

層が存在していたはずで、その深さは、少なくとも検出面より約50cmも上にあつたと推定できる。この点はSK87にも少なからず関係している。

〈遺物〉破砕された隅入方鏡の鏡片が、木棺内の西端部付近で鏡面を上にして出土した。この隅入方鏡は、四つある方鏡角部の一角にあたる小破片である(第319図922)。隅入部分間は僅かに張る。背面側には幅1.3cmの緑がめぐっている。内圏側の形は、外側の形と同じである。内圏部は、緑の部分から内側へ髑上の跡残りが1cm～1.5cmの長さで伸びている。この他、内圏部には、直線的な粗い研磨痕(線条痕)が残っている。この他、埋葬儀礼に伴う直接的な遺物ではないが、SK126においても木棺の部材を連結するために用いられた和釘がある(第319図923～939)。ほぼ完形のもので、6.6cm・6.8cmなど様々な長さがある。断面は、方形である。和釘の分布をみると、木棺の小口方向で最下底部に多い。この点から、木棺の底板と小口側板を連結するものみられる。和釘には、直交する方向の脈を有する木質部が残存している。SK126の和釘の厚さは、SK87のものに比べ小ぶりなものが多く。

越州窯青磁唾壺の特徴については福岡市教育委員会の田上勇一郎様と筑紫野市教育委員会の小鹿野亮様、隅入方鏡の特徴については奈良文化財研究所の中川あや様の御教示を頂いた。記して厚くお礼申し上げます。

参考文献

長 直信2012「豊前地域の土器様相と須恵器生産」『古文化談叢』第67集,古文化研究会,55・107

第4章 総括

第1節 弥生時代中期の遺構・遺物

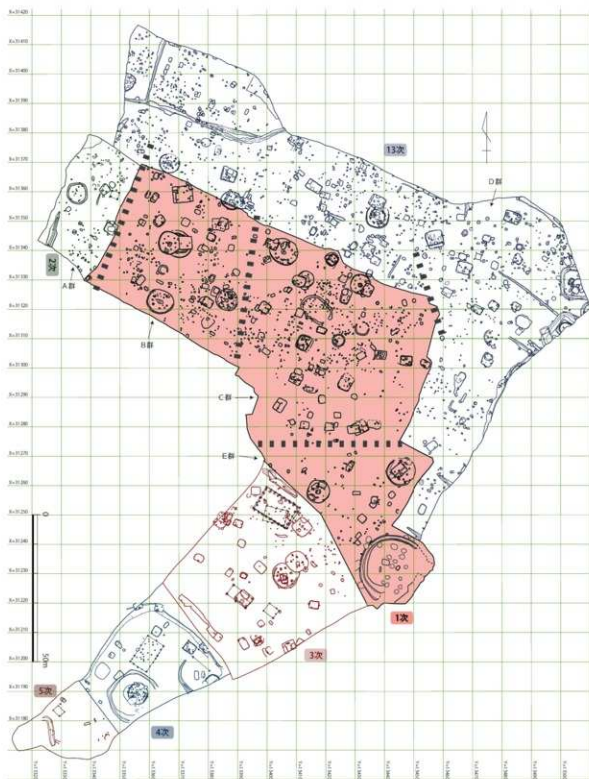
〈集落〉四日市遺跡の第1次発掘調査で調査した遺構は、竪穴建物跡41棟、土坑125基である。このうち37棟の竪穴建物跡と123基の土坑は、出土遺物から全て弥生時代中期中頃から後半にかけて営まれている。土器でいえば、須玖Ⅰ式、須玖Ⅱ式土器に相当するものが出土している。なかでも後者が出土した遺構は多く、大半を占める。しかも集落内における遺構の切り合い関係は、2棟分程度の切り合いが観察されるにすぎない。このことは、須玖Ⅱ式土器段階を中心に同時並存していた竪穴建物跡や土坑の多いことを示すのか、あるいは多くが廃棄土坑として転用されながらも埋没が完了しないために切り合い関係の生じるような遺構掘削が行われていなかったということになる。その時期は、出土した土器を実年代に比定するならば、須玖Ⅰ式新～須玖Ⅱ新の紀元前250年頃から紀元前後の間の250年のことと推定される（藤尾2009）。

竪穴建物跡や土坑などの遺構は、平面分布上数群に区分できる。その群構成については、竪穴建物跡や土坑などの粗密からA群～D群に区分できる（第320図）。前章で便宜的に区分し報告した北西部遺構

群がB群、中部遺構群がC群、南西部遺構群がE群にあたる。そのほか、B群の西側は、第2次調査区であるが、若干の間をあけて再び群集するかのよう状況が窺え、A群とした。C群の北東部は、第13次調査区内にあり、中小の竪穴建物跡が多く分布しており、D群としておく。なお、E群は第3次調査区方向に延びている。第2次調査区のA群に見るべき遺構は、ほとんどなく、隣接する第13次調査区西端を合わせると1,670㎡の調査面積があるが、40㎡以下の中小の竪穴建物跡が2棟分布しているに過ぎない。B群では、10棟の竪穴建物跡のうち40㎡以上の床面積を有する大型竪穴建物跡が5棟（他に第13次調査区側に1棟）、中小の竪穴建物跡が6棟である。C群では、大型竪穴建物跡が2棟（他に第13次調査区側に1棟）、中小の竪穴建物跡が20棟である。E群では、大型竪穴建物跡が2棟（他に第3次調査区側に2棟）、中小の竪穴建物跡が20棟である。D群については、第1次調査区外であるが、中小の竪穴建物跡のみで、大型竪穴建物跡は分布していない。これら竪穴建物跡の群構成をみると、B群やC群で大型竪穴建物跡が多く、他は少ないか無いという状況である。集落の内容については、5、6棟の中小の竪穴建物跡（竪穴式住居跡）に1棟の大型竪穴建物跡という単位が考えられてきたことと矛盾するようにもみえる（甲元1986）。この点は、四日市遺跡において遺構の希薄空間という境界が明瞭であることからすれば、それぞれの群が一つの単位であり、範囲でもあるとするならば須玖Ⅰ式新段階から須玖Ⅱ式新段階に至る累積的な遺構の形成によると考えるほかはないだろう（第1表/面積計算が可能な竪穴建物跡）。その上で、これらのA群からE群までの

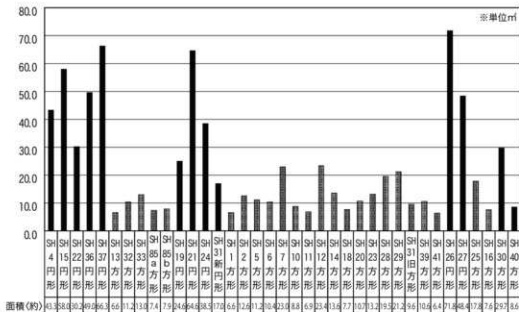
第1表 竪穴建物跡の面積と主柱穴数

地区	平面形	竪穴建物跡番号	面積(㎡)	規模	主柱穴
B 北西部遺構群	円形	SH4	43.3㎡	大	7
	円形	SH15	58.0㎡	大	11
	円形	SH22	30.2㎡	中	6~7
	円形	SH6	49.0㎡	大	8
	円形	SH7	66.3㎡	大	不明
	方形	SH13	6.6㎡	小	0
	方形	SH2	11.2㎡	中	2
	方形	SH3	13.0㎡	中	0
	方形	SH5a	7.4㎡	小	?
	方形	SH5b	7.9㎡	小	?
	円形	SH19	24.6㎡	中	4
円形	SH21	64.6㎡	大	10	
円形	SH24	38.5㎡	中	8	
円形	SH31新	17.0㎡	中	4	
方形	SH 1	6.6㎡	小	2	
方形	SH 2	12.6㎡	中	2	
方形	SH 5	11.2㎡	中	2	
方形	SH6	10.4㎡	中	2	
方形	SH 7	23.0㎡	中	2	
方形	SH10	8.8㎡	小	2	
方形	SH11	6.9㎡	小	2	
方形	SH12	23.4㎡	中	2	
方形	SH14	13.6㎡	中	2	
方形	SH18	7.7㎡	小	2	
方形	SH20	10.7㎡	中	2?	
方形	SH23	13.2㎡	中	2	
方形	SH28	19.5㎡	中	2	
方形	SH29	21.2㎡	中	21	
方形	SH31E1	9.6㎡	小	2	
方形	SH39	10.6㎡	中	2?	
方形	SH41	6.4㎡	小	2	
円形	SH26	71.8㎡	大	8	
円形	SH27	48.4㎡	大	6	
方形	SH25	17.8㎡	中	1	
方形	SH16	7.6㎡	小	2	
方形	SH30	29.7㎡	中	2	
方形	SH40	8.6㎡	小	2	



第320図 四日市遺跡における弥生時代中期集落の群構成

群（単位集団）が、同時に並存したのか、あるいは同一集団が移動した結果形成された景観であるのかはつきりしない。この点について甲元眞之は、「弥生時代中期



第321図 竪穴建物跡の面積

黒：円形 白：方形

以降、単位集団が併存する場合は溝をもって相互を区画する傾向があり、こうした区画溝がないことは、同時併存を意味しないことが考えられる。」としていることを考えると、同一集団が移動した結果形成された景観である可能性が考えられる。

この他、竪穴建物跡の床面積を比較すると、円形の場合が方形の場合よりも相対的に面積が大きいことが判る。床面積の大きさが階層性を示すのであれば、円形の場合の方が優位であった可能性がある。

〈建築部材〉 焼失家屋であるSR36からは大量のトチノキなどの炭化食料が出土しているが、それとともに遺構平面図をみてもわかるように放射状に建築部材が炭化した状態で出土し（第99図）、その樹種を同定した（巻末の古環境研究所の報告を参照のこと）。同定用の試料を抽出するにあたって、出土した炭化部材の分布を調査したところ、同一個体かどうかの認定に困難な建築部材もあった。しかし全体の傾向をつかむため、50点を抽出し、固定を実施した。それによると、「クリ47点、クリ？2点、カヤ2点、シキミ1点」と同定されている。その結果、圧倒的にクリが多いことがわかった。クリは、虫がつかないため保存性の高い樹種として知られており、縄文・弥生時代から使われ、県内では国東市の安国寺遺跡でツブラジイ、イタジイ、クス、カヤ、フシなどととも部材として出土している。県内外の状況は、木材の選択にあたっては多様な広葉樹を利用するなかでクリも使われているのが実状である（小矢部市教育委員会2005）。その中で、本遺跡の状況はクリを利用することで際立っている。したがって、柱や梁・桁にクリ材を多用した上屋構造の竪穴建物跡であったことがわかる。

〈土坑・周溝〉 土坑には、極浅い例もあるが、円形の例から方形、長方形、楕円形のものまである。どちらからいえば、方形の例の方が多い。最も特徴的な土坑は、A：平面形が長楕円形もしくは隅丸長方形をした例である。B：長楕円形もしくは隅丸長方形の、両方または片側小口側をオーバーハング状態にした例がある。また、C：隅丸方形・隅丸長方形土坑の対角線上の土坑外に柱穴の有る例もある。この他、数は少ないながら、D：平面形が通常の隅丸長方形・長楕円形で検出面からそのまま斜行する長軸掘削面をもつ例や、E：方形土坑の底面にもう一段低い方形の土坑を掘削した例がある。これらの土坑のうち、深さが20cmに満たない例を除き、その本来的な機能・目的に貯蔵があったとすれば、分布上の位置が重要となるが、

四日市遺跡では大半が竪穴建物跡の周辺や竪穴建物跡間の周囲に位置する。参考までに第13次調査区をみると、谷に面した北側付近に土坑の分布がほとんどないことが注意される（第320図）。福岡県板付遺跡の突帯文土器期や板付1式期における貯蔵施設は、竪穴建物跡群と川や水田地帯との間にあるなど、機能の違いにより分離した平面配置となっている。佐賀県千塔山遺跡の貯蔵施設も竪穴建物跡群との分布域を分けており、居住空間と貯蔵空間を隣接地に分けながらも環濠内には取り込まれている。板付や千塔山の事例からすれば、居住空間と貯蔵空間を截然と区分していないのが四日市遺跡の在り方ということになる。これは、別の見方からすれば、遺構配置に伴う集团的統制・集团的組織が未発達な状況を反映したのかもしれない。四日市遺跡におけるこうした状況は、一面では、収獲物の竪穴建物跡単位の管理であることを示している。更には、食糧を盗難から守る為に竪穴建物跡周辺で管理していたことの反映ともいえる。

円形周溝・楕円形周溝についても、竪穴建物跡間や中心部に位置しており、台地端部に近い第13次調査区には、1基もないことに注意が必要である（第320図）。円形周溝・楕円形周溝については、須玖系の土器が浅い溝に廃棄されていたことから弥生時代中期中頃から後半の遺構であることが確かである。その上で、この遺構に囲まれた内部域に墓であることを示す墓坑もないことから、家畜を囲む囲いの範囲ではないかと推測している。古代中国仰韶文化期の姜寨（ワウサイ）遺跡では、環濠で囲まれた集落の内側に住居や倉庫施設が並び、その内側に家畜囲場、広場が位置している。こうしてみると家畜が古代中国人にとって重要な意味を有していたことが分かる。四日市遺跡において、特にC群内の中央にあたる部分に周溝S2、近接して周溝S3、S4が広場的な空間とともに位置しており、これらの円形・楕円形周溝遺構を家畜囲場と推定する。

〈墓地〉四日市遺跡第1次調査区からは、1基の小児甕棺墓以外、成人の甕棺墓・土坑墓が一切確認されていない。四日市遺跡では、第1次調査の後、第15次調査に至るまでの台地上の平坦地は、一部を除きほぼ掘りつくしたといつて過言ではない。このことから、四日市遺跡に集落の規模に見合う大規模な墓域空間はなかったといえる。県内では、大型成人甕棺墓が出土するのは、日田市吹上遺跡のある日田盆地までであり、上流の同市天瀬町五馬大坪遺跡では弥生時代中期の祭祀土器とともに木棺墓が発掘されている。宇佐市の野口遺跡や桶尻遺跡は弥生時代中期の祭祀土坑とともに土坑墓や石蓋土坑墓が多数発掘された墓地遺跡であるが、近接した場所に竪穴建物跡群はなく、遺跡外に集落本体の存在が予測されている（高橋1989）。弥生時代の遺跡の場合、墓地を集落内・環濠内の別地点に配置した佐賀県吉野ヶ里遺跡や大分県吹上遺跡のような事例が知られている。その一方で、集落外の離れた場所に墓地を設置した例がある。山口県土井ヶ浜遺跡では、弥生時代前期・中期の埋葬人骨が300体以上出土している。土井ヶ浜遺跡へ遺体を埋葬した集落遺跡と考えられているのは、「土井ヶ浜南、片瀬、森広、西沢、竜王、今宮、上沢」などの遺跡があり、最大で2.5km近くも離れている（春成2017）。神奈川県大塚遺跡（集落）と蔵勝土遺跡（墓地）も同様な遺跡である。以上の状況から結論的にいえば、四日市遺跡内に集落の構成要素としての墓地は存在せず、四日市に隣接する台地に墓地の存在が予測される。

それでは、どこに墓地を求めるべきかである。宇佐市や日田市内の調査結果の動向を参考にすると、集落と墓地は、台地か丘陵上に営まれており、沖積低地にどちらか一方が立地するということはない。したがって、四日市遺跡の集落に対応する墓地も台地上に立地すると考えるのが自然である。そこで四日市遺跡の周辺で台地があるのは、幅狭い谷を隔てて北側に平行する池ノ原B遺跡、井ノ尻遺跡、ノノ釣遺跡、名草台遺跡のある台地だけである。とりわけ名草台遺跡は、古くから知られた遺跡で、1954年の調査では弥生時代後期や古墳時代を中心とした石棺や甕棺が出土している（賀川1971）。ここでは、四日市遺跡における弥生集落の墓地遺跡として可能性のある遺跡を含め、上記の遺跡を提示するにとどめておきたい。

〈鉄器〉 ここでは四日市遺跡出土の鉄器について取り上げたい。四日市遺跡における鉄器は、SH15から出土した鉄製平整形工具1点だけである。これは、床面から出土した土をフローテーションしているときにかかったもので、上端部の横断面がコの字形を呈し、下端が細くなった例である。こうした鉄製平整形工具との関連が窺えるのがSK83の炭化木材である。この炭化木材を観察すると、方柱状のホゾ孔が貫通しており、同様な痕跡は他にもう一例あった。こうしたホゾ孔の作出にあたっては、大陸系磨製石器の一つである、柱状片刃石斧の超小型品である鑿状石器でも可能かもしれないが、内部の細かい削りだしなどから鉄器の鑿状成品を用いたと考えている。1点以外に鉄器資料はないが、鉄器がかなり存在していたことは砥石の存在から窺える。砥石は15点出土しているが、その大半は鉄器研ぎ出し用のものと推定している。粗い質感と天草石のような細かい質感を有した例があり、大半は後者である。おそらく、粗砥用と仕上げ用に使い分けたことが推定される。これらの砥石の内細長い例は、横断面が四角形で、研磨によって中央領域がどの面も緩やかにすり減り、結果的に上下両端が太くなっている。こうした砥石の形状は、今日の使い込まれた砥石と全く変わらない。表面には、鉄

器(刃物)を研ぎだすときに生じた鋭い傷が延びていることでも共通する。

〈石器〉 石器については、表にまとめている通りであるが、敲石・磨石・台石などを入れていないが、各遺構で出土している例が多い。打製石鉄は5点が出土しただけである。このうち、SK103出土例以外の4点の石鉄は、縄文時代に由来する可能性の高い石鉄であるが、残りの1点は長さ4.85cm、幅2.25cm、厚さ0.55cmもある姫島産黒曜岩を石材に用いた石鉄としては県内最大の例であり、弥生時代中期の例としてよいだろう。一方、磨製石鉄は、長幅4.5cm/1.75cm、長幅6.65cm/1.9cm、長幅2.2cm/1.15cm、長幅6.35cm/1.8cmと巨大であり、対敵用の殺傷用武器といわれていることもあり巨大である。しかし弥生時代中期の打製石鉄・磨製石鉄

第2表 主要な石器・土製品の数量表

遺構	投擲(石)	投擲(土)	磨製石鉄	打製石鉄	鉄製鑿形工具	円形土製品	砥石	石包	石丁	石鉄	小型磨製石斧	始刃形石斧	片刃磨製石斧	防鈴	土製勾玉	石剣	石斧	石	埴	
SH15	79				1															35
SK81							2													48
SK83							1													52
SH33	2											1								63
SH32													1	1						66
SH4							1	1					1							69
SK15		1																		72
SH13																	1			80
SK22						1														84
SK76							1													98
SH36	61						2		1	1	1									101
SH37			1			1			1		1									103
SH20												2								112
SH21								1	2		1									115
SH18	4							1	1											117
SH19	3																			119
SH5												1								125
SK72								1												128
SK123			2																	136
SH7								2			1									141
SK103				1																143
S2				1																152
SK47		1																		154
SH31	13																			169
SH14			1																	173
SH23										1										175
SH24							2				1		1							179
SH2			2					3												195
SH9								1	1											202
SK10																				213
SH10								1									1			219
SH28	4																			224
SH29							1	1	2		1									252
SH25									1		1									251
SH26									1											253
SK80		1						1												266
SH27								5	1	2		1								275
SK78								1												291
SK65								2												297
SH3																	1			300
SH35										1										303
SH17	2																			310
合計	168	2	4	5	1	3	24	13	8	5	7	4	1	1	3	2				

の数量は、5点であり、極めて少量で、戦闘用、狩猟用だったとしても、装備としてはあまりに少量すぎるといえよう。しばしば、縄文時代の石鏃が発掘では全体の4分の1しか出土しないのに対し、残りは水洗で検出されるといわれる。四日市遺跡でもそのようなことが起こっていなかったとはいえないが、植物遺体を検出するためにフローテーションを行った際や雨後の表面観察を行った際に石鏃をまづ見かけることができなかったのが実状である。したがって、四日市遺跡における弥生人たちが弓矢の利用に際して所謂骨鏃を利用した可能性は皆無ではないが、その利用は極めて低調だったと考えられる。また、大分県中部・南部地域の弥生時代中期・後期の遺跡では、しばしば粘板岩や結晶片岩を用いた磨製石鏃の整作が行われた痕跡が検出されているが、四日市遺跡においては、そのような痕跡も検出されていない。

石鏃が極少量であるのに対し、小石利用の投弾が大量に出土している。ラグビーボール状の土製投弾も2点出土しているが、極少量であった。小石利用の投弾は、ほとんどが角四石粒を少量混入した安山岩の小石で、大きさは2cm～3.5cmまでの間に入る例がほとんどである。それらは加工を全くほどこさず、自然石利用のまま、鋭角角張った部分はないものの凹凸に富んでいる。そのような石であるが、大きさについては揃えようとする意識のもと、選択したことが窺える。小石利用の投弾は、製作の手間がかからないだけで(探す手間はかかる)、資源としても遺跡周辺に無尽蔵にあることに利点がある。SH36では、同程度の大きさを有する自然礫が竅穴建物跡内の壁際に集積した状況で出土している(第99図)。そのような目でみると、集積はしてないまでも、ほぼすべての遺構で幾つかの投弾が含まれているといつてよい。図示され、表に数量が記載された小石利用の投弾数は極めて少量にとどまることを指摘しておきたい。筆者が警見したところでは、四日市遺跡において、第1次調査区以外の弥生時代中期の遺構からも出土しているようであった。このことは、四日市遺跡における弥生時代人たちが普遍的に小石利用の投弾を用いていたことを意味している。

火山性発泡軽石について記しておきたい。この石器は第1表には入れていないが、各遺構から出土したものについて幾つか報告したところである(第63図174、第134図398・399、第243図648、第284図792)。この石は、ざらざらとした質感で、形や大きさに統一性がなく、若干の摩擦痕と鋭い傷の他は、これといった特徴のない灰色をした極めて地味な資料である。そのため、遺跡においては取り上げられることもすくなく、運よく持ち帰られたとしても整理対象から外れることが多い。しかし、この石は四日市遺跡の台地上に産出するものではなく、弥生時代の人々によって遺跡内に持ち込まれた遺物である。火山性発泡軽石は比重が極めて軽量で、水面に浮かぶ特徴を有し、表面が多孔質で、手ざわりがざらざらした軟質の道具である。軟質ではあるが折れやすいわけではなく、触ると粗い粉状の粒子がつく。調査時に炉跡の付近でよく出土したが、他の場所でも普通に出土する。大きさは、板状に近いものから、人頭大のものまである。その形や性質からすると刃物や台石、敲石、石器材料等の用途にはなじまないものといえよう。表面には部分的に摩擦痕や鋭い傷痕が観察される。民俗事例ではないが、こうした軽石は、近年まで農村部で、刃物や鍋釜の錆や汚れ落としに使ったり、風呂で使う洗いの東子代わりに使ったりした。このような使われかたは、多孔質で、やわらかいざらざらした質感の火山性発泡軽石に適した用途といえよう。推測であるが、四日市遺跡の事例も、鉄器や土器の錆やよごれ、磨き、あるいは皮の鞣し等、その特質にあった目的のために多用された貴重な道具であった可能性が高いことを指摘しておきたい。

〈食料〉 四日市遺跡の発掘中、床面直上城や土坑内の炭化物包含層から植物遺体が出土している。中には柱や藁のほか、トチノキ、モモの殻、イネなどが出土した。そこで幾つかの遺構の床面直上城の堆積土を、深さ約60cm、幅約50cmの土嚢袋約200枚に入れた。その量は、僅に軽トラック1台分もあった。これを当時の熊本大学埋蔵文化財調査室(現・熊本大学埋蔵文化財調査センター)に2ヶ年にわたって調査研究を

委託した。その結果が本書に掲載されている報告である。その報告を受け、調査・整理中に植物食料に関して整理してきた。

報告には、調査中にその存在が確認されていた上記の種類を含め、11種類が確認されている。これらは、炭化して形の残りにくいもので構成されているが、残りにくいイモ類も存在したであろうことは考慮に入れておく必要がある。イネは、土壌を採取した16基の遺構中、14基から出土しており、最も普遍的に食べられていた主食であったのだろう。特にSH36の火災住居からトチノキとともにままとってイネが出土しているほか、SH27からは、竪穴建物跡内の扇形土坑最下面の西壁沿いで、20cm近い幅で多量の炭化イネが出土した。しかも分布の全域に渡って数cm近い厚さで堆積していた。このことは、1年生の籾殻付イネを、屋内の土坑に保存していたことを示している。石包丁も今回の報告分では10点出土しており、水田耕作が行われていたことを物語っている。その場所は、四日市遺跡の北側小谷が最も可能性が高いと考えている。ここは、遺跡が立地する四日市の台地からみると地勢的に北側への下り勾配の方向にあり、距離も近く管理しやすいと考えられるからである。イネ以外は、畑作物のアワ、アズキ、ダイズ、マメ等と、自然生育のノブドウ、モモ、ドングリ、イチイガシ、コナラ、トチノキからなる。畑作物のうちアワ（雑穀）とアズキはイネに次いで出土遺構が多い。このことは、主要食糧としてのイネを補充するものとして住居地周辺の菜園で栽培されていたことが窺える。またトチノキを代表とする木の実類も重要な食糧であり、SH36やSH25、SH27、SH34、SK96などで出土している。とりわけ、トチノキは実が大きく、採れる炭水化物の量が多いが、灰汁が強く、数か月に及ぶ灰汁抜き・乾燥などの処理作業を必要とするでも知られている。このトチノキについて藤尾慎一郎が野生型のメジャーフードに分類し、社会における位置づけとして、取扱い、特定化するものとして管理された利用形態が考えられている（藤尾1993）。以上のようなトチノキの位置づけから四日市遺跡の事例について考えてみたい。SH36は、懸架乾燥を行っていた大量のトチノキが火災にあったのか、落下して帯状分布した状況で炭化していた。この状況は、乾燥・虫殺し、水さらしの工程の中で乾燥・虫殺しを梁などの上で行っていたものが火災により落下した状況を物語っていると推定する。こうしたトチノキは、大分県内で、トチノキの収量調査をした長岡海和によると9月3日から9月10にまでの僅か一週間で年間収量の90%が落下するという（長岡1986）。落下したトチノキは、まもなくネズミなどの小動物や虫などに食される。したがってトチノキの採取は、対人間というより、いかに小動物・虫に先じて確保するかにかかっている。四日市遺跡においても8月からの熟れ状況を下から観察しつつ、根本周辺の下草を刈るなどの準備を行い、適切な時期に竹などの棒で突き落としたのであろう。トチノキは自然に生えた木ではあるが、実がなるまでに10年以上かかるともいわれている。その実の採取に向けては、管理の必要な樹木であるだけでなく、代々に渡って管理された可能性が高い樹木である。その他の、ドングリ類、特に、イチイガシは、灰汁抜きの必要がない食料として縄文時代から利用されてきたが、これなどもコナラとともに管理されてきた食料なのだろう。

第3表 出土した食糧の収穫時期

※対象遺構数16

種類	学名	収穫時期	出土遺構数
イネ	<i>Oryza sativa</i> L.	10月上旬	14
アワ	<i>Setaria italica</i> (L.) P. Beauv.	9月下旬	8
アズキ	<i>Vigna angularis</i> var. <i>angularis</i>	9月下旬～10月下旬	10
ダイズ	<i>Glycine max</i>	10月中旬～下旬	2
マメ			1
ノブドウ	<i>Vitis</i> . <i>coignetiae</i>	9月中旬～下旬	2
ドングリ			1
イチイガシ	<i>Quercus gilva</i> Blum	10月～11月	4
コナラ	<i>Quercus serrata</i> Murray		1
トチノキ	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	9月上旬	5
モモ	<i>Prunus persica</i>	7月～8月	2

以上、植物質食糧について述べてきたが、四日市遺跡においては、家畜囲場と推定される周溝が確認されている。大分市下郡桑苗遺跡での事例のように、ブタの飼育が判明しており、集落景観の中

に円形周溝などで食糧用としての家畜を飼っていたことが当然予想されうる状況である。

〈祭祀・呪い〉祭祀・呪いには様々なものがある。弥生時代に限って言えば、銅鐸埋納祭祀、銅剣・銅矛埋納祭祀、先祖祭祀と結びついた農耕祭祀、葬送儀礼、水口祭祀、魏志倭人伝に記載された刺青、卜骨（古）、などがある。ここではそれらに言及する余裕はないが、発掘・整理を通して感じた実用性から離れた行為と考える出土状況・遺物がある。それらは、上記した弥生時代の祭祀・呪いの断片であるのかもしれないが、見落とされがちな事象を記載しておく。

SH19では、竪穴建物跡の中央に位置する炉跡内に台石を入れ、大型の土器破片で塞いだかのような状況が観察された（第118図）。竪穴建物跡の廃棄に伴う一種の「カマド封じ」のような意味があるのかもしれない。SH23では、土器片の一部を屋内土坑に廃棄する一方で、他は床面上にばら撒いたかのような出土状況をしている（第174図）。同時に出土した、丹塗磨研の無頸壺は、胴部を内面側からの打撃により孔を穿ち、廃棄している（第175図486）。この他、祭祀儀礼用の石戈が出土している（第175図493）。SH24では、炉跡の最下底部に大型の石製遺物と土器の底部破片を配置したかのような、実用性からかけ離れた出土状況が観察された（第177図）ほか、丹塗磨研の遺物が7点と多い。SH29は、四日市遺跡では丹塗磨研の杓子状土器（仮称）が出土しているほか、丹塗磨研の土器が6点と多い（第244図）。SK58のは長楕円形の両端にオーバーハング部分を有し、奥部に口縁を僅かに欠いた丹塗磨研の小型高坏を倒置した後に埋めている。なおSK58には丹塗磨研の高坏以外の土器破片もない。以上、紹介した事例が当時の弥生人にとってどのような考えで行なったか、判然としない部分が多いが、竪穴建物跡の場合、その廃棄・廃絶に伴うものであった可能性が高く、現代風に言えば「家じまい」的な儀式であると考えられる。

祭祀性の強い土器として、よく取り上げられるのが丹塗磨研の土器である。とりわけ須玖系土器分布圏では、精選された白い粘土で形作られた様々な丹塗磨研の土器があることで知られている。四日市遺跡第1次調査区には明らかな祭祀土坑や墓地はないが、様々な丹塗磨研の土器がある。それらの中には、希少な土器もあるが、大抵は鋤形口縁の甕や高坏で、ついで小型の無頸壺、脚付直口壺、杓子形土器がある。それらは、特別な出土状況ではなく、その他多数の土器片とともに遺構から出土するのが本遺跡での状況である。こうした状況から一つの竪穴建物跡単位ごとに鋤形口縁の甕を中心とする最低1、2個の丹塗磨研土器があったことが想定でき、竪穴建物跡内での何らかの屋内祭祀を考えるのが現実的である。そのように考えると、事例で紹介したSH24・SH29などでは特に丹塗磨研の土器が多く、祭祀に関わることの多かった竪穴建物跡といえるかもしれない。

このほか祭祀と関連ある遺物に、石剣、石戈、土製勾玉があるが数が少ない。これらは上記した丹塗の杓子状土器（仮称）を含めて、祭祀系遺物としては通常に使われることのない祭祀具だったのだろう。土製勾

第4表 祭祀・呪いの強い出土状況

遺構	出土状況	丹塗土器	挿図
SH19	炉跡内に台石を入れ、その上を土器片で被せる	1	第118図
SH23	一部を屋内土坑に廃棄し、他はばら撒いたような出土状況。丹塗磨研無頸壺は、胴部を内面側から孔を大きく穿って機能を停止させて廃棄	1	第174図
SH24	炉跡の最下底部に、石核・石斧・砥石・礪・底部破片を配置	7	第177図
SH21 SH29	杓子形土器・脚付直口壺は、本例以外に出土例はなく、使用頻度の少ない祭祀土器	5 (SH21) 6 (SH29)	第114図 第244図
SK53	甕の大破片を敷き詰めた行為		第19図
SK58	丹塗の土器を置いたのちに土坑を意図的に埋める	1	第260図

玉は墓室構の埋土から出土することが多く、儀器性の強い遺物として知られている。石剣・石戈については国内の広い範囲で出土しているが、本遺跡でも出土しているものの極少量であり、その数量と実用性を考えると特殊な祭事に使われる象徴的な祭祀具であったのだろう。また本遺跡や中津市諫山遺跡から出土した石剣・石戈は破損・破砕されていることで共通している。当初の機能から離れた形で残っている状況は銅鐸（破砕銅鐸片）・銅鏡（破鏡）・祭祀土器（穿孔）においてもしばしばあり、本遺跡の石剣・石戈も祭事が終了すると破砕したり、別の道具に転用した可能性も考えられる。

第2節 弥生時代後期終末の遺構と食糧

四日市遺跡第1次調査区の北西部を中心として、弥生時代後期終末の竪穴建物跡4棟が検出された（SH3、SH7、SH34、SH15）。SH17とSH34が切り合い関係にあるので、集落景観としては3棟の竪穴建物跡が立ち並んでいたことになる。この地区に隣接する、第2次調査区・第13次調査区に、同時期の竪穴建物跡があるかどうかは、現在のところ整理が進んでいないことから明らかではないが、採集遺物の数量からすると弥生時代後期終末土器片が広範囲に散布している様子はなく、集落構成が極めて小規模であったことは動かない。ピット・土坑等、この集落に係る付属的遺構もなく、竪穴建物跡のみからなる特徴を有しており、それだけにかえて近接する3棟の居住者たちの深い近縁関係が窺えるところである。

〈土器と地域性〉 壺には直口壺と複合口縁壺がある。直口壺は、胴長ながら張り、底部が丸底例、もしくは尖り底で、器面調整はタタキ目を加えたあと下半を調整している。複合口縁壺は、3種類に区分できる。A：複合口縁の上部が僅かに内傾し、下膨れした胴長で、底部が丸底例のもの（838）。B：複合口縁の中部に段のある僅かに内傾する口縁で、胴部が張る例（854）。C：複合口縁が僅かに内傾気味で、底部が平底気味の底部（855）。D：複合口縁が僅かに内傾気味で、底部が尖り底気味の底部のもの（856）。複合口縁壺の特徴として、上部が直口するか僅かに内傾する頸部が短く、口縁部の長さほとんど変わらないところにある。この点北部九州の複合口縁壺では頸部が長く、口縁部が内側に内傾する例が多いことからすれば、本遺跡における複合口縁壺の特徴は、日田・玖珠地域の特徴と言えるかもしれない。このように口縁部が直口する壺として、胴部上位の括れ部からそのまま立ち上がる直口壺も特徴的である（827・828・841・843・857～859）。高坏も口縁が短く直口気味で、脚部が「ハ」の字状に開く例もある（834・839）。甕の中型例は、胴部上半が僅かに「く」の字屈折口縁の長胴甕で、A：僅かに凸レンズ状の平底気味の例（866・868・869・871・873）、B：丸底の例（870）、C：尖り底の例（864・867）などの他、胴部が球形の屈折口縁甕がある（862・865）。これらの壺や甕は、全体的にタタキ目を加えた後、下半を調整することで共通している。近隣遺跡での類例には、玖珠町陣ヶ台遺跡からも同様な土器類が出土している。なお壺以外の中型甕は、器形の特徴から柳田康雄編年・分類の5様式（下大隈式の後半）に相当するものと思われる。実年代的には2世紀末～3世紀前半ということになる。他の小型甕、高坏等については省略する。

これまでみてきた土器の特徴で注意されるのは、頸部が短く同程度の長さの口縁部が直口気味であるなどの特徴や直口壺が多い点である。これまで豊後地域の弥生時代後期から古墳時代初期の土器を代表するものとして安国寺式系の土器が知られている。しかし、豊後でも筑後川上流域においては安国寺式系の土器は少ないのが現状である。むしろ弥生時代後期後半頃における日田・玖珠地域は、本遺跡のSH3、SH7、SH34、SH15で出土したような土器類が分布する地域の可能性が高い。

〈その他〉 小畑弘己氏の調査によれば、弥生時代後期終末の竪穴建物跡であるSH3ではアズキ、SH7ではイネ、ダイズ？、SH34ではイネ、アズキ？、イチイガシ、トチノキ、などの植物食糧が出土している。弥生

時代中期の集落が廃絶した後、200年以上経って、短期間ながら再び集落が形成されたことになるが、生業としては弥生時代中期後半の食糧構成とほとんど変化がない。稲作を主として行いながら、補完食糧としてアズキ、ダイズ等の畑作、トチノキ、イチイガシ等自然木の管理採取を計画的に行っていたことが窺える。

第3節 古代墓の意義

四日市遺跡で検出した2基の木棺墓から、古代中国唐代の陶入方鏡（銅鏡）が出土し、うち1基からは土師質土器の坏が3点と唐代の越州窯青磁唾壺が出土した。2点の陶入方鏡については、大分県立歴史博物館の柳田優生が蛍光X線分析を実施した（巻末を参照）。その結果、いずれもヒ素と銀は0.1～0.5%の含有量であった。一般的にヒ素が1%を超える場合はその銅製品が日本製であるとされ、銀の含有量については中国産の鏡に少なく、日本で製作された鏡には多いとされている。こうした成分組成の観点から本遺跡の陶入方鏡が日本製である可能性は低いと考えられた。したがって本遺跡の陶入方鏡の形態が、中国に類例のある陶入方鏡形であることを考えると中国産の銅鏡であることの蓋然性は高い。

陶入方鏡は、8世紀末～9世紀に製作され、同じ墓から出土した土師質土器は、その年代観から9世紀代に埋納されたことが確実である。したがって越州窯青磁唾壺は、9世紀前半までには製作され、時をおかず日本に請来されたと推定される。この越州窯青磁唾壺は葬送儀礼によるものか、口縁を丁寧に打ち欠き、陶入方鏡は割ったものであった。国内での類例は、越州窯青磁唾壺が筑紫野市大宰府関連遺跡群の堀池遺跡や奈良市平城宮跡で出土し、陶入方鏡については栃木県日光市の男体山頂遺跡で出土しているにすぎない。大宰府関連遺跡群の堀池遺跡で越州窯青磁唾壺が出土した周溝のある木炭塚木棺墓の被葬者は、大宰府在庁官人の長官級であると考えられている（筑紫野市教育委員会2012）。SR87における越州窯青磁唾壺の出土は、平安京、平城京、太宰府以外の遺跡で、遺構に伴う出土例としては初例であることと、陶入方鏡も日光男体山での事例しかない、極めて希少性の高い遺物である。こうした資料の希少性と年代観からすると、四日市遺跡の木棺墓から出土した越州窯青磁唾壺と陶入方鏡は、8世紀末から9世紀前半までに遣唐使によって請来されたものと考えられる。したがって、四日市遺跡の木棺墓被葬者は大宰府と特に関係の深かった郡司クラスが推定される。大宰府では、官人層の墓を桑坊の外側にある丘陵に造営している。同様な視点からすれば、古代「玖珠郡面」があったとされる盆地中央部の長野地区から見ると四日市遺跡のある台地は周辺台地であり、古代的な墓地の立地としてはふさわしい立地といえる。

参考文献

- 賀川光夫 1971『大分県の考古学』吉川弘文館
- 甲元眞之 1986『農耕集落』『岩波講座日本考古学』4, 集落と祭祀, 株式会社岩波書店, 77-125
- 高橋 徹 1989『共同墓地の成立』『大分県史先史篇Ⅱ』大分県, 91-114
- 筑紫野市教育委員会 2012『堀池遺跡 現地説明会資料』(平成24年11月10・11日発行) 筑紫野市教育委員会
- 長岡壽和 1986『トチノキの種子の収量調査(予報)』『大分短期大学研究紀要』第8号, 大分短期大学, 15-17
- 藤尾慎一郎 1993『生業から見た縄文から弥生』『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集, 1-66
- 藤尾慎一郎 2009『弥生時代の実年代』『弥生農耕のはじまりとその年代』新弥生時代のはじまり, 第4巻, 株式会社 雄山閣, 9-54
- 春成秀爾 2017『在来人と外来人の軋轢』『季刊考古学』第138号, 株式会社雄山閣, 83-87
- 柳田康雄 1987『高三階式土器と西新町式土器』『弥生文化の研究』4, 株式会社雄山閣, 34-44

